081.5-G95-Hk
1200300623223
081.5
G 95
Hk XI

帝國圖書館藏

叢書類從

第七輯

明治二十六年十一月飜刻

東京

經濟雜誌社

081.5
G95
HkXI

群書類從第七輯目次

和歌部 凡五十一種

卷第百四十六
拾遺和歌抄……一
卷第百四十七
後葉和歌集……三二
卷第百四十八
續詞花和歌集……六一
卷第百四十九
玄玉和歌集……一一六
卷第百五十
現存和歌六帖……一四六
卷第百五十一
秋風抄……一七九
卷第百五十二
雲葉和歌集……一九五
卷第百五十三
新和歌集……二三六
卷第百五十四
續門葉和歌集……二七六
卷第百五十五
續現葉和歌集……三二五
卷第百五十六
臨永和歌集……三六一
卷第百五十七
藤葉和歌集……三九五
卷第百五十八
玄々集……四二三
今撰和歌集……四三〇
柳風和歌集……四四〇
卷第百五十九
新撰和歌集……四四七
金玉集……四五五
三十六人撰……四五八
後六々撰……四六一

新三十六人撰……四六六
卷第百六十
爲家卿千首……四七六
卷第百六十一
師兼御千首……四九七
卷第百六十二
宗良親王千首……五三六
卷第百六十三
爲尹卿千首……五七七
卷第百六十四
天文十一年太神宮御法樂千首……六一六
卷第百六十五
白川殿七百首……六五五
卷第百六十六
龜山殿七百首……六八三
卷第百六十七
堀河院御時百首　稱太郎百首……七一二
卷第百六十八
永久四年百首　稱次郎百首……七五〇
卷第百六十九
久安六年百首……七六九
卷第百七十
正治二年院百首……八〇六
卷第百七十一
建保三年名所百首……八三四
卷第百七十二
弘長元年百首　稱七玉集……八六一
卷第百七十三
丹後守爲忠朝臣家百首……八七七
卷第百七十四
木工權頭爲忠朝臣家百首……八九五
卷第百七十五
句題百首　稱五玉集……九一四
朗詠百首……九二六
卷第百七十六
俊成卿文治六年五社百首……九三一

國冬朝臣祈雨百首……九四三
爲兼卿鹿百首……九四七
後成恩寺殿南都百首……九五一
卷第百七十七
道助法親王家五十首……九五七
卷第百七十八
新古今集竟宴和歌……九八二
續古今集竟宴和歌……九八五
文治六年女御入內御屏風和歌……九八八
昭慶門院御屏風和歌……九九六
最勝四天王院名所障子和歌……九九八
卷第百七十九
大江千里句題和歌……一〇一〇
紀師近家曲水宴和歌……一〇一六
宗尊親王三百首和歌……一〇一七
爲理卿七夕七十首和歌……一〇二六

群書類從第七輯目次　畢

群書類從卷第百四十六

檢校保己一集

拾遺抄卷第一（顯昭法橋注本作二拾遺和歌抄一）

花山院御撰

和歌部一

春部

○平定文か家に歌合し侍けるに　壬生忠岑

春たつといふはかりにや三吉野の山もかすみて今朝はみゆ覽

○承平（朱雀）四年中宮（穩子五十）の賀し侍ける　紀文幹

屏風に

はる霞たてるをみればあら玉の年は山よりこゆる成けり

○題不知　平祐擧

春たちてあしたの原の雪みれはまたふる年のこゝ地こそすれ

○延喜御時月なみの御屏風に　素性法師

新玉のとしたちかへるあしたよりまたるゝものは鶯のこえ

○定文か家の歌合に　躬恒

春たちてなをふる雪は梅花さくほともなく散かとそみる

○天暦（村上）十年二月廿九日内裏に歌合せさせ給ひけるに　中務（集朝忠）

鶯の聲なかりせは雪きえぬ山里いかて春をしらまし

○恒佐右大臣家の屏風に　紀貫之

野へみれは若菜つみけりむへしこそ垣根の草も春めきにけれ

○題不知　中納言阿倍廣庭（集雜春）

いにしとしれこして植しわか宿の若木の梅は花咲にけり

○延喜御時の屏風に　躬恒

降雪に色はまかひぬ梅の花かにこそにたる物なかりけれ

○同御時歌中に　貫之

梅かえにふりかゝりてぞ白雪も花のたよりにおらるへらなる

○冷泉院（六十三代）御時の屏風の繪にむめの花ある家に客人きたるかたかきたる所に　平兼盛

我宿の梅のたち枝やみえつらん思ひの外に君かきませる

○題よみ人しらす

梅花よそなから見むわきも子かとかむ計りの香にもこそしめ

○桃園にすみ侍ける前齋院の屏風に　よみ人しらす（集貫之）

白たへの妹か衣に梅花いろをもかをもわきそかねつる

○題よみ人しらす　（集元良）

朝またきおきてそ見つる梅花よのまの風のうしろめたさに

○齋院の屏風に　三常

香をとめてたれおらさらむ梅の花あやなし霞立なかくしそ

○題よみ人しらす　（集みつね）

ふく風をなにいとひけむ梅花ちりくる時そかは勝りける

○　大和守藤原永平朝臣（集よみ人しらす）

袖たれていさわか園に鶯のこつたひちらす梅の花見む

○延喜御時御屏風水のほとりに梅のはな咲たるかたかける所に　（集つらゆき）

梅の花また散れども行水の底にうつれる影そみえける

○題よみ人しらす

つみたむるものかたきは鶯の聲きくのへのわかな成けり

○　　忠峯
れのひする野へに小松の無りせは千代のためしに何を曳まし
○入道式部卿みこの子日し待けるに　　大中臣能宣
千年までかきれる松もけふよりは君に引れて万代やへむ
○子にまかりをくれて侍けるに。東山にこもり　　中務
侍りて
さけはちるさかれは戀し山櫻おもひたえせぬ花のうへかな
○天暦九年二月廿九日内裏歌合に　　よみ人しらす
咲さかすふそにても見む山櫻嶺のしら雲たちなかくしそ
○題不知
よしの山きえせぬ雪と見えつるは嶺つゝき咲櫻なりけり
○菅家万葉集に　　忠岑
淺みとり野への霞はつゝめともこほれてにほふ花櫻かな
○定文か家の歌合に
春はなをわれにてしりぬ花盛り心のとけき人はあらしな
○承平四年中宮の賀の屏風に田作所に　　よみ人しらす（集齊内宮侍）
春の田を人にまかせて我はたゝ花に心をつくるころかな
○題不知（くれ集）　　在原元方
はるたてば山田の氷うちとけて人の心にまかすへらなり
○宰相中將敦忠の朝臣の家の屏風に。あれたる宿に人きて花みたるかた書けりける所に　　貫之
あたなれと櫻のみこそ古郷の昔なからのものにはありけれ
○齋院の屏風に。春山路を行人かける所に　　伊勢（は集は なむ）
散ちらすきかまほしきを故郷の花みて歸る人もあらなむ
○題よみ人しらす
櫻かり雨はふりきぬ同じくはぬるとも花の陰にかくれん
○天暦の御時。麗景殿女御と中將更衣と歌合し　　清原元輔
侍けるに
春かすみたちなへたてて花さかり見てたにあかぬ山の櫻を
○題よみ人しらす
櫻色にわかみのうちはなりぬらん心にしみて花をおしめ（はかく集）［ば］
花見にはむれてゆけとも青柳の糸のもとにはくる人もなし
○　　三常
青柳の花たの糸をよりあはせて絶すもなくか鶯の聲　　元輔
○
とふ人もあらしと思ひし山里に花の便にひとめ見るかな　　讀人不知
○
つけやらむまにも散なは櫻花いつはり人に我やなりなむ
朝をに我はく宿の庭さくら花ちる程は手もふれてみむ
○天暦御時の御屏風の歌　　藤原清正
散ぬへき花みる時は菅のねの長き春日もみしかゝりけり
○あれ果てゝ人もはべらぬ所に。櫻花咲て侍を見て　　惠慶法師
あさ地原主なき宿の櫻はな心やすくも風（や集）にちるらむ
○櫓中納言義懷が家に櫻花おしむ心讀侍けるに　　藤原長能
みにかへてあやなく花を惜哉いけらは後のはるもこそあれ
○亭子院歌合に　　貫之

櫻ちる木のした風はさむからて空にしられぬ雪そふりける
○題讀人不知
足曳の山路にちれる櫻花きえせぬ春の雪かとそ見る
○北宮の着裳屏風歌　　（集貫之）
春ふかく成ぬとおもふを櫻はなちるこのもとはまた雪そふる
○天暦御時歌合に　　命婦少貳（る集）
あし曳の山がくれなる櫻はな散のこれりと風にしらす那
○やまとにくだり侍けるに。井出といふ所に山ぶきのいとをしう咲きて侍を見はべりて　　惠慶法師
山吹の花の盛にぬてにきて此さと人になりぬへきかな
○天暦の御時歌合に　　源順
春ふかみ井手のかは涙立かへり見て社ゆかめ山吹のはな
○顯讀人不知
澤水にかはつ鳴なり山ふきのうつろふ色やそこにみゆらむ（かけ集）
わか宿の八重山吹はひとえたに散のこらなむ春のかたみに
○亭子院歌合に　　坂上是則
花の色をうつしとゝめよ鏡山はるより後の影や見ゆると
○題よみ人しらす
年のうちはみな春なから暮ならん花みてたにも浮世過さむ春
かすみたちわかれ行山みちは花こそぬさと散まかひけれ
○延喜の御時御屏風に　　貫之
風ふけはかたもさためす散はなをいつかたへ行春とかは見む
○おなし御時の月令の御屏風の歌　　よみ人しらす（集貫之）
花もみな散ぬる宿は行春の古郷とこそなりぬへらなれ
○三月ふたつ有とし　　躬恒
常よりも閑かりつる春なれと今日の暮るはあかすそ有ける

定爲法印筆。拾遺集歟云。抄哥春五十七首。而此本有二五十五首。以二彼本及柳原業光卿筆拾遺集。皆注二抄寫于歌上傍。算合得二所脫二首一以附一此。

○天暦御時御屏風に　　たゝ見
春くれは先そ打みるいそのうみめつらしけなき山田なれとも
○屏風に　　よしのぶ
散そむる花を見捨て歸らめやおほつかなしと妹は待とも

拾遺抄卷第二

夏部

○冷泉院東宮におはしましける時百首歌たてまつりける中に　　源重之
花の色にそめし袂のおしけれは衣かへうきけふにも有かな
○夏のはじめに　　盛明親王
はな散といとひしものを夏衣たつやをそきと風をまつかな
○山里のかうきれの卯花に。鶯のなき侍けるに。　　判官代平公誠
うの花を散にし梅にまかへてや夏の垣根にうくひすのなく
○屏風に　　源順

我宿の垣れや春をへたつらん夏きにけりとみゆるうの花
○延喜御時月次の御屏風に　三　常
神まつる卯月に咲るうの花は白くもきれかとちけたるかな
○題よみ人しらす（かきれ集）
うの花の咲るさかりはみちのくの籬の嶋の波かとそ見る
初聲のきかまほしさに時鳥よふかくのみもおきあかすかな（めをもこころしつるかな集）
○夏山をまかるとて　久米廣縄
家にいきて何をかたらむ足引の山ほと〻きす一こゑもかな
○女四の親王の屏風に　坂上是則
山かつと人はいへとも郭公まつ初こゑは我のみぞきく
○寛和（花山）二年内裏歌合に　中納言藤原道綱母（いつ集）
みやこ人れて待らめやほと〻きす今そ山邊を鳴てすくなる
○　兼盛
深山いで〻夜半にや來つる時鳥あか月かけて聲の聞ゆる
○　忠見
さよふけてれさめさりせは時鳥人つてにこそ聞へかりけれ
○題よみ人しらす
山里に宿らさりせはほと〻きす聞人もなき音をやなかまし
○敦忠朝臣の家の屏風の繪に。山里にほとときすのかたかける所に。　貫之
この里にいかなる人か家ぬして山時鳥たえすきくらむ
○北宮の裳着の屏風に　公忠朝臣
ゆきやらて山路くらしつ郭公今一こゑのきかまほしさに
○屏風に　大中臣能宣
きのふまてよ所に思ひしあやめ草けふ我宿のつまと見る哉
○題不知　延喜御製

足引の山ほと〻きすけふとてやあやめの草のねにたて〻鳴
○　讀人しらす
たか袖に思ひよそへて時鳥はなたち花のえたになくらむ
○天暦御時御屏風に淀のわたりすくる人ある所　忠見
にほと〻きすかける所に
いつかたに鳴て行らむ子規淀のわたりのまた夜ふかきに
○小野宮（實頼）大臣家の屏風にわたりしたる所　見
にほと〻きすをき〻たるかたある所に　貫之
かのかたにはやこきよせよ時鳥みちになきつと人にかたらむ
○題よみ人しらす
五月雨はいこそれられれ郭公よふかくなかむ聲を待とて　貫之
○延喜御時月なみの屏風に
五月山この下やみにともす火は鹿のたちとのしるへ成けり
○九條右大臣（師輔）賀屏風に　兼盛
あやしくも鹿の立とのみ見えぬ哉小倉の山にわれやきぬらん
○西宮左大臣（高明）家屏風に　讀人不知（集順）
ほと〻きすまつにつけてやともしする人も山邊によを明す覽
○東宮（三條院）にさふらひける御繪にくらはし
山をかけるに時鳥のとひわたる所に人々の歌　藤原實方朝臣
つかふまつりけるなかに。
五月やみくらはし山の子規おほつかなくも鳴わたるかな
○題よみ人しらす
時鳥なくやさ月のみしか夜もひとりしぬれはあかしかれつ〻（も集）
此歌柿本人丸か集にいれり　中務
○
夏のよは浦島のこかはこなれやはかなく明てくやしかるらん

○月なみの御屏風にたひ人木のかけにやすむ
よみ人しらす（集みつれ）
行すゑはまた遠けれと夏山のこのした影は立うかりけり
○河原院のいつみのもとにてすゝみ侍けるに　惠慶法師
松かけのいはねの水を結ひあけて夏なき年と思ひける哉
○題よみ人しらす

拾遺抄卷第三

秋部

○あきのはしめによみ侍ける　安法々師
なつ衣またひとへなるうたゝれに心してふけ秋のはつ風
○延喜御時の御屏風に　貫之
荻のはのそよふく音こそ秋風の人にしらるゝはしめなりけれ
○河原院にてあれたる宿にあきのきたるこゝろ　惠慶法師
人々のよみ侍けるに
八重葎しけれる宿のさひしきに人こそみえれ秋はきにけり
○題不知　安貴王
秋たちていくかもあられとこのねぬる朝けの風は秋ずゝしも
○延喜御時屏風歌　凡河内躬恒
彦ほしの妻まつよひの秋風にわれさへあやな人そ戀しき
○題不知　貫之
秋風に夜のふけ行は天川かはへ（せ集）に波のたちぬこそまて　湯原王
そこ清み流るゝ川のせをはやみ（さやかにも集）はらふるとを神はきかなむ
○　藤原長能
蒼蠅なす荒ふる神もをしなへてけふはなこしのはらへ成けり
○右大將定國か四十の賀に内裏より屏風調して給けるに　忠峯
おほあらきの森のした草茂りあひて深くも夏の成にけるかな
彦星のおもひますらんことよりも見る我くるし夜の更ゆけは
○　柿本人麿
年にありて一夜妹にあふ彦星もわれに增りて思ふらんやは
○延喜御時月なみの屏風歌　貫之
七夕にぬきてかしつるから衣いと〻泪に袖やぬるらむ
○右衛門督源清蔭家屏風に
ひと〻せに一夜と思へと織女のあひ見ん秋のかきりなき哉
○修理太夫懐平家屏風にたなはたまつりのかたかける所に　惠慶法師
いたつらに過る月日を七夕の逢よのかすとおもはましかは
○七夕庚申にあたりて侍けるとし　元輔
いと〻しくいもれさるらんと思ふ哉けふの今夜に逢へる棚機
○天祿（圓融）四年五月廿一日仁和の帝の一品宮
資子にわたらせ給ひて亂碁せらせ給けるまけ
わさを七月七日にかの宮より内の大盤所にし
てたてまつる（らカ）せられける扇にはりて侍
けるうすものにをりつけて侍ける　中務

天川（集雜秋）かはへすゝしき七夕にあふきの風をなをやかさまし
○題よみ人しらす
我思（いのる集）ふとはひとつそ天川そらにしりてもたかへさらなん
あひみてもあはてもなゝ（はる集）く織女のいつか心のゝとけかるへき
秋風のうち吹とに高さこの尾上の鹿のなかぬ日そなき　能宣
紅葉せぬときはの山にすむ鹿はをのれ鳴てや秋をしるらん
讀人しらす
君こすはたれに見せまし我宿の垣れに咲る朝かほの花
手もたゆくうへしもしるく女郎花いろゆへ君か宿りぬるかな
○小野宮（實頼）のおほいまうちきみ
口なしの色をそたのむ女郎花はなにめてつと人にかたるな
○をみなへし咲て侍ける家に人〳〵まてきて前載のあたりにたゝすみ侍て　能宣
女郎花にほふあたりにむつるれはあやなく露や心置らん
○嵯峨野に前載堀にまかりて　長能
日くらしにみれとも（もあかす）女郎花のへにや今夜旅ねしなまし
○八月はかりに雁の聲をまつ心のかたよみ侍けるに　惠慶
荻のはもやゝうち戰く程なるをなとかり金のをとなかるらん
○題よみ人しらす　（集貫之）
こてふにもにたるものかな花薄戀しき人に見すへかりけり（集雜秋）
○亭子院の御前に前載うへさせ玉ひてこれよめ　伊勢
とおほせをありけれは
うへたてゝ君かしめゆふ花なれは玉と見えてや露も置らむ
○家の前載に鈴虫をはなちはへりて
いつこにも草の枕を鈴虫はこゝをたひとも思はさらなむ
○屏風に　貫之
秋くれはは（はる集）たをるむしの有なへに唐錦にもみゆる野へかな
○少將に侍ける時駒むかへにまかり侍て　左衛門督高遠
あふ坂の關の岩かとふみならし山たち出るきりはらの駒
○延喜の御時月令の御屏風に駒迎のかたある處に　貫之
あふ坂の關の清水に影みえていまやひく鑒望月のこま
○屏風に八月十五夜に池ある家に遊ひしたるかたある所に　源順
水のおもにてる月なみをかそふれは今夜そ秋の最中成ける
○延喜御時に八月十五夜後涼殿のはさまにて藏人所のをのこともに月宴し侍けるに藤原信從（集經臣）
こゝにたに光さやけき秋の月雲のうへこそ思ひやらるれ　躬恒
○同御時屏風に
いつこにか今宵の月のみえさらむあかぬは人の心なりけり　兼盛
○屏風に
夜もすからみてをあかさん秋の月こよひは空に雲なからなむ（の集）
○陽成院の御時の御屏風にこたかゝりしたる所に　貫之
かりにのみ人のみゆれは女郎花はなの秋そつゆけかりける
○題よみ人しらす（ろ集）
こてすくす秋はなけれと初鷹の聞たひをにめつらしきかな　躬恒
長月の九日をにつむ菊のはなもかひなく（の集）老にせるかな

○東山の紅葉見にまかりて又の日つとめてまかりかへるとてよみ侍ける　惠慶法師
昨日よりけふは勝れる紅葉はのあすの色をはみてや止なん
○竹生島に詣侍て紅葉の色おもしろく水にかけうかひて侍けれは　法橋觀教
みつ海に秋の山邊をうつしてはたはり廣き錦とやみむ
○題よみ人しらす
秋きりのたゝまくおしき山路かな紅葉のにしき落つもりつゝ（をり集）
○延喜御時の中宮の御屏風に　つらゆき
散ぬへき山の紅葉をあき霧のやすくもみせす立かくすらん
○たいしらす　僧正遍昭（ものそ集）
秋山のあらしの聲をきく時はこのはなられとわれはかなしき　貫之
○
秋のよに雨と聞えて降つるは風にみたる（したかふ集）ゝ紅葉なりけり
こゝろもて散んたにこそ惜からめなとか紅葉に風のふくらん
○あらしの山のふもとをまかりけるに紅葉のいたくちり侍けれは　右衛門督公任朝臣
朝またき嵐の山の寒けれはちる紅葉（もみちのにしき集）をきぬ人そなき
○二條右大臣（道兼）の粟田の山庄の障子のゑにたひ人の紅葉ある所にやとりたるかたある所に　惠慶法師
いまよりは紅葉のもとに宿からしおしむ（りせ集）に旅の日數へぬへし
○題よみ人しらす
とふ人もいまはあらしの山風に人まつ虫の聲そ悲しき
○暮秋源重之か消息し侍ける返事　兼盛
くれて行あきのかたみに置ものは我もと結の霜にそ有ける
此卷亦二首脫。所二以補一如二春部一。
○題しらす　みつね
露けくて我衣手はぬれぬともおりてをゆかむ秋はきのはな
○亭子院御屏風に　伊勢
うつろはんをたに惜しき秋萩におれぬはかりもをける露かな
足曳の山かきくもりもみくるれと紅葉（はる集）はいとゝてり增りけり　兼盛
○
もみくれゆへかつく秋をよそ人はもみちを拂ふ袖かとやみん
○もみくれして侍ける日　貫之
かきくらしもみくるゝ空を眺めつゝ思ひこそやれ神並の杜　之
又は神無月しくるゝ空をともいふ
○寛和二年清涼殿御障子の繪に網代をかけるに　貫之
よみ人しらす

拾遺抄卷第四

冬部

○殘紅葉を見侍て　遍昭
から錦えたに一むらのこれるは秋のかたみやた（を集）ゝぬなるべし
○百首歌中に　重之
あしのはに隱れて住し我宿（つのくに集）のこやもあらはに冬はきにけり
○屏風に　貫之

網代木にかけつゝあらふ唐錦日をへてよする紅葉成けり　兼盛

○屏風繪に

ふしつけし淀の渡をけさみれはとけむこもなく氷しにけり

○題よみ人志らす

冬さむみこほらぬ水はなけれとも吉野の瀧は絶るよもなし　清原元輔

○一條大臣の家の障子に

高砂の松にすむ鶴ふゆくれはおのへの霜やをきまさるらん　友則

○題しらす

ゆふされはさほのか原の河霧に友まとはせる千鳥なくなり　讀人志らす

夜をさむみれさめて聞は鳴鳥の浦山しくもみなるなる哉　貫之

おもひかれいもかり行は冬のよの河風さむみ千鳥なくなり

なかれくる紅葉をみれは唐にしきたきの糸してをれる也けり　よみ人しらす

水鳥のまた安からぬ思ひにはあたりの水も凍らさりけり

○平定文家歌合に

霜の上に降はつ雪のあさ氷とけすも物をおもふころかな　源景明

○初雪を見侍て

都にはめつらしとみる初雪をふしの〻山にふりやまぬらん　貫之

○をんなをかたらひ侍けるかとし頃になりけれとをのはへりけれは雪ふり侍ける日元　輔

ふる程もはかなくみゆる淡雪のからやましくも打とくるかな

○山あゐに雪のふりかゝりて侍りけるをみはへりて　伊勢

足引の山あゐにふれる白ゆきはすれる衣のこゝちこそすれ　兼盛

○題不知

山里はゆき降つみて道もなしけふこむ人を哀とはみむ　盛

○　彈正尹親王妹更衣(集たゝみ)

としふれは越の白山おいにけりおほくの冬の雪積りつゝ

○入道攝政(兼家)家の屏風に

見渡せは松のは白きよしの山いくよをつめる雪にかあるらん　兼盛

○屏風の繪にこしの山のかたかきて侍けるに　藤原輔尹朝臣

われひとり越の山路にこしかとも雪降にける跡をこそみれ

○題よみ人しらす

あし曳の山路もしらすまらかしの枝にも葉にも雪のふれれは

此歌柿本人丸か集に出たり或本には三方沙彌のよめるともいへり

水の上とおもひしものを冬のよの氷は袖のものにさりける　右衛門督公任朝臣

○

霜をかぬ袖たにさゆる冬のよは鴨のうは毛を思ひこそやれ　よみ人しらす

○

冬の池の上は氷にとちたるをいかてか月の底にみゆらん　惠慶法師

○冬月をみ侍てよみ侍ける

天の原そらさへさえや渡るらん氷とみゆる冬のよの月　兼盛

○冷泉院御時の屏風に

ひとしれす春を社まてはらふへき人なき宿にふれる白雪　貫之

○延喜御時の御屏風に佛名したるかたあるところに

としのうちに積れるつみはかき暮し降白雪とゝもに消なむ

○屏風繪に佛名のあしたに梅の木のもとにて導師とあるしとわかれおしみたるかたある所に　大中臣能宣

雪ふかき山路へなにしかへるらん春待花のかけにとまらて

○志はすのつこもりの夜よみ侍ける　兼盛

かぞふればわが身に積る年月をおくりむかふと何いそくらん

○村上の御時百首歌めしけるなかに　重之

ゆき積るをのか年をはまらすして春をはあすと聞そ嬉しき

拾遺抄卷第五

賀部

○天曆御時齋宮のくたり侍ける時長奉送使にてなくり侍てかへらんとするに女房さか月さしてわかれおしみけるに　中納言藤原朝忠朝臣

萬代のはしめとけふを祈置ていま行末は神そかそへん

○はしめて平野祭におとこ使たてし時うたふへき歌とてよませたりし　大中臣能宣

千早振ひらの〻松の枝しけみ千代も八千代も色はかはらし

○贈皇后(懐子)のうふやの七夜に兵部卿致平親王の雑たてまつるとてよませ侍ける　清原元輔

朝またききりふの岡に立雉子は千代のひつきのはしめ成けり　能宣

○ある藤氏の鶏葺屋に

二葉より賴もしき哉春日の〻木高き松の種とおもへは　元輔

君かへむ八百萬よをかそふれはかつ〳〵けふそ七日なりける

○參議誠信朝臣元服し侍ける夜　源順

老ぬれはおなしもこそせられけれ君は千代ませ〳〵

○三善佐忠かうふりし侍けるに　能宣

ゆひ初るはつ元結のこ紫ころもの色にうつれとそおもふ

○天曆のみかと冊にならせ給けるとし山階寺に金泥壽命經四十卷をかき供養たてまつりて御卷數をそへてたてまつらせたりけるにすはまをつくりて鶴をたて〻御卷數をくはせたりけり其洲濱の臺の數もの〻あしてにあまたのかたをかけりける中　平兼盛

山階のやまの岩根に松をうへてときはかきはに樂しかるらし

○承平四年中宮の賀し侍ける時の屏風に　齋宮内侍

色かへぬ松と竹とのすのよを何れ久しと君のみそみむ

○おなし賀に竹のつえのうたつくりて侍に　大中臣頼基

一ふしに千世をこめたる杖なれはつくともつきし君か齡は

○小野の宮のおほいまうちきみの五十賀し侍けるときの屏風に　元輔

君か代を何にたとへむさゝれ石の巖とならん程もあかれは

○　兼盛

わが宿にさける櫻の花さかり千とせみるともあかしとそ思ふ

○おなし大臣の七十賀し侍けるに竹の杖の歌をつくりて侍けるに　能宣

君かためけふ切る竹の杖なれはまたつきもせぬよゝそ籠れる（もつきせぬ集）
元輔

くらぬ山峯までつける杖なれは今万代の坂のためにそ（なり集）

○一條攝政（伊尹）の中將に侍ける時ちゝの右大臣（師輔）の賀し侍ける屏風の繪に松はらに紅葉のちりまてきたるかた侍ける所に
小野好古

吹風によその紅葉は散くれとときはのかけは長閑かり鳬（君かとときはのかけそのとけき集）
源公忠朝臣

○右大將保忠か妻の賀し侍けるに

萬代もなをこそあかれ君かため思ふ心のかきりなければ

○五條尚侍の賀を清貫かし侍ける屏風に
伊勢

おほ空にむれたるたつのさしなから思ふ心のありけ成かな

春ののゝ若なゝらても君かため年の數をもつまんとそ思ふ

○康保（村上）三年三月に内裏に花宴ありけるに
九條右大臣（師輔）

櫻花こよひかさしにさしなからかくて千年の春をこそへめ

○題讀人しらす

かつ見つゝ千年の春をすくすともいつかは花の色にあくへき

○亭子院歌合に（とせに）
躬恒

みちよへてなるてふ桃のことしより花咲はるに逢そしにける（にけるかな集）

○康保三年正月二日内裏にて子日せさせ玉ひけるに殿上人〳〵和歌つかうまつりけるに
右兵衛佐藤原信賢

珍しき千代の子日のためしとはまつ今日をこそ引へかりけれ（はしめの子日に集）

○小野宮大臣後院にて子日し侍けるに人々うたよみ侍けるに
三條太政大臣（頼忠）

ゆく末も子の日の松のためしには君か齡をひかむとそおもふ（ちとせ集）

○題讀人しらす

みな月のなこしの祓する人は千年の命のふといふなり

○承平四年中宮賀し侍ける時屏風に
藤原伊衡朝臣

御祓して思ふ事をそ祈つる八百萬代の神のまに〳〵

○天暦の御時前載の宴をせさせ玉けるに
小野宮大臣

萬代にかはらぬ花の色なれはいつれのあきか君かみさらん

○三條太政大臣家に歌よみとも志て歌よませ侍けるに草むらの松虫といふをを題にて
兼盛

千年とそ草むらをに聞ゆなるこや松虫の聲には有らん

○光右大臣家に前載合し侍けるまけわさ内舍人たち花のすけなりがし侍とてすはまに千鳥のかたなをつくりて侍けるによませ侍ける
貫之

たか年の數とかはみる行（ん）かひ（へり集）て千とり鳴なる濱の眞砂を

○鏡てうせさせ侍けるうらにつるのかたをいつけさせ侍てよみ侍ける
伊勢

千とせとも何か祈らむ浦にすむ鶴（たつ集）のうへをそ見るへかりける

○題よみ人しらす

君か代は天のは衣まれにきてなつともつきぬ巖ならなむ

拾遺抄卷第六

別部

○はるものへまかりける人のあか月に出立侍ける所にてとまり侍ける人のよみ侍ける
よみ人しらす

春かすみ立あかつきをみるからに心そ空に成るへらなる

○題しらす

櫻花つゆにぬれたる顔みれはなきて別し人そ戀しき

ちるはなは道みえぬまて埋まなんわかるゝ人の立やとまると

○春ものへまかりける人にあひしりて侍ける人〳〵のまてきて餞し侍ける所にかはらけ取て侍けるほとに雁のなき侍けれは讀侍ける
曾禰好忠

雁金のかへるを聞は別ちの雲井はるかにおもふはかりそ

○天暦の御時命婦少貳か豊前國へ夏ころ下り侍けるに大盤所にて餞給にかつけ物給とて
御製

なつ衣たち別るへき今宵こそひとへにおしき恩ひ添ぬれ

○題よみ人しらす

わするなよ別路に生る葛のはに秋風（の集）ふかは今かへりこん
紀貫之

○

時しもあれ秋しも君かわかるれはいとゝ秋そ露けかりける

○天暦十一年九月十五日齋宮くたり侍けるに
御製

君か代を長月とたに思ひせは（はす集）いかに別のかなしからまし

○題よみ人しらす

別てふとは誰かはしめけん苦しき物としらすや有けむ

別てはあはむあはしそ定なきこの夕暮やかきりなるらむ

○ものへまかりける人の送り關山までし侍てかへりはへるとてよみ侍ける
貫之

わかれ行けふはまとひぬ逢坂はかへりこむ日の名にや有らん（たそ有けれ集）

○題よみ人しらす

別ちは戀しき人の文なれややらてのみ社（か集）みまくほしけれ

旅ゆけは袖こそ濡るれもる山の雫にのみはおほせさらなん（介集）

○みなもとのよしたれか參河の守にまかりけるにとまり侍けるむすめには〳〵のよみて遣しける

諸ともにゆかぬみかはの八橋を戀しとのみや思ひわたらん

○しなの〻國にまかりける人によみてつかはしける
貫之

月影をあかすみるとも更科の山のふもとに長居すな君

○伊勢よりのほり侍けるに忍ひてものいひ侍けるをんなのあつまにまかりくたりけるかあふさかの關にまかりあひたりけれはよみてつかはしける
大中臣能宣

行末のいのちもしらぬわかれちはけふ逢坂やかきり成らん

○天暦御時に御めのと備後か出羽國にまかりくたりけるに餞給けるに藤壺より裝束遣しける
よみ人しらす

にそへられたりける

行人をとゝめかたみの唐衣たつより袖のつゆけかるらん

○この備後のめのとの餞に殿上の人とも女房も

歌よみ侍ける中に　御乳母少納言

おしむとかたしや我か心なる涙をたにもえやはさゝむる　女藏人參河

あつま路の草葉をわけん人よりもをくるゝ袖ぞ先は露けき

○共政朝臣肥後守になりてくたり侍ける時女備前かまかりくたりけるに揃御衣なと玉ふとて　天暦御製

わかるれは心をのみそつくし櫛さして逢へきほとをしられは

○大江爲基參河國へまかりくたりける時にあふきなと調してたれかとはなくてさしをかせ侍ける　衛門（赤染時用の女）

おしむともなきもの故にしかすかの渡りと聞はたゝならぬ哉

○みちのくの守これのふが女のくたり侍けるに彈正宮のみこの内方の香藥つかはしはへりけるに　戒秀法師（元輔子）

龜山はいくゝすりのみ有けれは止めむかたもなき別かな

○帥にて橘のきむよりかくたり侍けるにとしたれかまゝ母の典侍に馬のはなむけに裝束てうしてつかはしけるに　貫之

あまたには縫重れゝと唐衣おもふこゝろは千重にそ有ける

○みなもとのひろか數かものへまかりけるに裝束調して給とて　太皇太后宮御歌

旅人の露はらうへき唐衣またきも袖のぬれにけるかな

○藤原のまさたゝか豊前の守にはへりけるときためよりかおほつかなしとてくたり侍けるに馬のはなむけし侍けるに　きよたゝ

思ふ人ある方へ行別ちをおしむ心そかつはわりなき

○肥後守にて清原元輔かくたり侍るに源滿仲朝臣の餞し侍けるにかはらけとりて　もとすけ

いかはかり思ふらんとか思らんおいてわかるゝとほき道をは

○返し　みつなか

君はよし行末とをしとまる身のまつ程いかゝあらんとすらむ

○前日向守に侍ける人のつくしへまかり侍ける人にいひつかはしける　橘頼平

昔みしいきの松原をとはゝ忘れぬ人もありとこたへよ

○題不知　右衛門（源兼澄女）

命をいかならんとは思ひこしいきて別るゝ世にこそ有けれ

○　集よみ人しらす

君をのみ戀つゝ旅の草枕露しけからぬあか月そなき

○人の國へまかり侍けるにあまのしほたれ侍けるを見侍て　惠慶法師

集雜戀

故郷をこふる袂もかはかぬにまた鹽たるゝあまも有けり

○みちのくのかみにてまかりくたりけるときに三條太政大臣の餞給ける時によみ侍ける　藤原爲長（雅正男）

武隈の松をみつゝや慰めん君か千年のかけにならひて

○みちのくのしらかはのせきこえ侍けるによみ侍ける　兼盛

たよりあらはいかて都へつけやらんけふ白川の關はこえぬと

○なかされはへりて後女のもとにいひにおこせて侍ける　贈太政大臣

君か住やとの梢を行〳〵もかくるゝ迄にかへりみしはや

拾遺抄卷第七

戀部上

○天暦御時歌合に　壬生忠見

戀すてふ我名はまたき立にけり人しれすこそ思ひそめしか

○　兼盛

しのふれと色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふまて

○題不知　貫之

色ならはうつるはかりも染てまし思ふ心やしる人のなき

○　讀人しらす

あふををまつにて年をへぬる哉身は住のえにおひぬものゆへ

○大嘗會のみそぎにものみはへりける所にわらはの侍けるを見侍て又のあしたつかはしける　寛祐法師

あまたみしとよの御秡の諸人の君しも物を思はするかな

○たいよみ人しらす

命をは逢にかふとか聞しかと我やためしにあはぬしにせん

人しれぬ心のほとをみせたらは今までつらき人はあらしな

○天暦御時歌合　右衛門督藤原朝忠

あふとの絶てしなくは中〳〵に人をも身をも恨さらまし

○をんなのもとに男のつかはしける　よみ人しらす

人しれぬ泪に袖はくちにけりあふよもあらは何につゝまむ

○返し

君はたゝ袖計をやくたすらん逢には身をもかふとこそきけ

○題しらす

いかにせん命は限り有物を戀は忘れす人はつれなし

こひてへは同しなにこそ思らめいかて我身を人にしらせん

○をんなのとものもとにつかはしける　小野宮おほいまうちきみ

人しれぬ思ひは年もへにけれと我のみしるはかひなけりけり

○題よみ人しらす

歎あまり終に色にそ出ぬへきいはぬに人の知はこそあらめ

いかてかと思ふ心の有時はおほめくさへそ嬉しかりける　大中臣輔親（集能宣）

○をんなのもとにつかはしける

いかて〳〵こふる心をなくさめて後のよまてのものも思はし

○題しらす　みなもとのつねもと

あはれとし君たにいはゝ戀わひてしなむ命も惜しからなくに

○　讀人しらす

逢みてはをにせぬ身とそ成ぬへき頼むろにたにのふる命を

○　柿本人丸

千早振かみのいかきも越ぬへし今は我身のおしけくもなし

○　大宰監大伴百世

戀しなん後はなにせむいける日の爲こそ人のみまくほしけれ

○　ひさまろ

戀つゝもけふは暮しつ霞立明日の春日をいかてくらさん

○　よみ人しらす

わひつゝも昨日はかりは過してきけふや我よのかきり成らん

身をつめは露をあはれと思ふ哉曉をにいかてをくらむ　勝觀法師

○

忍れはくるしかりけり花薄あきのさかりに成やをなまし

○　讀人しらす

よそにくも有にし物を花薄ほのかにみてそ人は戀しき

あふものかたわれ月の雲隱おほろけにやは人のこひしき（拾集）
逢みてもありにし物をいつのまにならひて人の戀しかるらむ
○はしめてをんなのもとにまかりて又のあした
　　大中臣能宣
につかはしける
あふをを待し月日の程よりもけふの暮こそ久しかりけれ
　　權中納言藤原敦忠
○
逢みての後の心にくらふれは昔はものも思はさりけり
○題よみ人しらす
あひみても猶なくさまぬ心哉いく千夜ねてか戀はさむらし（拾集）
我戀はなを逢みても慰ますいやまさり成心地のみして
○　　人麿
朝れかみ我はけつらし美き人の手枕ふれにしものを（集て）
かくはかり戀しき物とおもはせはよそにみるへく有けるものを
○　　よみ人しらす
夢をたにいかてかたみに見ておもはあはてぬるよの慰めにせん
夢よりもはかなき物はかけろふの期かに見えし影にそ有ける
○天暦御時歌合　　讀人しらす（集忠見）
夢のをなさかよろしも君をみん暮る待まも定めなき世を
○　　能宣（集したかふ）
戀しさを何につけたか慰めむ夢たにみえすぬるよなけれは
○　　讀人不知
うつゝにも夢にも人によるしあへはくれ行はかり嬉きはなし
○題しらす　　藤原のありさき
逢ものなけきのもとを尋ぬれは獨れよりそおひ始めける
○入道攝政のまかりたりけるに門をゝそくあけ
ゝれは立わつらひぬといひ入て侍けるに

歎つゝひとりぬる夜の明るまはいかに久しき物とかはしる
○題よみ人しらす
たゝくとて宿の妻戸を明たれは人もこすゑのくねな成けり
衣たに中に有しはうとかりき逢ぬよをさへ隔てつる哉
○　　坂上郎女
黑髮に白かみましり生るまてかゝる戀にはいまだあはさるに（を集）
○　　人丸
湊入の蘆わけ小舟さはりおほく（みわかおもりふ集）戀しき人に逢ぬ頃哉
○　　よみ人しらす
忍ぶむに忍はれぬへき戀ならはつらきにつけて病もしなまし
○五月五日にある女のもとにいひつかはしける
いつかとも思はぬ澤のあやめ草唯つく〳〵とれこそ泣かるれ
○題しらす　　三常
生れとも駒もすめさぬあやめ草かりにも人のこぬかわひしき
○　　よみ人しらす
しのゝめに鳴こそ渡れ郭公もの思ふやとはしるくや有らん
水な月の土さへさけて照日にも我袖ひめや妹にあはすして（そめ集）
詫ぬれは常はゆゝしき七夕も浦山れぬる物にさりける
おもひきや我待人はよそなから棚機つめの逢をみんとは
けふさへやよそにみるへき彦星のたちならすらん天のかは涙
○　　人丸
足引の山より出る月待と人にはいひて君をこそまて
○三百六十首中　　曾禰好忠
わかせこかきまさぬ宵の秋風はこぬ人よりは恨しき哉（ら集）
○題よみ人しらす　　集人丸

右大將道綱母

逢みてはいくひさゝにもあらねとも年月のを思ひ（ゆる集）哉
○　　人丸
賴めつゝこぬ夜あまたに成ぬれはまたしと思ふそ待に增れる
○　　貫之
もゝはかき羽かく鳴も我をくあした詫しき數は增らし
○おとこの思ひ侍らさりけれは女のつかはしける
　　よみ人しらす
ありへむと思ひもかけぬ世中になか〳〵（はて集）みをそ歎かさりける
○たいしらす　　集人麿
ゆふけとふうらにもよく有今宵さへこさらん人をいつか賴（たに集）（まつ集）
○萬葉集の和し侍けるに　　源順
思ふらん心のうちを知ぬ身はおもはぬはかりにもあらしとそ思ふ
○題よみ人しらす
いきおなむとの心にかなひなは再ひ物はおもはさらまし
○おこなひすとて山寺にこもり侍けるおとこの
をんなのもとにいひつかはしける
人にたに知られて入し奥山の戀しさいかて尋來つらん
○冬ひえの山にのほりて春まてをとつれ侍らさ
　　集藤原のきよたゝかむすめ
りける人のもとに
眺やる山邊はいとゝ霞つゝ覺束なさのまさるはるかな
○たえて年頃になり侍にける女のもとへまかり
てつとめて雪のふり侍けれは　　源景明

みよしのゝ雪にこもれる山人もふる道とめてれをやなくらん
○をむなのもとに男のふみつかはしけれと返事
もせす侍けれは　　讀人しらす
山ひこもこたへぬ山の呼子鳥われ獨のみなきや渡らん
○題おらす
やまひこは君にもにたる心かなわか聲せれは音つれもせす
あし曳の山したとよみ行水の時そともなく戀わたるかな
○旅におもひをのふといふ心をよみ侍ける
　　石上乙丸
足引の山こえくれて宿からはいもたち待ていれさらむかも
○　　山邊赤人（とを集）
我せこををならしの山の呼子鳥君よひかへせ夜の更ぬまに（ぬ集）
○　　よみ人しらす
はるかなる程にも通ふ心かなさりとて人のおらし物ゆへ
○遠き所に思ひ侍ける人をゝき侍て　つれもと
雲ゐなる人をはるかに戀る身は（おもふに集）我心さへ空にこそなれ
○たいよみ人しらす
やほか行濱の眞砂とわか戀さいつれまされりおきつ島守
○みちをまかり侍てよみはへりける　をとまる
よそに有て雲井にみゆる妹か家に早くいたらんあゆめ黑駒
○題よみ人おらす
わかとく物思ふ人は古も今行末もあらしとそおもふ

○をんなのもとにつかはしける　　藤原惟成
人しれす落る泪の積りつゝかすかくはかり成にけるかな

拾遺抄卷第八

戀部下

○題よみ人しらす

君こふる涙のかゝる冬のよは心とけたるいやはれらるゝ（しは集）

○女のもとにつかはしける　大中臣能宣

あさ氷とくるまもなき君によりなとてそほつる袂なるらん

○題讀人しらす

うしと思ふ物から人の戀しきはいつこを忍ふこゝろなるらん

戀詫ぬれをたになかむ聲立ていつこなるらん音なしの里

○しのひてけさうし侍ける人につかはしける　清原元輔

音なしの河とそつねに成にけるいはて物思ふ人の泪は（なかれいつ集）

○題よみ人しらす

風寒み聲よはり行虫よりもいはて物思ふ我そまされる

○天暦御時承香殿のまへをうへのわたらせ玉て

ことかたにおはしましけれは奏せさせて侍け　徽子女御

る

かつみつゝかけはなれ行水の面にかく數ならぬ身を如何せん

○たいふみ人しらす

袂より落る涙はみちのくの衣河とそいふへかりける　紀貫之

○

なみた川おつる水上早けれはせきそかねつる袖のしからみ

○万葉集和せるなかに　源順

泪かは底のみくつと成はて〜戀しき瀬々に流れこそすれ

○題よみ人しらす

手枕のすきの風も寒かりき身はならはしの物にさりける（そあ集）

○五月夏至日けさうして久しく成侍ける女今夜

をうかたかひなく思ひたゆみてものいひ侍け

る程にしたしきさまに成侍りにけれはをんな

のいみしう恨みわひて後にはさらにあはしと

いひ侍けれは　能宣

あす知ぬ命なりとも恨みをかん此世にのみはやましと思へは（我み集）（てのみ集）

○題よみ人しらす　（集人丸）

我とや雲の中にも思ふらん雨も泪もふりにこそふれ

○　おほとものかたみ

いそのかみ降とも雨に障らめや逢むと妹にいひてし物を

○　讀人しらす（集元長）

詫ぬれは今はたおなし難波なる身をつくしても逢むとそ思ふ

○　坂上郎女

汐みては入ぬる磯の草なれやみる日すくなく戀らくのおほき（ちく集）

○　よみ人しらす

し賀のあまの釣に燈せる漁り火のほのかに妹をみるよしも哉

しるや君しらすはいかにつらからむ我かく計りおもふ心を

戀するは苦しき物としらすへく人を我身にしはしなさはや

○あめふれはえまてこすと申たりける男の又の

夜もまてこすなりにけれは　東宮女藏人左近

ふらぬよの心をしらて大空の雨をつらしと思ひけるかな

○題よみ人しらす

たちちれの親の諫しうたゝれは物思ふ時のけさにさりける（そあ集）

○をんなのもとにつかはしける　能宣

言の葉も霜にはあへす枯にけりこや秋はつるしろし成らん

○題よみ人しらす

すきたてる宿をそ人は尋けるまつはかひなき世にこそ有けれ（ところのなつはかひなかりけり集）

思ふとていとしも人にむつれけんしかならひこそみれは戀きわする〜かいさ〜は我む忘れなん人にしたかふ心とならは（なれさらめ集）

○をんなの元につかはしける　平忠依

逢とは心にもあらて程ふともさやはちきりし忘れはてれと

○題よみ人しらす

あふみなる打出の濱のうち出て恨やせまし人の心を

津の國のいく田の浦のいく度かつらき心をわれにみすらん（池集）

あしれはふうきは上こそつれなけれ下はえならす思ふ心を

數ならぬ身は心たになからなん思ひ知すはうらみさるへく（も集）

恨ての後さへ人のつらからはいかにいひてかれをはなかまし

○小野宮のおほいまうち君のもとにつかはしける　閑院大君

君を猶恨みつるかな蜑の刈もに住むゝしのなを忘れつゝ

○題よみ人しらす

思はすは難面きともつらからし頼めは人を恨みつるかな

つらけれと恨むる限り有けれは物はいはれてれ社なかるれ

かきりなく思ふ心の深けれはつらきも知ぬ物にそ有ける

恨みぬも疑はしくそおもほゆる頼む心のなきかと思へは（あり）（そあ集）

わたつ海の深き心はをきなから恨みられぬる物にさりける

○女のもとにまかりけるをもとのめのせいし侍

けれはいひつかはしける　源景明

風をいたみ思はぬ方に泊するあまの小舟もかくやわふらん

○題よみ人しらす

つらしとはおもふ物から戀しきは心にもあらぬ心なりけり（我にかなは集）

わりなしやしぬても頼む心哉つらしとかつは思ふものから

○ものいひ侍りける女のゝちにつれなく侍てさらにあひ侍らさりけれは　一條攝政

哀ともいふへき人はおもほえて身の徒に成ぬへきかな

○題よみ人しらす

世中のうきもつらきも忍ふれは思ひ知すと人や見るらん

○　伊勢

さも社は逢みるものかたからめ忘れすとたにいふ人のなき

○　よみ人しらす（集つらゆき）

大かたに我身ひとつのうきからになへての世をも恨みつる哉

心をはつらき物そといひなから變らしと思ふかほそ戀しき（をきて集）

わか袖ぬるゝを人のとかめすはれをたに安く鳴へき物を

○おやにをくれて侍けるころおとこのとひ侍　伊勢

らさりけれは

なき人もあるかつらきを思ふにも色わかれぬは泪成けり（集哀）

○屏風に三熊野のかたをかける所に　兼盛

さしなから人の心をみ熊野の〜浦の濱木綿いくへ成らむ

○たいしらす　右近（少將季繩女）

忘らるゝ身をは思はす誓ひてし人の命のおしくも有哉

○おんなをうらみてさらにまてこしとちかをを

たて〜後につかはしける　藤原實方

何せんに命をかけて誓ひけんいかはやと思ふおりもあり鬼

○題よみ人しらす

頓ふるにしなは何かはさも有はあれ活てかひなく物思ふ身は

思ひ增人しなけれはます鏡うつれる影されをのみそ鳴

○國用かむすめを藤原知光かまかりさりてのち

かゝみを返しつかはすとて書つけ侍ける

かけたえて覺束なさの增鏡見すは我身のうさもまさらし　なんな（集元）しられし集

○題よみ人しらす

夢にさへ人の難面みえつればれても覺ても物を社思へ

逢をは夢のうちにも嬉しくてれさめの戀に詫しかりける

忘しよ夢と契しをの葉はうつゝにつらき心なりけり

○今はとはしといひ侍りけるをんなのもとに　源臣城（集よみ人しらす）

忘れなん今はとばしと思ひつゝれる夜しもこそ夢に見えけれ

○たいよみ人しらす

むは玉の妹か黑髪こよひもや我なき床になひきてぬらん　源順

○万葉集を和せるうた

獨ぬる宿には月のみえさらは戀しきとの數はまさらし

○月のあかく侍ける夜人まち侍ける人のよみ侍ける　よみ人しらす（集人丸）

ことならは暗にそあらまし秋のよのなそ月影の人頼めなる

○月あかき夜をんなのもとにつかはしける　源信明朝臣

戀しさはおなし心にあらすとも今宵の月を君みさらめや　中務

○返し

さやかにもみるへき月を我はたゝ泪に曇るおりそ多かる

○月を見侍ていなかなるおとこをおもひいてゝ　中宮内侍馬

つかはしける

今宵君いかなるさとの月をみて都に誰を思ひ出らん

○京におもふ人をゝき侍てはるかなる所にまかり侍ける道に月のあかき夜　讀人しらす

都にてみしにかはらぬ月影を慰めにても明す頃哉　貫之

○たいしらす

てる月も影みな底に歸りけり似たる物なき戀もする哉

○善祐かなかされ侍ける時ある女のつかはしける　讀人しらす（集）

なく泪よはみな海に成ならんおなし渚は流れよるかと

○題しらす

捨はてむ命を今は頼まれよ逢へきとの此よならねは

○うみたてまつりたりける御このかくれ侍にける又のとし郭公を聞侍て　伊勢

しての山越て來つらん時鳥戀しき人のうへかたらなん　集長

○いせかもとにこのをとをとふらひにつかはすとて　平定文

思ふよりいふはをろかに成ぬれは譬へていはむとのはそなき

○中將兼輔朝臣めなくなり侍てのとしのしはすに貫之か母とにまかりてものかたりし侍けるついてにむかしの人のうへなといひいて侍けれは　貫之

こふるまに年の暮なはなき人の別やいとゝ遠く成なん　集長

○むすめにまかりをくれて　中務

忘られてしはしまとろん程もかないつかは君を夢ならてみん

○孫にをくれ侍て

うきながら消せぬ物は身なりけり浦山しきは水のあはかな　何

○題よみ人しらす

世中をかくいひ〳〵の果々は如何にやいかにならむとすらん　同

拾遺抄卷第九

雜部上

○わかなを御覽して　圓融院御製

春日野に多くの年はつみつれと老せぬ物は若な成けり　集春

○む月に人〳〵まてきて侍ける又のあしたに公任朝臣のかりつかはしける　中務卿具平親王

あかさりし君か匂ひの戀しさに櫻の花をそ今朝は折つる　集雜春

○なかされてまかりくたりける時に家の梅のはなを見はへりて　贈太政大臣

こち吹は匂ひをこせよ梅花あるしなしとて春をわするな　同

○延喜御時屏風畫に寺にまてたる所に貫之

思ふと有てこそゆけ春霞みちさまたけに立渡るらん　同

○故一條のおほいまうち君の家の屏風に　能宣

田子の浦に霞のふかくみゆる哉もしほの煙立やそふらむ　同

○正月叙位侍ける頃人〳〵まかりあつまりて子日の歌よまむといひ侍けるに六位にてよみ侍ける

松ならはひて人けふはあらましに袖の緣そか飛なかりける　同

○人にものいひ侍と聞ておとこのとはす侍けれは　中宮内侍（少將）

春日野の萩のやけ原あさるとも見えぬなき名をおほすなる哉　同

○女のもとになつなの花にさして遣しける　長能

雪を埋み垣れにつめるからなつなつさはま〳〵のほしき君哉　同

○天暦御時大盤所のまへのつほに鶯を梅のえたにつくりすへてたてられたりけるを見侍て　一條攝政

花の色はあかすみるとも鶯のれくちの枝にてなゝふれそも　同

○康保三年二月廿一日梅のはなのもとに御倚子立させ給て宴せさせ給けるに殿上のおのこともも和歌つかうまつりけるに　源博雅朝臣（集寛信）

折て見るかひも有哉梅花いま九重に匂ひまさりて　同

○内裏御遊ありける時　宰相藤原伊衡

かさしてはたちかにまかふ梅花今はいつれをぬかむとすらん　同

○はる花山に亭子法皇に御幸ありてとくかへらせ玉ひけれは　僧正遍昭

まてといはゝいとものかしこし花の山たはしと鳴ん鳥の音も哉　同

○北白河山庄にはないと面白くさきて侍けるに人々まてきたりけれは　左衛門督公任朝臣

春きてそ人も問ける山里は花こそ宿のあるゝ成けれ　同

○上總よりのほりまてきてのこころ頼光か家にて人々さけのみ侍けるに　長能

東路のゝ路のゆきまを分てきて哀都の花をみる哉　同

○はるものへまかりける道につほ裝束して侍ける女とも野邊にはへりけるをみてなにわさするとゝひ侍けれはところほるなりといひ侍けれは　賀朝法師

春のゝにところもとむといひつるはふたりぬ斗みてたりや君

○なんなの返し

同 春の野につら〳〵みれとなかり鳬よにところせき人の爲には

○中納言敦忠まかりかくれて後ひえの西坂本の山庄に人々まかりて花見侍けるに　一條攝政

集哀 いにしへは散をや人のおしみけむはなこそ今は昔こふらし

○櫻花さきて侍ける處にもろともにみ侍ける人の後のはるほかに侍けるにその花を〻りてつかはしける　（集よみ人しらす）

集雜春 諸共におりし春のみ燃しくて獨見まうき櫻花哉

○小野宮おほいまうちきみの家にて池邊のさくらはなを見侍て　元輔

同 櫻花そこなる影そおしまる〻ものつめる人の春かと思へは

○延喜御時月合御屏風に　三常

同 櫻花わか宿にのみ有とみはなきものくさは思はさらまし

○ある人のもとにつかはしける　御導師淨藏

同 霞たつ山のあなたの櫻花おもひやりてやはるを暮さん

○延喜御時南殿のさくらのちりつもりたるを見はへりて　公忠朝臣

同 殿守のともの宮つこ心あらは此春はかりあさきよめすな

○たいよみ人しらす

集春 岩間をもわけくる瀧の水をいかて散つむ花の咲と〻むらん

○三月うるふ月侍けるとし山ふきをみ侍て　菅原輔昭

集雜春 はる風は長閑けかるへし八重よりも重れて匂へ山吹の花

○比叡山にすみはへりけるころ人のたきものをこひて侍けれは侍けるま〻にすこしを梅のはなの散のこりたるえたにつけてつかはすとて　如覺法師

同 春たちて散はてにける梅花た〻かはかりそ枝にのこれる

すき集

○延喜御時ふぢつほにて藤の宴せさせたまひけるに殿上のをのこよく歌つかうまつりけるに

○　藏人藤原國章

同 藤のはな都のうちは紫の雲かとのみそあやまたれける　源重之

宮のうちには集

集夏 夏にこそ咲か〻りけれ藤の花まつにとのみも思ひける哉

○延喜御時飛香舍にて藤花宴ありけるに人々和歌つかうまつりけるに　小宮野おほいまうちきみ

同 うすくこく亂れて咲る藤の花ひとしき色はあらしとそおもふ

○郭公をき〻侍てよみはへりける　大伴坂上郎女

同 時鳥いたくな〻きそ獨ぬていのねられぬは聞はくるしも

○坂上大嬢に遣しける　大伴田村大嬢（集大伴像見）

集雜春 故郷のならしの岡の時鳥とつてやりしいかにつけきや

○たいしらす　輔親

同 あし曳の山郭公さとなれてたそかれ時になのりすらしも

○　躬恒

同 徒においぬへらなりおほあらきの森の下なる草にはあらねと

集雜秋 あひみすてひと日も君にならはねは七夕よりも我そ增れる

○みつれた〻みねにとひ侍ける　伊衡朝臣

白露はうへより置をいかなれは萩の下葉のまつも見つらん　見つれ

○こたふ

さを鹿のしからみふする萩なれは下葉や上に成かへるらん　秋萩は集

○　忠峯

秋はきは先さすえより移ふを露のわくとは思はさらなん

○嵯峨野にすみ侍ける房の前載ををんなともの見にまてきたりけれは　遍昭

集雜秋 こゝにしも何匂ふらん女郎花人のものいひさりにくきよに

○題不知　躬恒（集よみ人しらす）

同 秋の〻の花の色〳〵とりすへてわか衣手にうつしてし哉

○あきはらへしに唐崎にまかりて舟のまかりけるを見て　惠慶法師

同 おく山にたてらましかは渚漕ふなきも今は紅葉しなまし

○たいしらす　三常

同 紅葉々の流る〻時は竹川のふちの緣も色かはり鳬

るちん集

○亭子院大ゐ川に御幸ありて行幸もありぬへき所なりとおほせたまふにものよし奏せむとて　小一條太政大臣（忠平）

同 小倉山みねの紅葉は心あらは今一度の御幸またなん

○その〻ち延喜の帝かの所にみゆき有ける日あまたのうたよませ玉ひけるに　貫之

大井河々邊の松にも〻はむかし〻る御幸や有しむかしも

○延喜御時月なみ御屏風に　躬恒

雜秋 かりてほす山田の稻をかそへつ〻多くの年をつみてける哉

はしわひてなもるいりいはにいくよ（ぬらす集）

○たいよみ人しらす

同 かのみゆるいけ邊に立るその菊のしげみさ枝の色のこてらさ

てて集

○權中納言義懷入道の後むすめを齋院にやしなひ給けるかもとより東院に侍けるあれのもとに十月はかりにつかはしける

同 山かつの垣ほわたりきいかにそとしもかれ〳〵に問人もなし　元輔

○內裏御屏風に

同 月影のたな上川に清けれは網代にひをのよるもみえけり

○藏人所に侍ける人のひをのつかひにてまかるとて京に侍なから音もし侍らさりけるに　修理（葛原眞行妹）

同 いかて猶網代のひをにととはん何によりてか我をとはぬと

○ものれたみしけるをんなをはなれてのちうつろひたる菊をつかはすとて　よみ人しらす

同 老のよにうき事きかぬ菊たにも移ふ色は有けりとみよ

か集

○天暦御時伊勢か集めしけれはたてまつるとて　中務

同 しくれつ〻降にし宿の言のは〻かき集れとたまらさり鳬

と集

○御返し　御製

同 昔より名高き宿のとの葉はこのもとにこそ落積るてへ

○をみにあたりて侍ける人のもとにまかりてはへりけるに女さかつきに日かけをいれていたし侍けれは　能宣

同 有明の心地こそすれさか月に日かけも添ていてぬと思へば（集）
○恒佐大臣家の屏風に臨時祭のかたかきたる所に　貫之
同 足引の山ぬにすれる衣をは神につかふるしるしとそみる（おりふ集）
○まつりのつかひにまかり出ける人のもとより
すりはかますりにつかはしたりけるを〳〵かし
とせめ侍るれは　東宮女藏人左近
同 限なくとくとはすれと足曳の山ぬの水は猶そこほれる
○題不知　貫之
同 獨ねはくるしき物とこりよとや旅なるよしも雪のふるらん
○法師にならんとしける比雪のふり侍ければ　少將高光
（集裏）世中にふるそはかなき白雪のかつは消ぬるものとしる〳〵
○しはすの晦日に年の暮はへるとをなけき侍て
よみ侍ける　つらゆき
（集雜秋）むは玉の我黑かみに年暮て鏡のかけにふれるしら雪
○延喜廿年二月亭子院春日御幸ありける時國の
つかさ和歌廿首よみてたてまつりける中に
大和守藤原忠房
（集神樂歌）めつらしきけふの春日の八乙女を神もあはれと忍はさらめや
○冷泉院御時大嘗會近江國和歌　元輔（集乘盛）
同 とゝこほるともあらしな近江なるをものゝ濱の天のひつきは（どゝ集）
○延喜御時御屏風　貫之
（集賀）松をのみときはと思ふに夜とゝもに流て水も緣なりけり（なかすいつみ集）

○題よみ人しらす
（集神樂）住吉のきしもせさらむ物ゆへにれたくや人にまつといはれん
此うた住吉明神御託宣云々
○すみよしに詣て讀侍ける　安法々師
同 あまくたるあらひと神の相生を思へは久し住吉の松
○　惠慶法師
同 我とはゝ神よのこともかたらなん（こた〳〵集）昔しをしれる住吉の松
○天暦御時爲平親王着袴時　小野好古
（集雜賀）もゝ敷に千年のとはおほかれとけふの君はためつらしき哉
○菅原みちまさかかうふりし侍ける夜母のよみ
侍ける
久かたの月の桂も折はゝり家の風をもふかせましかな　權中納言敦忠
○或人賀し侍けるに
（集雜賀）于させふる霜のつるをは置なから久しき物は君にそ有ける
○清和女七親王の八十賀重明親王のし侍ると
きの屏風に竹に雪のふりかゝりたりける所　つらゆき
同 白雪は降かくせとも于世迄に竹のみとりはかはらさりけり
○たいしらす
なかれくる瀧の白糸絶すしていくらの玉のをとかなるらん　伊勢
○屏風に
（集雜賀）はる〳〵と雲ぬをさして行舟のゆく末遠くおもほゆる哉
○天暦十一年九月七日齋宮くたり侍けるに内よ
り御硯箱調て給すとて　御製

思ふをなるといふなる鈴鹿山こえて嬉きさかひとそ聞く
○圓融院御時齋宮のくたり侍ける時母の齋宮と
もにくたり侍けるに鈴鹿山にて　齋宮女御
世にふれは又も越けり鈴か山むかしの今になるにや有らん
○題不知　平定文
（集雜賀）ひきよせは只にはよらて春駒のつなひきよりそなは立ときく（すか集）
（集雜戀）我こそはにくゝもあらめ我宿の花みになとか君かきませぬ（たにも集）　伊勢
○たいよみ人しらす
（集雜賀）花の木はまかき近くは植てみしみれは物おもふをまさりけり（うつろふいろに人ならひけり集）
○灌佛のわらはを見はへりて
同 唐衣たつより落る水ならてわか袖ぬらすものや何なり
○修理大夫惟正朝臣家に方たかへにまかりたり
けるにつとめてまかりかへるとて出したりけ
る枕にかきつけ侍ける　少將義孝
同 つらからは人にかたらん數妙の枕かはらて一夜れにきと（し集）
○内に候ける人をちきりをきたりける夜をそく
まてきける程に丑みつと奏し侍けるをき〳〵侍
て女のいひつかはせける　讀人しらす
同 ひとこゝろ志みついまはたのましよ
といへりけれは　良峯宗貞
同 ゆめにみゆやとれそすきにける
○權中納言敦忠か兵衞佐に侍ける時忍ひていひ
契りて侍ける事のよにきこえ侍けれは

右集 左近（少將季繩女）
（集雜戀）人志れす契りしとは柏木のもりやしにけんよにふりにけり（たのめ集）
同 ○たいよみ人志らす
ぬれ衣をいかゝきさらんよの人のあめの下にしすまん限りは
○つゝむを侍けるをんなの返事をせすのみ侍け
れは一條のおほいまうちきみいはみかたてい
ひつかはしたりけれは　をんな
同 岩見潟何かはつらきつらからは恨みかてらにきてもみよかし
○女のもとにまかりたりけるにとくいり侍にけ
れはつとめていひつかはしける　源景明
（集旋頭歌）梓弓思ほすにして入にしをひきとゝめてそふすへかりける（さもねたく集）
○男もたりける女をせちに懸さうし侍てつかは
しける　よみ人志らす（る集）
（集雜戀）ありとても幾世かはふる唐國の虎伏すのへに身をやなけてん
○たいしらす
同 いつことも所さためぬ白雲のかゝらぬ山はあらしとそ思ふ
○女のもとにふみつかはしけるにあたなる人の
返しはせすといひて侍けれは　ふしのふ
同 あたなりとあたにはいかゝ定むちん人の心を人はしるやは
○題よみ人志らす
（集雜賀）いかてかは尋來つらん蓬生の人も通はぬわか宿のみち
○東三條にまかりいでゝあめのふりける日
承香殿女御
同 雨ならてもる人もなきわか宿をあさちか原とみるそ悲しき

○春日祭の使つかふまつりてまかりかへりてす
なはち女の許につかはしける　一條攝政
同くれはとく行てかたらんあふ事の遠ちの里の住うかりしも
○あつまより男の登り侍てさき〳〵ものいひ侍
ける女のもとにまかりたりけるにいかていそ
きのほりつるそといひ侍ひけれは
讀人しらす
同愚にも思ほましかは吾妻路のふせやといひしのへにねなまし
○とし月をへてけさうし侍ける女のつれなく侍
けれはまかりてさらに今はよにあらしといひ
侍てのちひさしうをとつれ侍らさりけれはこ
の男のいもうとのさきもかたらひなとし侍け
れはいひつかはしける
同心ありてとふにはあらす世中に有やなしやのきかまほしきに集そ
○かたらひ侍ける人のひさしふをとつれ侍らさ
りけれはたかんなつかはすとて
同君とはて幾世へぬらん色かへぬ竹の古根のおひかはるまて
○ある男のもとに松をむすひてつかはしたりけ
れは　よみ人しらす
集戀二なにせんに結ひ置けん岩しろの松は久しき物とふる〳〵
○一條攝政いまた下萬に侍ける時承香殿の御方
に侍けるをんな忍ひてものいひ侍けるにさら
になとひそといひ侍けれはほとへて契りし事
ありしかといひつかはしたれは　本院侍從
集雜戀それならぬとも有しをわすれねといひし斗を耳にとめけん

○ものへまかりけるにはまつらにかひのはへり
けるを見はへりて　坂上郎女
同我せこをこふるもくるし暇あらは拾ひてゆかん戀わすれ貝
○やんをなき所に候ける女の許に秋忍ひてまか
らむといひて侍けれは
同秋萩の花もうへをかぬ宿なれはしかたちよらん所たになし
○大納言朝光朝臣下らうに侍ける時忍ひてをん
なの許にまかりてあか月まかりかへらしとし
侍けれは　東宮女藏人左近
集雜賀岩橋のよるの契も絶ぬへしあくるわひしきかつらきの神
○紀郎女におくりける　大伴家持
集雜戀久方のあめのふる日を只ひとり山邊にをれは物うかりけり
○延喜御時御屏風歌　貫之
同何れをかしるしともみむ三輪の山有としあるは杉にそ有ける
○いなりにまてあひて懸さうし侍ける女のもと人
にあひ侍けれはいひ遣しける　藤原長能
同我といへは稲荷の神もつらき哉人の爲とは祈らさりしに
○稲荷のほくらにをんなの手にてかきて侍ける
讀人しらす
同瀧の水かへりてすまは稲荷山七日のほれるしるしと思はん
○つゝみの岳といふ所をよみ侍ける　紀輔時
集物名篝火の所さためすみえつるは流つゝみのたけはなりけり
○くまのくらといふ山寺に安居に賀縁法しの籠
りて侍けるに住持の法しに歌よめといひ侍け

れは
身を捨て山に入にし我なれはくまのくらはむともおほえす
○あらふれのみやしろ　藤原相見
莖も葉も皆みとりなるふか芹はあらふれのみや白くみゆらん
○さはかのみゆ
あかすして別れし人の住里はさはかのみゆる山のあなたか
○いぬか目のみゆ
鳥の子は又ひなゝから立ていぬかひのみゆるはすもり成へし　貫之
○よとかは　とき集
足引の山邊になれは白雲のいかにせよとかはるるよもなき
○やまと　元輔
ふる道に我やまとはむ古への野中の草はしけりあひにけり
○なとりのこほり　重之
仇なりなとりのこほりにおりゐるは下より解る事をしらぬか
○さくなむさ　如覺
紫の色にはさゝれむさしの草のゆかりと人もこそみれ
○かにひのはな　いせ
海神の沖なかにひのはなれ出てもゆとみゆるは天つ星かも　あまのいさりか集
○をみなへしといふをを句の上に置てよみ侍け
る　貫之
集雜秋古今物名小倉山みれ立ならし鳴鹿のへにけん年をしる人そなき　秋集
○かやくきのす　相見
集物名何とかやくきのすかたはおもほへて怪く花の名こそわすれ

○つくみ　よみ人しらす（集大伴黑主）
わか心あやしやあたに春くれは花につくみとなと成にけむ　てなり集
○日くらし　貫之
柚人はみやきひくらし足引の山のやま彦よひとよむ也　聲集
○　三常（集貫之）
松のねは秋のしらへに聞ゆ也たかくせめあけて風そひくらし
○とちところたちはな　相見
思ふとちところもかへすゝみへ南たちはなれなは戀しかる可
○さはやけ　（集よみ人しらす）
春風のけさはやけれは鶯のはなのころもゝほころひにけり
○かのとゝいふをを　惠慶法師
小男鹿のともまとはせる聲す也つまや戀しき秋の山邊に
○つゝみやき　すけみ
わきも子か身をなけしより猿澤の池のつゝみやきみは戀しき　すて集
○うるかいり
この家はうるかいりてもみてしや主なからもかはんとそ思
○あしかなへ　と集
津國の難波わたりに作る田はあしかなへかもえこそ見わかれ
○いかるかにけ　躬恒
をそとも聞たにわかすわりなくも人の怒るかにけやしなまし
○四十九日　相見
秋風のよもの山よりをのかしゝふくに散ぬる紅葉かなしな

拾遺抄卷第十

雑部下

○月を見侍て　　中務卿具平親王

よにふるにもの思ふ年もなけれとも月にいく度詠めしつらん

○小野宮おほいまうちきの家屏風に　貫之

思ふ事ありとはなしに久方の月夜となれはねられさりけり

○めにまかりをくれて侍けるころ　大江爲基

なかむるに物思ふものなくさむは月はうき世の外よりや行

○法師にならむと思侍けるころ　少將高光

かくはかりへかたく見ゆる世中にうらやましくも澄る月かな

○冷泉院東宮におはしましける時月まつ心殿上のをのこともよみ侍けるに　藤原仲文(藏人)

晨明の月の光をまつほとにわかよのいたく更にけるかな

○玄上宰柏のめの月のあかき夜かとのまへをまかりわたるとてせうそくいひいれて侍けれは　伊勢

雲ゐにてあひかたらはぬ月たにも我宿過て行時は見す(なし集)　貫之

○屏風の繪

常よりもてり增る哉山のはの紅葉をわけて出る月影　三常

○たいしらす

久かたの天つ空なる月なれといつれの里(水)にかけなかるらん(やとる集)

○三條のおほいまうちきみ後院に住み侍ける時歌よみともあつめて哥よませ侍けるに水上秋月と云題を　菅原文時

水の面に月の沈むをみさりせは我身のみとや(ひとり集)思ひはてまし

○除目のつとめて命婦左近かりつかはしける(もとに集)　元輔

年毎にたえぬ泪や積りつゝいとゝ深くはみを沈むらん

○權中納言敦忠か西坂本の家の瀧の巖にかきつけ侍ける　伊勢

音羽川をき入て落す瀧つせに人の心の見えもする哉

○　中務

君かくる宿に絶せぬ瀧の糸はへてみまほしき物にさりける(う有集)

○たいよみ人しらす　躬恒

もかり船いまそ渚にきよすなる汀のたつの聲さはなり

○大空を詠めそ暮す吹風の音はすれともめにしみえれは

○ある所に春秋いつれまさりたりとひはへりけれは　貫之

春秋に思ひ亂てわきかれつ時につけつゝ見ゆる(うつ集)心は

○草あはせし侍ける所にて　惠慶法師

種なくてなき物草は生にけりまくてふ事はあらしとそ思ふ

○なそ〳〵かたりし侍げる所にて　曾禰好忠

我ことはえも岩代の結ひ松千年をふとも誰かとくへき

○野宮にて齊宮の庚申し侍けるに松風入夜琴と

いふ題を讀侍ける　齋宮女御

ことの音に峯の松風かよふ也いつれのをよりしらへそめけん(らし集)

松風の音に亂るゝことの音をひけは子日の心地こそすれ

○五條内侍のかみの屏風に海に松のひたれる所

を

海にのみひたれる松の深みさりいくしほとかは知へからん　伊勢

○天暦御時名有所〳〵のかたを屏風にかゝせて

人〳〵に歌奉つらせ給ける中に　忠峯

尾上なる松の梢はうちなひき涙のこゝにそ風もふきける

○延喜御時御屏風に　つらゆき

雨降と吹松風は聞ゆれと池のみきはゝまさらさりけり

○つかさ給はらてなけき侍ころさうしを人のかゝせ侍けるおくに書つけ侍ける

いたつらに世にふる物と高砂の松も我をや友とみるらむ

○大江の爲基か許にうりにまてきたりける鏡のしきにかきて侍ける　よみ人しらす

けふのみと見るに涙のます鏡なれにし影を人にかたるな(まて集)

○小一條左大臣(師尹)まかりかくれてのちかひ侍ける　小野宮おほいまうち君

鶴のなき侍けるをきゝて

をくれぬて鳴なるよりはあしたつのなとか齡を讓らさりけん

○或所に說經しける法師の從僧の小法師原のぬて侍けるにすたれのうちより花おりてといひ侍けれは　從僧小法師(集壽之法師)

いなおらし露に袂のぬれたらは物思ひけりと人も社見れ

○山里にまかりけるあか月に日くらしのなき侍けれは　右大將濟時

朝朗日くらしの聲聞ゆなりこやあけくれと人のいふらん

○屏風のゑに法師のふねにのりてはへりける所に　中納言道綱母

わたつみはあまの舟こそ有ときけ乘たかへても漕てたる哉

なのみして山は三笠もなかりけり朝日夕日のさすをいふかも

○天暦の御時屏風に長柄橋のはしらのわつかに

のこりたるところに　藤原清正

あしまより見ゆるなからの橋柱むかしの跡のしるし成けり

○あかしの浦を船にのりてまかりけるほとにより

み侍けるよとゝもに明石の浦の松原は涙をのみ社よるとしるらめ　源爲宣(集爲憲)

○橘たゝもとか人のめにしのひてものいひ侍ける頃遠所まかるとてその女のもとにつかはしける　貫之

わするなよ程は雲井になりぬ共空行月のめくりあふ迄

○題不知

年月はむかしにあらすなりぬれと戀しきをはかはらさりけり

○難波にはらへしにある女のまかりたるにむかしむつましふしをりて侍ける男のあやしのさまにてあしをかりてあひて侍けれはさりけなく　よみ人しらす

ていひ遣しける

あしからしとてこそ人に別れけめ何か難波のうらにしもすむ(よからんとてこそわかれけん)　おさこ(はすみうき集)

○返し

君なくてあしかりけりと思ふにはいとゝ難波の浦そすみうき(も集)

○源重之か母近江に侍けるに孫のあつまよりまかりのほりていそくとありてなんこのたひえあはてまかりぬるといひてはへりけれは　祖母

親のおやと思はましかは問てまし我子のこにはあらぬ成へし

○天暦御時一條攝政藏人頭にて候ける時に帶を
かけて碁をあそばしけるまけたてまつりてか
すおほくなりにければ帶かへし給はすとて　御製
白涙のうらや返すと思ふよに濵の眞砂の數そつもれる
○内侍馬か家に中納言實資わらはに侍ける時小
弓いにまかりたりけるにものかゝぬさう紙を
かけものにして侍ければ　小野宮大いまうち君
いつしかとあけてみたれば濵千鳥あとあるとに跡のなき哉
○題よみ人しらす
なきなのみ龍田の山の麓にはよにも嵐の風もふかなむ
○たかおにまかりかよふ法師にある女のなたち
て侍ければ少將しけもとき〻つけてまことか
ととひにつかはしたりければ　八條大君
なきなのみ高尾の山といひ立る人はあたこの峯にや有らん
○みたけにとしおいて詣侍て　元　輔
いにしへものほりやしけん芳野山やまより高きよはひなる人
○兩ふる日大河原をわたり侍けるにひるのあし
につきて侍ければ　禪慶法師(集惠慶法師)
世中にあやしき物は雨ふれと大原川のひるにさりける
○みちのくにの名取のこほりくろつかといふ所
に重之かいもうとあまたすむとき〻侍ていひ
つかはしける　平　兼盛
陸奥のあたちの原の黒塚にをにこもれると聞はまとか
○三條のおほいまうち君の家のかへのゑに旅人
の盜人にあひて侍けるかたをかきて侍ける
藤原爲賴
にぶかれ集
やなかさん
ぬす人の龍田の山に入にけりおなしかさしの名をやなかさん
○同繪に白馬引處に　惠慶法師
難波江の蘆のはな毛のましれるはつの國かひの駒にや有らん
○かうふりやなきを見侍て　(集仲文)
かはやなき糸はみとりに有物をいつれかあけのころも成らん
○能宣かもとに車のかもこひにつかはしたりけ
るになしといひ侍けれ　仲　文
鹿をさして馬といふ人有けれはかもをもをしと思ふなるへし
○かへし　能　宣
なしといへは惜むかもとや思らん鹿や馬とそいふへかりける
○大隅守に櫻嶋忠信か侍ける時に郡司にかしら
ゑろきおきなの侍けるをめしかむかへんとし
侍けるにおきなのよみ侍ける　にぞ集
老はて〻雪の山をはいた〻けと霜とみるまて身はひえにける
○神明寺の邊に無常所まふけて侍りけるかおも
しろく見えけれは　元　輔
おしからぬ命や更にのひぬらんをはりの煙しむるのへにて
○つかさたまはらさりける人のとひにつかはした
りけれは　源　景　明
わひしとはうき世中にいけらしと思ふとさへかなはさりけり
○二條の大いまうち君の右近のつかひのをさ清
忠をめして歌よませ侍けるに身の〻そみ侍け
るかかなはす侍けれは　佐伯清忠
かきりなき泪の露にむすほれて人のゑもとは成にや有らん

○むすめにまかりをくれて又の年の春櫻花さか
りに家のさくらを見ていさ〻か思ひをのふと
いふ題を　小野宮大いまうちきみ
櫻はな長閑けかりけりなき人を戀る泪そまつは落ける　兼　盛
○
面影に色のみ殘る櫻花幾よの春を戀んとすらん　元　輔
○　元有集
はなの色も宿も昔の春なからかはれる物は露にさりける　能　宣
○
櫻花にほふものから露けきはこのめも〻のそ思ひしるらし
○この事をき〻侍て　源　千　古
君まさはまつそおらまし櫻花風のたよりに聞そかなしき
○天暦御時中宮かくれ玉ひてのち又のとしのあ
き前載につゆのをきたるをかせのふきなひか
すを御覽して　御　製
あき風になひく草はの露よりも消にし人を何にたとへん
○冬おやの裏にあひて侍ける孝子(法師)のもと　三　常
につかはしける　集雜秋　礼集
紅葉々やたもと成らん神な月しくる〻とに色のまさるは
○さる澤の池に采女のみなけて侍けるをみて　人　丸
わきも子かねくたれかみを猿澤の池の玉もとみるそかなしき　集哀
○題よみ人しらす　ぬ集
心にもあらて憂世にすみ染の衣の袖のぬれぬ日そなき

○服ぬき侍とて　貫　之
ふち衣はらへて捨る泪かはきしよりまさるみつそなかる〻　にも集
○一條太政大臣の服ぬくとて　道信朝臣
かきりあれはけふぬき捨つ藤衣はてなき物は泪なりけり
○とし
のふかなかされ侍ける時なかさる〻人は
重服の裝束してなむまかると聞てはゝの許よ
りそのきぬしてつかはすにむすひつけてつか
はしける　し集
ひとならてむねのちふさをほむらにてやく墨染の衣きよきみ
○思ひける女におくれて歎けるころよみ侍ける　大江爲基
藤衣あひみるへしと思ひせはまつにかゝりてなくさめてまし
うら山しいかなる人かとこふりてあひ思ふ人に別れさるらん　集どくふれと
○たいよみ人しらす
うつくしと思しいもを夢にみておきてさくるになきそ悲しき
○兵衛の佐のふかたまかりかくれて侍けるにお
やの許につかはしける　堀川のおほいまうちきみ
こゝにたにつれ〳〵とな郭公ましてこゝぬの森はいかにそ　元　輔
○順か子なくなりて
思ひやるこゝぬの森の雫にはよ所なる人の袖もぬれけり　重之(集兼盛)
○子にまかりをれくてよみ侍ける
なよ竹の我子のふをはしらすしておほしたてつと思ひける哉
○めなくなりてのち子もうせ侍にける人をとふ
らひにつかはしたりけれは　讀人不知

同 いかにせん忍の草もつみ詫ぬかたみとみえし子たになければ（集て）

此卷亦十五首脫算合如レ前

（小野宮大いまうち君いつしかとの下）

○返し

とゝめても何にかはせん濱千鳥ふりぬる跡は涙に消つゝ

（以下十四首疑らくはよみ人しらずいかにせんの下にあるへし）

○朝かほのはなを人のもとにつかはすとて　藤原道信朝臣

集長 あさかほを何はかなしと思けん人をも花はさこそみるらめ

○昔見侍し人〳〵おほくなくなりたることを人なけくをみ侍て　藤原爲頼

同 世中にあらましかはと思人なきかおほくも成にける哉　右衞門督公任

同 常ならぬ世は憂身こそ悲しけれ此の數にたにいらしと思へは

○子ふたり侍ける人のひとりは春まかりかくれいまひとりは秋なくなりにけるを人のとふらひて侍けれは　よみ人しらす

同 春は花秋はもみちとちりはて〻立かへるへきこのもとにもなし

○世中心ほそくおほへてつれならぬ心ちし侍けれは公忠朝臣のもとによみてつかはしけるこのあひたやまひおもくなりにけり　紀貫之

同 手に結ふ水に宿れる月影の有かなき〔か〕のよに社有けれこのうたよみ侍てほとなくなくなりにけるとなん家の集にかきて侍る　よみ人しらす

○題しらす

同 鳥邊山たに〻煙のもえた〻ばはかなくみえし我としらなん　沙彌滿誓

同 よの中を何にたとへん朝ほらけこき行船の跡のしら涙

○忠蓮南山の房のゑに死人を法師の見侍てなきたるかたをかきたるをみて　源相方朝臣

同 契あれはかはれなれとも逢ぬるを我をは誰かとはんとすらん　よみ人しらす

○題しらす

同 山寺の入相のかれの聲とにけふもくれぬと聞そかなしき

○法師にならむとていてける時に家にかきつけて侍ける　慶滋保胤

同 浮世をはそむかはけふもそむきなん明日も有とは賴へき身か　よみ人しらす

○題しらす

同 世中に牛の車のなかりせは思ひの家をいかて出まし

○爲雅朝臣普門寺にて經供養し侍て又の日これかれもろともにかへり侍にけるついてにおのにまかりて侍けるに花のおもしろかりけれは　春宮大夫道綱母

同 薪こゝろとは昨日につきにしをいさをの〻えはこ〻にくたさん

○をこなひし侍ける人のくるしくおほえ侍けれはえおき侍らさりける夜のゆめにおかしける法師のつきおとろかしてよみ侍ける

同 朝とにはらふちりたに有物を今幾世とてたゆむなるらん

同 市門にかきつけて侍ける　空也上人

一 たひも南無阿彌陀佛といふ人の蓮のうへにのほらぬはなし

定爲法印筆拾遺集跋

算合抄之證本

抄歌五百九十四首（上二百卅五首　下三百五十九首）

其中

戀上　中納言師氏

思つゝへにける年をしるへにてなれぬる物は心なりけり

或本無レ入後撰云々

○題しらす　赤染衞門

わか宿の松はしるしもなかりけりすき村ならは尋きなまし

此二首集不レ見歌也

五百九十二首集抄無二相違一

拾遺抄哥

春　五十七　夏　三十二

秋　四十九　冬　卅二

賀　卅一　別　三十四

戀上　七十五　一首集不レ見。或本無レ之。

戀下　七十五　一首集不レ見。

雜上　百廿二　雜下　八十六

已上五百九十四首

拾遺抄十卷後世希傳。保己一嘗得二公任卿眞蹟。一轉之本不レ耐二喜躍。謄寫挾レ架。疑其尾有二脫闕一也。屋代弘賢。日者得二拾遺集古本一比校而藏レ家。其一是定爲法印所レ筆。一則柳原業光卿手書。而二本並標註抄歌詳矣。弘賢乃採而參訂。定爲レ本。註二每卷哥數。而終書云。惣計五百九十四首。更計之實得二五百九十三首。明知其爲レ筆誤也。今據二此本一。於二春秋及戀上雜下一。四卷內得下其所二脫漏一廿一首上。始全然復二其舊焉。不二亦慊一乎。袋草紙曰。抄歌五百八十六首。或云四首。即淸輔朝臣所レ見レ本異耳。又曰。花山院御撰而世多爲二公任卿撰一。今試以二集中所レ載作者之官位一推二其時一。此書之撰即在二長德二年一。後段經二刊修一且稍有レ所二增加一。至二長保三年一乃改爲二拾遺集廿卷一也。玩二讀兩書一。其題書之辭俱似不レ出二人臣之手一也。爲二花山法皇製作一者得二其實一歟。姑書俟二識者點寘一爾。

群書類從卷第百四十六畢

群書類從卷第百四十七

和歌部二

後葉和歌集

いそのかみふるき人のをわさをたつね。河竹のなかれ久しき世々をきくに。ひゝりの帝畏しこきおほん時。人の心をわきまへ國の政をまろしめす事。敷しまの大和歌になんありける。しかあるを時。くたり人をろそかになりにけるより。なにはづによせて君をそへ奉るあさならひかたく。よし野山をかけて。人をしたふ思ひ。いさゞまれになりにけり。いまそかきくのいろなるはひとたびすみて。昔のにほひまて(本ノマヽ)より。ならの柴の名におへるみや[　　]ひひらけて。古の風あらたにつたはれる代にあひて。すたれたる道をいたみ。ふるきあさをこふる瞿。かみつかたのすべらぎにつかへまつる悦びをいだかずといふをなし。かくてのち。よつのうみ波をすまして。むなしき舟ながれにあそばしむる内に。さま〳〵の集にいらざる歌ども撰び奉るべきみをありて。言のはの花といへる集をあらたにえらび出されにけり。山かつのしつの垣ねに。風のつてにちれるを悦びて。おり〳〵ひらきて春のつれ〳〵をなぐさめ。秋のあはれをそふるに。古の人をつらね入られたるは。富士の根のけふりよりもたかくして。つくばねのこのもかのもにまゞり。今の代の歌をえらび載られたるは。夕つく夜おぼろげならぬはとられぬにやとみえながら。秋山のしかすがにおぼゆるも。ところ〳〵まゞはれる歌にかきあらため。撰べきみをありとは。花すゝきほのかにきこえわたりしかども。雁金のつらねあつめたりし人も。夕のそらの雲にまゞり。しぎのはねかきなをされんとも。在明の月のさやかにもきゝさだめれば。木のもとに殘れるとの葉もくちはてぬべく。いは間によどむ水のこゝろもかきながすかたなくて。老の身のしもをいたゞけるが。よはひを忘てをのはの風にたくはん事を思ひあまりし。かの集の中に。和歌の浦波こゝろよりぬべく。もゝの關路のめとゞまるをは。私のもてあそび物にあらむとて。思ひうるにまかせてかき出したり。此外の歌の春の水とゞこほりすくなく。秋の風きくところあるをばかされてこぬ(本ノマヽ)をかれんそさへにもやとて。きゝをよぶに從ひてつらね入たり。又かのふるきが中に心ふかく。をばたくみなるがおほくまゝはりてみゆると。池水のもらさずみなれざほとりえらふべけれども。ちかき撰集ふるきにゆつりて。とられぬほとの集にいれるをば。まさきのかつらくりかへし。月草のうつしあへかたければ。心にはそめながらとらずなんなりぬる。いやしくもふるき歌の跡をねがひ。殘れるとの葉をあつめて。後葉和歌集となづけて。わかちてはたまきとせり。押柿本のつたへあらす梨壺のつゆにしうるはして。もとあらの萩のもとあら〳〵みたりしをも。ふるから小野のふりはてにたれば。わすれ水わすれのみゆきつき(本ノ)くれば。とりあやまり多からむを。古にはぢ。今におそれ思へども。はゞかりの關のはゞかりながら。水莖のかきながしつる事になむなりける。夏草のかりのすさびにはあれども。おほあらきの森いづるともあらば。あざけりしげき。つまとのみなりはてぬへき事ならんかし。

春上

○ふるとしに春たつ日　延久第三親王(輔仁)

年のうちに春たちくれは一とせにふたゝひまたる鶯のこゑ

○春たつ心をよめる　源俊頼朝臣

はるのくるあしたの原を見わたせは霞もけふそ立はしめける

○新院百首の歌めしけるに　待賢門院堀川

雪ふかき岩のかけみちあとたゆるよしのゝ里も春はきにけり

○堀川院御時百首の歌たてまつりけるに霞をよめる　隆源法師

梓弓はるのしるしにいつしかとまつたなひくは霞也けり

○寛和二年内裏歌合に　藤原惟成

きのふかも霞ふりしかしからきの外山の霞はるめきにけり

○天德四年内裏歌合に　平兼盛

ふるさとは春めきにけりみ吉野のみかきかはらを霞こめたり

○同歌合にうくひすをよめる　源順

氷たにとまらぬ春の谷風にまたうちとけぬ鶯のこゑ

○百首の御歌の中に　新院(崇德)御製

鶯の鳴へき程になりぬれはさもあらぬ鳥も耳にこそたて

○題不知　道命法師

たまさかに我まちえたる鶯の初音をあやな人や聞らむ

○承暦二年内裏歌合後番の歌　藤原顯綱朝臣

春たては雪の下水うちとけて谷の鶯今そなくなる

○鷹司殿七十賀の屏風に子日をたるところを　赤染衛門

万代のためしに君かひかるれはねの日の松もうらやみやせむ

○堀川院の御時たてまつりける百首の中に　東宮大夫公實

れのひして二葉の松を千代なから君か宿にもうつしつる哉

○承暦二年内裏の後番の歌合に人にかはりて　前皇后宮美作

ふたば成子の日の小松ひきそへて花さく代をは君そみるへき

○若菜の歌とてよめる　讀人不知

昨日社やくとはみしか春日野にいつしか今日そ若菜つみける

○百首の歌の中にはるのこゝろをよめる　曾禰好忠

雪きえはゑくの若菜もつむへきに春さへはれぬみ山へのさと

○　大藏卿匡房

道たゆといとひし物を山里にきゆるはおしき去年の雪かな

○屏風の繪に内宴かける處を　平兼盛

あたらしき年のはしめにあひくれと此春はかり嬉しきはなし

○梅の歌とて　大納言師頼

いまよりは梅さく宿は心せむまたぬにきます人もありけり

○　源時繩

吹くれはかをなつかしみ梅の花ちらさぬ程のはる風もかな

○　源俊頼朝臣

梅かゝはをのか垣根をあくかれてまやのあたりにひま求む也

○百首歌たてまつりける中に　小大進

移かにあた名たちえの梅花なをこりすまに袖やふれまし

○むめの歌よませたまひける　新院御製

吹風にゝほふのみかは梅花うす紅の色もめつらし

○屏風の繪に梅花をみて人とゝまれり　平兼盛

花の木をうへしもしろく春くれは我宿すきてゆく人そなき

○天德四年内裏歌合に

さほひめの糸(然通)そめかくる青柳を吹なみたりそ春の山風

○忠義公の家歌合に　讀人不知

谷風のふきあけにたてる玉柳枝の糸にもみえぬはる哉

○百首のうたたてまつりけるに　藤原顯廣朝臣

紫のねはふよこの〻つほすみれ眞袖につまん色もむつまし

○よふこ鳥をよめる　讀人不知

我せこか衣たつ田の山中にうらかなしくもよふことり哉

○かへるかりの歌とて　贈左大臣(永實)

ふる郷の花の匂やまさるらむしつ心なくかへるかり金

○　源忠季

中〳〵に散をみしとや思ふらん花の盛にかへるかりかね

○春駒をよめる　俊惠法師

まこも草つのくみいつる澤へにはつなかぬ駒も放さりけり

○春の歌の中に　藤原清輔

みこもりに蘆のわかはも朋ぬらむ玉江の沼をあさる春駒

尋ねつる花のあたりになりにけり匂ふにしるし春の山かせ

○　關白前太政大臣(忠通)

かへるさのいそかぬ程の道ならはしつかに峯の花はみてまし

○ところ〳〵に花をたつぬといふをよませた

春くれは花の木末にさそはれていたらぬ里のなかりつる哉　白河院御製

○遠き山のさくらといふをを　前齋院出雲

九重にたつしら雲とみえつるは大内山の櫻成けり

○京極前太政大臣(師實)家歌合　一宮紀伊

朝またき霞なこめそ山櫻尋ね行まのよそめにもみん

○　大藏卿匡房

しら雲とみゆるにしるしみよしの〻吉野の山の花さかりかも

○　康資王母

紅のうす花さくらにほはすはみな白雲とみてや過まし

○　中納言女王

山櫻にほふあたりははる霞風をはよそに立へたてなん

○花御覽して　院御製(鳥羽)

心あらは匂ひをそへよ櫻花のちの春をはいつかまつへき

○題不知　藤原元眞

櫻花ちらさて千世もみてしかなあかぬ心はさてもありやと

○屏風の歌　平兼盛

ひと〻せは春なからにも暮なゝん花の盛をあくまてもみん

○關白前太政大臣家の歌合さくらをよめる　源俊頼朝臣

心あらは風もや人をうらみましおるは櫻のおしからぬかは

○百首の歌たてまつりけるに　左近衛中將教長

ふる郷にとふ人あらは山さくらちりなん後をまてと答へよ

後葉和歌集卷第二

春下

○院の北おもてにて人々歌つかうまつりけるに

風なくして花ちるといふををよめる　贈左大臣

うつろへはなのか心とちる花をさのみは風におほせさらなむ　大中臣能宣朝臣

○天德四年内裏歌合

櫻花かせにし散らぬ物ならは思ふをなき春にそあらまし　東宮太夫公實

○承暦二年内裏後番歌合

山櫻おしむにとまる物ならは花の春ともかきらさらまし　周防内侍

○京極前太政大臣家歌合

山さくらおしむ心のいくたひか散木のもとに行かへるならん　右兵衛督公行

○新院のくらゐにおはしましける時うへのをの

こともに歌よませさせたまひけるに

あらし吹志賀の山への櫻はなちれは雲井にさゝなみそたつ　修理太夫顯季

○題不知　よみ人しらす

おしめともかせにみたれてちる花をくる人とめよ青柳のいと

○承暦二年内裏歌合　修理太夫顯季

たつねこぬさきにはちらて櫻花みるおりにしも雪のふるらん

○太皇太后宮賀茂のいつきと開えける時人〻まいりて鞠つかうまつりけるにすゝりのはこのふたに雪をいれて出され侍りけるしきかみに書つけはへりける　摂津

さくら花散しく庭をはらはれはきえせぬ雪と成にけるかな

○落花滿庭といふをを　花園左大臣(有仁)

庭もせに積れる雪とみえなからかほるそ花のふるし成ける　源俊頼朝臣

○花のちるをみて

身にかへておしむにとまる花ならはけふや我世の限ならまし　藤原範永朝臣

○老人花をおしむといふをを

散花も哀とみすやいそのかみふりはつるまておしむ心を　藤原隆資

○落花をよめる

櫻花又みんともさためなき齡そ風よこゝろしてふけ　上達部花みんとて觀音院より雲林院を見侍り

○上達部花みんとて觀音院より雲林院に車たてて物みて

かへりけるあひたに齋院に車たてて物みて

かへるとてしめの花のはなにもあらぬなるへ

しと申ける返事に　堀川左大臣(俊房)

風をいたみまつ山へをも尋つるしめゆふ花は散らしとそ思ふ

○三月の十日のほとにはなの殘りすくなく成をみて

ちるまゝに春の過るをみる時は花なき里に住へかりける

○三月のつこもりに實方朝臣のもとにいひつかはしける　藤原道信朝臣

散殘る花もやあるとうちむれてみ山かくれを尋てしかな　待賢門院兵衛

○春の歌のなかに

花の色に光さしそふ春のよそ木の間の月はみるへかりける　延久第三親王

○題しらす

心してみるへかりけり春の月をそともなくむかし戀らる　よみ人しらす

○つゝしの歌とてよめる

わきもこがしたもの色の紅に花咲にけるいはつゝしかな

○堀河院御時百首の歌たてまつりけるに

風ふけは涙おりかけてかへりけりきしには植し山ふきの花　源俊頼朝臣
○　藤原俊基
山ふきの花咲にけりかはつ鳴井手のわたりを今やとはまし
○　よみ人しらす
山吹の花のちるをやおしむらんかみなひ川にかはつ鳴也
○藤のうたよみけるに
たこのうらにけふもとまりぬふち波の紫ふかき色のあかねは
○新院位におはしましける時牡丹をよませ玉ひける　關白前大政大臣
咲しよりちりはつるまて見し程に花のもとにて廿日へにけり　大中臣能宣朝臣
○　○

後葉和歌集卷第三

夏

○堀川院御時百首歌奉つりけるに　太皇太后宮肥後
あかさりし花になれたるかゝ衣心の外にかふるけふ哉
○　隆源法師
春とても花の袂にあらぬ身は衣かへうきとのなきかな
○題しらす　懐圓法師
花ちるとなけきし程に山里のやかてこくらく成にけるかな
○天德四年内裏歌合　平兼盛
あらしのみ寒き深山のうの花はきえせぬ雪とあやまたれつる
○山里のうのはなを
散花にせきとめらるゝ山川のふかくもはるの成にけるかな　藤原清輔
○百首の歌たてまつりける中に
大かたの春のくるゝはおしきかと花なきやとの人にとはゝや　橋俊成
○老人惜春と云をを
老てこそ春のおしさはまさりけれ今いくたひも逢しと思へは　藤原定成朝臣
○三月盡の心をよめる
いくかへりけふに我身のあひぬらむ惜むは春の過るのみかは　源俊頼朝臣
春こそは限もあらめみよし野に霞ハのこれかたみともみん　大納言成通朝臣
さのみやは又こむ春をまちへけむと思ふにいとゝ惜きけふ哉
年をへてかまひ馴にし山里のかとゝつはかり咲るうのはな
○ほとゝきすをまつこゝろを　周防内侍
昔にもあらぬ我身に郭公まつこゝろこそかはらさりけれ
○關白前太政大臣家にてほとゝきすの歌讀侍けるに　藤原忠兼
ほとゝきす鳴ねならては世中に待ともなき我身也けり
○堀川院御時百首歌奉つりれるに　藤原基俊
一こゑのきかまほしさに郭公思はぬ山にたひねをそする
○　前齋宮河内
夜をかさねまつをはふらて時鳥いかなる里に鳴ふかすらん
○中院右大臣家歌合　中納言師時
きゝつやと人もこそとへほとゝきすかたるはかりの一聲も哉

○天德四年内裏歌合　坂上望城
ほのかにそ鳴わたるなる時鳥み山をいつるけさの古こゑ
○題不知　大納言公教
待ほともぬる夜もなきをほとゝきす鳴音は夢の心地社すれ
○承暦二年内裏歌合　藤原伊家
ほとゝきす曉かけて鳴こゑをまたぬれさめの人やきくらむ
○六條左大臣家歌合　藤原國房
人つてにきかぬはかりそ時鳥名殘戀しき夜半の一こゑ
○通家朝臣家歌合によめる　良暹法師
さつきやみ花橘にふく風はたか里までかにほひ行らん
○百首の歌の中によめる　前齋宮河内
なつかしき花橘のにほひ哉思ひよそふる袖はなけれと
○題しらす　待賢門院堀川
こやの池に生るあやめの長きねはひく白糸の心ち社すれ
○百首の歌たてまつりける中に
五月雨の日をふる里の庭のおもは水草もとらぬ池かとそみる　中納言通俊
○郁芳門院菖蒲根合によめる
もしほやくあまの浦人うちたえていとひやすらん五月雨の空　源仲延
○五月雨をよめる
五月雨はしつのをころも朽ぬへし我身の爲にさゝめかるまに　大貳高遠
○寛和二年内裏歌合
鳴聲もきこえぬものゝ悲しきは忍ひにもゆる螢なりけり　修理大夫顯季
○百首歌中にともしをよめる
さつきやみ山か峯にともす火は雲の絶間の星かとそ見る　大皇大后宮大貳
○閏六月七日に
つれふりも歎やすらむ七夕はあはまし暮をよそになかめて　内大臣(實能)
○太政大臣家歌合夏風をよめる
夕されはしのゝ小笹をふく風のまたきに秋の氣色成かな　曾禰好忠
○歌しらす
そま川の筏のとこのうき枕なつはすゝしきふしと成けり　良暹
○新院にて人〳〵歌つかうまつりけるに泉邊避暑といふをよめる
結ふ手もすゝしかりけりみな月の岩間の水に秋やかよへる　相摸
○題不知
下紅葉ひとはつゝちる木のもとに秋とおほゆるせみの聲かな　よみ人しらす
○
いさきふく池の心やすみぬらんにこりにしまぬ花さきに鳧
○はちすの露をみて
うらやまし蓮はにねるしら露をうき世にやとる我身とも哉
○長保元年入道前太政大臣家歌合　源道濟
待ほとに夏のよいたく更ぬはおしみもあへす山のはの月　修理大夫顯季
○家歌合瞿麥をよめる
種まきし我なてしこの花さかりいく朝露におきてみつらん
○百首歌の中によめる
水無月の川そひ柳うちなびきなこしのはらへせぬ人そなき
○秋たつ日　よみ人しらす
秋きぬと聞つるからに風の音のけさうちつけに涼しかるらん

後葉和歌集卷第四

秋上

○題しらす　太皇太后宮攝津
荻のはにそよともすれは待人におとろかれぬる秋のはつ風
○七月七日式部大輔資業か家にてよめる　橘元任
荻のはにすかく糸をもさゝかには織女にとやけさは引らん
○承暦二年内裏歌合に　藤原顯綱朝臣
織女に心をかすと思はれとくれ行そらは嬉しかりけり
○題しらす　加賀左衞門
いかなれはとたえそめけむ天川あふせにわたす鵲のはし
○　修理大夫顯季
天川たなはたいそきわたさなん淺瀨たとれは夜のふけ行に
○寛和二年内裏歌合　大中臣能宣朝臣
おほつかなかはりやしにし天河年にひと度わたるせなれは
○　堀川右大臣
七夕はいかにさためて契りけんあふをかたき心ながさを
○　待賢門院堀川
織女のあふせたえせぬ天河いかなる秋かわたりそめけん
重てもあかぬ思ひやまさるらんけさ立かへるあまのは衣
○題しらす　源道濟
獨ねてなかむる宿のおきのはに風こそわたれ秋の夕くれ
○　和泉式部
秋ふくはいかな色のかせなれは身にしむはかりあはれ成らむ
○霧をよみ侍りける　源兼昌
夕霧に木末も見えすはつせ山入會のかれのをとはかりして
○兼房朝臣家歌合　法祐法師
あさ霧にみきはまとひぬ龍田河いつれの程かわたり成らん

○題しらす　三條院御製
あしひきの山のあなたにすむ人はまたてや秋の月をみるらむ
○月待心をよめる　大江嘉言
秋のよの月まちかねて思ひやる心幾たひ山をこゆらむ
○京極前太政大臣家歌合　源頼綱朝臣
秋のよは月に心のひまそなき出るをまつと入をなけくと
○寛和二年内裏歌合　花山院御製
秋のよの月に心のあくかれて雲ゐに物を思ふころ哉
○題しらす　中院右大臣
いかなれはおなし空なる月影の秋しもとに照まさるらむ
○關白前太政大臣家歌合　藤原重基
秋のよの月の光のもる山は木の下陰もさやけかりけり
○月浮水といふ事を　藤原忠宣
秋山の清水はくまにこりなは宿れる月のくもりもそする
○左京大夫顯輔家歌合　藤原道經
秋のよもあまの河瀨やこほるらん月の光のさえわたる哉
○中納言家成家歌合　藤原範兼
天川雲の波なき秋のよはなかるゝ月のかけそのとけき
○題しらす　坂上明兼
とりとむる物にしあらは山のはにいれてそみまし秋のよの月
○ひえの山念佛にのほりて月をみてよめる　良暹法師
天津風雲ふきはらふたかねにて入まてみつる秋のよの月
○堀川院御時百首歌たてつりけるに　源俊頼朝臣
木からしの雲吹はらふ高根よりさえても月のすみのほる哉
○爲忠朝臣家にて人々百首の歌よみける中に

秋風におはな波よる野へにきてほのめく月の影を社みれ　藤原親隆朝臣
○月を御覽して　三條院御製
秋に又あはんあはしもしらぬ身は今夜はかりの月をたに見む
○題不知　天台座主明快
ありしにもあらすなり行世中にかはらぬものは秋のよの月
○　和泉式部
鳴虫のひとつこゑにもきこえぬはこゝろ〳〵に物やかなしき
○八月廿日頃に虫のこゑを聞て　赤染衛門
在明の月は袂になかれつくかなしきころのむしの聲かな
○題しらす　永源法師
八重葎しけれる宿は夜もすから虫のねきくそとりところなる
○　曾禰好忠
秋のよの草むらとにをく露はよる鳴虫のなみた成へし
○天祿四年女四宮歌合　橘匡通
秋風に露を泪と鳴虫の思ふこゝろをたれにとはまし
○三條太政大臣(頼忠)家にて叢中虫と云心をよめる
あき深く成行よはの虫のねはきく人さへそ露けかりける
○神祇伯顯仲廣田にて歌合し侍りけるにくれの虫のこゝろをよめる
まくす原なひく夕の秋風にうらみかほなるまつむしの聲
○百首歌合にかりを讀る　藤原顯仲朝臣
春秋と行てはかへる雁金はいつこかつゐの栖なるらむ
○　待賢門院堀川
水の面にかきなかしたる玉札はとわたる雁のかけにそ有ける

○承暦二年内歌裏合に萩をよめる　藤原正家朝臣
夕暮は小野のはき原吹風にさひしくもあるか鹿のなくなる
○　春宮大夫公實
霧ふかき山のおのへにたつ鹿は聲はかりにや友をしるらむ　(類聚古歌秋)
○野亭鳴鹿といふ事を　源俊頼朝臣
さを鹿の鳴ねはのへに聞ゆれとなみたは床のものにそ有ける
○永承五年宮歌合　出羽介
聞人のなとやすからぬ鹿のねそ我つまを社戀てなくらめ
○中納言家成家歌合　藤原道經
夜や寒きつまやまとへる秋山の霧のあなたに男鹿鳴なり
○　藤原基俊
宮城野のはきやをしかのつまならん花さきしより聲の色なる
○關白前太政大臣九條の家に皇嘉門院御幸あり　皇嘉門院治部卿
て歌よまさせ玉ひけるに
さよ更てをしか鳴也みやき野の萩の下葉の露や寒けき　藤原伊家
○題しらす
秋はきをくさのまくらに結ふ夜はちかくも鹿の聲をきくかな
○百首の秋の歌中に　藤原清輔
我宿のもとあらの萩の花さかりた〳〵一むらの錦とそ見る
○秋の野を過侍けるに　よみ人しらす
ぬれ衣はあやなわれきつ女郎花わくる袂に露こほれつゝ
○をみなへしの歌とてよめる　藤原兼綱
心からあたなる風にうちなひき今朝は露けきをみなへし哉
○石山より出侍けるに音羽山の麓にてよめる　よみ人しらす
女郎花色めきたてる秋の〳〵にまたほに出ぬ花薄かな

○蘭をよめる　隆源法師
ぬしやたれきる人なしに蘭みれは野をにほころひに鳬
○白河院鳥羽にて前載合せさせ玉ひけるに　敦輔王
荻のはにをふ人もなき物を來る秋をにそよさこたふる
○加茂のいつきと聞えける頃本院のすいかきに　禖子内親王
朝かほのさきかゝりたるをみて

後葉和歌集卷第五

秋下

○題不知　藤原顯綱
荻の葉に露吹むすふ木からしの音そ夜寒になりまさるなる
○　讀人しらす
夕露もさむけく成ぬ神なびの森の木のはやうつろひぬらん
○百首歌めしけるに　待賢門院堀川
龍田姫もろこしまてもかよへはや秋の木末のからにしきなる
○寛治元年太皇太后宮歌合　大藏卿匡房
夕されは何かいそかむ紅葉はの下てる山は夜もこえなむ
○修理大夫顯季家歌合　讀人不知
色深き神なび山のもみちはをいくしほまてか時雨そめけん
○爲忠朝臣常磐の家に住侍けるころ九月九日或人のもとよりをくり侍ける
花咲ぬときはの里にいかにして今日こゝぬかの菊をつむらむ
○かへし　藤原爲忠朝臣
神かきにかゝるとならは蕣のゆふかくるまてにほはさらめや
○ほうりんへまうてけるにさかのゝ花のおもしろく咲て侍りけれは　赤染衛門
秋ののゝ花みる程の心をはゆくとやいはんとまるとやいはむ
○百首の歌の中に　大言納師頼
秋のゝを心のまゝに分行はおのかいろ〳〵さけるはなかな
年ふれとにほひかはらぬ花なれは菊もときはの物としらなん
○九月十三日夜月の常よりもあかく侍ければ爲忠朝臣のもとにいひをくり侍ける　大納言道成
昔よりいひをくをあたならす今夜の月におもひぬるかな
○堀川院御時百首歌たてまつりける　藤原仲實朝臣
長月の在明の月のほの〳〵にはねかく鳴のこゑきこゆなり
○菊花薫袖といふをを　堀川右大臣
菊の花おるうつりかにこゝひしも袖に心を人やをくらむ
○關白前のおほいまうちきみの家に歌合しける　に殘のきくをよめる
霜かゝるはしめとみすは白菊のうつらふ色をなけかさらまし
○雲居寺瞻西上人歌合し侍ける　源顯國朝臣
白菊もやへにほひけり此里にうつろひぬへき心地こそすれ
○題しらす　道命法師
もし又さくへき花のあらはこそ移ふ菊にめかれをもせめ
○　曾禰好忠
草かれのうへまてみよとはつ霜のをきてのこせる白きくの花

○關白前太政大臣家にて殘菊を詠る　前中納言師俊
露むすふ霜夜のかすの重なれはたえてや菊のうつろひぬらん
をく霜のなからましかは菊の花うつろふ色をけさは見ましや
○中納言家成家の歌合　大納言伊通
をく霜にあらそひかれて神なひの三室の山はもみちしにけり
○落葉をよめる　讀人しらす
さほ山のはゝその紅葉ちるまゝに聲ふはりゆく木からしの風
○雨後の落葉といふをを　源俊頼朝臣
なこりなく時雨の空は晴ぬれとまたふる物は木葉なりけり
○落葉隨風といふをを　贈左大臣母
色ふかき深山かくれの紅葉はをあらしの風のたよりにそみる
○橘資成法師になりて普門寺に籠りぬと聞てまかりたりけるに木葉の落るをみて　藤原盛房
見るまゝに哀さまさるすみか哉世をあき風にこのは散つゝ
○題しらす　曾禰好忠
山里はゆきゝのみちもみえぬまて秋のこのはに埋れにけり
○月のあかき夜もみちの散をみて　平兼盛
あれはてゝ月もとまらぬわか宿に秋のこのはを風そふきける
○百首歌たてまつりける中に秋の歌とて　藤原季通朝臣
いつこにも秋はかはらぬ物なれとなを山里はかなしかりけり
○山家にて歌合し侍けるに松風をよめる　藤原爲業
夕されは松風さひし山里の秋のあはれをとふ人もかな
○承暦二年歌合にもみちをよめる　大藏卿匡房
たつた山散紅葉はをきてみれは秋はふもとにかへるなりけり
○家歌合落葉をよめる　中納言家成
いとゝしく秋くれぬとや色々の木のはももとにかへる成らむ
○百首歌中に　右衛門督公祐
夜をかさね聲ふはり行虫の音に秋のくれぬる程をしる哉
○九月に閏月侍けるつこもりに　藤原爲忠朝臣
長月の日數をそふる今年さへありても秋のおしまるゝ哉

後葉和歌集卷第六

冬

○はしめの冬の心をよめる　春宮大夫公實
きのふ社あきはくれしかいつのまに岩間の水のうす氷るらむ
○　藤原顯仲朝臣
大あらきの杜のもみちは散はてゝ下草かるゝ冬は來に鳬
○　源重之
寒からはよるはきてねよみやまさり今はこのはにあらし吹也
○關白前太政大臣家歌合に時雨をよめる　源兼昌
夕つく日入さの山のたかねよりはるかにめくる初時雨かな
○　治部卿雅兼
ゆふされは散しく庭のならの葉に時雨をとなふ太山へのさと
○　源定信
音にさへ秋をぬらす時雨哉眞木の板屋のふはのねさめに

○一條院御時皇后宮十月はかりよふかにてしく
れしけるに歌よめと仰られけれはよみて奉り
ける歌　馬内侍
ねさめしてたれか聞らん此頃の木のはにかゝるよはの時雨を
○おもふと侍りける頃夜もすからなかめあかして
神無月あり明の月のしくるゝを又われならぬ人やみるらむ
赤染衛門
○旅宿のしくれを
いほりさすならの木陰にもる月のくもるとみれは時雨ふる也
贈西上人
○家の歌合に落葉をよめる　前太宰太貳資通
木末にてあかさりしかは紅葉はの散しく庭をはらはてそみる
僧都覺雅
○中納言家成家歌合に
紅葉はのちりしく色はかはられとこ末の秋はなをそ戀しき
○十月九日冷泉院の釣殿にて神無月といふをを
少將藤原高光
かみにをきて歌よませ給ひけるに
神無月風に紅葉のちるときはそこはかとなく物そかなしき
惟宗隆賴朝臣
○落葉埋水といふをを
今更にをのかすみかをたゝしとて木のはの下にをしを鳴なる
よみ人しらす
○題しらす
秋は猶木の下陰もくらかりき月ハふゆ社みるへかりけれ
小少將
○左京大夫顯輔家歌合
冬のよの空さえわたる月かけや天の川瀨のこほりなるらん
源定信
○關白前太政大臣家歌合
霜かれの菊なかりせはいとゝしく冬のまかきは淋しからまし
平兼盛
○天暦御時御屏風に網代にもみちおほくよれる
ところを
みち山には嵐やいたくふきつらむあしろもたはに紅葉つもれる
藤原仲實朝臣
○百首歌中にあしろをよめる
風吹は田上川のあしろ木に峯のもみちもひをへてそよる
○堀川院御時百首の歌たてまつりける中に
大藏卿匡房
山ふかみやく炭かまの煙こそやかて雪けの雲と成けれ
中原實定
○前大貳資通家歌合
初雪のふれるあしたの家居こそうとき人にはみせまほしけれ
大藏卿匡房
○題しらす
おく山の岩かけもみちちりはて〻朽葉かうへに雪そつもれる
中納言通俊
○京極前太政大臣家歌合
をしなへて山のしら雪つもれともしるきはこしの高ね也けり
源俊賴朝臣
○
ふる雪に谷のかけはしうつもれて木末そ冬の山ち也ける
○新院位におはしましける時雪中眺望と云事を
よませ給ひけるに　關白前太政大臣
紅にみえし梢も雪ふれはしらゆふかくる神なひのもり
○百首の歌たてまつりけるに冬の歌とてよめる
藤原清輔
きゆるをは宮古の人はおしむらむけさ山里にはらふしら雪
關白前太政大臣
○題しらす
遠こちのたつきもしらぬ明くれにいかて千鳥のうらつたふ覽
○新院位におはしましける時藏人にて侍けるに
歌たてまつりける　平時信
水鳥のうきねのとこにつら〻ぬて心の外に夜かれしにけり
○題しらす　讀人しらす

きくをこそ花のかきりと思ひしかきれの梅は冬そ咲ける
○入道前太政大臣(道長)大饗し侍ける屏風に佛
名かきたるところを　藤原輔尹朝臣
人しれすつくれるつみを暮て行年と〻もにもつくしてし哉
○歲暮をよめる　曾禰好忠
たま〻つる年の終に成にけり今日にや又もあはんとすらむ
○關白前太政大臣家歌合
年暮ぬ明日は雪氣の空はれていつしか霞た〻んとすらん

後葉和歌集卷第七

賀

○新院位におはしましける時上達部うへのをの
こ共をめしておほんみあそひなとありて松契
退齡云事をよませ給ひけるに　關白前太政大臣
千とせまてかきらぬ松をみとり哉こや君か代のためし成らん
○一條左大臣(雅信)家の障子に住吉をかきたる
ところをよめる　大中臣能宣朝臣
過きにし程をはすてつ今年より千世はかそへん住吉の松
平兼盛
○入道攝政家屏風に
めもはるに難波の浦にしける蘆の多くのふをは君そかそへん
○つえのふくろにあしてにてぬはれける歌
なふ竹のふなかき杖をつきてこそやを萬代の數はかそへめ
○正月一日子うみたる人にむつきつかはすとて
伊勢大輔
めつらしくけふたち初る鶴の子は千世のむつきを重ぬへき哉
○人の子三人かうふりせさせける又の日いひつ
かはしける　清原元輔
松島の磯にむれゐる蘆たつのをのかさま〳〵みえし千世かな
○關白前太政大臣九條の家にて皇嘉門院いはひ
の歌よませたまひけるに　藤原季經
君か代をいくよろつ世か三笠山神こそさして空にしるらめ
○鳥羽にて新院竹はるかなるさしの友といふ事
をよませ給ひけるに今上またみこにおはしけ
るときよませたまひける　御製
幾年とかきらさりける吳竹や君かよはひのためし成らん
○おなし心をつかふまつりける　藤原重家朝臣
千年まて君みるへしとしり貌に竹もよなかくおもひけるかな
○　美福門院師
色かへぬ竹のみとりや君か代におなしときはのためし成らん
○入道前太政大臣家歌合　大江嘉言
君か代のためしにたてる松風にいくたひ水のすまんとすらん
○河原院歌合松臨池といふをを　惠慶法師
たれにかと池の心も思ふらむ底にうつれる松のちとせを
○承暦二季内裏の歌合　大藏卿匡房
八百万こゝらの神のとしなみに夜ひるまもる君か御代かな
○長元八年宇治前太政大臣家歌合　能因法師
きみか代は白雲かゝるつくはれの峯のつゝきの海となるまて
○京極前太政大臣家歌合　一宮紀伊

万代を松のおやまのかせしけみ君をそ祈るときはかきはに　少輔内侍
○中納言家成朝臣家歌合
高砂の尾上の松にふく風は万代とこそかれてきこゆれ　僧都覺雅
○
君か代はちよもすきなん稲荷山祈るしるしのあらむかきりは　顯仲卿女
○神祇伯顯仲廣田にて歌合し侍けるに寄菊祝の

後葉和歌集卷第八

別

○實方朝臣みちのくにくたり侍けるに志たくら　前大納言公任
つかはすとて
東路のこのしたくらくなりゆかはみやこの月を戀さらめやは
○大納言經信大宰帥にて下り侍けるに川尻にま　津守國基
かり逢てよめる
六とせにそ君はきまさむ住吉のまつへき身こそいたく老ぬれ
○修理大夫顯季大宰大貳にて下らんとし侍りけ　權僧正永緣
るに
立わかれはるかにいきの松なれは戀しかるへき千世のかけ哉
○經信卿に具して後賴朝臣筑紫へまかりけるに　皇太后宮甲斐
くれはまつそなたをのみそ眺へきいてん日をに思ひをこせよ
○道濟筑前守にてくたり侍けるに　能因法師
ならはねはかりの別も侘しきにうとくそすこし成へかりける
○さたのふのくたる事侍りけるにあふきをつか　こゝろをよめる
きみか代を長月にしも咲そめて久しく匂ふしらきくの花
○上東門院御屏風に十二月のつこもりかける處を　前大納言公任
ひとゝせを暮ぬと何か思ふへきつきせぬ春の千世をまつには

はすとて　三親王
東路のみのゝを山の嵐にもあふきの風を思ひわするな
○齋宮のくたり侍ける供にまかりける女にいひ　藤原道信
つかはしける
かへりこん程をも志らす悲きはよを長月のわかれ也けり
○ひこのめのとくたるにせし給ふ人〳〵歌よみ　少將藤原高光
侍けるに
たひを行くさの枕の露けくはをくるゝ人の泪とをしれ
○弟子に侍けるわらはの親に具して入の國にま　法橋有禪
かりけるにかりさうそくつかはすとて
わかれちの草葉をわけむ旅衣立よりかれてぬるゝ袖かな
○僧正源泉比叡の山にのほりて古をゝもかたら　天台座主源心
ひて我も人もかくやんとなくなりたるとなと
ましてかへりくたりけるに
いつか又あふさか山と思ふにも關もあへぬはなみた成けり
○人のもとのすみかをあくかるゝ事有てはりま　僧都清胤
なるところにあらむとてまかるよしましけれ

は　待賢門院長門
はりまちや須磨の關守身なりせはあかぬ別はゆるさゝらまし
○人のもとに日來侍りてかへりける夜あるしに　僧都清胤
よみてたまひける
二つなき心を君にとゝめをきて我さへわれに別ぬる哉　源師資朝臣
○題不知

後葉和歌集卷第九

旅

○陸奥守に侍ける時中納言資仲大宰大貳に成に　橘爲仲朝臣
けりときゝてよみて都にをくり侍ける
きなれたる我たにもほる旅衣とをくて君か思ひたるらん
○任はてゝのほり侍けるにたけくまの松のもとにて　藤原隆經朝臣
故郷へ我はかへりぬたけくまのまつとは誰につけよとか思ふ
○播磨守に侍ける時三月はかりに船よりのほり　橘能元
けるにやまちに參議爲盛の朝臣志ほゆあみて　平忠盛朝臣
侍と聞てつかはしける
なかぬすな都の花も咲ぬらんわれは何ゆへいそくつなてそ　帥前内大臣
○なかされて侍ける時はりまにて月を見侍りて
都にてなかめし月を見る時は旅の空ともおほえさりけり　藤原顯廣朝臣
○修行してみちのくにゝまかりけるに白河關に
て月のあかく侍けれはせきやのはしらに書付
わかれ行そらこそなけれすか原や伏見の里の春の明ほの　待賢門院堀川
○百首の歌たてまつりけるにわかれの心を
行人もおしむなみたもとゝめかれ忘なとたにえこそいはれね　藤原顯廣朝臣
○
曉と聞て出つる別ちをやかてくらすはなみたなりけり　西行法師
志ら河の關やを月のもるからに人の心はとまる也けり　侍りける
○藤原賴任朝臣美濃守にてくたり侍けるともに
まかりて其後年月へて後國のかみになりて垂
井と云水を見てよめる
昔見したるひの水はかはられとうつれる影そ年をへにける　藤原隆經朝臣
○武藏國にまかりけるに二むらの山にて紅葉を
見侍て
いくらともみえぬ紅葉のにしき哉なと二むらの山といふらん　橘能元
○修行し侍ける時大峯に日ころに成てよめる
山路にて我をのゝえはくたしてんうき世中にこりはてぬれは　大僧正行尊
○海路のこゝろをよめる
秋つしまこきはなれ行浦舟はいくへか春の霞へたつる　藤原顯廣朝臣
○新院位におはしましける時海上遠望といふ事
をよませ給ひけるに
和田の原こきいてゝみれは久かたの雲ゐにまかふおきつ白浪　關白前太政大臣

○百首の御歌中に　新院御製
海士のすむ濱のもくづをとりしきて心とまると妹しらめや

後葉和歌集卷第十

物名

○うくひす　讀人不知
さかつきにうくひすきぬる桃のはな散ても水になかれ社すれ
○くゐな
見渡せは川瀨の井くゐなみ立てしからみかくる程そはるけき
○きり〳〵す　待賢門院堀川
秋はきり〳〵すきぬれは雪ふりて晴る〻まもなき太山への里
○たるなむし
君かため群てきたるなむしろ田の鶴の毛衣ちよをかさねて
○にはさくら　兵衛
山邊にはちくらんものをふる郷の花まつ程はゆきてたつねむ
○もちつ〻しのはな　左近衛中將教長
人をに弓はもちつ〻しのはなし何をかりこのやにはほかまし
○しをに　近衛院御製
露けきは秋のくさはと思ひしをにたるもなき袖の上哉
○からはき
つらからはきしへの松の涙をいたみ音に現れて泣むとそ思ふ
○をみなへし　後賴朝臣
○同歌たてまつりけるに　待賢門院堀川
道すから心も空に詠やる宮古の山のおもかくれする
ちる花をみなへしもちてゆく秋の戀しき時のかたみとやせむ
○つき　す〻むし　もみち　顯廣朝臣
峯つ〻きやまへはなれすすむしかもみちたる也秋の夕暮
○十五夜月　左近衛中將教長
五月雨をくるしうこやの月はしも浮きぬ難波のえ社かよはれて
○くらけを海の月といふよし人のましけるを聞　祭主親定母
深くすむちいろの底もみるへきにくらけにみゆるうみの月哉
○しかやはた
淺ましくうちとけかたき心哉しかやはたのむ人はあるへき
○おものたな　左京大夫顯輔
池のおものたなひきわたる浮草ははらはぬ庭と見えもする哉
○かゝけのはこ　小大進
霜ふれはなへて殘らぬ冬草もいはほかかけのはこそしほれれ
○からにしき　清輔
むつともつきて明ぬと聞からにしきのはれかき恨めしき哉
○さくさ　むくのは　後賴
程もなくさくさむくのはなりにけり虫の聲〳〵よはり行まて
○くるみのから
老のくるみのからふのみ覺ゆるはおもてはなのたゝむな鬼り

後葉和歌集卷第十一

戀一

○題不知　讀人不知
をしか鳴秋の〻はらのしの薄忍ひもあへぬこひもするかな
○　大中臣能宣朝臣
御垣もるゐしのたく火のよるはもえひるは消つ〻物をは思へ
○　平兼盛
谷川のいはまをわけてゆく水の音にのみやはき〻わたるへき
○　讀人しらす
大井川くたすいかたのみなれさほ見馴ぬ人も戀しかりけり
○　關白前太政大臣（忠通）
あやしくも我みやま木のもゆる哉思ひは人につけてし物を
○中納言家成家歌合　藤原基俊
夜もすから戀のけふりにむせひつ〻ふしのね高くもゆる頃哉
○百首歌中に　曾爾好忠
かた岡の雪まにねさす若草のはつかに見えし人そ戀しき
○　左近衛中將教長
河のせにおふる玉ものうちなひき君に心はよりにし物を
○新院にておもへともいはぬ戀といふ心をよめる　源賴政
戀すとは泪の色に見えぬらむ君ゆへかくといはぬはかりを
○百首御歌　新院御製（崇德）
愚にそとのはならはなりぬへきいはてや君に袖をみせまし
○　中院右大臣（雅定）
つ〻めとも泪に袖のあらはれて戀すと人にしられぬる哉
○中院の右のおほひまうちきみの家の歌合　大政大臣
色なきはぬれ衣そともいひなしきけふや涙と人にしられむ
○贈左大臣（長實）家歌合　藤原爲忠朝臣
つ〻めとふかく思ひしそめつれは涙そ色にまつは出ける
○忍ふる戀のこ〻ろをよませたまひける　近衛院御製
戀しとも言はゝ心のゆくへきにくるしや人めつ〻む思ひは
○關白前大政大臣家歌合　藤原基俊
よそなからしらせてし哉みかりの〻ましろのたかの戀の心を
○　源光雅
玉藻かるをしまの浦のあまたにもいとかく袖はぬる〻物かは
○　關白家信濃
夜と〻もに袖のみぬれて衣河戀こそわたれあふせなけれは
○左京大夫顯輔家歌合　民部卿顯賴
逢事を身にかふはかり歎けとつれなき物は命なり鬼
○　關白家參河
人をれす袖をそをほるかすならぬ身をしる雨の音はたてれと
○　よみ人しらす
心をれぬれをのみ泣は衣河そての色からみ堰かぬまそなき
○題しらす　源賴政
思へともいはて忍ふのすり衣こ〻ろのうちに亂ぬるかな
○堀河院百首歌中に　中納言國信
うちたへて詠たにせす戀すてふ氣色を人にみせしとそ思ふ
○題しらす　隆惠法師
かくとたにいはて墓なく戀しなは戀てをられぬ身とやなり南

○　　平兼盛
見ぬ人の戀しき事はをのつから我のみならす君もさるらん　大藏卿匡房
○百首歌中に
思ひかねけふたて初る錦木のちつかもまたて逢よしもかな　源明賢朝臣
○はしめたる戀のこゝろを
歎き餘りさらせ初つる言のはも思ふはかりはいはれさりけり　近衛院御製
○題しらす
さゝれ石の巖とならむ程までも君をはこひむ逢すたにあらは　平兼盛
さゝれ石のうへもこもらすさゝ水の淺ましくのみ見ゆる君哉
○關白前のおほいまうちきみの九條の家に皇嘉門院御幸ありける時人〳〵に歌よませたまひけるに
あふ事は人のためとも思はぬをあやなく身にもかへつへき哉
ますかゝみ見し面かけの身にそひて心は君にうつりぬるかな　賴仁法師
○
忍れはくるしかりけり青つゝら戀する名をもたちぬへき哉
○寄雲戀
むねにみつ戀の煙や雲ならん心のそらの晴るよもなき　治部卿雅兼
○三井寺を過けるにわらはのあそひありきける
とみていはせ侍りける　或命法師
逢坂の關のこなたに春霞たちやすらふと志らせつる哉　賀茂成助
○見あれのころ女に
ちはやふる神のおまへのもろは草又あふ名社しらまほしけれ　讀人も
○題しらす
とならはよひの螢となりにしか燃る思ひをみえ渡るへく　基俊
○國信卿家歌合
人も又戀にはまけしと思へともうつせみのふそ悲しかりける　僧都覺雅
○
こかるれとしる人もなきわか戀やみ山かくれの紅葉成らん　三のみこ
○
山風のさそふもみちのかすしらす亂にけらし戀のこゝろは　よみ人しらす
○題しらす
雪つもるみ山のつら〳〵年をへてとけもやすると待かひそなき　右衛門督公能
慰むるかたもなくてややみなまし夢にも人のつれなかりせは　よみ人しらす
○題しらす
年をへてもゆてふしの山よりも逢ぬ思ひは我そまされる　藤原伊家
わひぬれはしぬて忘れんと思へとも心ふはきは涙成けり
思はしと思へはいと〳〵戀しきはいつれかわれか心成らむ　大納言成通
○顯輔卿家歌合

後葉和歌集卷第十二

戀二

○承暦二年内裏歌合　藤原伊家
わか戀は夢ちにのみそ慰むるつれなき人も逢とみつれは
○新院位におはしましけるときうへのおのこともに寐覺戀といふををよませさせ給ひける
ふそなから哀といはん事よりも人つてならていとへとそ思ふ　賀茂のなりすけ
○つれなきをんなに
いかはかり人のつらさをうらみまし我身の咎と思ひなさすは　藤原親隆朝臣
○關白前太政大臣家歌合
かせ吹はもしほの煙かたよりになひくを人の心ともかな　新院御製
○百首御歌中に
戀しなは鳥とも成て君かすまむ宿の木末にれくらさためん　左京大夫顯輔
○おなし歌たてまつりけるに
年ふとも猶いはしろのむすひ松とはぬものゆへ人もこそしれ　藤原雅親
○家成卿家歌合
夜とゝもにむすほられたる君戀や野中にたてる君代の松　藤原親隆朝臣
○たのめてあはぬ戀のこゝろを
こひしなて心つくしに今までもたのむれはこそいきの松はら　藤原季通朝臣
○百首歌中に
今はたゝをそふる袖もくちはてゝ心のまゝにおつるなみたか　藤原清輔
○
中〳〵に思ひたえなむと思ふ社戀しきよりも苦しかりけれ　前齋院安藝
○
戀をのみすまの浦はにさほたれて燒とも袖をくたす比哉　關白前太政大臣
○歌合に
あさりするふさのあま人こよひさへ逢を涙に袖ぬらせとや　修理大夫顯季
○百首歌中に
わか戀はよしのゝ山のおくなれや思ひいれともあふ人もなし　よみ人しらす
○題しらす
我戀はふたみかはれる玉くしけいかにすれともあふ方もなし　隆緣法師
○
身の程を思ひしりぬるものみや難面人のなさけ成るらん
○家成卿家歌合
君こふる涙はうみと成ぬれとみるめはかたき袖のうら哉　高階通憲
○題しらす
あやしきも嬉かりけりおとしむる其言のはにかゝると思へは　源俊頼朝臣
○
たのめつゝこぬ物ゆへに松島や雄島のあまの袖ぬらすらん　藤原憲繩
○
人志れぬ涙のかはのはやきせはあふより外のしからみそなき　源頼政
○俊忠卿家歌合
紅のこそめの衣うへにきん戀のなみたの色やかくると　藤原顯綱朝臣
○修理大夫顯季家にて寄月戀と云事を讀けるに
よひのまにほのかに人を見る月のあかて入にし影そ戀しき　藤原爲忠朝臣
○寄月戀のこゝろをよめる
秋のよの月の光そおほろなる戀のけふりや空にたつらん　藤原道經
○百首歌中に
君にさはつらしと見えん人もかな戀は苦き物としらせん　待賢門院兵衛
○題しらす
冬くれは物思ふをそまさりける我ならさらむ人にとはゝや　和泉式部
○
我ためにつらき人をはをきなから何のつみなき世をや恨る　淨藏法師
○
はりまなるしかまにそむるあなかちに人を戀しと思ふ頃哉　曾禰好忠
○
命あらはあふよもあらむ世の中になとしぬはかり思ふ心そ　藤原惟成
○
戀しさのつらさに勝る物ならは今までかくは歎かさらまし　讀人しらす

後葉和歌集卷第十三

戀三

○百首よませたまひける中に　新院御製

戀しくてたのむるけふの吳羽鳥あやにくに待程そ久しき

○題しらす　道命法師

程もなくくるゝと思ひし冬の日の心もとなきおりも有り鳬

○　大藏卿匡房

みちしほの露ふみ分てこし程にあふよの袖もぬれにける哉

○　藤原道經

我戀はあひ初てこそ勝りけれしかまのちかの色ならねとも

○　關白前太政大臣

朝れかみわかつけとも手枕のたはゝな人に語りきかせそ

○顯輔卿歌合　大藏卿行宗

しのひつまおき行けさの霜の上に跡ふみつくな人も社しれ

○女のもとより夜ふかくかへりてあしたにいひつかはしける　されかた朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあられともまた夜をこめてなきにける哉

○後朝のこゝろを　新院御製

しの〳〵めの明行空に歸るとておつる泪や道しほのつゆ

○　藤原惟成

在明のそらかきくもり時雨つゝきつる衣のひるよしもかな

○堀川院御時百首歌たてまつりけるに　藤原顯仲朝臣

かへりつるけさの袂は露といひてくれ待そてを何にかこたん

○左京大夫顯輔朝臣家歌合　藤原顯廣朝臣

心をはゝ〳〵めてこそは歸つれあやしや何の暮を待つらん

○後朝につかはしける　堀川右大臣

冬の日をはるよりなかくなす物は戀つゝくらす心なりけり

○題不知　藤原基俊

風にちる花たちはなに袖そめて我思ふいもか手枕にせむ

○　曾禰のふしたゝ

きたりともぬる間もあらし秋のよの在明の月もかたふきに鳬

○誰契不來といふとを　關白前おほいまうち君

こぬ人をうらみもはてし契をきし其言のはも情ならすや

○題不知　藤原兼綱女

みても又あかぬ泪をおそふれはいつをか袖のかはくまにせん

○　藤原明兼

せきとむる岩まの水も自ら下にはかよふものとこそきけ

○をんなをあひかたらひけるよしありてつの國になからといふ所にまかりて後女のもとへいひつかはしける　兼盛

忘るなとなからへゆけと身にそひて戀き事はをくれさりけり

○弟子なりけるわらはのおやに具して人の國へあからさまにとてまかりけるか久くみえ侍らさりけれはたよりにつけていひつかはしける　最嚴法師

み狩の〳〵暫の戀はさも有はあれそりはてぬるかやかたをの鷹

○題しらす　よみ人しらす

たのめすは夢にも人をみるへきに待には社れられさりけれ

○冬夜寄衣戀をよめる　僧都覺雅

から衣君はきまさぬ冬のよに重ぬる物はうらみ也けり

○　藤原親隆朝臣

しほれつる袖はかりとそ思ひしに名をさへ戀にくたきつる哉

○題しらす　よみ人しらす

我はかりこひんを社かたからめ等閑にたに思ひ出すや

○中納言家成攝津國の山庄にて旅宿戀といふを　隆緣法師

よめる

侘つ〳〵もおなし都はなくさめき旅れそ戀のかきり成りける

○月のあか〳〵りける夜まちたりけるよたちなからかへりにけれはあしたにいひつかはしける　和泉式部

泪さへ出にしかたを眺めつ〳〵心にもあらぬ月をみるかな

○三井寺に侍りけるわらはを京にいでばかなら

す告よとちきりたりけるに出たりとはき〳〵けれと音信さりけれは　僧都覺雅

影みえぬ君は雨夜の月なれや出ても人に去られさりけり

○雪のあした人のまてきてかくならひてこすは

いか〳〵おもふへきといひけれは　馬内侍

忘るなはこしちの雪の跡たえてきゆるためしに成りぬ計そ

後葉和歌集卷第十四

戀四

○秋たちける日男のはしめて夜かれ侍りけれは　一宮紀伊

常よりも露けかりけるこよひ哉是や秋たつはしめ成らむ

○おとこにわすられてなけきける比は月はかり前栽のつゆを夜もすからなかめてよめる　赤染衛門

もろ共におきぬる露のなかりせは誰とか秋のよをあかさまし

○おとこのたえ〳〵に成ける比いかゝとゝひたる人の返事に　高階章行朝臣女

思ひやれかけひの水のたえ〳〵になり行程の心ほそさを

○かよひける女の人に物いふとき〳〵て　元輔

うきなからさすかに物の悲しきは今を限と思ふ也けり

○程なくたえにけるおとこのもとへいひつかはしける　相摸

ありふるもくるしかりけりなか〳〵らぬ人の心を命ともかな

○題しらす　讀人も

つらしとて我さへ人を忘れなはさりとてなかの絶やはつへき

○　源雅光

紅になみたの色は成にけりかはるは人の心なりけり

○たえたる男のもとへ五月五日に　よみ人しらす

身のうきに菖蒲のおふる物ならはけふ計りにも尋れきなまし

○百首歌中に　待賢門院堀川

うき人を忍ふへしとは思ひきや我心さへなとかはるらん

○中納言通俊たえ侍にけれはいひつかはしける　讀人しらす

さりとては誰にかいはん今そ只人を忘るゝとをゝしへよ

○かへし　　中納言通俊
またしらぬをばいかゝ教ふへき人を忘るゝ身にしあられは
○題しらす　　讀人も
今よりは問ともいはし我はたゝ人を忘るゝことをしるへき
○　　和泉式部
幾かへりつらしと人をみ熊のゝ怨めしながら戀わたるらん
○題不知　　よみ人しらす
忘らるゝ人めはかりを歎きにて戀しき事のなからましかは
人しれす戀に我身はしつめともみるめに浮くはなみた成けり
○弟子なりけるわらはの大僧正行尊かもとへまかりにけれはいひつかはしける　　律師仁祐
鶯は木つたふ花の枝にても谷のふるすを思ひわするな
○かへしわらはまかりて　　大僧正行尊
鶯は花のみやこも旅なれは谷のふるすをわすれやはする
○雨中戀のこゝろを　　よみ人しらす
雨ふれは庭にたまぬるうたかたのうき影だにもみえす成ぬる
○ほり河の院御時藏人にて侍けるに贈皇后宮の御方に侍ける女を忍ひてかたらひけるを人に物いふときゝてしらきくの花にさしてつかはしける　　源家時
霜をかぬ人の心はうつろひて面かはりせぬしら菊の花
○かへし女にかはりて　　春宮大夫公實
白菊の變らぬ色もたのまれすうつろはてやむ秋しなけれは
○關白前太政大臣家歌合　　藤原俊基
あさちふにけさをく霜の寒けきにかれにし人のなそや戀しき
○中納言家成絶てをとせさりけるかきくをのあれはえなんいはぬといはせたりける返りをに　　皇嘉門院出雲
夜を重れ霜をゝもにしおきぬれはありし計の夢たにもみす
○夢にをとする戀といふをな　　僧都覺雅
夢に社あはてもあらめかち衣きなれし裏はいかゝかへさん
○中納言惟仲ひさしくありてをとつれて侍りけるに　　成忠卿母
夢をのみ思ひ成にし世中を何今さらにおとろかすらむ

後葉和歌集卷第十五

哀傷

○むすめの思ひに侍ける人に月のあかゝりける夜いひつかはしける　　堀川右大臣（頼宗）
其こゝ思はぬたにもある物を何心して月をみるらむ
○一條攝政身まかりける頃よめる　　少將藤原義孝
ゆふまくれ木しけき庭を眺めつゝ木のはと共に落るなみたか
○天暦帝かくれさせたまひて七月七日御いみはてゝ後ちり〳〵にまかり出けるに女房のなかにましをくりける　　清原元輔
けふよりは天川霧たちわかれいかなる袖にあはんとすらん
○かへし　　讀人しらす
七夕は後の秋をもたのむらん心ほそきはわか身成けり
○七月七日に白河院かくれさせたまひけるにより　　平忠盛
める
又もこん秋をまつへきたなはたの別るゝたにもいかゝ悲しき
○郁芳門院かくれさせたまひて又のとし藤原とし
しのふかもとよりうかりしに秋はつきぬと思ひしをもしも虫の音こそなかるれと申てをくりける返事に　　康資王母
虫のねは此秋しもそ鳴まさる別のとをくなる心ちして
この歌の本歌金葉集康資王母といへるいかなるにか
○近衛院かくれたまひにける頃藏人に侍ける時なれつかうまつりけるをを思ひ出て彼院にはへりける土佐内侍かもとに申いれける　　寂然法師
いかはかり心のやみに迷ふらむ月かくれにし雲の上人
○いつれの御時にかみかとかくれさせたまひけるにおほんみわさの夜雨のをやまさりけれは誰ともなく人〻の中にさしをかせたりける歌　　よみ人しらす
世中のうきなけきには大空の雲も泪をおしまさりけり
○待賢門院かくれさせたまひて又のとし朝觀の行幸ありける日後院のたいはん所より行幸に參りける人に申つかはしける
誰もみなけふの御幸といそきつゝ消にし道はとふ人もなし
○堀川院御時つかうまつりけるにちうらんになりにけれはこもりぬて歎き侍りけるに人〻御ふくぬくよしきゝてよみ侍りける　　神祇伯顯仲
紅のなみたはかゝる袖なれとまた墨染の色は變らす
○むすめにをくれて服きるとて
淺ましや君にきすへきすみ染の衣の袖をわかしほるかな　　民部卿顯賴
○おもひに侍ける五月はかりに
さみたれの空も雲まはある物を心のやみに晴るまもなき
○後冷泉院御時藏人にて侍りけるに帝かくれさせたまひにけれはよめる　　藤原有信朝臣
泪のみたもとにかゝる世の中に身さへくちぬる心ち社すれ
○おとこにおくれ侍りてよめる　　讀人しらす
折々のつらさをなにし歎きけむありてなき世も有ける物を
○めなくなり侍りて山寺にこもりける比かたゝかへに都に出てあかつきにかへるとて　　左京大夫顯輔
いつのまに身を山かつになしはてゝ都を旅と思ふなるらん
○法務寛信身まかりにける比弟子なる法師服きるとてよめる　　讀人しらす
松のうへに思ひしかともふち衣我身にかゝる春もありけり
○父の思ひにはへりける年五月五日人のもとに
つかはしける
思ひやれけふはあやめのねをそへて泪のかゝるふちの袂を
○したしき人の山さとに侍りけるか五月五日にはかにはかなく成けるときゝて　　待賢門院長門
いかならむけふしもうきを菖蒲草思ひやるたにねこそ茂けれ
○子なくなりて後かの家にまかりてよめる　　祝部成仲
思ひかれ主なきやとを尋れは只あき風の音のみそする

○律師暹豪身まかりて後横川の坊におはしとゝまりたりけるわらはの志を戀て雪のふりける日後墓にまかりてよめる
ふる雪か涙もいとゝくらしつゝそこはかとなく迷ひぬる哉
○子の思ひに侍りけるころ人のとひて侍ければ　前齋院安藝
人しれす物思ふともありしかとこの事はかり悲しきはなし
○これをきゝておなし思ひにつきせすおほしければ　爲忠朝臣母
悲さは我身ひとつと思ひしに又このうさもたくひ有鳬
○人の四十九日の誦經文に書付ける　よみ人しらす
人をとふかねの聲こそ哀なれいつかわか身にならんとすらむ

後葉和歌集卷第十六

雜一

○うちにまかりける道にたこの水ひきけるを見てかくなんと申けれは入道前太政大臣見にまかりたりけるに水も見えさりけれはいかにとたつね侍りけるをきゝて七月七日なりけれはよめる　菅原爲言
ひく水もけふ七夕にかしてける天川原にふなぬするとて
○左京太輔顯輔近江にはへりける時讀てたまはせける　關白前太政大臣
思ひかねそなたの空を眺ればたゝ山のはにかゝるしら雲
○念增法師都にて身まかりにけるころ山の坊はなのさかりなるをみて　天台座主勝範
花よりもさきにちりける身をまらて待けん物を今や櫻と
○やまひおもく成侍にけれは三非寺にまかりて京の坊にうへ置たる梅を花さきぬらむみはやと申けれはおりにつかはしてみせけれは　大僧正行尊
この世には又もみるまし梅の花ちり〳〵になるとそ悲しき
○やまひおもくなり侍る比雪のふるをみて　良暹法師
おほつかなまたみぬ道をしての山雪かき分て越んとすらん
○入道前太政大臣(通長)の家にして大饗し侍ける屏風に野の行幸かきたるところを　祭主輔親
御狩する野への冬草風になひき春けくみゆるしめのうちかな
○　藤原輔尹朝臣
鳥やかへるましろの鷹をひきすへて君か御狩に合せつるかな
○大饗屏風に　かれもり
ひきつれて大宮人のきませれは春おもしろくおもほゆる哉
○百首歌の中に　大藏卿匡房
むもれ木のしたはくつれと古への花の心はかはらさりけり
○新院位におはしましける時きさいの宮の御かたにて藤のはな年ひさしといふをかんたち

めうへのおのことともよませさせたまひけるに　大納言師頼
春日山きたのふち波咲しより榮ゆへしとはかれてしりにき
○齋院長官にて年比まつりこたりて少將に成て　大藏長房
年をへてかけし葵はかはらねとけふのあふひは珍しき哉
○九條前齋院より祭の比あふひやあるとたつねられて侍りけれはつかはすとて　源忠宗
しめゆひし其かみならはあふひ草よそのかさしを尋さらまし
○忍ひけるおとこのいかゝ思ひけん五月五日のあしたにあけてのちけふあらはしぬるなんうれしきといひたりけるかへりをに　和泉式部
あやめ草かりにもくらん物ゆへにれやの妻戸や人のみゆらん
○院の位におはしましける時ある所のきくをめしてうへさせたまひけるに花の枝にむすひつけられたりける　よみ人しらす
九重にうつろひぬとも菊の花もとのま垣を忘れさらなむ
○五節たてまつりけるところにたき物かうはしくあはすとてたうのみれにこひにつかはしたりけれはたちはなの枝にみをとりすてゝいれてつかはすとて　如覺法師
すゑの代に成のみ行は橘の昔の香には有へくもあらす
○こゝろさしふかゝらぬおとこのはなあさきにかりきぬせさせけるつかはすとて　小大君
人こゝろうす花染のかり衣さてたにあらて色やかはらむ
○しのひけるおとこのなりけるきぬをかしかましてをしのけゝれは　いつみ式部
音せぬはくるしき物を身にちかくなるとて厭ふ人も有けり
○中納言家成家歌合　藤原基俊
山のはにますみの鏡かけたりとみゆるは月の出るなりけり
○月のあかく侍りける夜人々まてきてあそひけるに月の入て與つきにけれは歸なんとしけるによめる　大中臣よしのふ
月は入人は出なはとまりぬて獨やわれか霄をなかめん
○一條院御時殿上人あまた月見ありきける　讀人不知
うらやましく雲のうへ人打群てをのか物とや月をみるらん
○新院位におはしましける時月のあかく侍りける夜女房につけてたてまつらせける　太政大臣
澄のほる月の光にさそはれて雲のうへまて行く心哉
○題しらす
とこの守のともみやつこあけぬとて今夜の月に朝きよめすな
○神祇伯顯仲廣田にて歌合し侍りけるに寄月述懷のこゝろを　左京大夫顯輔
難波えの蘆間にやとる月みれは我身ひとつもしつまさりけり
○家の歌合
夜もすからふしの高れに雲きえて清見か關にすめる月かけ　藤原爲忠朝臣
○
古の人あらませはとひてまし今夜はかりの月はみきやと　大藏卿匡房
○京極前太政大臣家歌合
あふ坂の關の杉むらしたはれて月の漏るにそまかせたりける

○題しらす　内大臣（實能）

くまもなく信太の森のしたはれてちゝに影さへみゆる月哉

○父の信濃守にてくたりける共にまかりのほりたりける比顯輔卿の家に歌合しけるによめる　藤原爲眞

名に高きをはすて山はみしかさも今夜はかりの月はなかりき

○月おもしろかりける夜新院御身にたてまつりて月のまへにこゝろさしをいふと言事を讀せたまひける　右近衛中將教長

三日月の又在明になりぬるやうき世にめくるためし成らん

○題不知　源頼光朝臣

いつるより入まて月を眺むるは物思ふときのわさにそ有ける

○あれたる宿に月のもりて侍けるをみて　良暹法師

板間より月のもるをもみつる哉宿は荒してすむへかりけり

○河原院歌合月影漏宿といふをを　よみ人しらす

雨ならぬ年のふるにもわか宿は月もるはかり荒れにける哉

○題不知　待賢門院堀川

あた人はしくるゝ夜半の月なれや澄とてえ社たのむましけれ

○百首歌たてまつりける中に　藤原公重朝臣

すむかひもなき世中の思ひ出はうき雲かけぬ山のはの月

○題しらす　藤原顯仲朝臣

思ひ出て袂そほちぬ時そなき昔をしるはなみたなりけり

○小野宮の右大臣實資の家にまかりてむかしをなと云てよめる　清原元輔

老て後わかれをしのふ涙こそこゝら人めを包まさりけれ

○比叡の山に年の暮ぬるとをよみける中に　成尋法師

かすならぬ身にさへ年のつもる哉老は人をもきらはさりけり

○百首うたのなかに　左近衛中將教長

立歸るとしの行衛をたつぬれは哀わか身に積るなりけり

○題不知　相摸

住吉の入江にさせるみをつくしふかきにまけぬ人はあらしな

○屏風に鶴のおほく飛たるかた侍りけるに　三御子

雲井より群れてをりぬる蘆田鶴はいつれか浦のしるへ來らん

○人のかもを籠にいれてかひけるかいとおしきをゆるさんと侍りけるをきゝ侍給さりけれは夕くれにこよひ猶ほ入江のかもハはなちてん　源頼光朝臣

[illegible]もこそまてみしま江の春のこゝろをよめる　源頼家朝臣

春霞かすめるかたやつの國の本のみしま江のわたり成るらん

○堀川院の御時うへのおのこども御前にめして歌よませたまひけるに　源俊頼朝臣

須磨のうらにやく鹽かまの煙こそ春よりさきの霞成りけれ

○同御時百首歌奉ける中に

波たてる松のしつえをくもてにて霞わたれる天のはしたて

○丹後守に侍りける時眺望の心をよめる　藤原爲忠朝臣

たとふへきかたこそなけれ松かえに雪ふりかゝる天のはし立

○中納言家成布引の瀧にまかり歌よみけるに　藤原爲忠朝臣

雲ゐよりつらぬきかくる白玉をたれ布引の瀧といひけん

○ところ〳〵の名をよみける中に龍門をよめる　隆緣法師

けふ爰に我こさりせは立ぬはぬきぬきし人の跡をみましや

○廣澤　藤原公重朝臣

廣澤の池のかゝみにうつしもてくもらぬ月の影をみる哉

○室八島　藤原顯方

後葉和歌集卷第十七

雜二

○世中はかなき頃人と歌よみけるに　小大君

あるはなくなきは數そふよの中に袞いつまてあらんとすらん

○百首歌中に　權僧正永緣

長きよの夢の中にてみる夢はいつれうつゝといかて定めむ

○女ともの さはにわかなつむをみてよめる　源俊頼朝臣

ふつのめかゑくつむ澤の薄氷いつまてふへき我身なるらん

○花のちるを見侍りて　藤原實方

散花にまたもや逢んおほつかなその春まてとゝらぬ身なれは

○人のもとにまかりたりけるにさくらの花おもしろく咲て侍りけれはあしたにいひをくり侍りける　天台座主源心

ちらぬまに今一たひも見てし哉花に先たつ身とも社なれ

○百首歌中に无常をよめる　藤原季通朝臣

厭ひても猶おしまるゝ我身哉ふたゝひくへき此世なられは

○　近衛院御製

虫の音のよほろのみかは過る秋を惜む我身そ先きえぬへき

○秋のゝを過侍りけるに尾花の風になひくをみて　源親元

花薄まれかはこゝにさまりなむ何れのゝへもつぬのすみかそ

○無常のうたとてよめる　讀人しらす

朝顔の花にやとれる露の世ハはかなきうへに猶そはかなき

○よの中はかなくおほえさせたまひける頃　花山院御製

かくしつゝ今はとならむ時に社くやしき事のかひもなからめ

○入相のかねの聲をきゝて　いつみ式部

夕くれは物そ悲しき鐘のをとあすも聞へき身にしあられは

○夏のよすゝむとておほえけるを　神祇伯顯仲女

このよたに月待ほとはくるしきに哀いかなる闇にまよはん

○題不知　緣忍法師

山のはに影かたふきてくやしきハはかなく過し月日也けり

○　源季政

うき身そと思ひなからの橋はしら今まてよにもたてる成らむ

○　　よみ人しらす
はかなさはけふとも志らぬ世中にさりともとのみいつを待覽
○をこなひなんとてこもり侍りけるに　　前大納言公任
今はとて入なん時そおもほゆる山へをふかみとふ人もなし
○みやこにすみわひて近江の田上といふ所にまかりて　　俊頼朝臣
あし火たく山のすみかは世中をあくかれいつる門出なり鳬
○法師にならんとおもひけるころ月を見侍りて　　藤原爲經
在明の月よりほかに誰をかは山路の友にちきりをくへき
○前大納言公任世をそむきて長谷にこもり侍け
るころあらしはけしくきこえけれは又のあし　　中納言定頼
たにましをくりける
故さとのいたまのかせに夢さめて濱の嵐を思ひこそやれ　　前大納言公任
○かへし
山里の谷のあらしの寒きにはこのもとを社思ひやりつれ
○あはたにて　　瓦遲法師
うき世をはみれの霞やへたつらむ猶山里はすみよかりけり
○　　如覺法師
九重のうちのみつれに戀しくて雲のやへたつ山はすみうし
○世をそむきてふかき山にすみける人の宮古に
侍りけるをんなのもとへつかはしける　　讀人しらす
秋きりのへたつる山の深けれはおほつかなさになれて社ふれ
問ぬまのおほつかなさを思ひやる山には霧のへたてすも哉
○すみあらし侍けるところに秋きたりて　　前大納言公任
時しもあれ秋ふる里をきて見れは庭はのへとも成にける哉
○攝津國にこもり侍りて前大納言公任の許にい
ひつかはしける
ひたふるに山田守身と成ぬれは我のみ人をおとろかすかな
○世中はかなく覺え侍りける頃かつらなるとこ
ろにこもりぬ侍りけるを人のもとより今はす
みつきぬらんと申ける　　讀人しらす
たつぬへき人もあらしに紅葉ちる桂のさとは月のみそすむ
○伊勢國に外宮の神主とも歌よみ侍りけるに
度會俊忠
思ひやれ荒たる宿のさひしきに松ふく風の秋の夕暮
○大原にすみ侍りける頃としつなの朝臣のもと
より炭はやきならひたりやとまうしたりける
かへりもに　　瓦遲法師
大原やまたすみかまもならはれは我宿のみそ煙たえたる
○藤原隆資かもとにいひをくり侍りける
雪ふるとよそにのみ〳〵し大原は我世のはての住家也けり
○下らうにこえられ侍りける頃ほり川の關白の
もとに侍ける人につかはしける　　大中臣能宣
年をへてほしをいた〳〵くくろかみの人より志もに成にける哉
○新院位におはしましける時うへのおのことも
召て述懷の歌よませさせたまひけるに白川院
になれつかうまつりける事をおもひてよめる

志ら河の流れをたのむ心をは誰かはくみて霄にしるへき　　大納言成通
○宇治前太政大臣花見にまかりるとき〳〵て
ほり川右大臣
身をさらて人を恨むる心社ちる花よりもはかなかりけれ
○花のいみしうさきたる比人のもとよりたれを
まつとておしむ心そといひ侍りけるによめる
さらてたに戀しき物を昔みし花ちる里に人のまつ哉
○賀茂に人のまうて〳〵後やしろのつかさなりひ
□かもとをたつねけるになきよしこたえけれ
は歸りて後ありなからかくれけるよしいふと
きゝて　　なりひらかめ
山里の岩井の水はみくさぬてみえけん物をすまぬけしきは
○おほやけのかしこまりに侍りけるを僧正深覺
まうしゆるし侍りけれはそのよろこひにさつ
き五日まかりてよめる　　平致經
君ひかす成なましかは菖蒲草いかなるねをか袖にかけまし
○かしこまりにはへりけるさ月の比をんなのも
とにいひつかはしける　　藤原ともさと
さ月とて軒にあやめもふかさりきれはかり社は袖にかけしか
○物へまかりけるみちに人のさうふをひきける
をなかき根やあるとこはせけるをおしみけれ
は　　周防内侍
いかてかくれを惜らんあやめ草うきには聲もたてつへきよに
○帥前内大臣なかされ侍りける時おくれすくせ
んとしたまひけれは宣旨かきりありてみやこ
にと〳〵まりて　　高内侍
夜の鶴みやこのうちにこめられて子をこひつ〳〵もなき明す哉
○百首歌中に　　大藏卿匡房
まとろまて物思ふ宿の長き夜そ鳥のねはかり嬉しきはなし
○左京大夫顯輔撰集うけたまはりて歌こひ侍り
けるかへりとに　　太政大臣
思ひやれ心の水のあさけれはかきなかすへきとのはもなし
○新院位におはしましける時中宮のおほんかた
にてこゆみのおほんあそひありけるにかけ物
にさうしのかたつくりたるか物のかゝぬ出さ
れたりけるに書つけられたりける　　關白前太政大臣
これをみて思ひも出よ濱千鳥あとなきあとを尋れけりとは　　右近衛督公行
○かへし
濱ちとり跡なきあとを思ひ出てたつれ鳬とも今日社はしれ
○むすめのさうしかゝせけるおくにかきつけら
る　　源義國妻
木のもとにかき集めたる言のはをは〳〵その杜の形見とはみよ

○百首歌よませたまひけるに　　新院御製
志きしまや　やまとの歌の　　つたはりを

後葉和歌集卷第十八

雜三

きけハはるかに　ひさかたの　あまつ神代に
はしまりて　みそもしあまり　ひともしは
いつもの神の　やくもより　おこりたるとそ
志ろすなる　それより後は　もゝくさの
とのはしけき　ちり〳〵に　かせにつきつゝ
きこえしと　ちかきためしに　ほりかはの
なかれをくみて　さゝなみの　ふりくる人に
あたうへく　つたなきとは　はまちとり
あとを末まて　とゝめしと　思ひなからも
つのくにの　なにはのうらの　なにとなく
ふれのさすかに　このことを　忍ひならひし
なこりにて　よの人きかは　はつかしの
もりもやせむと　たもへとも　心にもあらて
かきつられつる

○おなしく歌たてまつりけるに　左近衛中將教長

あつさゆみ　はるたちぬとや　みよし野の
山にかすみの　たなひけは　このめも今や
はりぬらん　いつしかとのみ　はなまつと
このもかのもに　たちましり　家路わするゝ
かひもなく　咲はかつちる　はかなさを
哀いつまて　なけきつゝ　わか身のうへに
なりはてむ　をはしらて　なつくれは
志けき梢に　なくせみの　むなしきからと
あきはなる　かくはつれなき　よなれとも
くまなき月を　なかむれは　物思ふことも
忘られて　心ひとつそ　ほこらしき
さてのつもりは　おいらくの　身にせめくるは
しら露の　志もとしなれは　ふゆの夜に
むら〳〵見ゆる　草のうへは　みなしろたへに
なりにけり　これをはよそに　おもひこし
わか志ら髪も　いまはたゝ　くろき筋なき
以下闕

右後葉和歌集以二古寫一本一校合

群書類從卷第百四十七　畢

群書類從卷第百四十八

和歌部三

續詞花和歌集卷第一　春上

○春たつ日よみ侍ける　源俊頼朝臣

いつしかと今朝は氷もとけにけりいかてみきはに春をしる覽

新院(崇德)御歌

打なひきけふ立春のわか水はたかいた井にか結ひ初らむ

○三百六十首歌中に　曾禰好忠

なる瀧の岩まの氷いかならしはるのはつかせ夜半に吹也

○堀川院(七十三)御時百首歌たてまつりけるに　中納言國信

三室山谷にや春の立ぬらん雪の下水岩たゝくなり

○む月のついたち比雪のふれりけるに山里に侍

りける人のもとにつかはしける　肥後

山里の柴のとほそは雪とちて年のあくるもしらすや有らん

○三百六十首歌中に　曾禰好忠

峯の日やけさはうらゝにさしつらん軒のたるひの下の玉水

○承保(白河)四年内裏に子日せさせ給けるに　大納言經信

れのひするみかきの内の小松原千代をはほかの物とやはみる

○東三條院(詮子)四十御賀御屏風に子日を　源道濟

姫小松おほかるのへにれのひして心に千代をまかせつる哉

○題しらす　小辨

數しらすひけるれの日の小松かな一本にたに千代はこもれり

○雪中子日といふをよめる　新少將

珍敷ためしにひかむ雪降はれの日の松も花咲にけり

○題しらす　能因法師

御狩野にまた降雪はきえれとも雉子の聲は春めきにけり

○新院人々に百首歌めしけるに　前左京大夫教長

わかなつむ袖かとそみる春日の〻とふ火の〻への雪のむら消

○小野宮の大おほいまうちきみ(實頼)の賀屏風に　大中臣能宣朝臣

あたらしき春くるとに古郷の霞の〻へに若菜をそつむ

○む月の七日みかはがもとよりわかなをつかはすとてみためになむ野へにいて〻なといへり　美濃

けるに返事に

我も又君かためにそ思ひつるかたみに摘は若なゝりけり

○新院御時うへの人々に歌よませさせ給けるに　八條入道太政大臣(實行)

はしめてうくひすをきく心を

けふそ聞太山かくれのふるすより梢にうつる鶯のこゑ

○春のはしめつかた山中(里イ)に侍ころ人のもとへい　心覺法師母

ひつかはしける

山里は人そ音せぬ鶯の初ねはかりはうたて聞けり

○やまさとなるころみやこの人鶯いかに鳴らむ　前左京大夫教長

なといひて侍けれは

鶯はみな都へと出はて〻初音そき〻し春の山里　大納言道綱母

○題しらす

我やどの柳の糸はほそくともくる鶯のたえずもあらなん　源季遠

○

春風にかすみの衣ほころびてたえまにみゆる青柳の糸　藤原孝善

○承暦(白河)二年内裏歌合に

谷川の音はへたてすまかれふくきひの中山霞こむれと

○津の國といふ所にて人々うたよみけるに霞隔行舟といふをを　隆緣法師

あさ霞鹽ち遙に立にけりおきのかたほのみへす成行　藤原盛經

○春駒をよめる

とりつなく人もなきの〻春駒は霞にのみやたなひかるらん　平兼文

○内裏御屏風に

日比へて待しもしるく我宿の梅の梢に春ぞきにける

○侍所前にいとちいさきむめのはな咲けるをみて　清原元輔

去年かうへし梅たに春をしるものを雪に埋て年をふる哉

○三井寺やけにけれは修行にまかり出ける道に梅花侍りけるをみて房の梅を思ひ出てよみ侍ける　前大僧正行尊

わか宿のつまに匂ひし梅かえも誰か〻きれの花と成らむ

○題しらす　よみ人も

春のよはいやはれらる〻梅の花あかぬ匂ひにおとろかれつ〻

○　祐盛法師

續詞花和歌集卷第二春下

○白川院(七十二)御時花多春をちきると云をを

梅かえの花吹かくるはる風はいとひなからもなつかしきかな　藤原資隆

○

袖にみな垣れの梅はしみにけり花にはとまるかやなかるらん　津守國基

○山家梅をよめる

なつかしき香のみこそすれ山里は梅の匂はぬ宿しなければ

○屏風の繪に梅花さきたる山さとのかすかなるに女ひとりなかめてゐたる所に　藤原道信朝臣

みる人もなき山里の花のいろはなか〳〵風そおしむへらなる　心覺法師

○水邊の梅花をよめる

梅かえの下行水も心あらは花ちる程はなかれさらなむ

○むめのはなの水にうきてなかる〻をみて　大江嘉言

流れくる水の心もしらなくにうきても花のともに行哉

○歸鴈を　意尊法師

玉章をかけし時にやかりかねを春かへりと契りをきけむ

○新院人々に百首歌めしけるに　藤原季通朝臣

なかむれは涙そ落る鴈かねのまたこむ秋は我やなからん

○苗代をよめる　小左近

花みるとなはしろ水にまかせつ〻うちすて〻けり春の小山田

○堀河院御時百首歌たてまつりけるに　修理大夫顯季

雉子鳴いはたのをの〻つほすみれしめさすはかり成にける哉

人々よませ給けるに　大納言經信

百鋪やみかきか原の櫻花春した〻すはにほはさらめや

○山花始開といふををよませ給ける　御製(二條)

いつしかとまち〳〵て又山櫻今朝より散んををしそ思ふ

○京極家に白河院みゆきさせ給て又日人々に歌よませ給けるに　京極前太政大臣(師實)

櫻花おほくの春にあひぬれときのふ今日をやためしにはせん　式部大輔資業

○高倉一宮(祐子)歌合歌

君かすむ宿に〻ほへる櫻花春くる人のかさし成けり　藤原兼房朝臣

○

のとかにもみゆる櫻のにほひ哉宿のけしきや風もしるらん　中納言女王

○

山さくら匂ふあたりのはる霞風をはよそに立へたてなむ　治部卿通俊

○

春風は吹ともちるな櫻花春の心よわれになしつ〻　藤原顯綱朝臣

○

花ゆへにか〻らぬ山そなかりける心は春の霞なられと　藤原爲業

○題しらす

いつれともわかれぬ物は白雲の立田の山のさくら成けり　右大辨雅賴

○

霞にも雲にも誰かまかふらんたくひもみえぬ峯の櫻を

○鞍馬の住僧にて侍けるもの〻大門の花盛に見にまかりてよみける

山さくらみれはかすみのとめつれは麓の花をおりて社みれ

○遠尋山花といふをを人々によませさせ給けるに　新院御歌

たつねつる花のあたりに成にけり匂ふにしるし春の山風

○

かへるさをいそかぬ程の道ならはのとかに峯の花はみてまし　法性寺入道前太政大臣(忠通)

○

面影に花のすかたをさきにたて〻いくへ越きぬみれのしら雲　藤原顯廣朝臣

○新院御時春情在花と云ををうへの人々によませさせ給けるに　右大臣(公能)

梓弓春のこ〻ろにいるものはたかまと山の櫻なりけり　前太宰帥資仲

○花陰浮水と云事を

水にうつる影のなかる〻物ならはすゑ汲人も花はみてまし

○鳥羽院(七十四)白河花御覽しにみゆき有ける　花園左大臣(有仁)

日よみ侍ける

かけ清き花のか〻みとみゆる哉長閑にすめる白川の水　德大寺左大臣(實能)

萬代の花のためしやけふならん昔もか〻るはるしなければ　藤原顯方

○題しらす

淺茅原あれのにまさる故郷に匂ひかはらぬ花さくらかな　賢智法師

○

哀れにも春を忘れす匂ふかなあたなる花の心とおもふに　源雅重朝臣

○

よしの山ことしを花のきはと見ていくよの春をすくしきぬ覽

○雲林院のうすさくらみにまかれりけるにみなくちはて〻かたえの殘れるにいとおかしくけりけるをよみ侍ける　良暹法師

尋つる花も我身もをとろへて後の春ともえこそ契られ

○尙齒會といふをして人々歌よみけるに　藤原隆資

櫻花またみむともさためなきよはひそ風も心してふけ　藤原時房
○
花ゆへに過にし春をかそふれはあはれやそちに成にける哉　新院御製
○題しらす
年ふれとかはらぬ物は春毎にはなにそめてし心なりけり　楯榮職
○
世中は思ひてもなしと思へとも花に心のとまりぬるかな　顯昭法師
○仁和寺にあひしれる人のもとにまかれりける
時ともとする僧たち三四人具して花見ありき
けるに上西門院の藏人ともあそひける所にま
かりいたりてさは〳〵みゐ侍りて歸けるをそさ
はしいかにかゝる花を見すてゝはなとあなか
ちにとゝめければいひ遣はしける
わりなしや他にも花のなくはこそ一木かもとに日をも暮さめ　律師實源
○あやしのものゝ櫻のはなをもちてまかりける
をこひ侍けれとおしみけれは
情なきさつか心にいかにして花をはおしむ物とさりけん　僧都覺樹
○中納言隆家雲林院の花み侍けるにおかしかり
けるえたをおりてみせにつかはしたりけれは
○　小野宮右大臣(實資)
おりふしの行衛も今はしらぬ身に春こそかゝる花はみえしか
○花みにまかるときく人に　藤原實方朝臣
春くれと春にさられぬ埋木は花みる人をよそにこそきけ
○上達部上の人々雲林院のはなみけるに齋院女
房のもとよりさめのうらのはなはかひなき花
とせうそこ侍れは　堀川右大臣(賴宗)

風をいたみまつ山へをそ尋つるさめゆふ花はちらしと思へは
○小野宮のおほきおほいまうち君月林寺に花見
侍ける日よめる　前大貳高遠
山風にちらて待ける櫻花けふそこほれてにほふへらなる
○　清原元輔
たかためかあすは殘さむ山櫻こほれて匂へけふのかたみに
○かくれさせ給はんとちかく成て勝光明院の花
のちるを御覽してもの心ほそくおほしめされ
けれはよみて德大寺の大いまうちきみにたま
はせける　鳥羽院(七十四)御歌
心あらは長閑かにゝほへ櫻花のちの春をはいつかみるへき
○新院御時うへの人々に歌よませさせ給けるに
つかうまつれりける　右兵衛督公行
嵐ふくさかの山への櫻花ちれは雲ゐにさゝ涙そ立
○たいしらす　大藏卿匡房
天河雲のさからみたえにけり花ちり積るをはつせの山
○　僧都覺樹
嶺にちる櫻は谷の埋木に又咲はなと成にけるかな
○　太政大臣(伊通)
さら雲と峯にはみえて櫻花ちれは麓の雪とこそなれ
○新院人々に百首歌めしけるに　藤原季通朝臣
よしの山花はなかはに散にけりたえ〳〵かゝる峯のさら雲
○水上落花をよめる　源賴政
吉野川みなとの涙による花やあをれか嶺にきゆる白雲
○新院人々に百首歌めしけるに　前左京大夫教長
櫻花いかなる風にさそはれて惜む人をはさらぬ成らん

○　兵衛
さくらはな木のもとに吹ためてをのか物とや風のちるらん　仁和寺宮
○題しらす
はかなさを恨もはてし櫻花うき世はたれも心なられは　藤原爲業
○
又もこむ春もみるへき花なれと散は限りの心地こそすれ　賀茂政平
○
誰ためにちらさしと思ふ花なれはさぬ計りにはおしき成らん　源信宗朝臣
○
こりすまにちるおり花をみつる哉過にし春のおなし思ひを　中納言定頼
○隨風尋花といふをを
吹風をいとひもはてし散殘る花のしるへとけふは成けり　靜嚴法師
○尋殘花心をよめる
ちりぬとて尋さりせは山櫻あをはかくれの花をみましや　新院
○百首御歌中に
山吹の花のゆかりにあやなくも井ての里人むつましきかな　藤原範綱
○水邊欵冬をよめる
よしの川きしの山吹咲ぬれは水にそ深き色はみえける　藤原實清朝臣
○麗景殿女御大盤所より女房の藤花を山吹にさ
して給はせたりけれは　祭主輔親
ふた心ありける人のおる花はひとつ色にも咲すそ有ける　藤原爲業
○月前藤花といへることをよめる
ふち波のかけなる水の月みれはうす紫の雲そかゝれる
○梨壺に侍ける比かたはらのさうしより藤花を
うちこしたりけれは　大中臣能宣朝臣
おほつかな末の松山いかならんまかきの嶋をこゆる藤なみ　源道濟
○山里にて藤花をみてよめる
山高み松にかゝれる藤のはな空よりおつる涙かとそみる　俊惠法師
○藤花をよみ侍りける
楢よりこえて落くる藤涙のゐせきは松のさつえ成けり　曾禰好忠
○三百六十首歌中に
春ふかく成にけりとは住の江の峯の藤なみおるにてそしる　藤原實清朝臣
○題しらす
はなゝらて心慰む方もなき人こそせめて春はおしけれ　六條宮
○やよひのつこもりに
命あらは又も逢みむ春なれと忍ひかたくて暮すけふかな　源雅光
○
くれはつる春の行衛を尋れは人の心にとまる成けり

續詞花和歌集卷第三夏

○新院人々に百首歌めしけるに　前參議親隆
ぬきかふる花の袂のかつりかのかほるや春の名殘成らん
○題しらす　惠慶法師
我やとの外面にたてるならのはの茂みにすゝむ夏はきにけり
○うつきのついたちに山寺にもゝのはなさけり
けるを見て　僧都源信
山里のもゝの花やゝ咲にけり都は今やうつきなるらん
○卯花のかきねにうくひすのなくをよめる

うの花の色こそ梅にまがふともかを忘れてや鶯の鳴く　藤原尙忠
○鳥羽殿五番歌合に　左近中將信通
過ゆかは散もこそすれ卯花の枝さしかはすをのゝほそ道　藤原季通朝臣
○
見て過る人しなければ卯花のさける垣ねや白河の關　源盛清
○題しらす
卯花を音なし川の涙かとてれたくもおちて過にける哉　源相方朝臣
○
年をへてかよひなれたる山里の門とふはかり咲る卯花　よみ人不知
○
久堅の月の影ともみつる哉桂の里にさける卯花　大宮小侍從
○あふひをよみ侍ける
いかなれはその神山のあふひ草年はふれともふたは成らん　藤原範永朝臣
○左京大夫道雅西八條家の障子の繪に山里に郭公まてる人ある所を
今朝きなけさやまか峯の郭公やとにもうすき衣かたしく　藤原範永朝臣
○新院御時人々に歌よませ給けるに人傳に郭公をきくといふをを　法性寺入道前太政大臣
郭公聞つと語る人ともにいくたひとひつあかぬあまりに　藤原成範朝臣
○題しらす
夜もすから待をはしらて郭公いつれの山のかひに鳴らむ　源師賢朝臣
○
珍らしく鳴てすくなりほと〻きすいつくもこれや初音成らん　藤原隆資
○
初聲を聞そめしより郭公ならしの岡にいくよきぬらん

○後朱雀院御時むめつほの女御御方の人々ほそとのに上の人々と物語して侍るに經信卿ちは
しかくてまち給へとて一品宮の御方へまいり
にける程にほと〻きすの鳴けれは　小左近
きかましや山郭公一こゑもまてとたのむる人なかりせは
○夢聞郭公といへるを　太政大臣
郭公初れ聞つるうれしさは夢もうつゝにかはらさりけり
○新院御時郭公の歌よませ給けるに　前大藏卿行宗
ほと〻きす雲の上にてきく時も猶空にこそ鳴わたりけれ　源家俊朝臣
○鳥羽殿五番歌合に
ほと〻きす鳴一聲にあくかれてゝらぬ雲ゐに行こゝろかな　藤原基俊
○郁芳門院根合に郭公を人にかはりてよめる
二聲となきかきなかぬ郭公さこそみしかき夏のよならめ　右衞門督公保
○題しらす
暮毎になとかき鳴ぬほと〻きす待こゝろにはよかれやはする　法性寺入道前太政大臣
○
郭公なへて聞する聲ならはその人かすのうちにいれなん　源道濟
○
年をにめつらしけれと郭公むかしの聲もかはらさりけり　藤原永實
○
待かれてまとろめは又きなくなり人くろしめのほと〻きす哉　藤原教良母
○
郭公又もや鳴とまたれつる聞夜しもこそねられさりけれ　前大納言成通
○
ほと〻きす一聲鳴て明ぬれはあやなくよはの怨めしき哉

○　中院入道右大臣(雅定)
夏の夜はあくるもしらす郭公鳴て過ぬる空をなかめて　勝超法師
○
なく聲はたかまの山のほと〻きすとをちの里の人も聞らん　堀河
○住吉にもうて〻侍りけるにほと〻きすの鳴け
るをきゝて　大僧正覺忠
すみのえになき渡るなり郭公待にかひある心ちこそすれ　僧都實圓
○八條の山庄にて人々ほと〻きすの歌よみけるに　源賴實
いなりやまこえてやきつる郭公ゆふかけてこそ鳴渡るなれ　藤原仲實朝臣
○曉月聞郭公といへるを
郭公有明の月に鳴こゑを更行月のつとにかもせむ　藤原顯廣朝臣
○曉郭公を
忍ひ妻おき行空のほと〻きす名殘おほくも鳴わたる哉　藤原忠清
○郭公聲稀といふををよみける
たまさかにあふ坂山の郭公なにかかたらふたえまかちなる　藤原忠清
○後三條内大いまうち君(公教)身まかりてのち
かの家にて人々はな橘を題にて歌よみけるに　源通清
よめる
いにしへを忍ふにしけるつまにしも花橘のにほふなるかな　兵衞
○新院人々に百首歌めしけるに
五月雨の晴せぬ比そかつまたの池のむかしのけしき成ける　橘成元
○通宗朝臣家にて五月雨をよめる
五月雨はみつの〻原もなかりけりいつれか淀の渡り成らん　藤原成通
○郁芳門院の根合に五月雨をよみ侍ける
六條右大臣(顯房)

五月雨にかさとり山はこえゆかし花いろ衣かへりそする　堀川院御歌
○あやめをよませ給ける
玉藻かる池の汀の菖蒲くさひくへき程に成にけるかな　堀河
○新院人々に百首歌めしけるに
宿ことにつまにひかる〻菖蒲草たかよどのにかねはとまる覽　僧都實圓
○五月五日
七夕の心ちこそすれあやめ草年に一たひ妻にみゆれは　藤原仲實朝臣
○六條右大臣家歌合にほたるを讀る
五月やみ澤への草は茂けれとかくれぬものは螢なりけり　よみ人しらす
○晩螢を
鈎簾の外に宵のともしひ消やらてほのめくかけは螢也けり　仁和寺宮
○ともしをよめる
ともしすと山の雫にそほちつ〻尾上によをも明しつる哉　藤原忠兼
○堀河院御時百首歌奉つりけるに
ともしするみやきか原の下露に信夫綟摺かはくまそなき　大藏卿匡房
○水上夏月をよめる
夏かはの岩せにやとる月かけや冬にしられぬ氷なるらん　心覺法師
○夏月を
なつの夜はたゝときのまも眺れはやかて有明の月をこそみれ　仁和寺宮
○雲隔遠望といへるを
とをちには夕立すらし久かたのあまのかく山雲かくれ行　源俊賴朝臣
○新院御時水草隔舟といふををよませ給け
るによみ侍ける
夏ふかく玉江にしける蘆のはのそよくや舟の通ふなるらん　法性寺入道前太政大臣
○三百六十首歌中に
荻のはに風のそ〻ふく夏しもそ秋ならなくに哀なりける　曾禰好忠

○二條の大き大后の宮にて樹陰翫泉心をよみ侍
ける　贈右大臣(長實)
松かれに岩もる清水結ふ夜は我身ひとつの秋はきにけり
藤原道經
○水邊納涼をよめる
夕されは玉ぬる數もみえれともせきの小川の音そすゝしき
○八條入道太政大臣(實行)右近衛督に侍けるとき歌合し侍りけるに夏風をよみ侍ける
德大寺左大臣

續詞花和歌集卷第四秋上

○法性寺入道前太政大臣家にて山家早秋のこゝろをよみ侍ける
前治部卿雅兼
山里はいとゝ哀そまさりけるいくかもあらぬ秋のけしきに
源道濟
○題しらす
なつ衣またかへなくに荻のはの末うちなひく秋風そ吹
○三百六十首歌中に　曾禰好忠
朝ほらけ荻のうはゝの露みれはやゝはた寒しあきの初かせ
○堀川院御時百首歌奉まつりけるに　修理大夫顯季
露むすふ秋にはやく成にけり淺茅か花のうつろふみれは
○七夕の心を讀侍りける　宇治入道前太政大臣(賴通)
ちきりけむ程はしられと棚機の絶せぬけふのあまの川涙
藤原範綱
○
天の川まれに逢せと思ひしは流れてたえぬ契り成けり
よみ人不知
○
けふさへや袖はぬるらんたなはたの暮待ほとの天の羽衣
ゆふされは篠のをさゝを吹かせのまたきに秋のけしき成かな
○みな月の比ほひ二條の大き大后宮待草花歌人々によませ給けるに　美濃
藤はかまはやほころひて匂ひなむ秋の初風吹たゝすとも
○秋花夏開といへる事を　藤原經衡
あき萩は夏のゝへにそ咲にけるなかてや鹿のしからみにせん
○新院人に百首歌めしけるに　藤原季通朝臣
けふくれは麻のたちえにゆふかけて夏みな月の御祓をそする
○七日のゆふさりつかた内おまへに候にこよひのこゝろの歌よめとおほせこと有けれはつかうまつれる　三河内侍
雲井にてなかむるおりも天の河ほし合の空ははるけかりけり
○すみよしよりのほり侍りけるに七日あまのかはといふところにとまりてふねをたなはたにかしたてまつるとてよみける　津守國基
たなはたは思ひしらなんあまの川いそく渡りに舟をかしつる
○宇治へまうて侍けるに田に水ひきあへるかおかしかりつるよしかたり侍りけるをおとゝ聞侍りてふつきの七日見にまかれりけるにみつひくものもなかりけれはかむかへ申けるによめる　菅原爲言
ひく水もけふ七夕にかしてけりあまの河瀨にふなぬすなとて
○七夕にかせるきぬの露にかへりたりけれは　平實重

たなはたにぬきてかしつる花染の衣は露にかへす成けり
○八日よみ侍ける　上西門院冷泉
程もなくほしあひの空の明ぬれはかさねもあへし天の羽衣
○　八條入道太政大臣北方
露けさを思ひこそやれひこほしのけさ立かへる天の羽衣
○　仁和寺宮
七夕のかへるあしたのうき雲やわかぬ思ひのけふり成らん
○　藤原顯方
天河おなしせよりはわたれともかへさは袖やぬれまさるらん
○堀川院おん時百首歌たてまつりけるに　大納言公實
やまのはに横きる雲の絶まよりもりくる月のめつらしき哉
○月をよませ給ける　三條院御歌
あし引の山のあなたに住人はまたてや秋の月をみるらん
○　大納言公通
秋風は夜さむなりとも月影に雲の衣はきせしとそ思
○　藤原道綱
秋のよは天川をや氷るらん月の光のさへ渡るかな
○　前左京大夫教長
いつとても月にあくよはなけれ共秋としなれは寐られさり鳬
○　和泉式部
たのめたる人はなけれと秋のよは月みてぬへき心こそすれ
○百首御歌中に　御製
雲はみな峯のあらしにはらはせてさやけく月の澄のほるかな
○八月許月あかきよ山寺に侍りて京なる人につかはしける　源道濟
よそなから君やみるらん思ひつゝ今宵の月にれてあかしつる
○繪にひとりつきみたるひとあるところに　六條宮
獨ぬて月をなかむる秋のよはなにとをかは思ひ殘さむ
○法性寺入道前太政大臣連夜見月心人々によませ侍けるに　藤原行盛朝臣
よひのまのかたはれ月とみしものをなかめそあかす有明の空
源雅光
大堅の月のさかりに成ぬれは中〳〵ひろそまさりまれける
○題しらす　新院紀伊
たくひなくおほゆる物は秋のよのうす雲かゝる在明の月
○　前大納言成通
たくひなくつらしとそ思ふ秋のよの月を殘して明る東雲
○　大江嘉言
秋の夜の空すみ渡る月みれは行ともなくてかたふきにけり
○　惠慶法師
月の入山のあなたの里人と今宵はかりは身をやなさまし
○屏風の繪に月のよ山路をゆく人ある所に　源道濟
秋のよの月に山ちをこえ行はまたなも志らぬ鳥そ鳴成
○高倉一宮(祐子)のくさあはせのかちわさのとし侍けるにをはすて山に月をのそむ人ある所に　藤原家經朝臣
久かたの月はひとつを姥捨の山からとにみゆる成けり
○水上月を　越後
月影のやとれる程は水の面に我心さへ移りぬるかな

○題しらす　　よみ人も
水や空そらや水ともみえ分すかよひてすめる秋のよの月　藤原顯廣朝臣
○新院人々に百首歌めしけるに
石ばしる水のまち玉敷見えて清瀧川にすめる月かな　御製
○百首の御歌中に
ふるさゝもにちりたえせぬさひえにも移れる月は曇さりけり　左京大夫顯輔
○關路月といふをよみ侍りける
あふ坂の關にまみつのなかりせはいかてか月の影をとめまし　前中納言師俊
○
播磨路やすまのせきやの板ひさし月もれとてやまばら成らん　仁和寺宮
○月閑中友といふをを
とふ人に思ひよそへてみる月のくもるはかへる地ちこそすれ　俊惠法師
○古郷月をよみける
故郷のいた井の清水みくさぬて月さへすます成にける哉　大藏卿匡房
○承暦二年内裏歌合に
おほつかなこや有明の空ならむ夜ともみえすてらす月影　新院
○新院御時上のをの〔こ〕ともに歌よませさせ給
けるに
秋のよはひろにかはらぬ月なれは明るも鳥の音にてこそしれ　右兵衛督公行
○京極前太政大臣家歌合に
秋のよはいとゝなかくそ成ぬへき明るもしらぬ月の光に　讃岐
○題しらす
天の原遙にひとりなかむれは袂に月の出にけるかな　增基法師
○　　僧都最度
身のほとも忘られぬ物は秋のよの月になかむる心なりけり
○　　大納言經信母

みる人の心は空にあくかれて月のかけのみすめる宿かな　藤原道經
○
秋のよの月に心をなくさめてうき身に年のつもりぬる哉　平經盛朝臣
○
さもこそは浮世にめくる月ならめ眺むるからに物そかなしき　八條入道太政大臣
○九月十三夜德大寺のおほいまうち君の仁和寺
堂に人々きたり歌よみけるに
山のはにかゝれは月のおしき哉わかよの秋もふけぬと思へは　隆緣法師
○月照草花といへるをを
いはれのゝちくさの花にみたれたる露もくもらぬ秋のよの月　法性寺入道太政大臣
○題しらす
風ふけは玉ちる萩の下露にはかなく宿るのへの月かな　大藏卿匡房
○白河院御時上のをのことも
ををよませさせ給けるに
夜を寒み伊勢の濵おき分行はころも鴈金聞ゆなる哉　新院
○百首御歌中に
鴈かれのかきつられたる玉すさをたえ〳〵にけつ今朝の朝霧　堀川
○
水のおもにかき流たる玉章はとわたる鴈のかけにそ有ける　さかみ
○高倉一宮歌合に
露むすふはきの下葉やみゆるらん秋のゝはらにをしか鳴なり　藤原經衡
○
つまこふる鹿の心は秋萩の下葉をみてや色に成らん　仁和寺宮
○旅宿鹿といふをを人にかはりて
宮城のゝ小萩か原にとまるよは鹿に宿かる心ちこそすれ
○法性寺入道前太政大臣家にて鹿をところの名

によせてよませ給けるに　源雅光
心からあたしのゝへにたつ鹿は妻さたまらぬ音をや鳴らん　三宮
○題しらす
秋のよはおなし岡へに鳴しかの更行まゝにちかく成かな　大納言經信
○
秋ふかみ山かたそひに家ゐして鹿の音さやに聞はかなしき　惠慶法師
○
秋の夜のね覺かちなる山里ほまくらつとへに鹿のみそ鳴　藤原季通朝臣
○新院人々に百首歌めしけるに
身のうさを思ふれさめの鹿の音は我さへ聲もおしまれぬ哉　治部卿通俊
○白河院御時題をさくりて殿上の人々にうたよ
ませさせ給けるに朝霧をつかうまつりける

山里は霧立こめて人もなしあさたつ鹿のをとはかりして　小辨
○住けるやまさとをたちてほかにしはし侍りて
かへれるに前栽とものいたうおれふしたりけ
るをみて
宿かれていくかもあらぬに鹿の鳴秋のゝ原に成にける哉　靜蓮法師
○西山にすみける比さかのゝ花ともをおりて人
のもとへつかはすとて
しかのねや心なられは殘るらむさらてはのへをみなみする哉　西行法師
○かへし
鹿のたつのへの錦のきりはらは殘りおほかる心ちこそすれ　大中臣能宣朝臣
○藏人所のをのことも前栽ほりにさかのへまか
れりけるに
とし毎に大宮人のくるのへはさかのとをや花もみるらん

續詞花和歌集卷第五秋下

○二條のおほき大后宮にて待草花心をよめる　修理大夫顯季
思ふとち露うち拂ひみにゆかむ花のゝ萩のはやはさかなん　藤原伊家
○近對草花といふををよめる
あき山のふもとをしむるいへゐには末のゝ萩そまかき成ける　大藏卿匡房
○齋宮の野宮にて人々はきの歌よみ侍りける
秋の野の萩のにしきをきて見れは袖打ふらん道たにもなし　修理大夫顯季
○雨中野花といふをを

雨ふれは思ひこそやれ露をたにおもけに見らしまのゝむら萩　藤原長能
○雨夜思萩心を
ぬれ〳〵も明はまつみむ宮城野のもとあらのこ萩萎しぬらん　前治部卿雅兼
○法性寺入道前太政大臣家にて女郎花風にしたし
かふといふををよみ侍りける
女郎花なひくとみれは秋風の吹くるすゑもなつかしき哉　前參議親隆
○新院人々に百首歌めしけるに
いそのかみふるからのへの女郎花なを古へのすかた成けり　肥後
○堀河院の御時百首歌たてまつりけるに
みし人もあれ行宿の女郎花ひとり露けき秋のゆふ暮

○題しらす　中納言經忠
なつかしくおほゆる物を女郎花いかに心を露のをくらむ
○　藤原資隆
ぬきかけしぬしはしられと紫の色むつましき藤袴かな
○思野花といへるを　藤原伊家
今はしもほに出ぬらん東路のいはたのをの〳〵しの〳〵をすゝき
○房のまへなるすゝきを女のたちよりてみけれ　堀川
はよみける
我宿にうつして後は花薄のへにならひて人なまねきそ　藤原時房
○題しらす
雉子啼かたの〳〵みの〳〵花すゝきかりそめにくる人なまねきそ　藤原孝清
○
われのみと思はし今は花すゝき行かふ人をまねく成けり　道命法師
○さかのにはな見にまかりて
花薄まねくはさかとしりなからとゝまる物は心なりけり　前齋院尾張
○野華隨風といへるをよみける
さためなき秋の野風になひきつゝかたみにまねく花薄かな　前大藏卿行宗
○鳥羽殿前栽合に
花すゝきまねかさりせはいかにして秋の〳〵風の方をしらまし　修理大夫顯季
○
秋風になひく薄としりながらいくたひのへに立とまるらん　前大藏卿行宗
○
物をに秋のけしきはしるけれとまつ身にしむは荻の上風　道命法師
○題しらす
身のほとを思ひつゝくる夕暮に荻の上葉に風わたるなり　春宮大夫師頼
○堀河院御時百首歌奉つりけるに

さらぬたに秋のね覺は有物をけしきことなる荻のうは風　大貳三位
○題しらす
亂れたる名をのみそたつかるかやのをく白露をぬれ衣にきて　和泉式部
○花山院歌合時露をよみ侍ける
玉かとてとれは消ぬる白露をゝきなからこそみるへかりけれ　堀川
○新院人々に百首歌めしけるに
はかなさを我身のうへによそふれは袂にかくる秋のゆふ露　藤原長能
○八月許に人のもとへつかはしける
目ぐらしの鳴夕暮そうかりけるいつも盡せぬ思ひなれとも　藤原長能
○法性寺入道前太政大臣近衛の家の前栽にむし
とも花はなちて侍けるをむしはなくやとき〳〵
につかはしたりけれはかへりまうてきてなき　參河
侍ふしを申けるにいかゝき〳〵つるを侍りけれ
は
年をへてき〳〵ならせとも鈴虫の聲はふりせすめつらしきかな　曾禰好忠
○三百六十首歌中に
虫のねそ草むらもに亂るなる我もこのよはなかぬはかりそ　但馬
○野宮歌合にむしをよみける
淺茅生の露ふき結ふ木枯にみたれても鳴むしの聲かな　馬
○三條おほき大いまうちきみ(頼忠)人々に歌よ
ませけるに草村のよるのむしをよみける　紀時文
秋ふかく成行よはの虫のねは聞人さへそ露けかりける　大藏卿匡房
○遠聞擣衣心をよめる
衣うつをちの里人きりふかみあるかなきかの聲聞ゆなり　僧都濟圓
○

秋の夜をね覺て聞は風寒みとをちの里に衣うつなり　源俊頼朝臣
○堀川院御時百首歌奉つりけるに
松風の音たに秋はさひしきに衣うつなり玉川の里　藤原爲業
○題しらす
住よしのこたかき松を吹風の音にそ秋は空にしらるゝ　大納言公實
○堀川院御時百首歌奉つりけるに
ふもとをは宇治の河霧立こめて雲ゐにみゆる朝日山かな　新院
○百首御歌中に
秋の田のほなみもみえぬ夕霧にあせつたひして鶉なく也　前大藏卿行宗
○題しらす
霧はれぬ山田の庵の夕されは稻はの風のをとのみそする　刑部卿範兼
○
をのつからをとなふ物は庭の面にあさちなみよる秋の夕風　源道濟
○
いにしへは身にしむ秋もなかりしを老てはものそ悲かりける　藤原公重朝臣
○秋のよのなかき心をよみ侍ける
つくゝをとあけこそやられ秋のよは窓うつ雨の音はかりして　大貳三位
○題しらす
遙なるもろこしまてもゆく物は秋のね覺の心成けり　藤原爲忠朝臣
○ときはといふところにすみける比九月九日人
のもとより花さかぬときはにはけふのきくも
いかにつむらむなといひをくりて侍けれは
年ふれと匂ひかはらぬ花なれはきくはときはの物としらすや　前大僧正行慶
○籬菊如雪といへるを
雪ならは籬にのみはつもらしと思ひとくにそしら菊の花
○題しらす　藤原孝善
かさせとも老もかくれす中〳〵にさらかにまかふ白菊の花　鳥羽院御時菊めしけるに奉るとてむすひつけ
○
はへりける　花園左大臣北方
九重にうつろひぬとも菊の花もとの籬を思ひわするな　前大僧正行慶
○殘菊をよみける
人ならはつらからましを白菊のうつろふまゝになつかしき哉　辨乳母
○上東門院菊合に
うすくこくうつろふ色もをく霜にみな白菊とみえわたる哉　藤原仲實朝臣
○堀川院御時百首歌奉つりけるに
長月の時雨の雨やそめつらん正木のうはゝ紅葉しにけり　小辨
○宇治入道前太政大臣もみち見侍けるに
君みるとを心しけりな龍田姫もみちのにしき色をつくせり　藤原長能
○ものへゆくみちにさほやまのもみちのおもし
ろかりけるを見侍るをくれぬといそかしけれ　大中臣能宣朝臣
は
みぬときは思ひたにやるさほ山の紅葉の風にけふや暮さん　藤原長能
○紅葉をよめる
いつくにか駒をとゝめむ紅葉はの色なるものは心成けり　左京大夫顯輔
○
山姫にたへの錦をたむけても散紅葉はをいかてとゝめん　宗延法師
○
嵐ふくかみかき山の麓にはもみちやぬさと散まかふらん　齋院中將
○落葉隨風といへるを
紅にやしほ染たるもみちはをおろす嵐のねにかへすかな

○北白河にて人々もみちを讀けるに　よみ人しらす
なかれくる紅葉の色の深けれは淺きせもなし志ら河の水
○障子繪にあれたる宿にもみち隙なくちりたる
所をよめる　源俊賴朝臣
古郷は散紅葉はにうつもれて軒の志のふに秋風そふく
○齋宮の野宮に侍けるにさひしきたひれに何事
をかおもふなと人のいへりけれは　辨乳母
木のはちる嶺のあらしに夢さめてなにををかは思ひ殘さん
○なか月ふたつありけるとしよみ侍ける　源兼昌
長月のふたつ有年は行秋を惜みとめたる心ちこそすれ
○九月尽日源賴資か西山の家にて人々歌よみけ
るに　藤原範永朝臣
けふしもあれ小倉の山の麓にてまたき暮ぬる秋の空哉
○九月つこもりにすゝきのかせになひくに露の
こほるゝを見て　心覺法師母
とゝまらて暮行秋のつらけれはまれく薄の袖も露けし
○　前中納言師俊
草のはにはかなく消る露をしもかたみにをきて秋のゆくらん
○　よみ人志らす
秋はたくけふのみと思ふ涙こそ一夜ささたつ時雨成けれ
○　刑部卿範兼
萩の葉にあすもふくへき風なれと秋の哀はこよひはかりそ

續詞花和歌集卷第六冬

○十月一日秋のなこりなきこゝろを人〳〵よみ
けるに　源涼國
おしめとも野邊の草木は枯はてゝ露たに秋はとまらさりけり
○冬のはしめによみける　津守國基
いつのまに空の景色のかはるらん烈きけさのこがらしの風
○白河院御時殿上の人々大井にまかりてあそひ
けるに紅葉浮水といふををよみ侍ける　大納言經信
嵐ふく山のあなたの紅葉はをとなせの瀧におとしてそみる
○　治部卿通俊
紅葉はの散ぬる時は大ぬ川となせそ冬の木すゑ成ける
○新院人々に百首歌めしけるに　藤原顯廣朝臣
まはらなる眞木の板屋に音はしてもらぬ時雨はこのは成けり
○十月はかりによみ侍ける　馬内侍
れさめして誰かきくらむ此頃の木葉にかゝる夜はの時雨を
○法性寺入道前太政大臣家にてしくれをよみ侍
ける　源定信
音にさへ袂をぬらす時雨かな眞木のいたやのよはのねさめに
○題しらす　僧都覺雅
秋はてゝとふ人もなき山里にをとなふ物はしくれ成けり
○長閑寺にて山家冬の心を人々よみけるに　藤原宗國
しかの音も人もをとせぬ山里は秋より後そいとゝさひしき

○山ざとに侍りける人に十月許つかはしける　源賴定女
都たに淋しさまさる木からしに峯の松風思ひこそやれ
○宇治にてよみ侍ける　中納言定賴
朝ほらけうちの河霧たえ〳〵に現れわたるせゝのあしろ木
○月照寒草といふををよませ給ける　新院御歌
をみなへし月の光に思ひ出て小野のさかりの秋や戀しき
○永承四年内裏歌合に　大中臣永輔朝臣
秋のみといかなる人かいひそめし月は冬こそ見るへかりけれ
○冬の月をよみける　春宮太夫師賴
冬のよの雲吹はらふ木からしや月みる人の心なるらん
○　前中宮亮季行
冬のよは衣手さむし大空の月のひかりやさえ渡るらん
○曉千鳥をよめる　平忠盛朝臣
有明の月のてしほやみちぬらん磯つたひして千とり鳴也
○題しらす　能因法師
夕されはしほ風こしてみちのくの野田の玉川ちとり鳴なり
○　藤原長能
川霧は汀をこめて立にけりいつく成らん千鳥なく也
○　紫式部
水鳥を水のうへとやよそにみむ我もうきたるよを過しつゝ
○　仁和寺宮
谷河のふしきにねふるをしかもはつらゝの床や寒けかるらん
○百首御歌中に　新院
このころのをしの垣ねそ哀なるうはけの霜よしたの氷よ
○冬夜鶴のなくをきゝて　藤原道信朝臣
小夜更て聲さへ寒きあしたつはいくへの霜かをき增るらん
○竹の葉にをける霜のとけて露のやうにておつ
るを見て　赤染衛門
たけのはに結へる霜のとけぬれはもとの露とも成にける哉
○冬のころいとはけしくみゆる夜人のもとより
ともなしひにこよひはまいりくへきかといひを
こせて侍りけれはつはかしける　馬内侍
さゝのはに霰降よのさむけきにひとりはねなん物とやは思
○百首御歌中に　御製
冬のよのさゆるにしるしみよしのゝ山の初雪今そふるらし
○行路初雪をよみ侍ける　八條入道太政大臣
よな〳〵の旅ねの床に風寒てはつ雪ふれりやさやの中山
○京極前太政大臣家歌合に　藤原正家朝臣
旅人のしはすり衣うちはらひ拂もあへすけさのはつ雪
○　藤原顯綱朝臣
外山には柴の下葉の散はてゝをちの高ねに雪降にけり
○　治部卿道俊
をしなへて山のしら雪つもれともしるきはこしの高ね成けり
○　源俊賴朝臣
降雪に谷のかけはしうつもれて梢そ冬は山ちなりける
○題しらす　隆緣法師
箸鷹のとかへる山に雪ふれはをのれさへこそしらふ成けり
○　納大言經信
み山路にけさやいてつる旅人のかさ白妙に雪つもりつゝ
○　白河院御歌
跡もなく雪ふりつもる山路をは我ひとり行心ちこそすれ

○
みやまちを越行人はさむからし降しら雪をまくりてにして　大納言經信
○旅のやどりのゆきをよめる　修理大夫顯季
松かねにおはなかりしき夜もすからかたしく袖に雪は降つゝ
○後冷泉院御時雪ほれるあした皇后宮の御方に
わたらせ給つるにすゝきに雪のふりかゝれる
をおかしからせ給て御ともなる殿上人してお
らせて下野にとらせよと仰られければ　下野
雪ふれは咲ぬえたなくみゆれともおりからまさる花薄哉
○題しらす　藤原公重朝臣
降雪に賤のふせやも埋れてけふりはかりそしるしなりける
○　坂上明兼
吳竹のおれふす音のなかりせは夜ふかき雪をいかてしらまし
○　大納言經信
朝戸明てみるそさひしき片岡のならのかれはに降るしら雪
○
霜かれのまかきのうちに雪ふれは菊より後の花も有けり　藤原資隆
○山家待春心をよみける　源頼家朝臣
山さとに朝けの煙たな引を春にさき立霞と思はむ
○東しのうらにさける梅をよめる　天台座主明快
やま里のかきねの梅は咲にけりかはかりこそは春もにほはめ
○　藤原顯方
鶯の鳴ぬはかりそ梅花にほひは春にかはらさりけり
○新院人々に百首歌めしけるに　藤原實清朝臣
暮て行としのすかたはみえれとも身につもりてそ顯れにける
○歳暮のこゝろをよめる　前律師俊宗
一とせはかなき夢の心ちして暮ぬるけふそおとろかれぬる
○　さかみ
あはれにも暮行としの日數かなかへらんとはよのまと思へは

續詞花和歌集卷第七賀

○一條院御時冬の賀茂祭に藏人にて舞人して侍
けるを返立に入道攝政おまへにさふらはせ給
て祝歌つかふまつれとせめおほせられけれは
申ける　源兼隆
よひのまに君をしいのりをきつれはまた夜深くも思ほゆる哉
○前二條關白字治入道前太政大臣(教通)の八十
賀し侍けるとき杖の歌とてよませ侍けるによ
める　藤原經衡
やちよまて契れる杖は百年にちかつく君か齡とそおもふ
○貞元(圓融)元年初て齋宮侍從のくりやにおは
しますに庚申夜人々まいりてあそひし歌よみ
けるに　源順
神代より色もかはらぬたけかはのよゝをは君にかそへ渡らん
○津の國わたりなると路にあからさまに侍ける
こころ故一品宮よりおほひかひめしたりけるを
そのわたりのはわろかりけれは遠き所へたつ
ねにやれりけるほとひさしくありてたてまつ
るとて　兵衛

君か代のなか井の浦によるかひはひろふ程さへ久しかりけり
○知足院入道前太政大臣(忠實)わらはに侍りけ
る時つくりたるとりたてまつるとてかきつけ
たりける　康資王母
身につもるとしに万代とりそへてけふわか君にたてまつる哉
○いはひのうたとてよみ侍ける　太政大臣
君か世は天のかこ山てらす日のてらむ限りは盡しとそ思
○後一條院(六十八)御いかのひよみ侍ける
入道前太政大臣(道長)
如何にいかゝかそへやるへき八千歳の餘り久き君か御代をは
○大貳國章かこむまさて侍けるいかの日つかは
しけるわりこの歌繪にかき侍ける　清原元輔
住のえに濱の眞砂のこけふりていはほとならん程をこそ思へ
○小野宮右大臣うちつゝき子うませて侍けるに
年毎に祈りしくれはおもなれて珍らしけなき千世とこそ思へ
○人のこうませて侍ける七夜によめる
千とせをは松とかめとにまかせつゝ八百萬世はいはて思はむ
○女御御許にはしめて人々に歌よませ侍けるに
藤花久匂といふをよめる　大江維光
咲初る若むらさきの藤のはな匂ひは千代の春もかはらし
○新院御時藤爲松花といふをかうへのをのこと
もによませ給けるに　大納言公通
松か枝にかゝれる藤か君か代は千世へて咲ける花かとそみる
○大炊御門内裏のかたはらなる家にわたりては
しめて歌よみけるに鶴遐年をちきるこゝろを
よみ侍ける　大炊御門右大臣
千とせともかきらぬ鶴の聲すなり雲ゐの近き宿のしるしに
○みのゝかみにて神拜しけるにいつぬきかはを
み侍て　藤原基真朝臣
鶴の住いつぬきかはをきてみれは千年をふへき流れ也けり
○題しらす　權僧正永縁
松の上に住あしたつは君か代の千世をかさぬるしるし成けり
○東三條院四十御賀の御屏風に人の家に雪ふる
ところに　源道濟
松のうへに降しら雪のかつ消て千世はかくれぬ物にそ有ける
○周防守にてくに侍ける時岩におひたる松を
いはこめにとりて人のもてきたりけるに
清原元輔
萬代に千年をそへてみつるかないはほなからにひける小松に
○人の家にうへける松のにはかにかれけるをほ
かひて人とゝ歌よみけるに
とはりや緑の松のかれぬるも君によはひをゆつりてしかは
○題しらす　源道濟
千年ふる常磐の松もあまたゝひ君か御代にはおひかはりなん
○長保(一條)五年五月入道前太政大臣家歌合に
池邊松をよめる　藤原長能
君か代のちとせの松のふかみとりさはかぬ水に影そみえける
○　源兼澄
すみわたる水の色たに有物を松さへちよをそふる宿哉
○京極前太政大臣家歌合に　藤原顯綱朝臣
君か代は長井の濱のさゝれ石のいはほの山となりのほるまて
○泉石歴幾年といふをを　前太宰大貳實政

さゝれ石も苔むすはかり成にけり幾千世すめる泉なるらん　清原元輔
○人の裳き侍ける所にて
玉もよるいはほの程に成にけりなからの浦の濱の眞砂は
○中納言家成すみよしにまうてゝ人に歌よませけるに　家明卿
君かため千世のためしにさせとてや波もおるらん住吉の松
○二條のおほき大后宮にて月照松と云とを　源忠季
はかへせぬ松のこまよりもる月は君かちとせの風にそ有ける
○賀陽院のきたのつほに秋の花ともうへられたりけるにこそはなたれける松むしのなくをおかしとて歌よめとおとゝの中侍けれは　肥後
千々の秋にあふへき宿の花園をすみかにしたる松虫のこゑ
○新院御時法金剛院に御幸ありて歌よませ給けるに菊契千秋といふことをよみ侍ける　花園左大臣
八重きくの匂ふにしるし君か代は千年の秋をかさぬへしとは
○阿波國司彼國の墨銘に山下松秋と云銘をつくり初ける日よめる　良遲法師
君か代にたてしそむれは山下の松は煙はいつかたゆへき
○一院大嘗會御屏風にかゝみ山のもとに月見たる人ある所に　藤原永範朝臣
くもりなき鏡の山の月をみてあきらけきよを空にしる哉
○今上大嘗會歌ちさかのゝ浦をよめる　前參議俊憲
君か世の數にはたらし限なきちさかのうらの眞砂なりとも
○上東門院入道前太政大臣の六十賀せさせ給ける時院にたてまつり給ける　入道前太政大臣
かそへしる君なかりせはおく山の谷の松とや年をつまゝし

續詞花和歌集卷第八 神祇

御祓するかもの河なみ立かへりはやくみしせに袖はぬれきや
○上西門院かものいつきと聞えけるかはらせ給てからさきにはらへし給ける御とものまいれりけるに女房のもとへつかはしける　八條入道太政大臣
昨日まてみたらし川にせしみそきしかのうら涙立そかはれる
○祭のつかひに侍ける時神たちにて齋院の女房につかはしける　藤原實方朝臣
千早振いつきの宮のたひれにはあふひそ草のまくら成ける
○題しらす　源頼實
けふみれは掛て歸らぬ人そなきあふひや神のしるしなるらん
○夏神樂をよめる　多忠節
ゆふしては波にまかひぬ川社さかきそ神のしるし成ける
○堀河院御時百首歌たてまつりけるに　河内
榊とる庭火の前にふる雪をおもしろしとや神もみるらん
○神樂の心を　藤原政時
朝倉のこえこそ空に聞になれあまの岩戸も今や明らむ
○おもふを侍ける比かもにまうてゝよみ侍ける　大納言道綱母
ゆふ襷むすほゝれつゝ歎くことたえなは神のとくと思はむ
○かたをかのやしろにかきつけたりける歌　よみ人不知
かたをかと人はいへとも我はだゝ高き山ともたのまるゝかな
○たゝすのやしろのはしらに女のてにてかきつけたりける歌　千早振神に任せてこゝろみむたれもなき名はおふやおひすや
○後三條院すみよしにみゆき給て人々歌たてまつりける　治部卿伊房
古もけふのみゆきのためとてやあまくたりけむ住吉の神
○中納言家成すみよしに詣て人々歌よみける　參議隆季
神代よりつもりの浦にみゆきしてへにけむ年の限まられす
○すみよしをはなれてとしへて奉幣使にてくたれりけるにむかしすみける家のあれたるを見てよみ侍ける　津守有基
住よしと思ひし宿はあれにけり神のまろしをまつとせしまに
○一條院の一品宮(大教)天王寺にまうて給けるに御とものの人々すみよしにまいりて歌よみけるに　藤原道經
すみよしの濱松かえに風ふけは涙のまらゆふかけぬまそなき
○新院人々に百首歌めしけるに　藤原顯廣朝臣
いくかへり涙のまらゆふかけつらん神さひにけり住吉のまつ
○廣田社にて社頭紅葉をよみける　源忠季
神のますもりの下てる紅葉ゝの色もてはやすあけの玉かき
○白川院熊野へまうてさせ給ける御とものに侍りてしほやの明神のおまへにて人〳〵うたよみけるによみ侍ける　德大寺左大臣
立のほる鹽やの煙うら風になひくを神の心ともかな
○　後三條内大臣
おもふとくみてかなふる神なれは鹽やに跡をたるゝ成けり
○かし井の宮の杉をよみ侍ける　讀人不知
千はやふるかしぬの宮のあや杉は神のみそきに立る成けり
○題しらす　大僧正覺忠
光をはやはらけなからいかなれはあらふる神と跡をたるらん
○　惠慶法師
たきせとは思はさらなむわたつみの波の心は神もしるらん
○待賢門院后宮と申ける時女房のきぬのうせたりけるをあるつほねなる女房あやしきさまにいはれけるきたのゝ宮にこもり侍ける御前のはしらにかきつけらる
思ひいつやなき名をたつはうかりきとあら人かみも有し昔を
此のゝち程なくあらはれにけりとなん申
○やまとのかたよりくまのへまうてけるにかすかへまいるへきよしの夢をみたりけれとのちにまいらむと思ひてすきにけるに還向ほその

わたりにてあやしのけす女にかすかのつかせ
給ておほせられける
人しれす今や〳〵とちはやふる神さふるまて君をこそまて
御返しに申ける　堀河
三笠山さしもあらしと思ひしを天くたりぬるけふこそはしれ

續詞花和歌集卷第九哀傷

○後一條院御時中宮うせさせ給にける後おまへの花のちるを見てよみ侍ける　左大辨經賴
花よりも昔の人そこひらるゝいつれの春もあはしと思へは
○ぬしなき家のさくらをみて　藤原範永朝臣
うへをきし人のかたみとみぬたにも宿の櫻はたれかおしまぬ
○題しらす　道命法師
思ひきやよはばかなしと云なから君かかたみに花をみむとは
○二條院かくれさせ給ひて又のとし彼院のはなをみてよめる　源道濟
櫻花みるにもかなし中〳〵にことしの春はさかすそあらまし
○前坊かくれさせ給ひて御はてすきて人〳〵行わかれけるあしたひたちの乳母もとにつかはしける　前大僧正行尊
思ひきや春のみや人なのみして花よりさきに散んものとは
○かへし　常陸乳母
花よりもちり〳〵になる身をしらて千年の春とたのみける哉
○やよひのころほひ人におくれてなけきける人にやりける　成尋法師

つくるとも久もやけなんすか原やむねのいたまのあはぬ限は
○ある人この歌は一條院御時内裏のやけたりけるをつくられけるあひた御殿のうら板にむしのくへりける北野の御歌となん申

花櫻また盛にて散にけむなけきのもとを思ひこそやれ
○服に侍ける時かすみによせてむかしを思心をよみ侍ける　賀茂成助
朝な〳〵野への霞をなかめつゝけふりになりし人をこそ思へ
○おほいまうち君かくれ侍りて又のとし鶯のなくをきゝてよみ侍ける　花園左大臣北方
こその春鳴つくしつと思ひしによを鶯のねこそかはられ
○子におくれて侍けるひかへる鷹をきゝてよみ侍ける　大夫典侍
古郷へ鷹そ行なるかなしきは又もかへらぬわかれ成けり
○おさなきこのうせにけるかうへをきたりける　賀陽院木綿四手
さうけをみ侍て
あやめ草たれしのへとかうへをきて蓬のもとの露と消けむ
○故一品宮かくれさせたまひての比五月五日人のもとへつかはしける　兵衛
けふくれとあやめもしらぬ袂かな昔を戀るねのみかゝりて
○みな月の比ほひ東山に人の四十九日のわさしける所にまかれりけるにほとゝきすのいたく鳴けれは　平實重

かなしさのはてと聞てや郭公かきりのこゑを爰にしも鳴
○近衛院のみわさのよ藏人にて侍りしとをおもひてまいりておかみたてまつりてかへるとてものにかきてみさゝきのかたはらにたてける　承香殿女御
思ひきや虫のねしけき淺茅生に君をみすてゝかへるへしとは
○小野宮太きおほいまうち君みまかりて後がの家にて人々歌よみけるに　清原元輔
君なくてゆく〳〵しける庭草に鳴むしよりも我そかなしき
○郁芳門院かくれさせ給て次年藤原知信かもとより秋はつきぬとおもひしに今しも虫のねにそなかるゝなと申て侍けるかへしに　康資王母
むしのねはこの秋しもそ鳴まさる別のとをくなる心ちして
○赤染むすめにをくれて侍けるのちあきのころ彼家にまかれりけるになき人のすみけるかたのせむさい色〳〵にさけりけるを見ていひいれ侍ける　藤原義忠朝臣
うへをきし人は露よりあたなれと花そむかしの秋にかはらぬ
○近衛院かくれさせ給にけるころうへさせ給たりける菊を見て　大僧正覺忠
齡をは君にゆつらてさら菊のひとりをくれて露けかるらん
○一條院をいはかけにおさめたてまつりて侍けるを物へまかりけるにかしこをすくとてみさゝきにまいりておかみたてまつりけるにかなしき心しけれはかへりて人にいひつかはしける　式部大輔資業

いはかけの露をけふりにまかへつゝその夕暮の心地せしかな
○一條院うせさせ給へりける比月をみてよみ侍ける　承香殿女御
大かたにさやけからぬか月かけは涙くもらぬ人にとはゝや
○源爲善朝臣身まかりにける又の年月を見て　能因法師
命あれはとしの秋も月はみつわかれし人にあふよなきかな
○あひくしたりける女なくなれりけるとき月をみてよみ侍ける　藤原有信朝臣
もろともに有明の月をみし物をいかなるやみに君まとふらん
○子にをくれてなけき侍りける比こゝぬの庄といふ所ふりくたものたてまつりけるこにあをきかへてのはをしたりけるをみて　よみ人しらす
色かへてときはなからに有物はこゝぬのもりのなけき成けり
○この思ひに侍ける人のもとへとふらひにつかはすとて　仁和寺一宮母
人ふれぬこゝぬのもりの夕露にぬるらん袖を思ひこそやれ
○修理のかみ忠能身まかりてのち秋のゆふへ思ひいつるとや侍けむよみ侍りける　藤原長成朝臣母
いにしへをこふる涙もひまそなき露をきそふる秋の夕暮
○播磨守顯保朝臣身まかりにける時かの朝臣のすみける女のもとにつかはされける　新院御歌
聞にたに露ところせき古郷の淺茅かうへを思ひこそやれ
○めにをくれて侍けるころ　祝部成仲
秋風のみにしむはかり悲しきは妻なきとこのね覺成けり

○待賢門院かくれさせ給て五十日はて〻も女房
たちはゆきちらてはへるにやはたの行幸とき
こゆる日雪のふれるにとき〳〵まいる人もみ
えさりけれは三條の内の大いまうち君の別當
といひけるとき院の大盤所よりとてこの家に
さしをかせ侍ける　　堀川
誰もみなけふのみゆきにさそはれて消にし跡をとふ人そなき
○齊信卿のわさのよ〻みける　　高階經章朝臣
ふるしらぬ世に有人のはてみれはた〻ひと〻きの煙なりけり
○人をとかくしけるを見て　　僧都懐壽
はかなさを哀とそみる大空のけふりとなるも人のうへかは
○道信朝臣身まかりにける葬送りのあしたに　　藤原頼孝
思ひわひきのふの空を眺むれはそれよとみゆる雲たにもなし
○なき人のわさしける導師にて諷誦文よみける
に歌の侍けれは高座よりおるとていひける　　慶範法師
うちならす鐘の音にや長きよも明ぬなりとは思ひしるらん
○村上のみかとかくれ給にける御忌のほとにれ　　齋宮女御
いならぬを侍りてよみ侍ける
をくれてもこえける物をしての山さき立とをなに恨みけむ
○子にをくれてよみ侍ける　　高丘頼言
人のうへとき〻こし物をしての山わかこの道に迷ひぬる哉
○子なくなりて侍ける比おなし思ひ成ける人に　　橘則光朝臣
つかはしける
かたらはやこのよの夢のはかなさを君はかりこそ思ひ合せめ

○おやにおくれて侍をとはさりける人の又おや
なくなりにけれはいひつかはしける　　權僧正永縁
我身にてならはさりせは歎くらん人の思ひをいかてしらまし
○母の思ひにてよめる　　顯昭法師
たらちねやとまりて我を惜まゝしかはるにかはる命なりせは
○待賢門院かくれさせ給て四十九日のみわさは
て〻まいりこもれる人々まかてあへりけるに　　新院御歌
兵衛におほせをありける
限りありて人はかた〳〵別るとも涙をたにもとゝめましかは
○返し　　兵衛
ちり〳〵に別るゝけふの悲しさに泪しもこそとまらさりけれ
○子なくなりて侍けるに元輔かとふらへりける　　源順
かへりをに
朽はてゝなきこのもとは君かとふものはみるもまつそ戀しき
○身まかりにける女のせうそこもの侍りける　　大納言公通
をみてよめる
かきつめしものはのみそ水莖の流れてとまるかたみ成ける
○やむをなき人にゆめはかりにていといたうし
のひけれは又みあはて過ける程に此人身まか
りにけれは　　源重之
思ひいてのかなしき物は人しれぬ心のうちのわかれなりけり
○もの申けるをんな身まかりて三七日許になり　　大藏卿匡房
けるにかの家につかはしける
かはるらん月日もしらす歎くまにあはれはつかに過にける哉
○かたらひけるわらはおもはすにてうとく成に

けるなくなり侍にけるを人のもとよりとふら
へりけれは　　靜嚴法師
かなしさを是よりけにや思はましかれてならはぬ別れ成せは
○能因身まかりにけるに女のもとへいひつかは
しける　　藤原兼房朝臣
ありし世は暫もみてはなかりしを哀とはかりいひてやみぬる
○ふくに侍けるときあるよ人のきたれりけるか
すみそめのけさをわすれてとりにつかはした
りけれはやるとて　　天台座主勝範
墨染の色はいつれもかはらぬをぬれぬや君か衣なるらん
○後三條院かくれさせ給へりけるころよみ侍け
る　　藤原顯綱朝臣
かはくよもなき墨染の袂かなくちなは何をかたみにもせむ
○美福門院の御ふくにて侍けるを宣旨にて程な
くぬき侍とてよめる　　大納言雅通
心さしふかくそめてしふち衣きつるひかすのあさくも有かな
○をむなのふくにてよみ侍ける　　民部卿長家
きしよりもぬくそかなしき君か爲そめし衣の色と思へは
○下萬にこゑられてこもれりける比又あひくせ
る女身まかりにけるをやむをなき所よりとは
せ給へりける御かへりことに申侍ける　　右兵衛督公行
押なへて常なきよとはしりながら浮身のとかになしそ果つる
○をんなにをくれて侍る比肥後かとひて侍ける
に　　藤原基俊
思ひやれむなしき床を打はらひ昔を忍ふ袖の雫を

○あひ志れりけるおとこの身まかりにけるを
かにおもふらんなと人のとひ侍けれは　　中宮内侍
めのまへにかはるはうきに慰めつさらぬ別そかなしかりける
○はりまのかみに侍ける時歪櫨頭兼任をくに〻
と〻めをけりけるくたるたひにはいつしかい
てきけるを身まかりにける後まかりくたりて
よめる　　藤原兼房朝臣
いつしかと思ひ貌なるけしきにてまつこし人のみえぬたひ哉
○土御門前齋院かくれ給てほとへてかの院にま
いりて侍けるに堀河院前齋院あひつきてすみ
給けれはなにともかはらぬさまには侍れとむ
かしおもひいてられ侍けれは女房のもとへい
ひつかはしける　　中院入道右大臣
ありすかはおなし流と思へとも昔のかけのみえはこそあらめ
○はゝのはかにまかりてそとはにかきつけ〻る　　新院上野
果なくてやみにし跡の片身にも是をそ〻とはみるへかりける
○贈皇后宮かくれ給にけるあとに御もの〻くと
もとりおさめけるにつれにつかはせ給ける硯
のはこにかみにかきてをかせ給へりける歌
胸にみつ思ひをたにもはれすして煙とならむもそ悲き
○日ころなやみけるをんなにはかにたえいり
しにけれは父母願をたて〻わかいのちにめし
かへよと泰山府君に申けるほとにいきいて〻
このむすめのよみける

しての山こゆへきかたもおもほえす親に先たつ道をしられは

○大貳高遠身まかりにける跡に子息の夢に蛇道になんおちたるとてよみけるうた

おく山の行衛もしらぬ谷底に哀いく世をすきんとすらん

○木幡僧正靜圓身まかりて後上東門院の御夢にかの人の歌とてあまた侍ける中に

あたにして消ぬる身とや思ふらん蓮の上の露そわかみは

續詞花和歌集卷第十釋教

○人々行願寺にて勸學會をこなひて序品の入於深山といふ文をよみけるに　藤原仲實朝臣

鳥の音もきこえぬ山に來れともまとの道は猶遠き哉

○未嘗睡眠のこゝろをよめる　源季廣

昔しよりまとろむともなき物をいかて浮世を夢とみるらん

○譬喩品　權僧正永緣

心をはみつの車にかけしかとひとつぞのりのためしには引

○藥草喩品終歸於空といふ心を　仁照法師

草もかれ木も朽はて〜空しきはもとのふるれにかへる成けり

○弟子品　近衛院御歌

年ふれとかけてそしらぬ衣手に逢はかりなきたまもたりとは

○提婆品　僧都覺雅

千年まて結ひし水も夢はかり我身のためと思ひやはせし

○寂然法師

なにとなく涙の玉やこほれけむ峯のこのみをひろふ秋に

○あるをんな物いふおとこの身まかりにけるをわつちひける比とはさりしをくやしくおもひてれたりけるゆめにかのおとこのよみける

思ひ出てのちに哀といふよりも限のおりそとはゝとはまし

○藤原定通身まかりてのちとしへて人の夢に月あかきよ殿上になん侍とてよみける

古郷をわかれし秋をかそふれはやとせになりぬ有明の月

○壽量品　朝日尼

あかなくに雲かくれぬとみし月の鷲の嶺には澄ぬよそなき

○勸發品　覺然法師

ふそにては匂ひにあかぬ花なれは散このもとを尋てそくる

○懺法をこなひけるついてに人々思惟此經といふをよみけるに　藤原家經朝臣

思ひ出て心のやみしはれぬれは雲かくれにし月もみえけり

○左京のかみ顯輔和歌曼陀羅といふものかきて供養しける目法華經の歌人々によませけるに

無量壽經をよめる

さま〜になる〜法の水なれとその水上はひとつなりけり

○普賢經の我心自空罪福無主といふ事をよめる　寂然法師

かつまたの池の心はむなしくて氷も水も名のみ成けり

○心經のこゝろをよめる　大宮小侍從

色にのみそめし心のくやしきをむなしと〜ける法そうれしき

○寶篋印陀羅尼經を供養して極樂へまいるへき

心を人〳〵よみけるに　よみ人不知

けふひらく寶のはこのをしてこそ西へ行へきしるし成けれ

○維摩經に此身如水泡といふとを　前大納言公任

爰にきえかしこに結ふ水の泡のうき世にめくる程そはかなき

○この身いなつまのもし

稻妻の照す程にはいつるいきのいるを待まも變ちさりけり

○此身如夢　赤染衞門

夢や夢うつゝや夢とわかぬかないつれの世にかさめむとす覽

○淨名居士　新院御歌

くみてとふ人なかりせはいかにして山井の水の空をしらまし

○櫻炭經のこゝろを　如覺法師

たのむより月のれすみのさはくまに草葉にゝる露の命を

○極化鹿苑　新院御歌

耳近く鹿のそのにてとく法にかつ〳〵かりのよをはいてにき

○先昭(照歟)高山

朝日さすみれのつゝきはめくめ共また霜ふかし谷のかけ草

○法身如來のこゝろを　花山院御歌

思へともたとひはかりはなき物を我さとりてやしらはしる覽

○題しらす　山口重如女

極樂の蓮の花のうへにこそ露の我みはをかまほしけれ

○人のもとにて佛供養しけるあいた雨のもりて袂にかゝりけれは禮盤よりおるとてよみ侍ける　瞻西上人

古を尋てもきく今もみるもろやはのりのかたき成けり

○天王寺の龜井を御覽して　上東門院

濁りなき龜ゐの水を結ひあけて心のちりをすゝきつる哉

○天王寺にまうて〜舍利おかみたてまつるとてよみける　瞻西上人

薪つき煙もすみてさりにけるこれやのこりとみるそ悲しき

○かまくらの涅槃會にまいりて讀る　成尋法師

かなしさとたき〜つきけむその人そ昔に今もかはらさりける

○瞻西上人釋迦講をこなひけるに人々さゝけ物に歌をそへてをくりけるにひとへをやるとて　神祇伯顯仲

夏衣のりのためにとぬきつれは今日はすゝしき身とそ成ぬる

○雪中古寺といふをよめる　覺延法師

雪ふれはちかひたのもし初せ山かれたる木にも花咲にけり

○智緣聖人はゝきの大山に參りけるいてなむとしけるあか月の夢にみゑけるうた

山ふかく年ふる我もある物をいつちか月の出て行らむ

○肥後涅槃經よみける比夢に十餘歲はかりなりけるわらはのかみにかきてとらせける　肥後

春風に池の氷もとけにけり花吹ちらす春のよの空

○夢のうちに返しける

谷河のなかれし清くすみぬれは隈なく月の影もうかひぬ

○まつしき女のきよ水にとし比まいりける御前になく〜ふせりけるゆめに御帳のうちより

ちいさきそうのいてゝよみかけゝる

梅の木のかれたる枝に鳥のゐて花さけ〳〵となくそわりなき

○中比ある僧の夢にいときよけなる僧三人いきあはれなり(一人僧)ひはくれかたになりぬれと(又一人僧)西へゆくへき人のなきかな

○女のもとにつかはしける　藤原惟成
うらわかみ荻のまたはにをく露をさもほのめかす風のなき哉
○題しらす　隆惠法師
まらせはやしけき人めを忍ふ草下葉に結ふ露はかりたに
○内裏百首歌に忍ふる戀をよみ侍りける　源通能朝臣
いさゝらはほのめかしてむと計りも心にのみそいひ合せつる
○題しらす　三宮
いかにせむ心を人にそめなから色に出しさまのふ比かな　賢知法師
伊つしかと色にいてしと思へともみゆらん物を絶ぬけしきは
○物申ける女のはらからなりける人につかはし　能因法師
げる
色にこそいつとなけれと紫の一もとゆへにおもひそめてき
○人まれす心さし侍りなからえしもいひいてゝ　藤原伊行
すきける女のまきものをかゝせ侍りけるおく
にかきつけ侍ける
あちきなしさてしもやまし思ふをいひ出てそ身をも恨みめ
○内裏百首歌に忍戀をよめる　藤原重家朝臣
つらからむ時こそあらめあちきなくいはて心を碎くへしやは
○女の許に初て遣しける　加茂成助
思ふをいひたにいてゝ戀しなは誰ゆへとかは君かきかまし
○題しらす　源明賢朝臣
歎くあまりしらせそめつる言のはも思ふ計りはいはれさり鳧
○　藤原季經朝臣
思ひあまり色に出ぬるを葉のはちるとも何かくるしかるへき
○　堀川
おもふともいはゝなへてに成ぬへし心のうちを人にみせはや　藤原頼保
○
しるらめや今こそ人を水の面に物思ふ橋をわたしそめつる
○内裏百首歌にはしめの戀のこゝろをよめる　源雅重朝臣
我戀は岩まをくゝる山水のもらすにつけて袖そぬれける
○獨ぬたるをみてこふといふををよませ給ける　御製
人はみなさよ更ぬとて入にしを曉までに月みしやたれ
○女のかみをうちやりてねたるを見つるにやら　藤原經衡
んとて人のこひけれは
いとゝしくみたれて物を思かなねくたれ髪をみつるけさより
○一院山にのほらせおはしましたりける御とも
にはへりけるにそうとものくしてもの誦せさ
せけるわらはの心にかゝりておほえけれは房　參議隆季
を尋ていひつかはしける
君ゆへに思ひ入ぬるみ山へのたにの心はふかきをしれ
○殊外に思へりける女に　平兼盛
谷ふかみ燒炭かまの煙たに峯の雲とはならぬものかは
○戀の心を雲に寄てよみ侍ける　德大寺左大臣
一めみし人は誰ともしら雲のうはの空なる戀もする哉
○女の琴ひきけるをきゝてよませ給ける　御製

琴のねにかよひそめにし心かな松ふく風にあらぬ身なれと
○人の女の幼きを語ふにまた手も書す迚返りを　藤原重家朝臣
もせさりけれは舉周朝臣に代りて　赤染衛門
和歌の浦の鹽まにあそふ濱千鳥ふみすさふらん跡なおしみそ
○女のもとに遣せる文を返したりけれは　皇嘉門院近江
よみ人しらす
とゝろきの橋も渡りてこゝろみきまに踏かへす人はなかりき
○題しらす　藤原雅親
よとゝもにむすほゝれゝる我戀や野中にたてる岩代の松　源親房
○
物をこそ忍へはいはれ岩代のもりにのみもる我なみた哉
○雨ふる日しのひたる人のもとに　堀河右大臣
人しれす物思ふ比の袖みれは雨ともしらすなみたともなし
○堀川中宮の内侍に物いふほとあめのふりかゝ　少將藤原義孝
りけれは
わひぬれはつれなしかほはつくれ共袂にかゝる雨のわひしさ
○題しらす　大納言雅通
よとゝもに人めをつゝむ身なれともおちゝる物は涙なりけり　馬内侍
○
人とはゝいかゝこたへむ泪たに心してやは袖をぬらさぬ　前治部卿雅兼
○
かゝりける涙と人もしるはかりしほらし袖よくちはてれたゝ　隆緣法師
○
日數へはいかにせよとて我戀の昨日にけふはまさるなるらん　神祇伯顯仲
○
物おもふといはぬはかりは忍ふともいかゝはすへき袖の雫を
○内裏百首歌に忍戀のこゝろを讀る　藤原重家朝臣
玉藻刈いせをの蜑の袖ならはぬるとも人はとかめさらまし
○新院人々に百首うためしけるに　堀川
荒磯の岩に碎る涙なれや難面人にかくるこゝろは
○たはといふ人にものいふときくおとこの又ふ　皇嘉門院近江
みをゝこせけれは
いかなれは大えの山をこえなからしかの浦なみ思ひかくらむ
○人に物かたりしてあかしたるあしたによるの　野
名殘のなみたになといへりけれは　下
何ゆへに夜の泪とかけつらん我ぬれきぬになりもこそすれ
○堀河院御時艷書歌殿上人々にめしてうたよむ　民部卿忠教
女房ともものもとへつかはしけるに
つちさには思ひたえなんと思へともかなはぬ物は泪なりけり　肥後
○返し
うけひかぬあまのを舟のつなて繩たゆとて何か苦しかるへき　堀川
○新院人々に百首歌めしけるに
逢事のなけきの積るくるしさをおへかし人のこりはつるまて
○せうそこつかはしける女を人にときゝてふつ　源雅光
きの七日つかはしける
よとゝもに戀わたれとも天川あふせは雲のよそにこそきけ　藤原顯方
○戀のこゝろをよめる
わか戀は年ふるかひもなかりけりうらやましきは宇治の橋守　藤原爲具
○
そかなしや思へはかりの世中に戀をのみしてあかしくらすよ　加賀左衛門
○
筑波山なとつくゝと我身しも戀するものふもとなりけむ

○朝光大將の五節所にてみ侍りける人につかはしける　前大納言公任

天津空豐のあかりにみし人のなを佛のしぬて戀しき

○入道一品宮なる女の五節のわらはにて侍ける　平經章朝臣

を見て後につかはしける

雲の上にひかけかさしゝかひもなく山井の氷とけてやみにし

○返し　女

ゆきすりに山ゐの氷とけたらはかはす日影もまはゆからまし

○ある所にあはちといひける女のせうこそすれ　左京大夫顯輔

とかへりとをいはさりけれは

いかにせむとふひも今はたてわひぬ聲もかよはぬ淡ちしま山

○題しらす　藤原季通朝臣

歎きあまるうき身そ今はなつかしき君ゆへ物を思ふと思へは

○百首御歌中に　新院

戀しなは鳥とも成て君かすむ宿の梢にねくらさためん

○題しらす　左京大夫顯輔

いはれ共したはいとなし鶯とりのうきたる戀と思はさらなむ

○　大納言公實

鳴海潟しほちにあそふかも鳥のうきねは我もおとりやはする

○　大宰帥俊忠

我戀は海士のかるもにみたれつゝかはく時なき涙のした草

○　花園左大臣

便あらは蜑の釣舟をつてむ人をみるめにもとめわひぬと

○　源頼政

せきかぬる涙の川の早きせは逢よりほかのまからみそなき

○　よみ人不知

瀧津をは音にそたゝし戀すれは枕におつる涙なりけり

よな〳〵の枕の下にたつ波はとこの浦よりよする成へし

○　藤原惟規

たのめとや否とやいかにいな舟のまはしと待し程はへにけり

○　藤原頼保

いかならむとの葉にかは靡へき戀しといふはかひなかりけり

○　平兼盛

ことのはゝ色やはみゆるこ紫深きこゝろはれそめてそしる

○　藤原行宗

今見てむかくいひ〳〵て戀しなは身にかふはかり思ひ鬼とは

○　藤原長方

戀しなむ同し浮名をいかにしてあふにかへつと人にいはれん

○十月はかり人にかはりて女のもとへつかはしける

霜かれの野へにあさ吹風の音の身にしむはかり物をこそ思へ

○こゝろかけたりけるわらはのふみをかりて侍ける　天台座主忠尋

つかはすとて

ふみわけてかゝるはかりに成にけり物思ふ人の宿のにはくさ

○寄草花戀のこゝろを　藤原爲眞

あたなりといはれのゝへの女郎花なと我にしも靡かさるらん

○法性寺入道前太政大臣戀の心をはなによせて　源雅光

人〳〵によませ侍りけるに

吹かせにたえぬ梢の花よりもとゝめかたきは涙なりけり

○題しらす　華山院御歌

夜もすから消かへりつる我身かな涙の露にむすほゝれつゝ

○　信宗法師

つれなさを思ひしらすはなけれとも我とはいかゝ人を忘れむ

○題しらす　源實基朝臣

思はむと頼めなからに難面きはつらきにまさる物にそ有ける

○　藤原親佐

たのめすは今は命も絶なましいけるや人のなさけ成らん

○　小辨

なをさりの空たのめたにせさりせは中〳〵今は戀もしなまし

○ふみをかくす戀のこゝろをよめる　藤原爲眞

こひしれとかきてもあらん玉章を人めにつゝむ程そわりなき

○戀をふちのはなによせてよみけるに　祝部成仲

藤涙のふるとたのめしをのはを松にかゝりてひを暮すかな

○新院人々に百首歌めしけるに　大炊御門右大臣

さよ衣露のへたてはなけれとも身を分てこそいらまほしけれ

○題しらす　讃岐

明ぬれとまたきぬ〳〵になりやらて人の袖さへぬらしつる哉

○　藤原長能

わかくさのいもかきなれの夏ころもかさねもあへす明る東雲

○人のいてにける跡をなかめて　さかみ

人もゆき月も入ぬる明ほのゝ名殘の空になかめられける

○後の朝の戀のこゝろをよめる　高松院衛門佐

戀しさは逢につけてそまさりける昨日はけさの心ちやはせし

○仁和寺宮にて人々後朝戀心をよみけるにわら　宮

はにかはりてよませ給ける

かへりつるその曉に又れして夢にこうみれあかぬ名殘を

○新院人々に百首歌めしけるに　堀河

なかゝらむ心もしらす黑髪の亂てけさは物をこそおもへ

○心ならす人にしたしくなりて　和泉式部

これも又さぞな昔の契りそと思ふ物からあさましきかな

○題しらす　法性寺入道前太政大臣

朝れかみわかつけそむる手枕のたはれ人にかたりきかせそ

○たひなるところにて物いへりける女のもとへ　大藏卿匡房

あさかほにつけてつかはしける

草枕れくたれかみをかきつけしそのあさかほの忘られぬ哉

○三條式部卿宮のものゝたうひける女を忍ひて

あひしれりけるきこえなはひむなかるへしと

てあひかたく侍けれは　藤原正家朝臣

宮城のゝもとあらの萩の盛にはひとりのみやは行てみるらん

○ひろなりともたちなからなと申ける女をよる　津守國基

をまてといひける女に

逢とをひろはなきさにあさりかれあまの釣舟よるをこそまて

○侍りける人々のこひの歌よみけるに人にかはり給て　仁和寺宮

逢みても思ふはかりはいはれぬに色に出ぬる袖そうれしき

○題しらす　新少將

こりすまに幾度とこを拂ふらんたのめてこぬは今宵のみかは

○　大輔

たのめつゝまてとこすえのうす紅葉こやかれそむる初成らん

○　俊惠法師

わきもこをかた待よひの秋かせは荻の上葉をよきてふかなむ

○　大宮小侍從

待宵に更行かれのこゑきけはあかぬ分れの鳥はものかは
○　讃岐
一夜とてよかれし床のさ筵にやかてもちりの積りぬる哉
○　藤原範綱
あかすのみ夢の枕をかはすよのさむる別に〳〵る物そなき
○　僧都覺雅
夢にこそあはてもあらめから衣きなれし裏はいかゝかへさむ
○はやうみ侍りける女内わたりにありとき〳〵て　藤原惟成
五節のころつかはしける
けふかさす神のいかきのたまひかけ昔のあとを尋てそくる
○むつましくなりて又つれなかりける人をおと　讀人しらす
ろかすとて
逢みてし人ともさらに思はれは今いひそむる心ちこそすれ
○もと見たりける女に程へてわりなくしてあひてあしたにつかはしける　藤原實方朝臣
いそのかみ古きみちとは知なからまとふ計そけさは戀しき
○三百六十首歌中に　曾禰好忠
あれはありとなけしのふそにみし人を秋風吹はそれそ戀しき
○もの申ける女おやにくして遠き所へまかりけるか春に成てかへりまうてくへきいかゝおもふと申をくりて侍けるかへりをに　平經盛朝臣
思ひやれ雪のした草むすほゝれとくる春まつ程の心を
○かたの〳〵わたりにかよふ女に物申けるか常はかしこにのみ侍けるか京に上りて侍ける又くたるとて此たひは程なく歸りくへきよし申けるに遣しける　中原師尚

いさしらすかりにときけと逢事の又かた野にやならんとす覽
○かたらひける人のいつちともしらせてうせにけるほとにあからさまに人のくにへまかるとてそのしんそくなる人にもしあり所きこえはつてよとてせうそこをあつけてくたりける後たよりにつけてかの人に見せよとおほしくて　又つかはしける　顯昭法師
武藏の〳〵草のゆかりをかき分てふみをきてこし跡をたにみよ
○ふみかよはす人内わたりにもらすとき〳〵てつかはしける　大貳三位
露たにももらさしとおもふとのはを嶺の嵐にまかすへしやは　よみ人も
○題しらす
いかはかりとはぬ人めをなけかまし忍はぬ中のかゝらましか
忘るなといふにつけてそ賴まれぬさはさるとの有かと思へは
○つれにとちきれる人のさもあらさりけれは　越後
味氣なくとはぬにしもそ賴まるゝ思はぬををせぬかと思へは　僧都覺雅
○冬夜戀
唐衣きみかきまさぬ冬のよにかさぬる物はうらみ成けり
○百首御歌中に　新院
から衣かさねしよはの手枕につけくるしはをかたみとそ見る　大納言公實
○題しらす
わきもこにあはぬよさむや蓮葉のうきはかしたの鴛の獨寢　藤原惟規
思ひやれつら〳〵ひまなき裏の池につかはぬをしの夜の浮れを　源重之
○

霜の上にけさふる雪のさむけれはかされて人をつらしとそ思
○　參川内侍
おもひやれ秋のよすからね覺してなけきあかせる袖の雫を
○　齋院　帥
あた人にあひそめかはをわたらすは心つくして思ひせましや
○忍ひてあひかたらふ女のつねはこゝろさしなしとえんし侍けれは　前中宮亮季行
君にのみしたの思ひはかはしまの水の心はあさからなくに
○堀河院御時けさうふみの歌とも殿上人によませて歌よむ女房とものもとへつかはしけるを　大納言公實
大納言は康資王母の許へつかはせりけるに又周防内侍のもとへもやりけりときゝてそれみたる歌をおくれりける返事に　大納言公實
滿鹽に末葉をあらふなかれ蘆の君をそ思ふうきみしつみて
○女のもとにやれりける文をたゝにかへしたりけれは　源顯國朝臣
さはりおほみあはぬたえまの玉章を返すにしるし恨けりとは
○おとこのもとへやるふみを人にみすらんなと　女
いひて
涙河せゝの玉藻もかきつめし人のみくつに成もこそすれ
○堀河院御時百首歌たてまつりけるに　藤原仲實朝臣
ひくまの〳〵かやかしたなる思ひ草またふた心なしとしらすや
○題しらす　大納言經信母
をのつからさこそはあれと思ふまにまとに人のとはす成ぬる
○　よみ人しらす

かりそめにふしみの〳〵への草枕露か〳〵りきと人にかたるな
○　權僧正靜圓
見し程の夢ならませは中〳〵にしはしはれたる心ちしなまし
○　因幡内侍
かたるなよ夢はかりなるあふとを思ひあはする人もこそあれ
○　和泉式部
夢にたにみてあかしつる曉のこひこそ戀の限なりけれ　津守國基
○
たまさかに逢みしよはの曉のわかれかたさのまたに忘れぬ
○　藤原爲忠朝臣
よひのまにほのかに人をみか月のあかて入にし影そ戀しき
○人と物かたりして侍ける程に又ひとの來りけれはたれも〳〵かへりにけるあしたにいひつかはしける　和泉式部
半天にひとり有明の月をみて殘るくまなく身をそ知ぬる
○房よりにしにちかとなりなる人のもとに侍わらはに忍ひて物申ける比月のあかき夜いひつかはしける　律師延眞
よかれせすうら山しくそ西へ行月は人めもつゝまさりけり
○女にかはりてよめる　藤原成親
かれにけるをさゝかふしをかそふれは哀すくなきよゝの數哉
○堀河院御時百首歌たてまつりけるに　藤原基俊
吳竹のあなあさましの世中やありしやふしの限なるらん
○はゝかるをありて又もあひかたりける女のとをやますけうらにてとひけるかつゝかさり

けれはそれにむすひくしてつかはしける　藤原親重
思ひあまり山すけうらに物とへハはなれ〳〵になるそ悲しき
○いくかされといふふるとをいへる人に　和泉式部
とへと思ふ心そたへぬわする〻をかつみくまの〻浦の濱ゆふ
○題しらす　源仲綱
心さへ我にもあらす成にけりこひはすかたのかはるのみかは

續詞花和歌集卷第十三戀下

○題しらす　藤原惟成
忍ひにし心のかきりつきにしをあやしや何の物は思ふそ
○　齋院少式部
かれてより思ひしとのたかはぬは程なく人のつらき成けり
○　參議爲通
契りしも諸共にこそ契りしかわすれはともに忘れましかは
○　宰相
忘らろ〻我身のうさはわすられてわする〻人のわすられぬ哉
○　小大君
君はかく忘れ貝こそひろひけれうらなき物はわかこ〻ろかな
○　參河
人ふれす袖をそしほる數ならぬ身をしる雨の音はたてれと
○　神祇伯顯仲
中々にたのむはかりのとのはを契らさりせはうらみさらまし
○　二條大宮衛門佐
戀わたる歎きにもゆるけふりこそ身を浮雲とはては成けれ
○　慶基法師
なか〳〵につらくはさても有へきを二たひ物を思はするかな
○　よみ人不知
いかにせむ人のみるめもはつかしの森の雫にぬる〻袂を
○　右近權中將宗家
世中も浮なはさまる物なれは身をなけつともかひやなからん
○かたらふ人のひさしくをとせぬに　大貳三位
うたかひし命はかりはありなから契りしなかのたえも行哉
○題しらす　藤原實方朝臣
契こしとの違ふそたのもしきつらさもかくやかはると思へは
○　相模
春の野のき〻すなりとも我はかりかりにあやうき物は思はし
○女のつ〻むをあれはいまはえなむあふましき
といへりけれはつかはしける　藤原頼輔
あふをを今はかきりと思ふには命もともにたえぬへきかな
○もの申女のうらめしきをありけれはいまはと
はしとおもふにさすかかなしくおほえ侍れ
はつかはしける　藤原親重
たえなむと思ふ心はたれなれは人やりならす戀しからむ
○女をうらみ侍ていまはまうてこしなと申て侍
けるかなをわすれかたくおほえけれはつかは
しける　藤原家通朝臣

つらしとは思ふ物からふし柴のこはしもこりぬ心なになり
○丹後守に侍ける比物いふ女のもとに又人いく
と聞てつかはしける　藤原兼房朝臣
まもにや人のくるにはたえにけむいくの〻さとの夏ひきの糸
○新院人々に百首歌めしけるに　堀川
小かにのいかさまにかは恨むへきかき絶ぬるも人のとかくは
○帥宮おはせてのちよみ侍りける　和泉式部
れさめする身を吹とをす風の音をむかしは耳のよそに聞けん
○題しらす　從一位宗子
長きよのれ覺はいつもせしかとも又こそ袖はこほらさりしか
○　鳥子
有しおりつらさを家にならはせて俄に物をおもはする哉
○　藤原教長母(女イ)
との葉も絶果てぬれはつらかりし空たのめさへ戀しかりけり
○　越後
今はた〻人をわする〻心こそ君にならひてしらまほしけれ
○和泉式部道貞にわすられて程なく帥宮へまい
るとき〻て　赤染衛門
移はでしはしこの田の杜をみよかへりもそする葛のうら風
○かへし　和泉式部
秋風はすこく吹ともくすのはの恨かほにはみえしとそ思
○月のよ女のもとへまかれるに人のあるけしき
なりけれはかへりていひつかはしける　平忠盛朝臣
人心あさみとりなる大空に何とて月のすみ渡るらん
○備中守仲實朝臣國へくしてまかれりけるにお
もひうすくなりてつれはひとりのみ侍けるに
月のあかきよなかめあかしてあしたにつかは
しける　遊女とく
數ならぬ身にも心のありかほにひとりも月をなかめつる哉
○しなのなりける女をいひかたらへりけるおと
こ京にぬてのほりてと女をかたらひてとはす
成にけれは女のいひつかはしける
しなのなるよもさらしなと思ひしを我をは捨の山のはそうさ
○題しらす　藤原爲親
身のうさも人の苦さを思ふにもひとかたならすぬる〻袖かな
○　よみ人不知
我からとわれも我身を知なからつらきはつらき物にそ有ける
○赤染衛門わつらひけるころ人のとふらひにき
たりけるをうたかはしくや思ひけむいひ侍け
る　大江匡衡朝臣
かりにくる人にとこよをみせけれはよを秋風に思ひなる哉
○内にたてまつり給ける　齋宮女御
里わかすとひわたるめるかりかねを雲ゐに聞は我身成けり
○題しらす　藤原顯方
うきせにもうれしきせにもさきに立涙はおなし泪成けり
○　藤原基俊
涙よする磯への蘆のおれふして人のうきにはねこそなかるれ
○　皇后宮權大夫師時
さ〻涙やしかの浦なみ恨みし思ふはかひもなきさ成けり
○かきたえてをとせぬ人に　和泉式部
恨むへき心はかりは有ものをなきになしてもとはぬ君哉

○題しらす　よみ人も
うき人を恨みむともけふはかりあすを待へき我身ならねは
○　謹蓮法師
なをさりの文もかよはす成にこそかき絶ぬとは思ひしらるれ
○三條院みこの宮と申ける時久しくおほせをな
かりければ　安法々師女
よのつねの秋風ならは荻の葉にそよとはかりの音はしてまし
○あひかたらふ人のまきるゝことゝもありてな
んえまいりこぬわすれぬるとや思ふといへり
けれは　意尊法師母
忘れすといふにつけてそ中〳〵にとはぬ日數の積るとはしる
○題しらす　西院皇后宮
わすれてもあるへき物を中〳〵にとふにつらさを思ひ出つる
○たえて後こひといへるをよめる　藤原爲忠朝臣
今更にいひな出しそかつまたの池のつゝみはむかしきれにき
○久しくをとせぬおとこのもとよりことをかり
て侍けるにつかはすとて　安　藝
うき身をは何につけてか思ひ出む尋るとのなからましかは
○ことひく女にもの申わたりけるをきくと侍り
けれはとはすなりにけるに女のもとよりをを
さへやはすれぬるなといへりけれは　藤原尹明
人にまた妻なれにけることなれはうき例にはひくとしらすや
○わすれにけるおとこのおもひいてゝまうきか
よひけるか又たえにけれは　二條大宮別當
今更に何かは袖をぬらさまし野中のしみつ思ひ出すは
○たえて久しくなりにけるおとこのおもひ出て
いまはあたなるとは侍らしなと申けるに　土御門齋院中將
年經とうきみは更にかわられはつらさもおなしつらさ成らん
○かれ〳〵になりにける人のもとへむつきの比
いひつかはしける　關白家辨
忘れにし人を忘れぬ心こそかはれるとしもかはらさりけれ
○とき〳〵まうてきかよふ人のむまをうしなひ
てもしそこにまうてきてや侍と尋けれは　馬内侍
あくかれて行えもしらぬ春駒はおも影ならてみゆるよもなし
○むすめのもとにかよふおとこのかりにまかる
になんとてたちをこひにをこせたりけれはつ
かはすとて結ひつけゝる　赤染衞門
かりにそといはぬさきより賴れすたちとまるへき心ならねは
○忠盛朝臣あなかちにいはせけれは心よわく成
にける後かれ〳〵になり侍けれはいひつかは
しける　平教盛朝臣母
ならはれは人の心もつらからすくやしきにこそ袖はぬれけれ
○題しらす　權中納言實國
うきなからつらさは事の數ならす戀きにこそれはなかれけれ
○　辨乳母
戀しさはつらさにかへてやみにしを何の殘りてかくは悲しき
○　俊惠法師
思ひかれ猶こひちにそかへりぬる恨みは末もとをらさりけり
○　前律師俊宗
人心つらきも今は物なれてうらめしとたにいはれさりけり
○　左大臣家卿

身のうさを思ひもしらてありふれは難面名さへ立ぬへき哉
○かさしふたはといふさうしをともに物いひけ
るおとこのふたはにつきてかさしをはたえに
けれはかさしにかはりてみあれの日あふひに
かきてつかはしける　小大進
思ひきやふたはにかけし葵草よそのかさしにならん物とは
○女のふかき山にもいらまほしきよしいひたり
けるに　民部卿齊信
山よりもふかき所を尋れはわか心にそ人はいるへき
○おとこにわすられてなけき侍ける比霜のふれ
るあしたに人のもとへつかはしける　和泉式部
けさはしも思はむ人はとひてまし妻なきれやの上はいかにと
○かたらひけるわらはをえてしはしとはす侍け
るにかのわらはのふみをおこせて侍けるかう
す墨にかきたりけれは　僧都覺基
薄墨にかくにてしりぬ君はさはみえぬをよしと思ふ成へし
○たゝならすなれる女をわすれてを人にうつり
けるおとこのもとへかの女にかはりてつかは
しける　平實重
筑士のこのせはかりをすこせかし心のひかむかたは有とも
○さうふのれのなかきを入道前大きおほいまう
ちきみのつかはしたりけれは　高松北方
なかしともしらすやれのみなかれつゝ心のうきに生る菖蒲は
○五月五日人につかはしける　よみ人しらす
身のうきにあやめのおふる物ならはけふ計にも人はきなまし
○四條宰相をとしころいひわたりけるあるまし
きさまにのみおもへりけるこころさしにまけてし
たしくなりにけるをはたおもふ心やありけむ
をともせて四五日はかりありて五月五日なか
きれをやるとて　藤原能通朝臣
みしまえにおりたちしより菖蒲草またを澤のねをもみぬ哉
○ありしよりをもてわつらひてなむとてかへり
ともいはさりけれはゆきとふらんと思ふをお
ほやけをさしあひて二三日はかりありてまか
れりけれはや身まかりにけりとをとつれは
へらはたてまつるへきよしにてかきをきたま
へるとてありしさうふのれにむすひつけたる
文をとりいてたるにかけりける歌
おり立し三島の水やあせにけむ生しあやめのねもかれにけり
○平兼盛駿河守になりてくたりけるに　清原元輔
しらさりつたこのうら涙袖ひちておいの別にくちん物とは
○大貳高遠くたり侍けるにつかはしける　小野宮右大臣

續詞花和歌集卷第十四別

○源道濟筑前守にてくたり侍けるにつかはしける　能因法師
ならはれは假の別もかなしきをうとくそ少しなるへかりける

行めくりあひみまほしき別には命もともにおしまるゝ哉　神祇伯顯仲
○修行に出立けるに人々まうてきあひていつの
ほとにかかへりきたり侍へきなと申侍けれは　前大僧正行尊
歸りこむ日數はいつといひをかしさためなきよは人たのめ也
○公資朝臣さかみの守にてくたりけるにつかは　能因法師
しける
古郷を思ひ出つゝ秋風に清見か關をこえんとすらん
○隆家師くたり侍けるにあふき給はすとて　枇杷殿皇后宮
涼しさはいきの松原まさるともそふるあふきの風な忘れそ
○修理のかみ顯季はりまのすけにてくたりける
時河しりまてをくりにまかりて舟こきはなる
ゝ程はかりにかすみわたれりけるをみてよめ　津守國基
る
島かくれこき行まてもみるへきにまたきへたつる春の霞か
○人の法會をこなふ導師に越前國にまかりての
ほりなむとする時あるしわかれをしみけるに　天台座主源心
ながらへてあるへき身とし思れは忘るなとたにえこそ契られ
○つくしなりけるおとこ京へのほるとてかとて
の所より女のもとにのほるへき心ちなむせぬ　女
なといへりけるかへりをに
あはれとし思はむ人はわかれしを心は身よりほかの物かは
○とをくまかれりける人に餞すとて　賀茂政平
歸りこむ程を待こそ久しけれ行すゑとをき旅の別は

○題しらす
かへりきてみるへき身とし思はれは今日の別のあはれ成かな　僧都覺雅
○
心をも君をも宿にとゝめ置て泪とゝもに出るたひかな　源重之
○
ころも川みなれし人の別には袂まてこそ波は立けれ
○十月はかり女のともへまかりけるに　楠則長
逢事を何にいのらむかみな月おりわひしくも別ぬる哉
○あひしれりけるわらはのみちのくにへまかり
なんとしけるに月のあかきよ人々わかれおし　實叡法師
みて歌よみけるに
思ひ出よ今よひの月の光をは誰も雲ゐのよそになるとも
○ものへゆきける人のぬさこひけるやるとて　藤原經衡
よみ人不知
ぬさはなしこれをたむけのつとにせよけつれは神も靡とそ聞
○筑前守にてくたれるに資通大貳いつとせはて
ゝのほりけるにいひつかはしける
行人をとゝめまほしくおもふかな我も戀しき宮こなれとも　前大貳資通
○返し
年へたる人の心を思ひやれ君たにこふる花のみやこを
○河内にくたりてひころ侍ける人のほらむとす
る時君をゝきてかへるそらなきよしなといへ　山口重如
りける返しに
心をは君にたくふる旅なれは我もとゝまる心地やはする
○いよのくにゝ侍るころ守のゝほりける時よめる　能因法師

ともしけき都なりともさよ更て浦になくたつおもひをこせよ
○春比ちゝ仲正あつまのかたにすまむとてまか
りけるに人〳〵餞して花下惜別心をよみ侍け　源頼行
るによめる
思へたゝかけに隱れぬ人たにも留らぬ花はおしくやはあらぬ
○みちのくにのすけにてまかりける時範永朝臣　高階經重朝臣
許につかはしける
行すゑにあふくま川のなかりせはいかにかせましけふの別を　藤原範永朝臣
○かへし
君にまたあふくま川を待へきに殘りすくなき我そ悲しき
○源惟盛さしころ侍る物にてもなとをしへける
を土佐國へまかりける時をくりにかはきりま
てきたれりけるにをの双調には滄海波曲とい
ふものあるをそのあひたのをなと申てかたみ　前中納言師長
も思へなといひてよみ侍ける
教をくかたみのをを忍はなん身はあを海の波になかれぬ

○はなれにけるおとこのををきほとへ行をいか
ゝ思ふといひたる人に　和泉式部
別てもおなしみやこに有しかはいとこのたひの心ちやはせし
○をはりのくにゝ京よりくたれりけるおとこか
たらひつきにけるをのほりなむとしける時あ
すのゝほりはかならす侍へきにやと尋侍ける
にをぬはかりおほゆれはあすはいくへき心ち
せぬよしを申て侍けれは　傀儡あこ丸
しぬはかりまをになけく道ならは命とゝもにのひよとそ思ふ
○二條大后宮の式部にいひわたるをつれなくて
すくる程にまめなる人につきてあつまの方へ
ゆきけるかあはつといふ所よりかへる人につ
けてくすのはのかへらむをまてなといへりけ
れはくにへをひていひ遣はしける　左京大夫顯輔
あはつのゝくすのすゑはの歸まて有りやはつへき露の命は

都にて越路の空をなかめつゝ雲ゐといひしほとにきにけり
○津の國なるところにしほゆあみにまかれりけ
る頃中納言國信せうそこして侍けるに　肥後
草枕さくかきうすくあしのやはところせきまて露そをきける
○しほゆあみにまかれりけるところちかくと
なりける人又まかり侍てかくときゝてたひれ
のをころはうら〳〵なりともみやこに戀しき

續詞花和歌集卷第十五旅

○みちの國のすけにてまかりくたりけるにいひ
つかはしける　橘爲仲朝臣
わかれしはきのふはかりと思へともみちにて年の暮にける哉
○題しらす　源盛家朝臣
東路を思ひ立しは遠けれと尋きにけりしら川の關　御形宣旨
○

ともはおなしくやなとやうにいへりけるかへり
をに　源頼政

君かすむうら戀しくそ我はおもふ忍ふ都も誰かゆへそよ
○新院人々に百首歌めしけるに　堀川
忍ふへき都ならねとしらすかの渡りもやらす哀なるかな
○みまさかのすけにて侍ける時國にて月をみて
よみける　左京大夫顯輔

過つらん都のをもとふへきに雲のよそにもわたる月哉
○月前旅宿といふをを　藤原基俊

あたらよをいせの濱荻おりしきていもこひしらにみつる月哉
○あかしに人々まかりて月の歌よみけるに　證蓮法師

故郷を思ひやりつゝなかむれは心ひとつにくもる月かけ
○堀河院御時百首歌奉まつりけるに　大藏卿匡房

月かけにあかしの浦をこき行は千鳥しはなく明ぬ此よは
○紀伊守にて國にはへりける時源則重おほやけ
の御かしこまりにて土佐國に侍をとふらひに
まかれりけるに月のあかく侍けるによみける　高階經重朝臣

遙〳〵とやへのしほちをかきわけて思はぬ方の月をみる哉
○旅宿待月心を　源頼家朝臣

おほつかな有明の月のいてかねしいかなる山のふもと成らむ
○題しらす　藤原範永朝臣

有明の月もし水に宿りけり今よひはこえし逢坂の關
○みのをにこもらせ給ていて給けるあかつきに
月のおもしろかりけれは　仁和寺宮

木のまもる有明の月のをくらすはひとりや山の嶺を出まし

○新院人々に百首うためしけるに旅の心を　堀川
みちすから心も空になかめやる都の山の雲かくれぬる
○題しらす　式部大輔資業

ふなてしていくかに成ぬ古郷は山みゆはかりけふそきにける
○屏風歌　大江嘉言

山みれは近くきぬるを故郷はいつともしらて待やわたらん
○みちの國のすけにてまかりける時しなの〻み
さかをこゆとて　橘爲仲朝臣

よそにのみ聞しみさかはしら雲のうへまてのほるかけち成鳬
○題しらす　權僧正永縁

白雲のかゝる旅れもならはぬに深き山ちに日は暮にけり
○　よみ人不知

今よりはしのたの杜に宿りせしちえの雫は雨に增れり
○備中介にてくたり侍ける時道にてよめる　橘道時

しなか鳥ぬなの渡りに旅れしてきひのなか山いつかこゆへき
○ことありてあつまの方へまかりける道に京よ
りあはれなるをとも申をくれりける消息の返
事に　法眼靜賀

戀しくはきてもみよとて相坂の關のし水にかけはとめてき
○をはりのなるみのさと〻いふところにとまれ
りけるによめる　藤原儲範朝臣

昔にもあらすなるみの里にきて都戀しき旅れをそする
○都はなれて遠き所へつかはされける道にて

日をへつゝ行にはるけき道なれはすゑを都と思はましかは
○すみよしのへにやとりてよめる　源俊頼朝臣

住吉のしきつの浦に旅れして松の葉風にめをさましつる
○あかしにかれこれまかりてあそひける時海邊
旅宿のこゝろをよみける　登蓮法師

みさこゐるいその松かれ枕にてしほかせさむみあかしつる哉
○海路時雨をよみける　藤原顯廣朝臣

袖ぬらすをしまか磯の泊りかな松風寒みしくれふるなり
○なにはわたりにまかれりけるに　中納言定頼

おきつかせよはに吹らし難波かた曉かけてなこのたつなり
○ものへゆくみちにふれにてよるきけはなみの
音いと哀に侍けれは　肥後

小夜更てあしのすゑこす浦風に哀うちそふ波の音かな
○天王寺へまいり侍ける時暮かゝる程になには
を過とてよみ侍ける　前大僧正行尊

夕されに難波わたりを見渡せはたゝうすすみのあして成けり
○題しらす　山口重如

行末もみえぬふなちの悲しきは波のなかにそいる心ちする
○たこにてよみ侍ける　赤染衛門

思ふとなくてそみましよさのうみのあまのはしたて都成せは
○遠江へまかりけるときみのゝかみ義通朝臣國
に有と聞てまかりよれりけるにあるしなとし
てなにとにていつこへまかるそなと申けれは
よみける　能因法師

さすらふる身はいつこともなかりけり濱名の橋の渡へそ行
○しなのゝかみにて侍けるよとせはてゝのほり
けるみのゝくにの野かみといふ所にやとれる
にかの國のかみ知房朝臣せうそこしてさけな
とをくれりける返事に　藤原永實

との葉の露のなさけのみえぬれはうれしき旅の草枕かな
○返し　藤原知房朝臣

いかてかは露のなさけもをかさらんのかみの里の草の枕に
○野近き所にふるとまりてむしのいたく鳴けれ
は　赤染衛門

一夜たにあかしかれぬる秋の〻になく〳〵すくす虫そ悲しき
○秋比高野へまうて給けるみちにて　仁和寺宮

あきのよは旅のね覺そあはれなるをかのかやれの虫の聲〳〵
○かうやへまうて侍けるみちにて　仁和寺宮

定なき浮世の中と知ぬれといつくも旅の心ちこそすれ
○百首御歌中に　新院

はかなくもこれをたひれと思ふ哉いつくも假の宿とこそきけ
松かれの枕もなにかあたならん玉のゆかとてつれのとこかは
はらせ給て宮の御方にさしをかせさせ給ける
新院御歌

久方のあまのかこやまいつるひもわかゝたにこそ光さすらめ
○清輔四位して侍ける時よろこひいひにつかは

續詞花和歌集卷第十六雜上

すとて　藤原重家朝臣
武蔵の〻わか紫の衣手はゆかりまてこそうれしかりけれ
○後一條院春日行幸侍けるにみこしにたてまつらせ給てまいらせ給けるに一條院御時このみゆきはゝしまれりけるをおほしめしいて〻　上東門院
見かさ山さしてきにけりいそのかみふるき御幸の跡を尋れて
○右大將兼長春日祭の上卿にてくたり侍けるともに藤原範綱をいとおかしうしたて〻しのふすりのかりきぬなときせたりけるゆへあるやうにみえけれは又日範綱かもとにたれともなくてさしをかせける　左京大夫顯輔
昨日見し忍ふもちすり誰ならん心の程そかきりしられぬ
○平忠盛朝臣六波羅家を新院女房達見にまかれりける時つまとにかきつけ侍ける　仁和寺一宮母
音羽川せきれぬやとの池水も人の心はみえけるものを
○京極前太政大臣家歌合に康資王母のほとときすの歌になくわたりこそとまりなりけれとよめるかおかしくおほえけれはいひつかはしける　源頼綱朝臣
年へぬるふなきのくちも郭公啼わたるにそゆられふりける
○後拾遺えらひける比康資王母に歌こへりけるをつかはしたりけれはこれをなむかりにすへきなといひてつかはしける　治部卿通俊
年をへて君かかきつむ藻鹽草たまもをかれる心ちこそすれ
○後拾遺のいてきたりける時二條大きおほいきさきの宮にたてまつれりけるなをすへきとありて申いてける時におほせとにてよみてつかはしける　攝津
尋つ〻かきあつめすはとのはもをのかちり〳〵朽やしなましし
○金葉集のはしめていてきたりける時みかはかしもに侍けるを撰集の歌人まいれとめしけれはまいれりけるにかみのきれにかきてたまはせたりける　從一位宗子
むかしよりいかなる家の風なれはちるとのはの絶せさるらん
○返し　參河
家の風ふくともなしにとの葉の思ひの外にいかて散らむ
○二條太后宮くすたまのれうに人のもとにはなむすひにつかはしたりけるをおかしくむすひてたてまつれりけれはいひつかはしける　攝津
白露のいかにむすへる花なれは匂ひもとに見ゆる成らん
○卯月の十日比に宇治の前大きおほいまうち君のもとにとのゐて侍るに經衡とひと所にれてとのゐものをとりたかへてふくろにいれたりけれはとりかへにつかはすとて　橘俊成
夏きてはかそふはかりに成ぬるをたちおくれたる衣かへかな
○俊綱朝臣の伏見家のにて山家眺望といふとをよみける　藤原國房
山賤の野飼の駒もかへるめりはつせにくさをしかひかけつ〻
○堀河院御時百首歌奉つりけるに　修理太夫顯季
梓弓いるの〻草のふかけれは朝行人の袖そ露けき
○反草をよみける　源俊頼朝臣

しほみては野島かさきのさゆかはに涙こす風の吹ぬまそなき
○題しらす　藤原公經朝臣
玉藻刈いらこか崎のいはねまついく夜まてにか年のへぬらん
○二月はかりみかはの國の花その山といふ所にてかりし侍とて　修理大夫顯季
春霞花園山をあさたては櫻かりさや人はみるらん
○春ころ僧正行尊くまのよりいてたりと聞てつかはしける　よみ人不知
ほの〳〵と霞立けむわかの浦の春のけしきはいかゝみてこし
○遙望漁舟心をよめる　僧都公圓
涙まよりあるかなきかにみゆるかな島つたひ行蜑の釣舟
○　皇后宮權大夫師時
さゝ涙やひらの山風はやからし波まにきゆるあまのつり舟
○なからの橋をよみ侍けるき〻わたるなからの橋は跡たえて朽せぬ名のみとまる成けり　藤原基俊
何事もかはり行める世中にむかしなからの橋柱かな
○室の八島を　藤原公重朝臣
たえす立むろの八島の煙かないかにつきせぬ思ひ成らむ
○顯しらす　道命法師
しら雲にまかひやせまし吉野山おちくる瀧の音せさりせは
○雨後山水と云ふとを　藤原顯方
吉野川空や村雨降ぬらし岩まにたきつせとゝよむなり
○水風驚夢心をよめる　藤原基俊
瀧つせの岩ま吹こすかせの音に夢みる程もれられさりけり　源俊重
○暮望旅客といふ事を　大納言經信
夕日さす淺茅か原のたひ人はあはれいつこを宿にかるらん
○題しらす　藤原公經朝臣
ゆふひさすをちの山里見わたせは心ほそくもたつけふりかな
○大齋院御あしなやませ給をすきのゆにてゆてさせ給へきよし申けれはゆてさせ給へとも見えさりけれは　齋院宰相
足曳のやまひもやますみゆる哉志るしの杉をたれかいひけん
○返し　齋院
志るしありとすきにし方は聞物は我このみわのやまぬ成へし
○八十賀し侍けるに大僧正觀修かはらけとりていはひの歌よみて侍けるかへしに　天台座主覺慶
祝ともかひやなからのおく山にやそちの冬にあへるからきは
○上東門院内へまいり給ける時御屏風のゑに人の家に松竹なとあるにすたれのまへにふえふくおとこ有所　民部卿齊信
笛竹のよふかき聲そ聞ゆ成峯の松かせ吹やそふらむ
○繪に松の木の下に人々ぬてをひきたるかたかけるを　中納言定頼
ひくひとはと〳〵なれと松風にかよふ調はかはらさりけり
○人のもとにまかれりけるにあないしてとはかりやすらひける程にあつまのをとのきこえけれはいひける　藤原範綱
たけくまの松の風にや通ふらんあつまのことのねこそ聞ゆれ
○人の紙をこへりけるをいさ〻かつかはすとて　藤原實方朝臣
いさや又ち〻の社も知ぬ身はこやそなるらんすくなみのかみ

○かへし　よみ人しらす
ひろまへにまさぬ心の程よりはおほなほひなる神とこそみれ
○うらにものかゝむとておほくかきあつむなる　藤原經衡
ふみたまへと人のこひければ
やくとしもかき集ねはもしほ草あまたもみえぬ浦と志らなん
○祭主輔親内に侍むすめのもとへ扇調してつかはしけるをうらやましくやおもひけむおとゝむすめの十一二はかりなるかすゝりのはこにかきていれたりける
ともすれは思ひのあつき方にこそ風をもまつはあふきやり鳧
○これをみてかたはらにかきつけゝる　祭主輔親
ひとりには塵をもすへしひとりをは風にも當しと思ふ成へし
○ゆかしくおほされける人女房のつほねに忍ひてかたくかへにまいれるときかせ給てたいめむせむなとおほしめしけるをあかつき出にけれは　大齋院
逢みむと思ひしをたかふれはつらき方にも定めつるかな
○山なるそうのさとへ出むにはかならすをとせむとちきりたりけるいてたりとききけとも音せさりけれは　祝部成仲
里なるゝ山ほとゝきすいかなれは待宿にしも音せさるらん
○雨中待客心を　大中臣輔以
人を待あらましことにめもさめて聞あかしつる五月雨の空
○大納言公實許にて人々對水待月こゝろをよみけるに　源俊頼朝臣
山のはの玉江の水にうつしもて月をも波のしたにまつ哉
○樵路月と云とを　仁和寺宮
松風の音もさひしき曉に月にうたひてすくるやま人　前參議親經
○山月初出といふ題をよみける
相坂のすきま今こそしらむめれをとはの山に月やいつらん　法性寺入道前太政大臣
○題しらす
あかなくにいりぬる路のさひしきに月みむ人は有明を見よ　左京大夫顯輔
○晨月をよめる
みむろ山嶺に朝日のうつろへは立田の川に月そ殘れる　大藏卿匡房
○賴總朝臣津の國のはつかといふ所に侍ときや
らむとてよめりける
秋はつるはつかの山のさひしきに有明の月を誰かみるらん　藤原隆信
○三井寺にまかりて日頃侍てかへりなむとしける時人々別れおしみて歌よみけるに　形部卿範兼
月をなとまたれのみすと思ひ觀けに山のはゝいてうかりけり
○大原にすみ侍ける比爲業まうてこむとのみ申てみえさりけるたま〳〵まうて來りけるに月おかしき所とてほかにやとれりけれはいひつかはしける　寂超法師
まちてたる雲ゐの月も宿らねはおほろの志水すむかひそなき
○九月十五夜賴基僧都まうてこむと申てをとせさりけれはつかはしける　真覺法師
君待と月をなかめて明ぬれはたのめてこぬもうれしかりけり
○大教院一品宮中院にわたり給へりける程月あかきよ春宮大夫師賴頭辨と申ける時まいれりけるかほとなくいて侍けれはいひつかはしける　前齋院出雲

池水にやとれる月はのとけきを影もゝさめぬ雲のうへ人　前大僧正行慶
○月前待客といふとを
こすもあらむ晝に變らぬ月なれはよにかくれてと契りし物を　源道濟
○山寺に侍ける比月を見て
昔みし人はこれともなか〳〵に契らぬ月そ忘れさりける
○さしころ修行に人々ありきてかへりまうてき

續詞花和歌集卷第十七雜中

○山寺に侍けるとき五節たてまつる人のたきものかうはしくあらすとてそらたき物すこしとこへるにたちはなのなりたるえたにみをとり　如覺法師
すてゝいれかへてやりける
末のよになりもて行は立花も昔のかにはにるへくもなし
○圓融院のみかとおりさせ給てひころありてまいれりけるに山吹の花をたまはせたりけれは　藤原實方朝臣
八重なから色もかはらぬ山吹のなとこゝのへに咲ず成にし
○筑後守爲通としころなさけなくあたり侍ける　良勢法師
いつとせはてゝ上りけるに云やりける
君はしも忘れしかしな中々につらきにまさるかたみなけれは
○津守國基身まかりにけれはすみよしにもすますなりにけるをあからさまにまかり下りける
(れるイ)にもとみし物ともむかしのけしきに　津守景基
もあらさりけれは
人心あらす成行すみよしの松のけしきはかはらさりけり
て侍に人〳〵月前懷舊といふとを　登蓮法師
もろともにみし人いかに成にけむ月は昔にかはらさりけり
○月前述懷心を　仁和寺宮
なかめして過にし方を思ふまに嶺よりみれに月はうつりぬ
○殿上の□りけり比月を見て　藤原隆信
なにををおもふともなき人たにも月みるたひに眺やはせぬ
○ふきすゝきありときこしめして新院よりめしけれは奉つるとてむすひつけゝる　前大藏卿行宗
花すゝき秋のすゑはに成ぬれはをそともなく露そこほるゝ
此のちほとなく身まかりにけりとなん申
○やことなき所の御前のすゝきむすはれたりけるをその人のむすへるなめりひむなきをとしたりとてかしこまりけれは人につけて申ける　よみ人しらす
花すゝき忍ひつゝこそ結ひしかあやなくほにも出にける哉
○むすめのもとへしのひてかよひけるおとこのせうそこして侍けるに　清原元輔
むすひけむ露をもしらす花すゝき秋をさためてほには出なん
○物いふ人のもとにわかなをかりて人のいれりけるをあいなくえむしけれは　大江嘉言
すゝくへきかたなき物は春のゝに我つみならぬ若菜なりけり
○題しらす　よみ人も
袖の上に泪の川はなかるれとなきなはえこそすゝかさりけり
なきなのみ世には立田の山水の清きをすむといふにや有らん

○かれにけるおさこのいまかたらふときこゆる
女のもとへもとの女のいひつかはしける
たのむなよ思ふにさこそ契らめ我にもいひしものはそそは
○かたらふおさこのもとの人いみしくはらたつ
ときくにたかうなをやるとていまの人のよま
せ侍けるに　和泉式部
變らしや竹のふるねはひとよたにこれにとまれる節は有やは
○一院くらゐにおはしましける時右のおほいま
うちきみ右衛門督ときこえける比ものいふ女
房侍けるをうへめすなりときゝてかの女のも
とへ人にかはりてつかはしける　前中宮亮季行
みかきもり衛士の煙の立のぼり雲ゐになると聞はまことか
○女のもとにまかれりけるにかみあらふほとな
りとてあはさりけれは　二條關白前太政大臣
今よりはゆふかけてこむ千早ふるかみあらはるゝ處成けり
○和泉式部か家につれにかたゝかへにまかりけ
るにいたしたる枕をあしたにかへすとてかき
つけゝる　大江公資朝臣
たひとにかるもうるさし草枕手まくらならはかへさゝらまし
○義孝少將修理のかみこれたかゝ家にかたゝか
へにまかれりけるにいたしたるまくらにかけ
りける歌
つらからは人にかたらむ敷妙の枕かはして一夜ねにきと
○これか返しのあかすおほえけれは又人にこれ
かゝへしせよといひ侍けれはよめる　よみ人不知
かたるともたかなはたゝしなかゝらぬ心の程や人にしられむ

○源氏の物語を人に借て返しやるとて　藤原顯綱朝臣
いかはかり袖のぬれけむむさしのゝ若紫の露のきえかた
○ほかに侍けるほとにとものまうてきてかくれ
しとなとうらみつかはして侍けれは　賀茂政平母
山里の岩もる水にみくさゐてみえけむ物をすまぬけしきは
○修行のところより三宮にたてまつりける
前大僧正行尊
やま里は我か心にまかせたるかけひの水そたえす音する
○物おもひける比くらまにこもりて　藤原爲信女
たれはかり尋てきなん山里に入にし人はありやなしやと
○なにはわたりにあひしれる人を尋ぬるになし
といひ侍けれは　能因法師
難波江に人を尋てきつれともたまもかりにといてにけらしな
○藤原孝清和泉寺にてくたるとてすみよしをす
きけるにつかはしける　津守國基
すみよしの峯の白涙打すくるたよりにたにもとはぬ君哉
○前中宮上總くまのへまいりけるに還向にすみ
よしによろへきよし申てまうてこてすきにけ
れはつかはしける　津守景基
としふとも忘られしかし住吉の松にとまらて過るつらさは
○前大納言公任なかたにゝすみける比十二月は
かりいひつかはしける　申納言定頼
故郷のいたまの風にね覺つゝ谷の嵐をおもひこそやれ
○返し　前大納言公任
谷風の身に志むとにふる郷のこのもとをこそ思ひやりつれ
○ひむかし山のへんにぬしなき宿にまかりてよ

みける　源道濟
君なくてまたいくとせになられ共嶺の松風こゑそかはれる
○はやかすみける山さとにゆきて　能因法師
松風のふくをとのみそひくらしに昔の聲はかはらさりけり
○あまになりてすゑのよに思ひかけぬ所にて人
にたいめんしてむかしのものかたりなとしけ
るほとををひきならしけるをきゝていひいた
しける　三條大宮式部
聞馴し昔のををひきかけて志らふるからにれこそなかるれ
○圓宗寺にてよみ給ける　三宮
いにしへの影やみゆると人志れす池のみくさのはらはるゝ哉
○三宮隱れ給て七條のいつみに左おほいまうち
君まかり侍て歌よみけるに　越後
ありし世にすみも替らぬ水の面になき風のみそ移りさりける
○かはらの院にて人々むかしをこふる心をよみ
けるに　平兼盛
石まゝより出る泉そむせふなる昔をこふる聲にや有らん
○金葉集のおりにいてきたりける歌とりを俊頼
朝臣かくれてのちかきあつめてをくとておく
にかきける　新少將
あさりせし君もなきさに盪たれて玉ものくつをかきそ集むる
○圓融院かくれさせ給にける春あはたにて人々
歌よみ侍けるに　藤原實方朝臣
此春はいさやまとに暮してむ花の都はをるに露けし
○あるしうせたるところの花をみて　道命法師
庭櫻きみかおしみしほとはかりしのひしもせし花のこゝろは

○待賢門院おはしまさてのち法金剛院にてほと
ときすの啼けるをきゝ給て　仁和寺宮
故郷をけふみにこそはほとゝきす誰と昔をこひてなかまし
○近衛院に侍けるにかくれさせ給にけれは皇后
宮にまいれりけるにことにふれてむかしのみ
こひしくおほえけれはふつきの七日土佐内侍
のもとへつかはしける　皇后宮備前
天の川ほしあひの空はかはられとなれし雲ゐの秋そ戀しき
○匡衡朝臣うせて後石山へまうてける道に山か
けなる草の露にあさひのさしたるを見て　赤染衛門
朝日さす山した露のきゆるまもみしほとよりは久しかりけり
○一條院かくれさせ給てほとへて夢に見たてま
つりてよみ侍りける　大江匡衡朝臣
夜もすから昔のををみつる哉かたるやうつゝ有りし世や夢
○上東門院にまいりて一條院に匡衡か御書をし
へたてまつりし程のをなと昔物かたり啓して
まかり出けるあしたにたてまつりける　赤染衛門
いとゝしく又ぬれそひし袂かな昔をかけておちし涙に
○かへし　院
うつゝとも思ひわかれて過す哉みしよの夢を何語りけん
○大納言公實身まかりてとしへてよみ侍ける
華園左大臣北方
かそふれは昔語に成にけり別はいまの心ちすれとも
○近衛院御時としころよゐつかうまつりけるか
くれさせ給にけれは當今御時又よゐにめされ
て侍けるに太政大臣のもとへいひつかはしけ

る　　大僧正覺忠

うきまゝに空をなかめし名殘には雲ゐの月を猶もみる哉

○後冷泉院おはしまさてのち九月十三夜四條宮にまいりて式部命婦と夜ひとよむかしのことなと申て　藤原清家朝臣

夜もすから思ひやいつるいにしへにかはらぬ空の月を詠めて　式部命婦

○返し

雲の上の月の光はかはられとむかしの影はなをそ戀しき

○九月十三夜月おもしろく侍けるを前師季仲と もろともに見侍てほとなくかの人とをき所へなかされにけれはいひつかはしける　藤原基俊

みるたひに昔のことのおほゆれはまたそのまゝに月も眺めす

○　　玄範聖人

いく雲ゐへたつる山のあなたにて都のことをおもひ出らむ

○思ふをありけるころよふけつるまて月をみて　赤染衛門

物思はぬ人もやこよひなかむらんれられぬまゝに月をみる哉

○題しらす　源頼光朝臣

出るより入まて月を眺るは物思ふおりのわさにそ有ける

○行宮見月傷心色といふをを　前大貳高遠

思ひやる心も空になりにけりひさり有明の月を詠て

○長恨歌の心を　藤原爲忠朝臣

まほろしのつてに聞こそ嬉しけれ契りしをは夢ならねとも

○陵園妾のこゝろをよめる　登蓮法師

松の戸をさしてかへりし夕よりあけるめもなく物をこそ思へ

○をありてあふみなるところにこもり侍りける　大江公資朝臣

時よめる

こゝしけき世の中よりも足引の山のへにこそ水は清けれ

○遠きくにへつかはされける時人のもとへいひつかはしける　前左京大夫教長

おち瀧つ水の泡とは流るれとうきにきえせぬ身をいかにせん

○おなしみちにてのりかへにかけなる馬の侍けるをたつねけれはあしをやみてさかりて侍よし申けるをきゝて

目の光てらしすてたるうきみには風さへそはす成にける哉

○おほやけの御かしこまりにて下野國につかはされける時むろのやしまを見て　藤原成範朝臣

わかために有ける物を東路の室のやしまにたえぬ思ひは

○なかされたるものとも程へてみなめしかへしけるに一人なをゆるされさりけれは内わたりの女房のもとへをくりける　前左兵衛督惟方

この世にもしつむと聞は泪川なかれしよりも袖そぬれける

○よの中にこもりぬ侍りけるとき　知足院入道前太政大臣

さほ河の流れひさしき身なれとも浮世にあひて沈みぬる哉

○ぬす人にあへりける又の日人のかいねりのきぬをゝくりて侍けれは　清原元輔

淺からす思ひそめてし衣かはかゝる世にこそ袖もぬれけれ

○くまのへまいりける女をとなし川よりかへされたてまつりてなく〳〵ふみ侍ける

音なしの川のなかれは淺けれとつみの深きにえこそわたられ

この〳〵ちことなくまいりにけりとそ申す

○從一位宗子やまひ重くなりて久まいりて心細き事なと申て侍ける御かへりに　近衛院御歌

うき雲のかゝる程たにわひしきにかくれなはてそ有明の月

○わつらふころ寂昭聖人をむかへて戒うけなとしけるにほとなくかへりにけれはつかはしける　小大君

長きよのやみにまとへる我をゝきて雲かくれぬる空の月哉

○長月のつこもりにわつらひてたのもしけなくおほせけれは久とはぬ人につかはしける　藤原基俊

こかくれに殘れる雪の下消て日を待ほとの心地こそすれ

秋はつる枯野の虫のこえたえはありやなしやと人のとへかし

○わつらふ事ありて雲林院なる所にまかれりけるに人のとふらへりけれはよめる　良暹法師

此世をは雲のはやしに旅れして煙とならん夕をそまつ

○返し　よみ人不知

煙にとよそふる旅のかとてには心ほそくや思ひ立らん

○やまひにわつらひける比雪の消のこれるをみて　中納言定頼

りうへゆるされむと申けるをかなはさりけれは大内に行幸なれりけるころ女房許へ申ける　源頼政

入しれぬ大内山の山もりはこかくれてのみ月を見る哉

○光覺法師維摩會の講師の請にたひ〳〵もれにけることを法性寺入道前太政大臣に申たりけるかへりをにしめちのはらと侍けるをつきのとしも又人のたまはりにけれはたてまつりける　藤原基俊

契りをきしさせもか露を命にて哀ことしの秋もいぬめり

○堅義請申ける僧の申文のおくにかきてたてまつりける　藤原範永朝臣

春の日の光もしらて雪ふかき谷の松こそとしおいにけれ

○む月の朔日雪のふりけるに　藤原範永朝臣

春の立しるしはみえて白雪の降のみ增る身とそ成ぬる

○題ふらす　源仲正

いかにして春の初めに思ふともかすめて空のけしきをもみん

○新院御時うへのおのこともにあまたの題をよませさせ給けるにおもひをのふる心を　右衛兵督公行

春日山松にたのみをかくるかな藤のすゑはの數ならねど共　法橋忠命

○四月にさけるさくらを見て

散果て又咲花も有ければ人にをくるゝ身をもうらみし　藤原實綱朝臣

○人〳〵おもひをのふる歌よみけるに

人はみな花咲春にあふものを我のみ秋の心なるかな　源俊頼朝臣

○身のをつめるをおもひて五月雨のころ人に　大僧正寛曉

つかはしける

五月雨のひまなき杜の雫には宿もあるしも朽にける哉

○のそむをなくて山ざとに侍ける秋ころもみち　右兵衛督公行

見に人〳〵まふてきて歌よみけるに　よみ人しらす

埋木とおほゆる人のすみかにも花こそ咲ればゝもみちけり

○下萬にこえられてなけきける比頼輔卿許へつかはしける　右兵衛督公行

心のみむすほゝれたる露の身は霜となりての後やきえなむ

○題しらす　源仲正

思ひ出もなきよは何のをしけれは殘りすくなき身を歎くらん　源國能

埋木は昔は花も咲にけむ思ひてもなき我身なりけり

○身のゝそみなくてよの中にありへんともかた　賀茂成保

くおほえ侍ける比よみ侍ける

墨染に思ひ立ぬる衣手をまたきあらふはなみた成けり

○法性寺大きおほいまうち君石山のてらにまうて〻侍る時人々に歌よませけるに六位にてのそみならす侍ける比よめる　源爲憲

おいにける渚の松の深みとりをつめる影をよそにやは見る

○題しらす　橘敦隆

秋の露わかもとゆひにむすはれとをもと成行あされかみ哉

○年のあひくせりける女にをくれて山里に侍けるをよき日をさらにとく京に出たつにあかつきあけ侍ぬといそかし侍ければ　左京大夫顯輔

いつのまに身を山賤になしはて〻都を旅と思ふ成らん

○うれふると侍けるころ　源俊頼朝臣

さらぬたにかはかぬ袖そ清みかたをはしなかけそ波のせき守

○世中をなけきける比人のとへりければ　三條大宮式部

捨果てなきになしぬる憂身をは世に有とてや人の問らん

○修行にありき侍ける時たよりにつけてめのとのもとへつかはしける　前大僧正行尊

哀とてはく〻みたてし古はよをそむけとは思はさりけむ

○世中はかなくきこゆるころさかみかもとへつかはしける　藤原兼房朝臣

あはれ共誰かは我を思ひ出むあるよをたにもとふ人そなき

○山寺にて都のかたをなかめて　道命法師

都をはうしとて山に入しかとそなたにむきて日を暮す哉

○ひえのやまにて故郷こふる心をよみける　源道濟

あるときはうきをまけき故郷をこふるや何のこゝろ成らん

○あからさまにひえの山にのほりて侍けるにかへりなむとしけるおりわらはの手本かきてと申けれはかきてとらすとておくに　靜教法師

浮雲の跡もさためぬ身なれ共山のうへこそ立うかりけれ

○傀儡にかはりて　能因法師

いつことも定ぬ物は身なりけり人の心を宿とするまに

○甲斐守にて國に侍けるころ朝光大將のもとに侍ける人のもとへいひつかはしける　源師綱朝臣

さすらふる身を何處にと人間はるけき山のかひにとをいへ　大藏卿匡房

○題しらす

さすらふるみはさためたる方もなし浮たる舟の波にまかせて　源雅重朝臣

○

我か身はさそふ水まつ浮草の跡たえぬともたれか尋れむ　藤原顯廣朝臣

○

うき身をは我心さへふりすて〻山のあなたに宿もとむ也　大江爲基

○津のくにとしへて侍けるおり赤染衛門許へいひつかはしける

有はてぬ身たに心にかなはすて思ひの外によにもふるかな　和泉式部

○少將井尼大原よりいてたりときゝて

世をそむくかたはいつくに有ぬへし大原山は住よかりきや　少將井尼

○返し

思ふをおほはら山のすみかまはいと〻なけきの數をこそつめ　よみ人も

○題しらす

世を捨て〻ふかき山には入しかと涙の出るおりそおほかる　赤染衛門

○あひしれりける人入道すとて戒師むかへむれうに馬をかり侍けれはつかはすとてよめる　賀茂政平

よをそむくまことの道にひく駒はのりのためにと思ふ成けり

○かしらおろして後子にはかまをきすとて法性寺入道前太政大臣にさしぬき申侍とてよめる　源定信

身をすて〻苦の衣はきたれ共此よはえこそ忘れさりけれ

○衛門宣旨よをそむきぬときゝてつかはしける　清原元輔

ます鏡二たひよにやくもるとてちりを出ぬと聞はまとか

○兵部卿宮(致平)入道して侍りける比女三宮の齋宮女御もとへ

みな人のそむきはてぬる世中にふるのやしろのみを如何せん

○ふをそむきぬときゝてはらからの許よりけさをゝくるとて夢の心ちするよしなと申つかはせりける返事に　兵衛

長きよの覺ぬれふりにみしとは夢なりけりとけさそ驚く

○御くしおろさせ給てのち御佛名のあしたつくり花を公任卿もとへつかはすとて　花山院御歌

程もなくさめにし夢のうちなれはむかしにゝたる花の色哉

○よをそむきてのち花を見て　寂然法師

この春そ思ひもかへす櫻花むなしき色にそめし心を

○おとこのよをむなしとしりなからきみにさはりてそむかぬをくいひたりける返事に　赤染衛門

我もなし人もむなしと思ひなは何か此世のさはり成へき

○世中はかなくきこゆるころ北白川にまかりてもみちのちりのこれりけるをみて　前大納言公任

けふこすはみすやあらまし山里のもみちも人も常ならぬよに

○新院人々に百首歌めしけるに　前參議親隆
あたにをく草葉の露の消ぬるを哀よそにや人のみるらん
○題しらす　治部卿
かつきえてはかなきよとは知なからなを降雪や我身なるらん
○　源頼家朝臣
見し人は昔かたりに成にけりいかて殘れる我身成らん
○　道命法師
みる人はみなく成ぬわれをたれ哀とたにもいはむとすらむ
○ともなくなれりけるにあとなる人のもとへ　賀茂成保
誰とてもとまりはつへき身ならねとまつは先立人そかなしき
○きたのみやかくれ給つる比　如覺法師
世中はかくこそみゆれつく〳〵と思へはかりのやとり成けり
○新院人々に百首めしけるに　藤原顯廣朝臣
世中を思ひつらねてなかむれはむなしき空にきゆるしら雲
○　兵衛
いつまてとのとかに物を思らん時のまをたにしらぬ命を
○よのなかはかなくきこゆるころつれなきこゝろを人〳〵よみけるに　心覺法師
はかなさをおとろかぬにそ深きよのねふりの程は思ふらるゝ
○題しらす　花山院御歌
長きよの初め終りもしらぬまにいくそのとを夢にみつらん
○　權僧正永緣
長きよの夢のうちにてみる夢はいつれうつゝと如何さためむ
○　前參議俊憲
あすもありと思ふ心にはかられてけふをむなしく暮しつる哉
○新院人〳〵に百首歌めしけるに　兵衛
西とのみ心はかりはすゝめともいかなる方にゆかむとすらん
○題しらす　大江嘉言
たとふへき方こそなけれよの中を夢もむなしな覺ぬ限は
○　藤原頼輔
れ覺して思ひとくこそ悲しけれうき世の夢もいつまてかみむ
○　小大君
あるはなくなきは敷そふ世中に哀いつ迄いはんとすらむ
○　大齋院
いつれの日いつれの山の麓にてむせふ煙さならむとすらん
○ほしはみ　堀川右大臣
あやしくも風にをるてふさくなきの榛よりもなかくみゆらん
○つく〳〵し　よみ人不知
雲かゝる浦にこきつくつくし舟いつこかけふの宿り成らむ
○くるみのから　源俊頼朝臣
おいのくるみのからくのみ覺ゆるは面になみのたゝむ成けり

續詞花和歌集卷第十九物名

○さくなむさ　少將藤原義孝
櫻はな山にさくなむ里のにはまさるを聞をみぬかわひしさ
○野宮歌合にしほにをよめる　日向
高砂の山のをしかは年をへておなしおにこそ立ならしけれ
○たちまのくになるいつしの宮といふやしろにてなのりそといふものを題にて人の歌よめと　源重之
ちはやふる出石の宮の神のこま夢なのりそやたゝりもそする
○かきのから　大貳三位
さかきはゝ紅葉もせしを神かきのから紅にみえわたるかな
○おものたな　少大進
月のおものたなかみ川に宿るこそひをのよるみる形見成けれ
○とりはゝき　藤原教長母
秋の野に誰をさそはむ行歸りひとりはゝきのみるかひもなし
○ふりつゝみ　肥後
池もふりつゝみ崩て水もなしむへかつまたに鳥のねさらん
○すたれかは　中納言定頼
跡たえてとふへき人もおもほえす誰かはけさの雪ま分こむ
○みつのみ　僧都有慶
いなり山しろしの杉の年ふりてみつのみやしろ神さひにけり
○さつきやみといふ五文字を句のかみにをきてよめる　肥後
さゝのはの露は暫もきえとまるやよやはかなき身を如何せん
聯歌
○上東門院后宮と申ける時うへの御つほねにはしますに道信朝臣山吹華をもちてとをるにかたちのはしに見えけれは花をさしいるとて歌の本をいへりけれはおくに侍をかれとれと宮のおほせことありけれはとるとてすゑをいひける　伊勢大輔
くちなしにちしほやちしほ染てけりこはえもいはぬ花の色哉
○つまとをならしてをつれけれはふらすかほにて女のうたのかみをいひけれはふもをつけける　藤原實方朝臣
誰そ此なるとの浦に音するはとまりもとむる蜑の釣ふね
○河内守爲政くに〻侍けるに雪のふれるあした山口重如まうてきたりけるに連歌せよと申けれはまへに侍けるさふらひのすゑはつけゝる
雪ふれはあしけに見ゆる生駒山いつ夏かけにならむとすらん
○内にていみしくふみける夜道信朝臣かくいひけれはすゑをつけゝる　藤原實方朝臣
あしのかみ膝よりしものさゆる哉こしのわたりに雪や降らむ
○あやしけなるきくの花をみて源頼茂朝臣の歌のもとをいひけれはすゑを　源頼成
菊の花すまひ草にそにたりけるとりたかへてや人のうへけむ
○日吉社の禮拜講といふに定誓律師かはらけとりて歌のなからをいへりけれはすゑを　壽圓法師
もとゝりのなかにかくせる玉なれはかみの光もけふや增らん
○夕くれにからすのいなりのまへとひ行をみて頼綱朝臣の歌のもとをいひけれは　藤原信綱
いなり山れきを尋て行烏ハはふりによはの露やおつらん
○藤原盛房越前のあすはの宮にまいりて又日かへるとてかくいへりけれはすゑをともなるさふらひつけゝる
昨日きてけふこそ歸れあすはより三日のはら行心ちこそすれ
○民部卿長家許に不斷經よみける夜番に侍ける

に火をけにひもなかりけるをみて慶暹律師の
歌のもとをいへりけれは　永源法師
このとのは火桶に火こそなかりけれかの水かめに水はあれ共
○堀川院御時中宮の御方にうへわたらせ給て藏
人永實をめしてこそに侍けるたき物のひをけ
をめしにつかはしたりけれはゑかきたるきり
ひをけをとらすとて周防内侍歌のすゑをいへ
りけれはとるとて　藤原永實
花やさきもみちやすらんおほつかな霞こめたるきりひをけ哉
○かりしけるにとりのたてるあとにかひこの有
けるをみてともに侍るもの〳〵歌のかみをいへ
りけれはすゑを付たりける　源義光
ほろ〳〵と鳴てやきしの立つらんかひこも我も歸るましとて
○大内のおほかきのやふれたるをみて琳賢法師
のいへりけるすゑをつけ〳〵る　心也法師
大垣はされかはりこそ殘りけれ方なしとてもいへはあらしな
○前中宮の越後あみたかうをこなひけるに僧と
ものゐたる所に雪のふりいりけるをみて歌の
かみをいひいてたりけれはすゑを　相圓法師
極樂に行かゝるともみゆる哉空より花のふるこゝちして
○法性寺入道前太政大臣の歌はもとを申てのへ
りけれは　源俊重
狩衣はいくのかたちしおほつかな我せこに社とふへかりけれ
○くまの〳〵みちにてある山ふしの歌のすゑをい
ひたりけれはもとをつきける　平忠盛朝臣
見わたせはさりへの山も霞つゝあきつの里も春めきに鳬
○新院の御時御方達のところにて人々におほみ
き給てよもすからあそはせ給けるに左京大夫
顯輔にたひをに人々さけをすゝめけれはゑひ
てなにとなくいへりけるをを歌にとりなして
すゑをいひける　前左京大夫教長
あさなへの心ちこそすれちはやふるつくまの神の祭ならねと
○道風か手本をかりけるなかに櫻のはなのあり
けるをみて人の歌のもとをいひかけたりけれ
は　讀人しらす
櫻花みち風吹はいかゝせむ散さぬてをそまつならふへき
をさいなみてかきになむゆひつけゝるときき
ていひつかはしける　惟宗經泰
梅のかを袖にうつすとする程に花ぬすむてふなはつきにけり
○題しらす　賀茂重保
あやなくも風のぬすめる梅のかにおらぬ袖さへ疑かはれぬる
○花のもとによりふしてよめる　道命法師

續詞花和歌集卷第二十戲咲

○百首御歌中に　新院
れの日すと春の野毎に尋れは松にひかる〳〵心ちこそすれ
○中原致時か家ちかとなりに侍けるに紅梅のさ
けりけるをうなしておりにつかはしたりける
あやしくも花のあたりにふせるかな折らは咎むる人や有とて　仁和寺宮
○題しらす
朝れかみみたれてなひく玉柳たれとふしきの姿成らん　源仲正
○
さよふけてぬすまはれなく郭公聞あらはしつ老のれ覺に　仁和寺宮
○
草の庵の軒にあやめをふきたれはひと庇さす心ちこそすれ　江侍從
○
夏の内ハはたかくれてもあらすしており立にける虫の聲哉
○とくさのはの落たるに露のをけるをみて　小大君
しなの〳〵やとくさにをける白露はみかける玉とみゆる成けり　法性寺入道太政大臣
○題志らす
九重にたゝめる玉のみえしよりかたふく月のれりのほる哉　小大進
○新院人〳〵に百首歌めしけるに
こま〳〵とかく玉章にをよせてくる初鴈の數そよまるゝ
○山にかたわきて花をつくりけるにかたきのか
たにをみなへしをつくりたりけるを人〳〵を
かしかりけれはれたくてよみてむすひつけゝ
る　僧都親教
草も木も佛になるといふなれと女郎花こそうたかはれけれ
○とし比御導師にて侍に人の申侍けれは　教源律師
のふしにて多くの年はへぬれともまたこそふれれ女郎花には
○ともの山里に侍ける許へまかれるにもみちの
ちりかゝりけれは　江侍從
紅葉々を尋るたひにあられとともにしきをのみも身にきつる哉
○題しらす　大僧正覺忠
逢ことはかたをとりする山鳥今はかくとそれはなかれける
○　源親房
しるらめやあはてひさしの槇柱ひさま〳〵に思ひ立さは
○ものへまうてける女房三人ありけるかみすみ
にたちてものいふをみていひやりける　法橋忠命
打みれはかなへの足に〳〵たる哉はけむれすみに成やしなまし
○返し　女房
打みれはなへにもにたる鏡かなつくまの數にいれやしなまし
○まつり見ける女車よりかはほりをおとしたり
けるくとりてかきつけてつかはしける
いとむけに鳥なきしまにあられ共かはほりにこそ思つきぬれ　藤原道信朝臣
○人のたはふれをしてかたみにのりなとして後
ひさしくをともせぬに女のもとよりはる駒の
のるをくるしと思ふにやなといへりけるかへ
し　右衛門督公保
くるしとも思はれはこそ春駒の乘れと心はなをはやるらめ
○あひくしたる女もいとはしきさまに申けれは
人のくにへまかりて年月さそらへけるもはた
をなることもなかりけれは京へかへりきても
とのところにはさるへきともやあらむとつゝ
ましくてまつむまのくらをつかはしてまいり
きてなん侍これをきゝたまはれと申けるをは
したなくいひて返したりけれは　よみ人不知
春駒のゝかひし程にあくかれてくらもをかれす成にける哉
○久しくをともせぬ人に　大輔

契りしはやふれにけりな板庇もの外にもまはらなる哉
○新院人々に百首歌めしけるに　小大進
きてかへる物ともしらて夏衣ひとへ心はすかされにけり
○題しらす　源俊頼朝臣
色々に君かきせたるぬれ衣はいつはりしてやぬひかさねけん
○　さかみ
思はしや苦しやなそやと思へ共いさや詫しやむつかしのよや
○六波羅といふ寺の講の導師にまかりけるに
高座にのほるに聽聞の女房のあしをつみけれ　良喜法師
はよみける
人のあしをつむにて知ぬ我方へふみをこせよと思ふ成へし
○あひしれる女おとこにかみきられたりとき〻　大藏胤材
てつかはしける
千早振神もなしとかいふなるをゆふはかりたに殘らすや君
○惠慶法師はりまの講師になりてくたるに　權僧正尋禪
打はへて舍人のねやにいる人は擂磨かちにやあらむとすらん
○人のせうそこしたりける返事を物かきけるふ
てのつぬてに朱にてかきてやれりけれはをし
かへしてまつのけふりの色のくれなゐなるよ
しをいへりける返事に　玄範聖人
墨の色の紅深みえけるは筆を染めつ〻かけはなるらん
○題しらす　源親房
すまの浦にあみくり下すうけ舟の打かたふきてよを歎かな
○こふしの花を人につかはすとて　よみ人不知
時しあれはこふしの花も開け〻り君か握れる手のか〻れかし

○ほそちをおけりけるかゆふたちのしけるまき
れにうせにけれはよめる　少將藤原義孝
ぬす人ほほそちをみても雨ふれはほしうりとてや取隱すらん
○鯛といふいをに梅花をかさして人のをこせた
りけるかかのつきたりけれは　赤染衛門
春をに櫻たいとそ聞しかと梅をかさせるかそつきにける
○人のおほゑひを尋たるになきほとにてあるま
まに十九やるとて　大中臣能宣朝臣
世の人はうみの翁といふめれとまたはたちにも足すそ有ける
○くらまの別當のしたしき人のもとよりめつけ
といふものこのほとおほかた見えねはえたて
まつらすといへりけるに　辨乳母
最惜や鞍馬のめつけいかなれはふつとみえすと云にか有らん
○内裏御屏風にかみかふりしたるほうしのはら
へしたる所に　大中臣能宣朝臣
物知らぬをはり法師のはらへをは頭つ〻めるかみのみやきく
○くまの〻大鳥の王子のほくらにかきつけたり
ける歌
大鳥のほく〻み給ふかひこにてかへらん儘にとはさらめやは
此歌ある人意尊法師か歌とも中　增基法師
○太神宮にまいりけるによめる
音にきくかみの心をとろ〳〵とす〻かの山をならしつる哉
○たゝすのやしろにまいれりける女房のとも
るめのわらはの御前にてしをしたりけれは
あつかりのさいなみの〻しるをきゝて　女房
千早振たゝすの神のみまへにてしをする事のかくれなき哉

○筑前守にて國に侍に日のいたくてりけれはあ
めのいのりにかまとの明神にかゝみたてまつ
りけるにそへたりける　藤原經衡
雨ふれといのるしるしのみえたらは水かゝみとも思ふへき哉
○おやを海へおとしいれたるきこへある人の七
月十五日おやのために盆供そなふるをみて　道命法師
わたつ海に親をゝし入てこのぬしのほむするみるそ哀成ける
○をむなのよきつみやめすとうりありきけるを
きゝて　よみ人しらす
よきつみと言とも誰も買じかしおとりてつくる人しなけれは
○かまを錢にかへけるにこよなくいひおとしけ
れはうるもの〻よみける
地こくのや鼎にもこそにへたまへおほくのせになおとし給そ
○返し　藤原仲子
買よりも賣こそつみは重けなれむへこそかまの底にみえけれ
○中納言家成家歌合を歌をよみつ〻判しけるに
右歌の心ゆかぬをのみ有けるつかひによめる　左京大夫顯輔
とにかくに右は心にかなはねは左かちとやいふへからん
○濟圓仲胤　かたちのにくさけなるをかたみに
をにとつけてなんいとみわらひけるに濟圓公
請にまいらすとて綱所の下部つきて房をこほ
ちたくなりとき〻ていひつかはしける　僧都仲胤
誠にや君かつかやをやふるなるよにはまされるこゝめ有けり
○返し　僧都濟圓
破られてたち忍ふへき方もなし君をそたのむかくれみのかせ

右續詞花集以二織部正乘尹。及岸本永膺秘本一校正。

群書類集卷第百四十八畢

群書類集卷第百四十九

和歌部四

玄玉和歌集序。

夫和歌者起レ自二八雲之古風一。傳爲二吾朝之習俗一。用二之郡國一。用二之鄉人一。諷喻之道莫レ先レ於レ此。爰代々歌仙奉二詔命一而撰二集之一。家々好事稱二打聞一而編二次之一。而身既爲二桑門之叢一。品詞雖二泥花之藻一。只慇懃二近代綺靡之句一。或爲二下愚素閑之玩一。千餘首成二部數十有二一連一卷軸一號曰二玄玉和歌集一而已。

やまとうたはやくものかぜひさしくつたはりて。世々にさかりなることわざとぞなりにける。むかしはこゝろふかくとぼすなをにして。ひとをおしへ物をいましむるたよりなりき。今もまたそのながれを思へるともがらなきにしもあられど。ときうつりことかはりて。うけるすがた雲のをくにまかひ。志づめるおもひいづみのごとくにわく。つねに耳をたのしみ。めをよろこばしむるもてあそびとして。上にも是をすてたまはず。下にもいとふものなかりけり。志かればすなはち。みとのりをうけてゑらびたてまつること。そのかずおほくかさなりて。あきつしまのなみ志きりにきこへ。また家〳〵のうちきゝなつのこずゑよりも志げくして。つくば山のかげをあらそへり。爰に殘れるちりを。かきのもとにたづねて。あらたなるともを花のしたにれがふもの有。身いやしければともなふものまれにして。つれ〴〵のながめなぐさめがたきあまりに。ちかきよのうたをあつめて。玄玉和歌集となづく。ちうたあまり。あはせて十二卷とせり。はじめに神祇をつらね。をはりに釋教をゝけり。たま〳〵あとをいにしへにたうとびて。ながきちぎりをまもるのみちにむすばむとれがふなるべし。そも〳〵。玄なれどもきゝつたへざるはいたづらにもれぬ。玉なれども見をよばざるはひろふをなし。うらみを殘す事たゞ是に有。のちにみむ人。たやすくあざけるべからずとなむいふをしかり。

玄玉和歌集卷第一 四十三首

神祇歌

○攝政前太政大臣におはしましけるとき百首歌よませ給けるに神祇のうたとて　皇太后宮大夫（俊成卿）

神風やいすゝの川の宮はしらいく千代すめとたて初めけむ

○百首歌の中におなし心を　法性寺座主法印（慈圓）

なかむれはひろき心も有ぬへしみもすそ川の春のあけほのやはらくる光にあまる影なれやいすゝ河原のあり明の月

○中宮はしめて入内の時の御屏風に春日祭書たるをよませ給ける　攝政前太政大臣

けふまつる神の心やなひくらんしてに涙たつさほの川風

○同御屏風に賀茂の下社神館邊に祭したる人有處を　前左大臣

いく歸りけふのみあれにあふひ草たのみを掛て年のへぬれは

○賀茂の臨時祭かきたる所を　皇太后宮大夫（俊成卿）

月さゆるみたらし川に影見えて氷にすれる山あゐの袖

○　大納言（實家卿）

百數や庭火たくよの朝くらに返す〳〵も神やなひかむ

○題不知　右京大夫（季能）

あさからぬちかひ思へは石清水すへたのもしき流れなりけり

○石清水の社の歌合に社頭の月をいふこゝろを　右京權大夫藤原（隆信）

よみはへりける

榊葉に霜もをきけり岩清水月のこほりの影さゆる夜は

○四位しはへりてのちの春石清水の臨時の祭の目内裏の事はてゝ舞人ともきたの陣にいてゝ侍りけるほとにあふきにかきて侍從家隆か許　左近衛少將藤原（定家朝臣）

立歸り猶そ戀しきつられこしけふのみつのゝ山あゐのそて

○かへし　侍從藤原家隆

やまあゐのしほれ果ぬる色なからつられし袖の名殘はかりそ

○きつきおほやしろにまうてゝよみ侍ける　寂蓮

やはらくる光や空にみちぬらし雲ゐをわくるちきのかたそき

いつも河ふるき湊を尋れハはるかにつたふわかのうらなみ

○嚴嶋社にまうでてうしまとのとまりにて海邊の松といふ心を人〳〵讀侍けるに　前左大臣

はる〳〵となきたるあさの岩かれにまつとはしるし宮島の神

○住吉の松に書付られける　前大僧正（覺圓）

神代より松のみとりのかはられは昔にあへる心地こそすれ

○　隆寛法師

うしとみる此世のほかに身も成ぬ月影きよきちきのかたそき

○後白川院天王寺に百日籠りまし〳〵ける時人〳〵すみよしにまうてゝ讀侍りけるによめる　大納言（實家卿）

すかはらや伏見ならねといさ爰に我世はへなん住よしのはま

○　右衛門佐

尋れ來て心のとまる住吉に岸うつ涙のなとかへるらん

○百首のうたよませ給けるに神祇の心を讀せ給ける　攝政前太政大臣

澄わたるみたらし川のそこみれは清きは神のこゝろのみかは

○賀茂にまうてゝ雪のふり侍けれはなにとなくむかしのとなとおもひ出て　大納言（實家卿）

庭の雪にむかしの跡を思ふにも出もやられぬしめのうち哉

○いまた中納言になられさりける時人〳〵まうてきて社頭の藤といふ心をよみ侍りける　左大臣

春日山はな咲ふちの中にまたひらけもやらぬ枝も有けり

○百首の歌の中に神樂のこゝろを　法性寺座主法印

神かきやして吹かせにさそはれて雲井になひく朝くらのこゑ

○かものみやの歌合に述懷のこゝろをよめる　前民部少輔源定家朝臣

さりともとたのむ心になくさむやかつ〳〵神のしるし成らむ

○三輪のみやの歌合とて人〳〵にうたよませ侍りけるときはるの歌とてよめる　殿富門院大輔

敷島やみわの山もとほの〳〵とかすむは春や尋れきぬらむ

○かものみやに百首の歌奉られける中に　皇大后宮大夫（俊成卿）

久かたの月のみやこもいかゝあらん賀茂のかはらの有明の空

きふね川岩こすなみも氷りぬて冬そしつかに月はすみける

○百首の歌中に神樂の心をよめる　隆信朝臣
みたらしに心をきよくすましつゝなを立かへるさゝ涙のこえ
○石清水社の歌合に寄神述懷といふ心を　法印(靜賢)
さゝ波の聲もあらすなふもの海にあき津島もろ神ならは神
○賀茂の宮の歌合にかすみの心を　法印(範玄)
神山は霞にけりな榊葉のかをとめてこそゆくへかりけれ
○春日の宮の歌合に社頭の月といふこゝろを
已講(範圓)
隈もなく月すみぬれは三笠山なへて梢にかくる白ゆ哉〔ふ〕
○春日の社に百首歌たてまつられける中に
皇太后宮大夫(俊成卿)
世をすては吉野のおくに住へきをなをたのまるゝ春か山かな
○攝政前太政大臣右大臣におはしましける時の
百首の歌の中に讀侍りけり　俊惠法師
三笠山こたかき藤のうら葉にはわきて春日もまつやさすらむ
○神祇歌とて　法性寺座主法印
もろ人のねかひをみつの濵かせに心すゝしきしてのをとかな
皇太后宮大夫(俊成卿)
ひえをやま岩きりとをす谷川のはやきしるしをなを頼むかな
○日吉社にて月をみてよめる　隆寛法師

玄玉和歌集卷第二六十四首

天地歌上

○月次の御屏風にすみよしにかすみたち渡れり

みたひまてこの下露にやとりこし光に色をそむる月かな
○北野社にて人〳〵歌よみ侍りけるとき時雨の
うたとてよめる　鴨長明
しめのうちは心してふれ村時雨ぬれきぬほしに人もこそくれ
○題不知　圓位法師
流れたえぬ波にや代をはおさむらん神風すゝしみもすその岸
さやかなる鷲の高ねの雲まより影やはらくる月よみのもり
○後白川院位におはしましける時やそ島まては
へりけるにすみよしにてよみ侍りける　紀二位
天皇の千代のみかけにかくれすは今日住吉の松をみましや
○松の歌とて　皇太后宮大夫(俊成卿)
うきなから久敷世をそ過にけるあはれやかけし住よしの松
○中宮月次の御屏風に五節參入書たる所を　左大臣
雲の上に玉ものこしを引つれてのほりそやらぬ天津をとめ子
○　左少將定家朝臣
白妙の天の羽衣つらねきてをとめまちとる雲のかよひ路
○同御屏風に神樂したる所をよませ給ける
攝政前太政大臣
神代よりなかく雲ゐにます鏡ひかりをかはす明星のこゑ

けるをよませ給ける　攝政前太政大臣
さひしさはなほ住吉の朝ほらけ松やはかすむ難波江のはる
○　左大將
なかめやる遠里をのはほのかにて霞にのこる春のかせかな

○霞の歌とて　皇太后宮大夫(俊成卿)
明石よりゐしまをかけてかすめとも霞の上も沖つしら波
○題不知　三位中將(公衡)
唐を霞のうちに思はせてまつらの奥の春の明ほの
○大原野にまうて〻松原の霞をみて
皇太后宮大夫(俊成卿)
春かすみ立にけらしなをしほ山小松か原のうすみとりなる
○攝政前太政大臣右大臣におはしけるとき歌合
せさせ給けるに霞のうたとて　太宰大貳(重家)
たちわたる春のかすみもわかれぬは煙になるゝしほかまの浦
○　寂蓮法師
立歸りくるとしなみや越ぬらん霞か〻れるすゑのまつ山
○　俊惠法師
たつのぬる擅ひのかたをみわたせは春の霞のみちにける哉
○百首歌の中に春の歌とて　法性寺座主法印
あつまには絶ぬけふりをたよりにてむろの八島やまつ霞らむ
○題不知　定家朝臣
思ふを誰に殘して詠をかむこゝろにあまる春の明ほの
○前左大臣家の十首歌中に遠村霞と云こゝろを
皇太后宮大夫(俊成卿)
朝戸あけて伏見の里になかむれは霞にむせふうちの川涙
(新勅)
○百首歌の中に霞籠行船といふ心を　寂蓮
中〳〵にみるめやよ所に成ぬらむ霞をかつくあまのつり舟
○歌合に霞の歌とて　三位中將(公衡)
大かたは絶てとなりもなけれとも霞につゝく春の山里
○題不知　俊惠法師

何とこは音羽の山のゆふ霞人めはかりのせきかたむらむ
○　隆信朝臣
分入し秋のけしきにかはれとも霞もふかし萩のやけ原
○　前左大臣
けふもまた花まつほとのなくさめになかめ暮しつ峯の白雲
○百首歌中に春の歌とてよめる　隆寛法師
命をはみれの霞にまかすへしみ山の雲よをのれかれなは
○　晴眞法師
山ふかみ世にふる道はたえぬれと峯の霞にはく〻まれつ〻
○　從三位(經家卿)
日にそへて立やかされむよしの山霞の衣またひとへなり
○　左大將
おほろ成そらに哀をかさぬれは霞も月のひかり也けり
○題不知　定家朝臣
梅花かすみにかほる春の夜はくもるも月の光りなりけり
○　前播磨守藤原隆親
何ゆへにかすむ梢をおもふらん花なきみれはさもあらはあれ
○望山待花といふこゝろを　皇太后宮大夫(俊成卿)
山さくら咲やらぬまは暮をにまたてぞみつる春のよの月
○賀茂の社の歌合に霞をよめる　顯昭法師
朝かすみきえ行まゝに高砂の松のみとりのふかくなる哉
○　覺盛法師
なるみかたとまり尋れて行舟を波まにやとすゆふ霞かな
○　藤原親盛
吉野河とをつかは風春めきて霞なかるゝ明ほのゝ空
○　俊惠法師

しめはへてしつのあらまく小山田の春のかこひは霞成けり　法橋宗圓
○題しらす
雪たにもまた消やらぬ柴の戸をかさねてうつむ春霞哉　藤原隆親
○ならの歌合に霞のこゝろをよめる
春霞へたてぬたにも行かよふ宿はまれなるみ山への里　顯昭法師
○海邊の霞といふ心をよめる
友ふねは霞にきゆるこしの海はるの波路はさひしかりけり
ゆふかすみ浦こく舟にかけてこそ難波の春はみるへかりけれ　朝惠法師
○歌合に霞のこゝろをよめる
東路やあさたつ空に詠れはかすみにしつむうき嶋のはら　太皇太后宮大進清輔
○題不知
朝かすみふかくみゆるや煙立むろのやしまのわたり成らん　大江公景
○
はるかせや岩間の氷ふきとけはまた末むすふ人も有けり　圓位法師
○
ふりつみし高根のみ雪とけにけり清たき川の水のしら波　左大將
○
千里まてけしきにこむる霞にもひとり春なき越の白山　大江公景
○
住よしの岸うつ涙とみゆるかな松の木かけに殘るしら雪　隆信朝臣
○百首歌の中に春雨をよめる
はれくもり定めなかりし空よりもしつかに袖をぬらす春雨　侍從家隆
○
行衛なくかすめる空に雨ふりてなかめもあへぬ春の夕くれ　攝政前太政大臣
○五月雨を讀せ給ける
五月雨はおふのかはらのまこも草からてや波の下にくちなむ　大納言（實家卿）
○
五月雨はいさら小河をたよりにて外面の小田を海になしつる　右衛門督（隆房）
○
五月雨はあさ澤をのもなのみして深く成行わすれ水かな　皇太后宮大夫（俊成卿）
○
さみたれは岩なみ洗ふきふれ川かはやしろとは是にそ有ける
五月雨は水上まさる泉河かさきの山も雲かくれつゝ　寂蓮
○資盛卿家の歌合に五月雨をよめる
花の春月の秋たに人とはぬしほの庵のさみたれの空　性我法師
○題不知
浦かせもしほたれにけりきさかたや雲のさまふく五月雨の比　素覺法師
○
山影の雫にゝころさらし井のゐつゝもみえすさみたれの頃　俊惠法師
○
五月雨に水かさまされはこやの池のあしのは末にかはつ鳴也　晴眞法師
○
夜さゝもにはれぬ心はさもあらはあれ　空に五月雨やせし　左少將定家朝臣
○百首歌中に五月雨を
山里の軒はの楢雲こえてあまりなとちそ五月雨のそら　覺盛法師
○
五月雨はつたの入江のみをつくし見えぬも深きこゝろし成けり　平康頼
○
さみたれはかつみか葉すゑ水こえて家路にまとふみつの里人　藤原親盛
○
日數ふるひらのみなとの五月雨にこかれといつるあまの釣舟　大納言（實國卿）
○泉留客といふ心を

堰とむる志水にかくるこゝからみはくる人をさへやらぬ也けり　三位中將（公衡）
○題不知
さらぬたにすゝしき松の下陰にせきかぬはかり出るまし水　家隆
○
せきかぬる山した水をむすふ手の雫に秋の露そこほるゝ　顯緣法師
○泉爲夏栖といふ心をよめる
故郷は岩もる水にすみかへてよもきや庭のあるし成らむ　皇太后宮大夫（俊成卿）
○題不知
道のへの清水なかるゝ柳かけこゝはしとてこそ立とまりけれ　圓位法師
○
○泉靜來枕といふこゝろをよめる
自から水の間もりくる日影こそさすかに夏のこゝろしなりけれ　俊惠法師
あか月に夜や成ぬらむ岩まもる水のこゝら玉音のすゝしき
瀧の糸の岩にみたるゝ音きけはまくらに秋そくる心ちする
○題不知
岩波の木すゑにかゝる心地してむすはまほしき庭の松かせ　皇太后宮大夫（俊成卿）
○御屏風に納涼したる所を
立とまるほとたにすゝし山の井に住らむ里の人をしそ思ふ　左大將
○
山陰やいつる清水のさゝなみに秋をよすなりならのした風　左大臣
○
自から水の間もりくる日影こそさすかに夏のこゝろしなりけれ
虫明のせゝの鹽ひの明かたになみの月かけ遠さかるらむ　前左衛門督（公光）
○
あたしのゝ花のえをにおく露のかすに影すむ秋のよの月　右衛門督（兼光）
○
秋風になひくをかへの玉さゝに露もてみかくゆふ月夜かな　參議教長
○
限りありて更るもおしき月かけのいかにせむとて雲かゝる覽　左大將
○
月たにもなくさめかたき秋のよの心もしらぬ松のかせ哉　皇太后宮大夫（俊成卿）
○法性寺にて十首歌人々よみ侍りけるに月の歌
月清み都のあきをみわたせは千里にしける氷なりけり　左大將
○攝政前太政大臣右大臣におはしましけるとき
歌合にせさせ給けるに月のうたとて

玄玉和歌集卷第三百四十一首

天地歌下

○月の歌とてよませ給ける　崇德院御製
貞管にいとひもはてしかはかりの月をたもてるこのよなり鳬
○　前左大臣
思ふもなくてなかめし昔たに月にこゝろの殘りやはせぬ　按察大納言（公通卿）
○
秋かせは夜さむ成とも月影に雲の衣はきせしとそおもふ　大納言（實家卿）
○題不知
空はれて月すみのほるうれしさやかたふくまゝの嘆き成らん　左大將
○百首歌中に月の歌とて
さらぬたにふくるはおしき秋のよの月よりにしに殘るしら雲　攝政前太政大臣右大臣
今宵たれすゝのしのやに夢さめて吉野の月に袖ぬらすらん

前右京權大夫(頼政)

遠かたやあさつま山にてる月のひかりをよするしかのうら涙

○題不知　刑部卿(頼輔)

秋のよは身のうき事そ忘れぬる月みるほかの心なけれは

○百首歌中に月のうたとて　三位中將(公衡)

世中をおもひはいれし袖の雨にたくは〻月のくもりもそする

なかむれは涙の玉にみか〻れて袖にそ月の色はみえける　侍從家隆

○歌合に月歌とて

大空もひとつにみゆる波の上を光にこむる秋のよの月

○田家曉月といふこ〻ろを讀せ給ける　二品法親王(仁和寺)

あけぬとはよひよりみつる月なれと今そ門田に鳴も立なる

○百首歌中に月のうたとて　法性寺座主法印

みか月のほのめき初る門田よりやかて秋なる空の通路

秋のよの月のあたりのむら雲をはらふとすれは狹の上風

おもひ入心のすゑに月さえてふかき色ある山のおくかな

○題不知　前右京權大夫(頼政)

秋のよもわかよもいたくふけぬれは傾く月をよそにやはみる

○　太宰大貳(重家)

月きよみ思ひそあへぬ山高みいつれの年の雪にか有らむ

○世をのかれてつきのとし秋月あかく侍りけれ　皇太后宮大夫(後成卿)

思ひきやわかれし秋にめくりきてまたも此よの月をみむとは

○崇德院百首歌の中に

月よりも秋は空こそ哀なれはれすはすまんかひなからまし

夢さめて後の世までの思ひ出にかたるはかりもすめる月かな

つゆしけき花の枝とにやとりけりのはらや月の光成らむ　法印(靜賢)

○

山端はわれもちかくや成ぬらんかたふく月をみるとせしまに　法印(範玄)

○

よひのまに月は入ぬる秋のよのなかき思ひはなくさめそなき

すみのほる心にたくふ身なりせは山のあなたの月はみてまし　法橋(覺範)

○

月みれは秋の心もわすられてまはしよそなる葛のうら風　隆信朝臣

○月前遠情といふこ〻ろを

さらしなやおはすて山もまたみぬに思ひまらする夜半の月哉

○皇太后宮大夫(後成)十首歌人〳〵によませ侍りけるに月の歌とてよめる　前民部少輔盛方朝臣

はりまかた明石のせとにすむ月の　寂蓮

○百首歌中に月のうたとて

いひしらすせめても月の冴る夜はうす霧わたるをはすての山

天河月や波まのみをつくしふかきあはれをよそにみすらん

うらやまし空行月のみや人と身をさためてもすめはすむと　法性寺座主法印

○

なかめこし心は花のなこりにて月に春あるみよしの〻山

清みかた月のひかりのさえぬれは波のうへにもしもは置けり　少納言藤原有家朝臣

○

秋のよは野中の清水ぬるけれと月すみぬれはつら〻ぬに鳬　性我法師

○百首歌中に月歌とてよめる

木のまより月かけおちぬ暮たにも秋にたゆへき我こ〻ろかは　右近衛少將藤原成家

○題不知

月のすむ清瀧川はこほりして岩こすなみのをとそかはらぬ

○　前伊豆守源仲綱

早き瀬も流れさりけり月影はをのかつら〻をしからみにして

○　隆信朝臣

何事をおもふともなき人たにも月みるたひになかめやはせぬ

○　家　隆

よしさらは心はつくせ秋の月いりなん後のものもおもはし

○崇德院さぬきの國におはしましける時修行の

つひてに參りて月のあかく侍りけるよよみて　寂　蓮

奉りて侍りける

昔みし月は雲ゐの影なから庭はよもきの露そこほる〻

○　民部權少輔藤原知資

よる涙もひとつ哀にさえゆけは月にをとあるよさのうら風

○藏人おりてのちの秋月をみてよめる　源仲綱

なかむれはぬる〻袂にやとりけり月よ雲井の物かたりせよ　隆信朝臣

○題不知

くまもなく月すむ峯になかむれは千里は山のふもと也けり　藤原知資

○

里すみて待よもふけぬ秋の月有明の空をいかにせよとて　法印(靜賢)

○石清水の歌合に月の歌とて

おもひきやわかのうら風みにしめて吹上の濱の月をみむとは　法橋(宗因)

○題不知

松かせに月かけよするしら波のかへるもおしきしほかまの浦

これもみるうき世のなかの夢の中に思ふもおしき夜半の月哉　信詮法師

○

はかなくも草葉の露にやとりつ〻月さへもとの雫とそなる

○攝政前太政大臣右大臣におはしましける時歌　俊惠法師

合させ給けるに月のうたとて

照月のすむへき夜半に成ぬれは雲もこ〻ろは有けるものを

○中宮月次の御屏風に月池にうつりたる所をよめる　左少將定家朝臣

あまつかせみかく雲井にてる月の光をうつすやとの池水　寂　蓮

・○　歌とて

月影はいと〻隈なく空さへて秋の雨ふる松のかせかな

月さゆるみほか崎まて見わたせは氷をとをるしかのうら波　覺　蓮

○曉月のこ〻ろをよめる

何となく明ぬとつくる鳥の音もうらめしきまてすめる月哉　道　因

○

山のはに雲のよこきる宵のまは出ても月そなをまたれける

身につもるわかよの秋のふけぬれは月みてしもそ物は悲しき　因(圓カ)位法師

○

すつとならは浮世を厭ふしるしあらん我みは臺れ秋のよの月

かくれなくもに住むしはみゆるとも我から臺るあきのよの月

うき世にはほかなかりけり秋の月なかむる儘に物そかなしき　源　季　貞

○

いにしへにかわらぬ月のかけみれは共になかめし人そ戀しき　藤原公信

○

なかむれはあはれをそむる秋のよの月そ心の色はそめける　大中臣定雅

○

秋の田のかりねの床のいなむしろ月やとれともしける露かな　惟宗廣言

○田家見月といふこ〻ろをよめる

よもすから稻葉の風を身にしめて外面の小田に月をみるかな　中原有安

○題不知

かくはかりむかしを忍ふ心をは月みる夜半の袖そしりける　殿富門院新少納言
○
影きよみ立よる波のかすとに月もてあそふよさのうら風　大輔
○
はかなくて雲と成なんよなりともたちはかくさし秋のよの月
打はらふ枕のちりもくもりなくあれたるやとのてらす月かけ　皇嘉門院別當
○
なかむれは月には袖のぬるゝやと物おもひなき人にとはゝや
○左大將家の百首歌の中に月のうたとてよめる　左少將定家朝臣
床の上のひかりに霜のむすひきてやかてさえ行あきの手枕
月きよみはれうちかはしとふ鳥の聲あはれなる秋かせの空　太皇大后宮小侍從
さらしなはむかしの月のひかりかはたゝ秋風そおはすての山
○月前遠情といふ心を
いとふらむくめちの神のけしきさへ面かけにたつ夜半の月哉　攝政家丹後
○百首歌中に月歌とて
きよみ潟なきたるおきに漕出て雲なき夜半の月をみるかな　藤原兼康
山のはにをくる心の色にいてはあらぬかけそふ月かとやみむ　法性寺座主法師
○
有明の月の行えをなかめてそ野てらの鐘はきくへかりける
山のはにあかて入ぬる月かけは松のあらしにのこるなりけり　左大將
入ぬれと涙の露に影とめて月はたもとに有明のそら　左少將定家朝臣
○
秋そかしこよひはかりのねさめかは心つくすなあり明の月
ひとりねの夜さむになれる月みれは時しもあれや衣うつこゑ　太皇大后宮大夫俊成
うき世いとふこゝろのやみのしるへかな我思かたに有明の月
○百首歌中に月歌とて　皇太后宮大夫俊成
月みれはなくさめかたしおなしくはなをはすて山の都なりせは
○師光家の歌合に月歌とて　俊惠法師
久方の天のかはらに雲きえてなきたる夜半の月をみる哉　左少將定家朝臣
○百首歌中によめる
さむしろに待夜の秋のかせふけて月をかたしく宇治のはし姫
月清みれられぬよしも唐の雲の夢まてみる心地する
さひしやな明石の月に秋くれて波のこなたに衣うつこゑ　登蓮法師
○題不知
月影に盞みちくれは難波かたうたひて出るあまのつり舟
清みかた月すむ夜半の浮雲はふしの高ねの煙なりけり　信定法師
○河上月といふ心をよみ侍りける
よしの河岩こす波にやとりきて光をくたく秋のよの月　寂因法師
○故郷月といふこゝろを讀る
さひしけや世になか岡の里ふりてあれたる露にひとりすむ月　大納言(實家卿)
○海邊の月といふ心を
もしほやく烟なたてそあま人の明石の月のくまともそなる　圓喜法師
○古池月といふこゝろを讀る
かつまたの池はあさちとあらはれて露にそやとる秋のよの月　源資清
○題不知
卷向のあなしの宮にたつ民の山かつらとる秋の夜の月　素覺法師
・○
難波かた葦のはかくれすむあまのこやもあらはに照す月かけ　朝惠法師
○海上月をよめる
わたの原しほちはるかにすむ月のいつるも入も興津しら浪　寂念
○殿上まうしけるとき月をみてよめる
すみのほる心はおなし空なからよそに雲ゐの月をみるかな

○題志らす
難波かたあしまを分てこく舟のをとさへすめる秋のよの月　寂超
○
このよゝり哀と思へ秋の月なかめてよはひかたふける身そ
○故郷月といふこゝろを
ふる里のやともる月にことゝはむ我をはたれや昔すみきと　藤原兼康
○歌合に海上月といふ心をよめる
もろ共になみの上にそ出にける月はいつくかとまり成らむ　隆寛法師
○海邊月といふ心を
さ夜ふかき月の白なみ峯こえていつらはおきのあはちしま山　法橋忠慶
○歌合に月歌とて
扨もなをすみはつましき物ゆへに月にこのよのおしまるゝ哉　素覺法師
○
なかむれはれやも忘れぬ有明は月みる人の名にこそありけれ　平康頼
○三輪の社の會に月歌とてよめる
世をすては我も入へき山端にまつかくれぬる夜半の月かな　律師(證雪)
○題不知
さらぬたに西に心はすむ物をかたふく月のなにさそふらん　圓位法師
○
身にしみて哀志らするかせよりも月にそ秋の色はみえける
うき身こそいとひなからも哀なれ月をなかめて年のへにけり
月みはと契をきてし故郷の人もやこよひ袖ぬらすらむ　攝政前太政大臣
いつくとて哀れならすはなけれともあれたる宿そ月は淋しき
くまもなき折しも人を思ひ出て心と月をやつしつるかな　左大將
○世をのかれてはへりける比月のうたとて讀る　寂超
有明の月よりほかに誰をかは山路の友と契りをくへき　寂然
○題志らす
かくしつゝ我世も更ぬ月かけのかたふくをのみ嘆くへきかは
○山路曉月といへる心をよみ侍りける　性我法師
月にふくみれの松かせ音さひし色なおしみそ有明の月
○中宮の月次の御屏風に山野に秋風ふきたるとこころをよませ給ける　攝政前太政大臣
野原より秋の哀をさそひきて籬の萩に風つたふなり　前左大臣
いつも閑麓のさゝ思へともきのふにかはる山嵐のかせ　隆信朝臣
○三輪社の會に秋の歌とて
を鹿なく小萩かはらに月さえてなかむる袖に秋風そ吹　源清員
○題不知
なにそとてきえにし人のあさなれや玉しく庭の道芝の露　攝政前太政大臣
○月次の御屏風に霧をよませ給ける
常よりもふかくたくもの煙かな鹽屋をこめて霧や立らん　隆信朝臣
磯つたひそこともみへぬ秋霧に立こめられぬ波の音かな　左大將
○百首歌中に秋のこゝろを
山賤のたにのすみかに日は暮て雲のそこより衣うつなり　三位中將(公衡)
○句を定て百首歌人〳〵よまれ侍し中にいなつ
まといふかみのを葉有題の心を
いな妻のひかりにまかふ山端にほとなくかよふわか心かな　左少將定家朝臣
○
稻つまの光もいまはよはりけりたのもの風の聲はかはらて

○題しらす
むら雲のたえまのかけににし立てしくれ過ぬるをちの山きは　大納言（實家卿）
○遠村擣衣といふ心を
これやこの朝けのけふり棚引てみへつる里に衣うつこゑ　右京大夫（季能）
○題不知
霧こめて秋のあはれやみえさらむとふ人もなきみ深山への里　圓經法師
○田家夕風といへるこゝろをよめる
をとつれよ友はいな葉の風そかしひた打いほの秋の夕くれ　圓位法師
○題不知
人とはぬ霧のまかきをいかゝせむならはぬ宿の住ぬ成せは　清輔朝臣
○
霧のまに明石のせとに入にけりうらの松風をとにしるしも　寂然
○
きり深き淀のわたりの明ほのによするもしらす舟よはふ聲　侍從家隆
○百首歌中に秋の歌とてよめる
あれはて〻野原につゝく花の色をもとのまかきにこむる霧哉　侍從家隆
○あさちに露おもしといへる心をよめる
をく露になれふす庭のあさち原するゑはにもとの雫をそみる　寂蓮
○霧隔行舟といふ心をよめる
いせしまやいそらか崎の朝霧にたなゝしを舟こき隱れつゝ　前齋院長官源有房
○題不知
哀いかに草はの露のこほるらん秋風たちぬみやきのゝはら　圓位法師
たれすみてあはれしるらん山里の雨ふりすさむ夕暮の空　法性寺座主法印
○
もしほやく煙も霧にうつもれぬすまの關屋の秋のゆふくれ　二條院參河内侍
大かたの峯ふく風に霧はれてかゝみの山に月そくもらぬ　圓經法師
難波かたうらさひしきは秋霧のたえまにみゆるあまのつり舟　侍從家隆
○
今よりは雪ふりつまむみ山路に冬をこめてもうつむ霧哉　侍從家隆
○高野にこもりて侍ける比大原の寂然かもとに
山ふかみといふ十首の歌よみてつかはしける　圓位法師
中に
山ふかみ槇のはつくる月影はほけしきものすゑき成けり　寂然
やまふかみさこそあらめと聞えつゝをと哀なる谷川のみつ　前左大臣
○
袖ぬらすさよのね覺の初しくれおなし枕にきく人もかな　崇德院御製
○題不知
木からしに紅葉ちりぬる山めくり何をしくれの染むとすらん　皇太后宮大夫（俊成）
○
そてぬらす雄島か磯のとまり哉松かせ寒く時雨ふる也　定家朝臣
○百首歌中によみ侍りける
霰ふる賤かさゝやよそよさらに一夜ほかりの夢をやはみる　侍從家隆
○
くもる夜やなかめはれん有明の月は秋にうちしくれ鳬　隆寛法師
○
霜寒きかせのまかきに時雨してさひしき色をそむる山里　崇德院御製
神無月もの思ふやとのむらしくれたえまをつくは涙也けり　中原仲業
○百首歌中に霜の心をよめる
これや此玉かとみえし露ならん草葉にしろくをける初しも　源仲賴男童
○山寺時雨といふこゝろをよめる
吹まよふ嵐くれぬる初瀨山しくれにくもる入あひのこゑ

○題不知
木の葉ちる外山のおくに風ふけは時雨にはる〻冬のよの月　圓經法師
○
秋篠やとやまのおくやしくるらん伊駒のたけに雲のかゝれる　圓位法師
月をまつたかれの雲もはれにけり心あるへき初しくれかな　俊惠法師
○
月をこそ哀とよひになかめつれくもるしくれも心すみけり　三位中將（公衡）
みよしの〻山かき曇り雪ふれはふもとの里はうちしくれつゝ　覺盛
○
むら雨の山めくりして吹かせに木のはしくる〻夕暮の空　鴨長明
○
時雨すと梢にみえしかた岡のならの落葉に霰ふる也　隆信朝臣
○宇治にとまりて侍りける夜山風いたく吹て月
のくまなく侍りけれは法性寺座主法印御もと
に十首の歌讀て奉りける中に　定家朝臣
杉の屋やのゆきあはぬまよりをく霜に結はぬ夢も月に成ぬる　左大將
○是を見給て
霜さゆる杉の板屋のめもあはすさこそは袖に月こほるらめ　定家朝臣
○同十首の中に
か　のひ〻きにたにもなれぬ身のこれさへつらき山颪哉　法性寺座主法印
○かへし
おとすへき木のは落ぬる山風をなみにかくさぬうちの川霧　左大臣
○
秋の色の今はのこらぬ梢より山かせおつる宇治の川なみ　印
○同時あまたはへりける返事の中に　法
かりそめと君はみるらむ我宿のいほ哀なるうちの山かけ
○百首歌中に
すきぬるか嵐にたくふむら時雨竹のさ枝にこゑは殘りて　左大將
大井川せゝの岩なみをと絶てぬせきの水に風こほる也　皇太后宮大夫（俊成）
しかの山梢にかよふ浦風はこほりにのこるさゝ涙のこゑ　皇太后宮大夫（俊成）
○題不知
かつこほりかつはくたくる山河の岩まにむせふ曉のこゑ　三位中將（公衡）
○
霜かる〻萩のはわたる風とても哀はあきにかはらさりけり　隆信朝臣
かりくらしかたの〻眞柴折しきて天の川せの月をみる哉　隆信朝臣
ゆふ暮は絶ぬ清水もつら〻ぬてをさへとまる逢坂の關　隆信朝臣
○
片岡の眞柴おりしきさぬるよを所もをかすふるあられかな　隆信朝臣
霰ふるは山かすその柴の庵に夢みしとてはすまさりし身を　隆信朝臣
萩のをとは風にのみやは聞えける朽葉かうへに霰降なり　源資清
○百首歌中に霰の心をよめる
たか庵のまさろむ夢を殘すらん霰ふる也のちの篠はら　橘惟村
○題不知
雪つもるよしの〻山の明ほのや雲にまかひし花のおもかけ　宴信法師
○遠山の雪といふ心をよめる
かつらきの高まの山やこれならん雲より上にみゆるしら雪　寂圓法師
○山居雪深といふ心をよみ侍る
さひしとてまたいとふへきすみかゝは通路のこせ山のしら雪　寂圓法師
○攝政前太政大臣右大臣におはしましける時歌
合せさせ給けるに雪歌とて　皇太后宮大夫（俊成）
たつぬへき友こそなけれ山陰や月と雪とをひとりみれとも
○中將に侍りける時雪の夜月またいとあかく侍

りけれは大内の女房あまたくして法性寺のかたに行侍りてそのつぬてに師光の家に立いりていさなひ侍りけれはまもりてよもすからあそひて歸侍てのちいひつかはしける　右衞門督(隆房)

あはてこそむかしの人は歸りけれ雪と月とをともにみてしか　右京權大夫源師光

○返事

月冴る雪かき分てとふにこそふるにかひある身とはしりぬれ

○中宮月次の御屏風に雪ふりたる所を　左大臣

雪ふりて所もわかすさく花はこすえも庭もさかりなりけり　左大將

○

なかめやる心のみちもたとりけり千里の外の雪の明ほの

○同御屏風に氷を

池水にさゆるひかりをたよりにて氷は月のむすふ成けり　隆信朝臣

○

をしのぬる池の汀の薄氷ふかき契をむすふなりけり　中納言(長方卿)

○題不知

宮木ひくそま山人は跡もなしひはら杉原ゆき深くして　中納言(親家卿)

○

ふる雪のひましらみぬといそき出て明こそやられ野原しの原　宰相中將(公時卿)

○

山里のあさけの水もいかゝせむそともものをかは氷しにけり　右京大夫(季能)

○

をしなへて氷とぬれはあすか川冬や淵せもかはらさるらむ

○泉侍りける家に住ける女の許に夏比ゆきて住るとせられける程に何となくてかき絶られて

侍りけれは其年の冬頃女の許より云つかはしたりける　讀人不知

をのつから思ひ出やと待ほとにむすひし水もつらゝぬにけり

○返事　民部卿(成範卿)

心にもまかせぬ宿のまし水はとゝこほらてもいかゝすむへき

○歌合に冬月といふ心をよめる　前右少將(公重朝臣)

月かけのかされてさろくみゆる哉更行まゝに霜やをくらん

○題不知　清輔

をのつからをとする物は庭の面に木葉ふきまく谷の夕かせ

はつ雪にわれとは跡をつけしとてまつ朝たゝむ人を待哉

○殿上のをのことも曉望山雪といふ心をつかう　高倉院御製

まつりけるに讀せ給ける

音羽山さやかにみする白雪を明ぬとつくる鳥のこゑかな　性我法師

○題不知

清見かた汀の月に冬さえて雪打はらふ波のせきもり　皇太后宮大夫(俊成)

○

濱ゆふもいくへかしたに成ぬらん霧ふり蔑るみくまのゝうら　師光

○

雪つもるひらの高れの山おろしに木末もみえす谷の埋木　侍從家隆

○

きさ山のふゝき分ける衣手に何いとひけむ秋のはつ霜　隆信朝臣

○

中〳〵に雪にはあさく成にけり木葉を分し冬の通路　寂然

○大原にて雪の歌とてよめる

尋れきて道分わふる人もあらしいくへもつもれ庭のまち雪　侍從家隆

○百首歌中に冬の心をよめる

冬きては峯の柴屋も物さひて雲のまかきをはらふ木枯

たかいほのれ覺の窓にたちむらん雪降つもる岑の明ほの

秋の色をさてしも人にみするかはかれの〻冬をうつむ白雪　崇德院御製

○

晴ぬれと枝もとをくにたつりしてこの下かけはなを雪そふる

○百首歌に氷閉瀧水といふこゝろを　寂蓮

石はしる音は氷にとちられて松かせ落る布引のたき

○題しらす　隆寛法師

ふる波をつらゝの上にむすひきていくへかされつまの〻浦風

○　空仁

花の春もみちの秋もしるかりし松の木すえもみえぬ白雪

○　惟宗廣言

冬されのあさちかうへにをく霜のきゆる雲はたかひ也けり　侍從藤原公仲

○海邊の雪といふ心をよめる

すまの蜑の鹽屋も雪にうつもれてたくもの煙ゆく方もなし

○仁和寺二品親王雪の朝遍昭寺におはしまして

人〳〵歌よませ給けるによみ侍りける　顯昭法師

玉すたれむかしをかけてふる雪に山さへけさは信夫もちすり

○大原の寂然かもとにいひつかはしける　圓位法師

おほはらはひらの高れのちかけれは雪ふる程を思ひこそやれ　法橋(覺範)

○題不知

冬かれのおはなかそれに霜さえて月影さむしまの〻浦かせ　法橋(宗圓)

○

霰ふるゆらの御崎をなかむれは玉しく礒にさゆる月影　性我法師

○山家冬月といふこゝろをよめる

柴の庵は軒のたるひにとちられてわつかにそもる冬のよの月

○あしまの冬の月といふ心をよませ給ける　後入道親王

いせの海しほみちくれは濱荻のひまにたゝよふ冬のよの月

○百首歌中に冬の心をよませ給ける　前齋院

玉の井の氷のうへにみぬ人や月をは秋のものといひけむ

○有明の月いとあかく侍りけるをみて大原宰相入道

あへへす雪ふり侍りけるをみて大原宰相入道　讀人しらす

修範卿のもとにいひつかはしける

月かけやあまきる空にみたるらん光ちりくる雪のあり明　入道參議(修範)

○返し

有明の月にまかへる雪の色も深き山路はまさるとをしれ　左大將

○山家冬情あまた侍けるなかに

みせはやな氷れる露にかけとめて庭の木のはにやとる月影

風寒み庭のやり水こほりぬて松にのこれる岩涙のこゑ

柴の庵のあらしにたへぬあれまよりさえ行月に床をまかせて

あともなき庭はかれの〻けしきにて心の道も霜埋むなり

都にはもくれしほと〻おもふよりまつ此里のゆきの明ほの　法性寺座主法印

○

ひきかへてさひしさかくのへの月氷らぬ露にやとりし物を

山川のをのかなかれに氷ぬて松のこすゑに岩たゝく涙　定家朝臣

○

露こほる木のはのしたに跡とちて月や山路の色うつむらん

○百首歌中冬歌とて　皇太后宮大夫(俊成)

遠かたや都のたつみ誰すみて槇のすみかにけふり立らむ

すみかまのをのか煙の雲さえて雪ふれは又まよふやま人　侍從家隆

○

山ふかみやくすみかまに立けふり絶すみゆるもさひしかり鳧　参議教長卿
○たいしらす
よそにみるひちの高れの雪なれとさゆるは床の物にそ有ける　藤原季定
○
板まあらみねやに霰のもりこすは枕にゆめを殘さましやは　晴眞法師
○百首歌中に冬の心をよめる
れやのうへ霰たはしる曉はさめぬうつゝもおとろかれけり　法性寺座主法印
○
霰ふる賤かゝやゝの板ひさしうつゝの夢を殘さましやは　信　光
○氷を

物おもふ枕のしたのうす氷いかなる春かとけむとすらん　寂　蓮
○山家送年といふ心をよめる
立出てつま木をこりしかた岡の深き山路と成にけるかな　三位中將(公衡)
○山家心を
つゐにわかすむへき庵をわすれは心のうちに山もありけり　清輔朝臣
山里はとはぬ人をそうらみつるくすのかれはに霰ふる也
○河水久澄といふをよめる
年へたる宇治のはしもりことゝはむいく代になりぬ水の水上　信　光
○百首歌中佛寺歌とでよみ侍ける
初せ山かはらのこけに霜ふけてさひしくひゝくかれの音かな

玄玉和歌集卷第四　四十六首

時節歌上

○伊勢の御社に百首歌奉られけるに立春の心を　皇太后宮大夫(俊成)
いつしかと霞の衣立かけてみもすそ川にこほりとけゆく
○百首歌中に同心を
あまの戸の明るけしきもしつかにて雲ゐよりこそ春は立けり　圓位法師
○
岩まとちし氷もけさはとけそめて苔のした水道もとむ也　右京權大夫(隆信)
○
あふ坂の關の清水のうす氷とくるや春のこゆるなるらん　前左大臣
○
久かたの天のかく山てらす日のけしきもけふそ春めきにけるきのふかもあはとなかめし淡路島春としなれはかすみ一むら　法性寺座主法印
○百首歌中に同心を
朝またき春の霞はけふたちぬくれにし年やをのかふる里　二品親王(仁和寺)
○立春の心をよませ給ける
年なみの立かへりぬるをろしあれや氷し水もしたむせふ也　俊惠法師
○中院の右大臣家の會に立春のこゝろをよみ侍りける
今朝みれはこやの池水うちとけて氷そ春のへたて成ける　信　光
○おなしこゝろを
春といへは霞にけりな昨日まて波まにみへしあはちしま山　左少將定家朝臣
○中宮月次の御屏風に小朝拜かきたる所をよみける
霞しく春のはしめの庭の雨にまつ立わたる雲のうへ人　掃政前太政大臣
○百首歌中に同心を
春たては霞はかりはみとりにてまた雪白し三吉野の山　登蓮法師
○前左大臣家會によみ侍ける
かすみ立春のみそらと思はすはけふも雪げの雲とみてまし　俊成卿家
○俊成卿家の十首歌中に立春のこゝろを人々よみ侍ける
おほつかな空に心やかよふらん霞もはるもけふこそはたて　前中納言(師仲卿)
○
冬こもるふしの〻山のいはやには苔のしつくに春やまるらん　前右京權太夫(頼政)
○
あふさかの關ふきこゆる春風にをかはの氷今やとくらむ　源行頼朝臣
○
春やきて雪の下水さそふらんふしのなる澤をとまさる也　源　仲　綱
○
春はけさこえぬと思に逢坂のせきの杉むらなをかすむらん　俊惠法師
○
東路をまた夜をこめてくる春はまのふの里を立やまぬらん　顯昭法師
○太輔かよませ侍ける百首の中に立春の心をよめる
春風の吹くるまゝにしかのうらの涙にもかへるうす氷かな　侍從家隆
○春自東來といふ心をよめる
こゝろをやとゝめて春も過つらん清見か關のあけほのゝ空　顯昭法師
○題不知
春はまた汀にかへるをとす也遠さかりにしまかのうら波　圓賢法師
○山家立春といふ心を讀る
解そむる岩まの水をまろへにて春こそつたへ谷のかけひを　藤原公信
○百首歌めしける時子日の心をよませ給ける　崇德院御製
子日する春の〻毎に尋ぬれはまつにひかる〻心ちこそすれ
○月次の御屏風に野邊の小松原に子日したる所を長保の昔をおもひて　左大臣
千代ふへき春日の〻への姫小松なかくたもてるためしにそ引
○百首歌中に野歌とて　皇太后宮大夫(俊成)
春日野は子日わかなの春のあと都の嵯峨はあき萩の時
○子日こゝろをよみ侍ける　左中將源(有房朝臣)
のへみれはまたふた葉なる姫小松いつくに千代のかす籠る覽　藤原家隆
○
子日してけふひき殘す小松原われとや千世のかけを待らん　法性寺座主法印
○三月盡の心を
紅に霞の袖もなりにけり春のわかれのくれかたのそら　皇太后宮大夫(俊成)
ゆく春の霞のそてを引とめてまほろばかりや恨かけまし　三位中將(公衡)
○百首歌中に同心を
花の色はこゝろのそこに有物を霞をさそふ春のくれかな　法橋宗圓
○題不知
ふしなれし夜とこあらして驚の今は音せぬ春のくれ竹　前中務大輔藤原仲綱
こぬまても花ゆへ人のまたれつる春も暮ぬるみ山への里　左大將
○月次御屏風に更衣したる所
けふよりは千世をかさねんはしめとてまつひとへなる夏衣哉　藤原大納言(定國)
○更衣心を
おもひなく花色ころもぬくはかり染し心のまつかはれかし

○　　小侍從
おしみこし花の袂はそれながらうき身を更る今日となりはや
○　　前左衛門督(公光)
よのうさを我身ひとつにかさぬれは薄き衣はたつかひそなき
○　　加茂神主重保
けさみれは霞の衣たちかへて山もひとへにうすみとりなり
○　　道圓
かさりあれは衣はかへつ花にそむ心そ春のかたみなりける
○菖蒲歌とて　　顯昭法師
宿ことにつまと成ぬる菖蒲草もとのふとのは跡や絶ぬらん
○六月祓の心をよませ給ける　　後入道親王(仁和寺)

玄玉和歌集卷第五　六十四首

時節歌下

○初秋のこゝろをよませ給ける　　崇德院御製
いつしかと荻の葉むけの偏りにそゝや秋とそ風もつくなる
○　　圓位法師
をしなへて物を思はぬ人にさへ心をつくすあきの初かせ
○秋立日前大僧正(覺□)の御もとに申遣して侍りける　　俊惠法師
物をにさひしさまさる秋の暮はとはぬ人さへうらめしき哉
○かへし　　前大僧正
とへかしと思ひもよらすさひしさは我宿からの物とをりつゝ
○山家立秋といふこゝろを　　法印靜賢
吹風にをはのとほそをたゝかせてむくらの宿に秋はきにけり
淵もせにかはる流れに禊して憂きもかくてはやましとそ思ふ
○百首歌に同心を　　皇太后宮太夫(俊成)
禊する麻のたち枝のあをにきてさはへの神もなひけとそ思ふ
○隔秋一夜といふ心を讀る　　源季貞
みそきする川瀨の風の身にしむは明るをまたて秋やきぬらん
○六月祓の曉といふ心をよめる　　藤原資俊
なこしするとなせの風の涼しきは秋のかたにやよは成ぬらん
○月次御屏風に六月祓を　　前宮內卿(季經)
御祓してたつるいくしの河風になひくや神のこゝろ成らむ
○　　攝政前太政大臣
みそきするかへさを秋やむかふらん袂にふけぬ夜半のかは風
○百首歌中に初秋の心を　　皇太后宮大夫(俊成)
今朝みれはさかのゝ露も色つきて嵐の山に秋かせそふく
○海邊初秋と云心を　　右兵衛督(兼光)
いせしまやふくもの煙さそひきて浦つたひする秋の初かせ
○旅泊初秋といふこゝろをよめる　　寂蓮
みなと河おなしうきれの涙の音もけさ立かはる秋のはつかせ
○百首歌中に初秋の心をよませ給ける　　前齋院
秋きてはいくかもへぬを吹風の身にしむはかりなりにける哉
○題不知　　中納言(長方卿)
あき立てことそともなくかなしきは荻のはそよく夕暮の空
○人〳〵によませ侍りける三輪の社の會に初秋のこゝろを　　大輔

朝またきひはらを分る山風の身にしむこれや秋のはつ風
○　　左衛門督(通親)
秋といへは心の色もかはりけり何ゆへとしも思ひそめれと
○百首歌に初秋のこゝろを　　三位中將(公衡)
きゝなるゝ松の嵐も秋たてはいかなる色のこゝろにそふ覽
○初秋の心をよめる　　性我法師
あれゆかむけしきもしるしすかはらや伏見の里の秋の初かせ
○　　前右衛門佐藤原資持
秋かせの吹はまつちる涙かな萩のうはゝの露ならねとも
○立秋のこゝろをよめる
今朝みれはふしみの里のいなむしろかへしそゝむる秋の初風
○早秋忽涼といふ心をよみ侍ける　　左中將公經朝臣
うちをかぬ心は夏にかはられとあふきのすゑに秋はきにけり
○崇德院百首歌中に初秋の心を讀る　　右馬權頭實清朝臣
葉はふ宿にしもこそをら露のたまもてかさる秋はきにけれ
○初秋の心を讀る　　信光法師
袖のうへはふるきおもひの宿なるを露あらたむる秋の初かせ
○七夕のこゝろを讀せ給ける　　崇德院御製
天川やそせの波もむせふらん年まちわたるかさゝきの橋
○　　皇太后宮大夫(俊成)
たなはたのとわたる舟のかちのはに幾秋かきつ露の玉つさ
○　　清輔朝臣
けふはかり天の河かせ心せよ紅葉のはしのとたえもそする
思ひやるけさのわかれは天川わたらぬ人のそてもぬれけり
○　　定家朝臣
長月の有明の月のあなたまてこゝろはふくるほし合の空
○　　俊惠法師
たなはたのたえぬ契りをうれしとも今宵はかりや思ひ知らん
たなはたのわかるゝけふの袂にやあきの白露をきはしむらむ
○　　道因
七夕はあすのわかれをなけくまに逢よの袖やかはかさるらん
○　　大輔
織女の暮をまつまはあちきなく雲のよそなる心地こそすれ
○　　刑部卿(賴輔卿)
天河わたるこよひや棚機は中〳〵袖をぬらさゝるらむ
○二條院御時御前にて七夕の夜歌よむへきよし　　參河內侍
仰られけれはよめる
雲井にてなかむる折そ天河ほし合の空はるけかりけり
○五十首月歌の中に十五夜の心をよめる　　定家朝臣
いく里か露けき野へにやとかりし光ともなふ望月の駒
○　　寂蓮
もろこしの山路たつねてすみそめしむかしや思ふ秋のよの月
○　　圓位法師
秋はたゝこよひ一夜の名成けりおなし雲ゐに月はすめとも
かそへれと今宵の月のけしきにも秋の半を空にをる哉
○法印(範玄)にくして逢坂の關に行て十五夜の月みを侍りて讀る　　尋玄法師
逢さかの關の清水にやとりてやこよひの月は名をとゝめけん
○隆信朝臣家の會に兼思十三夜月と云心を　　隆寛法師
折しもあれ秋暮かたに名をとめて人の心にかゝる月かけ
○九月盡のこゝろをよみ侍りける　　寂蓮

ゆく秋をおしむにさよのふけぬれは袂よりこそ時雨そめけり　皇太后宮大夫(俊成)
○
暮わたる夕の空をなかむれは雲こそ秋のなこり也けれ
○九月盡の日ものにまかれりけるに旅のとまり　民部卿(成範卿)
もあはれに覺て侍りけれは
草枕こよひはかりの秋かせにことはりなりや露のこほるゝ　道因
○
しら露を秋のかたみとみるへきにあすは霜にや置かはるらん
○藤大納言(實國卿)家の歌合に九月盡の心を讀る　俊惠法師
けふこそは秋の哀をなかめきて心つくしのはてには有けれ　法印(靜賢)
○おなしこゝろを
浮世をは我もさこそはあきはつれことはりなくも惜きけふ哉　藤原知資
○
あかさりし有明の月の名殘まておもひつゝくる秋の暮なか　皇太后宮大夫(俊成)
○
行秋のかへる雲井をなかむれは夕の空も波路なりけり　定家朝臣
○百首歌中に秋のくれの心をよめる
よをかさね身にしみまさるあらしかな松の梢に我やすくらん　顯昭法師
○
雲路をや暮ゆく秋はかへるらんしたふ心のそらになるかな　清輔朝臣
○九月盡の日時雨のし侍けれはよめる
大空も秋の哀をおもふらん今日のけしきはうち時雨つゝ　左大將
○題不知
眞葛原秋かへりぬる夕暮は風こそ人のこゝろなりけり　左大將
○崇德院百首歌中に初冬の心を　皇太后宮大夫(俊成)

いつしかと冬のしるしに立田川紅葉とちませうす氷せり　二品親王(仁和寺)
○同心をよませ給ける
冬きぬと水の心やしりぬらむ谷風さむみつらゝぬにけり　法性寺座主法印
○
さひしさよ秋はくれぬといひかほにみな山里は冬の夕くれ　三位中將(公衡)
○
神無月冬のしるしや是ならむみわの山こえうち時雨つゝ　隆寛法師
○
山風もやかてはけしく成ぬなり秋にわかるゝしのゝめの空　攝政前太政大臣
○歲暮の心をよませ給ける
つもりては老と成て行年をいとふはおしむ物にそ有ける　師光
○旅宿の歲暮といふ心をよめる
かりそめの草の庵とおもひしに今宵あけなはふたとせやへん　道因
○年の暮のこゝろを讀る
老にける我こそ年のふるさとよ歸るといひてみにしつもれる　仲綱
○
はやきせもいはきる程は有物をさはる物なき年のなみ哉　俊惠法師
○
なけきつゝことしも暮ぬ露の命いけるはかりを思出にして　參議(教長)
○
立かへる年の行衛を尋ぬれはあはれ我みにつもるなりけり　攝政前太政大臣
○攝政前太政大臣右大臣におはしましける時年
の暮雪のふれりけるに奉ける　皇太后宮大夫(俊成)
暮はつる松のとほその雪のうちを春こそしられ君たにもとへ　攝政前太政大臣
○かへし
雪のうちはいつくも同しさひしさを我宿とても春をしるかは

○題不知
年なみの我身にたかくよるまゝに藻屑とのみそ人にいはるゝ　法印(靜賢)
○　圓位法印〔師カ〕

玄玉和歌集卷第六百八十七首

草樹歌上

○中宮月次の御屏風に人家并に野邊に梅花咲たる所をよませ給ける　攝政前太政大臣
梅かゝを外へや風のさそはまし夜ふかくあけぬ槇の戸ならは　左大將
○百首歌中に梅華を
軒ちかき梅の梢に風過て匂ひにさむる春の夜の夢　崇德院御製
○題しらす
大かたの色をはいはし梅の花香をもあたにはちらさゝらなん　大納言(隆季卿)
○
朝霞梅の立枝はみえねとも其なたの風に香やはかくるゝ　右大將(賴實卿)
○題不知
梅の花心にそむる程はかり匂ひは袖にとまりやはする　隆信朝臣
○
咲しより色にも香にもあらはれて春のさかりもみゆる梅哉　清輔朝臣
○
あしかきのおくゆかしくもみゆるかな誰すむ宿の梅の立枝そ　左少將定家朝臣
○百首歌中に梅歌とてよみ侍ける
春の夜は月のかつらも匂ふらん光に梅の色はまかいぬ
○左中將兼宗朝臣の家の歌合に同心を

昔おもふ庭にうきゝをつみおきてみし世にも似ぬ年の暮哉　寂然
○
ゆく年を送りむかふといふ程に定めなき世のはてそかなしき

梅の花霞のほかの雲ゐまて匂ひにこむる春の山かせ　寂蓮
○題不知
梅枝に軒のふからみかけてけり花のさきもるさゝかにの糸　有家朝臣
○
我宿の軒はの梅をふく風は匂ひよりこそ先ちらしけれ　俊惠法師
○
袖はぬれ香はうつるとも梅の花折てなき名はたゝむとそ思ふ　圓位法師
○
とめこかし梅さかりなる我宿をうきも人は折にこそよれ　隆寛法師
○
むめかゝを空にさそひて行風もまたふ心にあかぬものかは　寂然
○
忍ひ妻おきゆく床に匂ひきて軒はの梅そ名殘かほなる　顯昭法師
○
春風の吹にまかせて梅の花匂ひは宿をさためさりけり　惠章法師
○梅花董風といふ心をよめる
たかさとの梅の梢を過つらんぬしなつかしくにほふ春風　前大僧正
○
梅かゝの薰るあたりは窓のうちにあつむる雪を花かとそ見る　大輔
○正月七日後白川院少納言かもとにちいさきか
たみにわかなを入てつかはすとてよめる

我なをは片みにいれつ身のうへに老を積てそやるかたもなき
○百首歌めしける時若菜の心よませ給ける　崇德院御製
賤の女は片みしなへてひをつめとまたうら若菜てにも溜らす
○　皇太后宮大夫(俊成)
澤に生る若菜ならねといたつらに年をつむにも袖はぬれけり
○題しらす　前薩摩守忠度朝臣
春毎のわかなにそへてつむ年のもる〻かたみをいかて結はん
○二條院御時柳の歌とて　前中納言(師仲卿)
春風や心〳〵に吹つらんとけぬみたれぬ青柳のいと
○美福門院御時彼岸御念佛の會に橋邊の柳と云
心を人〳〵よみ侍けるに　皇太后宮大夫(俊成)
やつはしにみとりの糸をくりかけてくもてにまかふ玉柳かな
○題しらす　三位中將(公衡)
波かくる川そひ楊枝しけみなかれもやらぬ水のおとかな
○　法性寺座主法印
霞しく春の川風うちはへてのとかになひく青柳の糸
○　俊惠法師
梢ふく風もや水にうつるらん庭に波よるあを柳のいと
○　顯昭法師
春風やたえへす契をむすひけんまつ打なひく青柳のいと
○　前左大臣
わかやとの柳の糸のうちなひき春よりほかにくる人もなし
○　隆信朝臣
旅ねせし宿の梢やそれならぬ霞にもる〻玉のをやなき
○野亭早蕨といふ心を　右京大夫(季能)

早蕨のおりにも人にとはれねはのへのすまひそいと〻物うき
○百首歌中に花の歌とてよませ給ける　攝政前大臣
櫻咲たかれに風や渡るらん雲立さはく小初瀬のやま
○中宮月次の御屏風に小野井に人の家に花咲たる所を　左大將
吹風にちるともみえす櫻花はなはけふこそさかり也けれ
○題不知　前左大臣
咲かさすおほつかなしや白雲の絶すか〻れる峯の櫻は
さ〻波にまかふ櫻をさきたて〻風こそしかの山はこえけれ
花のちるひら山おろしうみふけは峯より沖によする白なみ
○百首歌の中に春の歌とて　左大將
昔たれか〻る櫻の花をうへてよし野を春の山となしけん
谷川のうら出る波にみし花の峯の木すゑに成にける哉
明わたると山の木すゑほの〳〵と霞そかほる遠の春かせ
をしなへて花の梢に成ま〻に雲こそなけれみよしの〻山
○題しらす　前中納言(師仲)
日にそへて立こそまされみよしの〻吉野の山の花の白雲
○　參議(教長)
よしの河花のしら波なかるめり吹にけらしな山颪の風
○崇德院近衛院殿に御幸侍りける日遠尋山花と
いふ心を　皇太后宮大夫(俊成)
面かけに花のすかたをさきたて〻いくへ越きぬ峯のしら雲
○人々百首の歌よませ給けるに花の歌とて　左大將
しほりせて吉野の花や尋ましやかてと思ふ心ありせは
九重の花のさかりに成ぬれは雲そくも井のしるし成ける
いつくにもさこそは花をおしめとも思ひ入たるみよしの〻山

○
花は雪霞はたえぬけふりにてふしのねうつす山櫻かな　有家朝臣
○　定家朝臣
櫻花咲にし日よりよしの山空もひとへにかほるしら雲
○題不知　前大僧正
山櫻木とにうつる心かな一枝たにもをしみえなくに
○百首歌中に花の歌とて　法性寺座主法印
咲そむる花の梢をなかむれは雲に成ゆくみよしの〻山
花ゆへにとひくる人のわかれまて思へはかなし春の山風
○重家卿歌合花の歌とて　前右京權大夫(頼政)
近江ちやまの〻濱へに駒とめてひらのたかねの花をみるかな
○題不知　俊惠法師
咲をまち散をおしむに春暮て花に心をつくしはてつる
よしさらはしるへにもせんけふはかり花もてむかへ春の山風
○法勝寺にて花を見てよみはへりける　左大將
後の春ありとたのみしむかしたに花をおしまぬ年はなかりき
○十五首の花の歌中に　左大將
はる〳〵と我すむかたは霞にてやとかる花をはらふやま風
高砂の尾上の花に春くれて殘りし松のまかひ行かな
けふこすは庭にや跡のいとはれんとへかし人の花の盛を
○　定家朝臣
花おもふ心にやとるまくす原秋にもかへすかせのをとかな
後もうしむかしもつらし櫻花うつろふ袖の春の山風
花のちるゆくゑをたにもへたてつ〻霞のほかに過る春かな
○　寂蓮
いかはかり花咲ぬらむよしの山霞にあまる峯の白雲
花にあかぬ心のはてはもろこしの吉野の山の春の明ほの
天川雲のみおにや通ふらん花のそこなきみよしの〻山
○祇園社の歌合山路の花といへる心を　藤原公信
なかめつ〻ゆきそやられぬ山櫻花こそ道を遠くなしけれ
○題不知　藤原爲廣
花にあかてかへる山路のなくさめはかすめる空に出る月影
○　藤原隆親
ちらぬまの花の下にてあかすよは梢よりこそしらみそめけれ
○　清輔朝臣
から國のとらふす野へに匂ふさも花の下にはれてをかへらん
○　崇德院御製
山高みいはねの櫻ちる時はあまの羽衣なつるとそ見る
ことならはさてこそちらめ櫻花おしまぬ人もあらしと思へは
○　皇太后宮大夫(俊成)
櫻花おもふあまりにちる事のうきをは風におほせつる哉
○中山の家の花のさかりなるをみて　三位中將(公衡卿)
すみなる〻我宿なれとけさみれはおほめくはかり花咲にけり
○百首歌の中に花の歌とて
汀には峯のさくらを吹とめて雲に波こすしかの浦かせ
○春日社歌合に花のうたとて　前宮内卿(季經)
おしと思心にとまる色ならは花は我身のものにそあらまし
○　二條院參河内侍
よしの山花のさかりをきてみれはうき世の外の心ちこそすれ
○　參議(教長卿)
高砂の尾上の花のさかりにはこ〻も波こす末のまつやま

○　　刑部卿(頼輔卿)
ちりまがふ花のふそめはよしの山嵐にさはく峯のしら雲
○　　前右京大夫(頼政)
をつから花のしたにしやすらへはあはゝやと思人もきにけり
よしの川岩瀬の波による花や青根か峯にきゆる白雲
○攝政前太政大臣右大臣におはしましけるとき
の歌合に花の歌とて　　太宰大貳(重家)
春のうちはよしの〻山のみねならぬ心も花に成にけるかな
○範兼卿白河の花みにまかられぬとき〻て遣し
ける
しつみぬるみくつならすはもろ共にけふ白河の花はみてまし
○花の歌とてよめる　　左中將兼宗朝臣
吉野山みれたちかくす雲かとて花ゆへはなをうらみつるかな
○南殿のさくらのさかりにはへりけるにうへの
人〳〵花の歌よみ侍けるによめる
藤原範孝(藏人文章生)
物いはゝ花にとはまし吹風はむかしもかくやのとけかりしと
○閑居待花と云へる心を　　權律師定範
さかぬまは人も稍のさひしさに花をのみまつ柴の庵かは
○題不知　　法橋(聖玄)
心をは雲ふむ峯にとゝめをきて花そ家路の關かためける
○　　圓經法師
山櫻さそふ嵐のかよひきて匂ひもまかふ峯の白雲
○百首の歌に花の歌とてよみ侍ける　　侍從家隆
よしの山霞も花の色ならはいく重かみましみれの白雲
世中を思ひつゝけて見るときもちるこそ花の盛也けれ

○　　藤原知資
身のうさを花になくさむ程たにもうらみは風に絶せさりけり
○　　大輔
うき世をはまたなにゝかはなくさめん花に先たつ命さもかな
今よりは花のたよりに人またしちれはわかるゝ思ひそひけり
○　　寂蓮
見わたせはならの都の花さかり稍をこむるやへのしら雲
○　　前齋院中將
九重に匂ひをそへしいにしへのふるき稍に花咲にけり
○　　攝政家丹後
春はまつよもの山へにあくかれて花よりさきにちる心かな
あたにちる花には風も遲れけりこれもうき世の習ひならすや
○　　法性寺座主(法印)
松風になかめし秋は花ゆへにいとふへしとも思はさりしを
ちる花のふるさとゝこそ成にけれわかすむ宿の春の暮かた
○　　法橋範榮
ちりつもるその木の本や櫻花さそひし風のやとり成らん
○花の歌とて　　法橋宗圓
花盛りなをおくありとみゆるかな雲のはてなきみよしの〻山
高砂の尾上の花やさかりなる雲の波せく松のむらたち
○松間夕花と云心を　　法橋覺範
高砂の尾上吹こす夕風に花のなみせくまつのむら立
○題不知　　源定宗朝臣
みわたせは稍につもる白雪の風にきえぬや櫻なるらん
○百首に春の歌とてよみ侍りける　　定家朝臣
たれすみて心のかきりつくすらん花にかすめる遠の山きは

○二條院御時南殿の櫻のちるを御らんして歌つ
かうまつるへきよし仰有けれはよめる　　三河内侍
身にかへて散もおしまし君か代の花みん春の限りなけれは
○題不知　　寂念
吹風に花なる里をきてみれは木末よりこそ春は暮けれ
○山寺はなと云心を　　法橋宗圓
初瀨山木すゑの花にひゝきゝて入あひのかねの聲かほる也
○　　道因
我宿の花をや風にゆつらましぬしとなりなはおしむはかりに
○公衡卿の中山の家にまかりて花み侍りて後に
申をくり侍ける　　隆寛法師
花の色の猶おくありてみえしかなよしの〻山の春をうつして
○　　源季貞
わか宿の稍の花をみるたひによしの〻山を思ひこそやれ
○題不知　　平康頼
花にあかぬよしの〻山の旅ねには夢にもみゆる峯の白雲
○世をのかれんとしける比百首歌よみて法性寺
座主法印のもとに奉ける中に花の歌とてよめ
る　　晴眞法師
世をいとふ思ひを花にみたらしと心つくろふ春の山さと
○花の歌とてよめる　　行圓法師
おもひやるよものたかれの花さかりみる面影に雲をかけつる
○題不知　　圓位法師
吉野山木すゑの花をみし日より心は身にもそはす成にき
よしの山去年のふほりの道かへてまたみぬ方に花を尋ん

よしの山やかていてしと思ふ身を花ちるはなと人や待らん
咲そむる花をひとへにまつおりて昔の人のためと思はん
○　　俊惠法師
山たかみ峯の櫻を尋てそ都の花は見るへかりける
露なから折てかさゝん山櫻志つくに袖やそはしかほるを
かつらきやたかまの櫻咲しより春ははれせぬ峯の白雲
なかむへき殘の春をかそふれは花とゝもにもちるなみたかな
花みれは物おもひなしといひ置し人は散をやおしまさりけん
○　　登蓮法師
櫻花散なんのちのなくさめは朝ぬる雲のたゝんとすらん
さくら咲なからの山に風ふけは空にそみゆる志かのうちなみ
○　　顯昭法師
天の原たなひく雲はかつらきやたかまの山のさくらなりけり
あかなくに散ぬる花のかたみとて殘るは風のつらさ成けり
○前左大臣そのかみ白河の花見にさそひ侍けれ
はまかりてよめる　　師光
いさやまた月日のゆくも知ぬ身は花の春ともけふこそはみれ
○題不知
わひ人の宿にはうへし櫻花ちれはなけきのかすまさりけり
人志れぬ心のゆきて見る花は殘る山へもあらしとおもふ
うきよには思ひもいてしよしの山花ゆへならす岩のかけみち
○　　玄俊法師
世をすてゝ吉野のおくにいる人は花のさかりや住うかるらん
○白河に罷りて水邊落花と云心をよめる　　藤原行康
花さそふ嵐の空に涙こえて雲になかるゝ白河の水
○百首歌の中に花歌とて　　法橋覺範

心すむ有明の空の月かけに花ちるさとは秋の夕くれ
れにかへる槍のそらに春くれは花にわかるゝ峯のしら雲　圓位法師
○
うきよにはとゝめおかしと春風のちらすは花をおしむ也けり
風もよし花をもちらせいかゝせん思いつれはあらまうき世そ
かさこしの峯のつゝきに咲花はいつさかりともなくや散らん
世の中をおもへはなへて散花の我身をさてもいつちかもせん
花さへに世をうき草と成にけりちるをおしめはさそふ山水　法橋季嚴
○
いふ事はなきならひなる花なれとおしむ心をしるやしらすや　信定法師
○
たつねわひまとろむ夢にみる花はさむるうつゝや春の山風　橘惟村
○題不知
花の色を槍にとめぬ山風や月みし秋のむら雲のそら　信詮法師
○
みよしのゝ花のさかりや過ぬらむ雲ふきおろす春の山かせ　後入道親王(仁和寺)
○杜若の心をよませ給ける
そこきよきあさゝは水にかけそひてふたへに見ゆる杜若かな　皇太后宮大夫(俊成)
○百首歌にすみれの心を
紫のねはふよこののつほすみれ眞袖につまん色もむつまし　三位中將(公衡卿)
○題不知
ふるさとのよもきをわけてすみれつむ折しも袖をぬらす春雨　寂蓮
○
春雨にまかきのすゝきむら立ぬ今年もさてや道もなきまて　崇德院御製
○
田子の浦の岩れにかゝる藤波はみちくる鹽の聲をからなん
老ぬれと若紫にかさゝれて藤にも松はかゝるなりけり　前齋院
○
しつかなる庵にかゝる藤の花まちつる雲の色かとそみる　寂念
○紫藤亂風と云心を讀る
ときはなる名たてなりとや藤浪をゝのれなかゝちらす松風　皇太后宮大夫(俊成)
○百首歌中に歎冬
櫻ちり春のくれぬる物思ひも忘られぬへき山吹のはな　顯昭法師
○
こゑたつる井出の蛙は山吹の花さきぬとや人につくらん　朝惠法師
○
蛙なく井出のわたりは山吹の色にそなみの花も咲けり
○卯月のはしめつかた大炊御門のやへさくらを
折て定家朝臣のもとにつかはすとてよめる　攝政家丹後
ことしより春やときはに成ぬらむまたちりそめぬ花も有けり　前參議(親隆卿)
○卯月の歌とて
ふしみつや川そひうつき花咲て波はかきねの物とこそみれ　源清貞
○河邊卯花といふ心をよめる
きしつたひ風にしられて立浪のなかれぬ程や卯花の色　顯昭法師
○野徑卯花と云心をよみ侍ける
關河やおりえてさける卯の花にみゆきめつらしのへのふる道　法印範玄
○題不知
うの花のさかりなりけり風さゆる冬のまかきは雪おれそせし　小侍從
○葵の歌とてよめる
いかなれはそのかみ山のあふひ草としはふれとも二葉成らん　宴信法師
○菖蒲の歌とてよみ侍ける

かゝる身の枕となれはあやめ草けふもうきをはなれさり鳬　參議(教長)
○雨後早苗と云心をよめる
なはしろにほそ谷川もひかてこそ雨の名殘はさなへとりけれ　皇太后宮大夫(俊成)
○題不知
おほあらきのうき田の早苗おいにけり杜の下草取なまかへそ　寂蓮
○百首歌に沼邊菖蒲といふ心をよめる
ひき殘す跡忍へとや菖蒲草すゝしくかほる波の岩かき　崇德院御製
○
かくれぬに五日とまちし菖蒲草けふはひきます物なかりけり　前齋院
○花たちはなの心をよませ給ける
たれとなく空に昔そ忍ばるゝ花立はなに風過るよは　左大臣
○
たち花の夢の枕に匂ふよはむかしの人とぬる心ちする　皇太后宮大夫(俊成)
○
たれかまた花たち花に思ひいてんわれも昔の人と也なは　前宮內卿(季經)
○
有し夜の袖の匂ひはわすれぬを花立はなのほのめかすらん　小侍從
○
軒ちかき花たちは花はいにしへを忍ふの草のつまとこそみれ　定家朝臣
○
故郷は庭もまかきも苔むして花たちはなの花〔そ〕ちりける　藤原家隆
○
ことしより花咲そむる橘のいかてむかしの香にゝほふらん　覺範法師
○
風わたるはな橘の折〳〵にむかしを袖にさそひきにけり　寂蓮
○題不知
この世にて物思ふ袖もくたしけり雨そゝきする軒の橘　祐盛法師
○
忘れゆくむかしをたれかしらせまし花橘の風なかりせは　法印(範玄)
○
軒ちかき花橘のかほるよはあふきの風もなつかしきかな　藤原親盛
○
なちに咲花橘を吹過てさもあらぬ軒に匂ふゆふかせ　皇太后宮大夫(俊成)
○
雨の後花橘をふく風に露さへにほふゆふくれの空　俊惠法師
○
夕されはすのうきはに風こえてうつしそかふる露の白玉　性我法師
○
蓮葉の色にもめてしそこすまぬこれもぬまえの名殘ならすや　皇太后宮大夫(俊成)
○
野へにをくおなし露とも見えぬ哉はすのうきはにやとる白玉　攝政前太政大臣
○
花はみなあかぬなかにもこんよまてゆかしき物は蓮成けり　小侍從
○中宮月次の御屏風に夏草かきたる所をよませ給ける
日數ゆくのはらしのはら夏ふかく分行袖の露の草すり　皇太后宮大夫(俊成)
○
夏ふかみ野へのさやかは風過て秋おもほゆる杜のかけかな　大納言(實家卿)
○題不知
夏の夜をかけにわするゝ吳竹はまたきに秋のよやこもるらん　寂蓮
○
こぬ人を思ひたえたる庭の面によもきか末そまつにまされる

玄玉和歌集卷第七八十八首

草樹歌下

○草花の歌とてよませ給ける　攝政前太政大臣
よそながらみやきか原をみわたせは心にうつる萩か花すり
○中宮月次の御屏風に草花の歌とて　前左大臣
萩か花玉しく庭にうつしうへて露をきなから千世の秋みん
○　前右京權大夫(頼政)
かり衣われとはすらし露しけき野はらの萩の花にまかせて
○　圓位法師
萩か枝の露に心のむすほれて袖にうらある秋の夕暮
○百首歌に秋の歌とて　法橋宗圓
宮城の〻露わけ衣おもけれとしほらてそみる萩か花すり
○百首歌の中に　皇太后宮大夫(俊成)
あたらしや露せきのへにふす鹿のうは毛にうつる萩か成すり
○題不知　前宮内卿(季經)
棹鹿のしからむほとそみやきの〻こはきか露のたえま成けろ
○　隆信朝臣
心してわくへかりけり秋風にうつらなくの〻萩の夕つゆ
○　源仲綱
秋風のをとつれしより小萩さく野守にわれは成にし物を
○　崇德院御製
あらはれて虫のみ音にはたえれとも女郎花にそ露はこほる〻
○歌合に女郎花を　三位中將(公衡卿)
妻こひの鹿の鳴野の夕露にたへすおれふす女郎花かな
○　隆信朝臣
はけしさをうらみやすらん女郎花なひくは風にそむく成けり
○　有家朝臣
ひとかたになひきなはてそ女郎花風の心はかはりもそする
○百首歌に女郎花炎泪と云心をよめる　寂蓮
山さとにかこひわけたる女郎花いくもと野への物と成らん
○古雛女郎花といふ心をよめる　寂然
主なきまかきはあれてをのれのみ秋を忘れぬ女郎花かな
○　定家朝臣
女郎花なひくまかきの露なからたれふる里とあらしそめけん
○題不知　寂念
住吉の遠里小野のをみなへしたれ松風に露こほるらん
○　圓位法師
花か枝に露のしら玉ぬきかけておる袖ぬらす女郎花哉
○　崇德院御製
秋立て野とに匂ふ蘭なかふむ鹿やあるし成らん　右京大夫(季能)
○題不知
ふかぬまはいつかはまれく花す〻き思へは風の秋之けり
○　大輔
こぬ人をうらみやすらん花す〻きまれく袂に露そこほる〻
○　法印(範玄)
花薄ほにいつる秋の夕暮はまれかぬにたにすくる物かは
○歌合に草花の心をよめる　圓玄法師
はな薄むへこそ人をまれきけれさひしかりけるのちの夕暮
○題不知　圓信法師
波とみえて尾花かたよるたきの原に松の嵐の音なかるなり
○　左大將

うちなひく入江の尾花ほの見えて夕波まかふまの〻浦風
○かるかやを　皇太后宮大夫(俊成)
はし鷹やはつとやたしの秋風にまたきしほれぬ野路のかる萱
○百首歌中に苅萱の心をよめる　性我法師
かるかやの野への信夫の摺衣たれゆへにとてみたれそめけん
○　大納言(實家卿)
夕まくれ荻吹風の音ならて秋のあはれを何にしらまし
○　三位中將(公衡卿)
露むすふ荻のうは〻に風ふけは玉にこゑある秋の夕暮
風わたる秋よりほかの物ならはおきも哀やよそにきかまし
○　皇太后宮大夫(俊成)
秋風の萩の葉わたる夕暮は身を分て吹心ちこそすれ
○題不知　隆信朝臣
わきもこを待つる宵の風ならはあやしかるへき荻のをとかな
○秋のゆふへ常よりも物さひしく侍けるに人の　八條院六條
もとにつかはしける
吹過る荻のうは〻の風ならて有やなしやをとふ人そなき
○荻聲驚眠と云心をよめる　寂蓮
さもこそは跡なき庭とあれはてめ夢路もたえぬ荻のうは風
○荻帶晚風と云心をよめる　左中將(公經朝臣)
たそかれにをとなふ秋の風もまた荻の葉よりや立はしむらん
○　源清貞
思ひわく袖にはあらす荻の葉にやとかる風の哀はかりよ
○題不知　大江公景
夕されは秋のあはれを荻のはも思ひ去りてや露けかるらん
○　皇太后宮大夫(俊成)
朝日さすほとをもまたぬ朝顔はた〻面かけの花にそ有ける
○　家隆
おきて行人はくれをもまつ物を露にわかる〻朝かほの花
○題不知　法性寺座主法印
秋のよのす〻のをのやの夕暮も猶身におはぬすまぬ成けり
○　圓信法師
をけき野をいく一むらに分なしてさらに昔を思ひかへさん
○　前左大臣
ふりにけるなからの橋をきてみれは蘆のかれはに秋風そふく
○中宮の月次の御屏風に紅葉を　左大將
秋霧のはれ行ま〻に色みえて風も木のはをそむる成けり
○題不知　侍從家隆
まさきふくと山の嵐色つきて末葉かれ行庭の紅葉は
○圓位法師高野にこもりて侍けるに秋比大原の
寂然かもとへ山深みと云五文字ある歌十首よみ
てつかはして侍けるを又大原の里と云はての七
文字ある歌讀てつかはしけるなかに　寂然
山ふかみ岑のさ〻くりはら〳〵と庭に散しく大原の里
むくらはふかさは木葉うつもれて人もさ〻こぬ大原の里
あたにふく　の庵のあれまより袖に露をく大原の里
○題不知　崇德院御製
いり日さすとよはた雲にわきかねつ高間の山の岑の紅葉は
○攝政前太政大臣右大臣におはしましける時歌
合せさせ給けるに紅葉の歌とて　皇太后宮大夫(俊成)
時雨ゆくそらたに有を紅葉はの秋はくれぬと色にみすらん
○殿富門院皇后宮におはしましける時紅葉のさ

かりに六條殿の御かたの紅葉に結付け侍ける
うらやまし軒にゝしきを折かけてもみちにあける秋の宮人　隆信朝臣
○歌合に紅葉の心をよめる
月ゆへはいとひし山も紅葉して人の心もいろやかばらむ　圓信法師
○題不知
松にはふまきのはかつらちりにけりと山の秋は風すさふらん　左大將
○
このはちりて後にそ思ふおく山の松には風もときは也けり　顯昭法師
○
紅葉はを染るのみかはときは木の色も時雨にあらはれにけり　定家朝臣
○
我思ふ人すむさとのうす紅葉きりのたえまにみてやすきなん　資隆朝臣
○
初しくれふりにし里をきてみれはみかきか原に紅葉しにけり　法橋(覺範)
○
をしなへてそめぬ木末もなき物を時雨に殘る岑の椎柴　公重朝臣
○松間紅葉といふ心を
ときはなる松のたえまの紅葉はをいかて時雨のわけて染けん　藤原隆親
○題不知
尋ゆくと山かすそのはゝそはら奥ゆかしくも紅葉しにけり　攝政前太政大臣
○
杉のやにたえすをとなふ木葉こそ時雨ぬよはの時雨也けれ　太宰大貳(重家)
○
風のふきにし日よりたつた川紅葉になれる波の花かな　左大將
○
紅葉ちる岑の嵐のくらきよにおもかけにたつ袖の色哉　道因
○
紅葉ゆへふたゝひつらき嵐かなまた庭をさへはらふへしやは　信光
○落葉の心をよめる
しくれちる紅葉のかはのみなかみはたつたの山のおくの秋風　性我法師
○落葉埋代と云心をよめる
筏士のさほなかりせは大井河紅葉を風のくたすとやみん　資宗朝臣
○
時雨かときけはこのはのちる物をそれにもぬるゝ我袂かな　隆寛法師
○擣衣聲盡と云心をよめる
衣うつしつのたふさやよはならんひとりさやけき庭の松風　藤原行康
○題不知
故郷は庭もあさちに成にけり軒のしのふにかはるのみかは　前齋院
○百首歌中に秋歌とてよませ給ける
さらてたに身にしむ秋の夕暮に松をはらひて風そすくなる　寂然
○住吉に詣て、讀る
松風の音はいつくとわかれとも猶すみよしの秋そとなる　隆家法師
○題不知
しかすまん心をかれてならすかな松風しむる秋の庵に　皇太后宮大夫(俊成)
○大嘗會悠紀方の御屏風吉水郷に多人家菊花臨水所を
いく千世の秋かすむへき菊の花匂ひをうつすよし水の里　太宰大貳(重家)
○中宮月次の御屏風にきくの花を
山人のおる袖匂ふ菊の露うちはらふにも千代はへぬへし　師光
○兼宗朝臣家歌合に殘菊をよめる
やへ〳〵の花のをとゝとみし菊の霜をいたゝく冬はきにけり　寂蓮
○

秋の夜の有明の空にみし月の影さへ殘る白菊の花　皇太后宮大進
○寒蘆歌とてよめる
風渡る蘆のかれはもふる雪のつもらぬほとそうちそよきける　賀茂重保
○
難波江の蘆の葉末もうつもれて雪をそわくるたなゝしをふれ　圓位法師
○題しらす
つの國の難波の春は夢なれやあしのかれ葉に風渡るなり　侍從家隆
○
しま風の蘆のはわたる夕暮に汀の鶴も聲かよふなり　寂蓮
○古池寒蘆と云心をよめる
昔おもふ池にはいぬもくちはてゝかれ野につゝく蘆の上風　左大將
○山家歌とて
さひしとよたゝわか友とたのみこし竹のは分の冬の山かせ　法性寺座主法印
○
吳竹は冬のおきにそ成にけるさこそ吹しか秋の夕風　後入道親王(仁和寺)
○
風わたるまかきの竹のそよ〳〵とみはてぬ夢をあはすなる哉　寂圓法師
○月前松風と云心を讀る
身にはさて殘るあはれもなかれとやかたふく月に峯の松風　源資清
○
山里はあらしのそこに音ふりて軒は夜すから松の村雨　三位中將(公衡)
○百首歌に松のうたとて
かしこくもさひしき松の風の音に習ひにけりといつか思はん　隆寛法師
○佛寺の歌とてよめる
いにしへの我立柚に年ふりて谷の杉むら色さひにけり　寂蓮
○題不知
わかの浦を松の葉こしになかむれは梢によするあまのつり舟

延慶三年庚戌三月廿八日於二大和國添上郡辰市郷春福院一書寫之畢。深住與隆之思。不レ願二多情之眼一而已。
散位中臣祐仲

右玄玉和歌集以二佐佰侯秘本一校正了。

群書類從卷第百四十九　畢

群書類從卷第百五十

和歌部五

現存和歌六帖

○はるのくさ　信實朝臣
かきやれる雪まをみれは水莖の岡の春草したもえにけり
○　從三位行能
春日野のゆきまの草の淺みとりまたいつかなる春の色かな
○　前關白左大臣(良實)
春きてはかつそもゆらしあは雪のふれとたまらぬ岡のかけ草
○　前大納言爲家
知れしな霞にこめてかけろふのをの〻若草したにもゆとも
○　眞觀
みよしの〻やけふをみれはいとはやもにぬ草もえて淺緑なる
○　法眼長尋
今朝みれは垂氷のうへの薄みとりそれかと計りもゆる若草
○なつのくさ　藻壁門院少將
さほ姫のそめし緑の色ならのへの草葉に夏はきにけり
○　前關白左大臣
茂り行あたのおほの〻夏草の道なきかたや我身なるらん
○　藤原爲繼朝臣
今はまた庭の夏草みちもなし茂るとみても日數へぬれは
○　藤原爲氏朝臣
かよひこしあとやはいつく夏草の茂みかしたの野への古みち
○　藤原行宗朝臣
いまは〻や道ふみたえてこぬ人のつらさあらはすやとの夏草
○　法印耀清
夏草のふかき心のひくかたやかれんのちをもしらすなるらん
○あきのくさ　前大納言爲家
明わたるあさ〻はをの〻秋草にうきぬはかりもをけるしら露
○　正三位知家
露深きわれにてしりぬ夕暮の草はも秋の心あるらし
○　鷹司院按察
我おもふことのしけさの數ならし秋の夕の草のうへのつゆ
○　藻壁門院少將
けぬかうへに又や結ばん秋草のしけるしけみの露のふかさは
かれはてむ後までつらきあき草の深くや鹿の妻をこふらん
○　鷹司院帥
うかりけるたかならはしに秋草のうつろふころは鹿の鳴らん
○ふゆのくさ　御製(後嵯峨)
かきれなる草も人めも霜かれぬ秋の隣や遠さかるらん
○　入道三品親王
やたの〻に雪ふりおほふ冬の草のもえてみゆへき我思ひかは
○　入道前攝政(道家)
冬かれのお花かもとの草のなをそれとはかりもしる人そなき
○　前大納言基良
なにゆへか人もすさめんおきな草身はふりはつるのへの霜枯
○　信實朝臣
かたちこそ霜のくちはとなりはてめたてるもよはき翁くさ哉
○　祝部成茂
冬くさは我老らくのかみなれやけたすてしものふり重ぬらん

○したくさ　藤原爲綱朝臣
さとわかす春の日かけはてらせとものまた露ほさぬ谷のした草
○にこくさ　明珍法師
我思ひ人しろらめやあしかきのなかのにこ草したにもゆとも
○さうのくさ　信實朝臣
みま草はくるとものからんみこもりのぬかひの岡の事の茂さに
露しけきをかのあさけにかる草のひつきに袖をぬらす比かな
○　正三位知家
人めもるしのひの岡にかる草のあなかま露に袖のぬるらん
○　源有長朝臣
我戀はみつのうへのにかる草のひと日もみれはいや勝りつ〻
○　隨心法師
足曳の山のかけくさしけりあひてせかる〻水やむすほ〻る覽
○　皇太后宮大夫俊成女
いかにせんしくる〻のへの思ひ草した葉にむすふ露の亂れを
○　權中納言資季
しられしなきみかあたりの草のはに露の命をかけてこふとも
○　正三位知家
かつまたの生るはなにそ難面の草のさてしも老にける身よ
○　入道前攝政
わひ人の賴むかけなくなりしよりかへにおふてふ草のなそ憂
○　九條前内大臣(基家)
筆の海かく人なみのもしほ草あるもかひなき名にやしほれん
○やまふき　衣笠前内大臣(家良)
うかるへき春のわかれの近しとも咲なしらせそ山吹の花
○　前大納言爲家
○　藻壁門院少將
早瀨かはなみのかけこす岩きしにこほれて咲るやまふきの花
○　權中納言資季
ふるなみもしたにやむせふ山吹の花にかくる〻ぬての河岸
○　藤原隆祐
ちめゆひしまかきやたりになりぬらん花おもけなる庭の山吹
○　從三位行能
咲なる〻まかきはなにのつらけれはいはて露けき山ふきの花
○　尙侍家中納言
いはすともすみうき程や見えぬらむあれたる宿のやま吹の花
○　正三位知家
はふりこか衣の色やまかふらん神のみむろの峯の山ふき
○　淨恩法師
くちなしのこそめの衣をりはへて垣ほにさらすやま吹の花
○　義停法師
あをによしならちもちかし山城のぬての山吹みにこわかせこ
○　藤原隆祐
春のゆくかたこそみゆれよしの河散て流る〻山ふきの花
○なてしこ　入道前攝政
朝な〳〵猶咲まさるいろ見えてちりたにすへぬとこ夏の花
○　衣笠前内大臣
見ても又あかんものかはなてしこの初花なひきをける白露
我やとのからなてしこの花盛みにきませとも誰に告まし
浦人やかさしにおらん夏草ののしまかさきのやまとなてしこ
○　前大納言爲家
よそなから哀とそ思ひかはしまの草のわつかにみゆる撫しこ
○　右兵衞督基氏

撫子の花の色〳〵にをく露のちらまくおしみさらはけぬへし　正三位知家
○
我せこか宿の床なつ咲たらはたえすやとはん花につけても
○はき
白露ののをけるをみればたかまとののへの萩原ときはきに鳬
入道前攝政
○
いさこともはや行てみんしらすけのまの〻はきはら盛成らし
○　前太政大臣(實氏)
旅衣あさたつをの〻こはき原あらくはわけし露もこそちれ
○　前中納言定嗣
移し植しこの秋はきの枝たはみあかす日毎にをけるふち露
○　正三位知家
人はこぬ草葉のさこの露の上にかたしきねたる萩か花つま
○　卜部兼直宿禰
こよひたにねたりとみゆなる萩か花月にめてすと人も社いへ
○　源有長朝臣
秋はきに衣にほは〻あつさ弓ひくまの〻へに又かへりこん
○　衣笠前内大臣
露かけておらはおしけん神なひのあさ〻は原のあき萩のはな
○　式乾門院御匣
あれはて〻野へとなる庭の秋はきに玉をく露そみる人もかな
○　正三位知家
暫たにをきてやはみん日かけさすつとには消る萩の上の露
○　藤原隆祐
年をへてのとなる庭のかひあらは鹿たにかよへ秋はきの花
○　藤原爲繼朝臣

たかまとの〻へのあきはき今も又花咲ときやしかも鳴らん
○　前攝政左大臣(實經)
ぬれ〳〵も折てかさ〻む萩か花ちらす詠の日數もそふる
○　信實朝臣
ゑはしみむあやなくちりそ白露の玉もて咲る秋はきのはな
○　從三位行能
遠山田かりそ鳴なるあき萩の下葉の露や色にいつらん
○　藤原爲氏朝臣
まはきはら秋の野風は心せよ色とる露のちらまくもおし
○　藤原基政
秋萩はうつろひぬらし乙女子か行あひのわせもまた刈ぬまに
○　承明門院小宰相
咲はまつみせんと思ひし秋萩のうつろふまてに人はとひこす
○　少將内侍
さためなき風を待まもうつろひぬもとあちの萩に結ふ白露
○　尚侍家中納言
秋かせに今こそもの〻悲しけれしたは色つくまの〻萩原
○　鷹司院按察
うき人の心もしらす秋はきのしたはをみすはなをや頼まん
○　藤原惟平朝臣
夕されはなにをうしとか女郎花いはぬ色にも露こほるらん
○　平重時朝臣
露か〻るむかひの〻への女郎花おらぬになとか袖のぬるらん
○　藤原雅平朝臣
思ひきやあたれの床のをみなへし霧結ふへき契りなりとは
○　明珍法師
男山よそにみつの〻女郎花誰ゆへ花のひもはとくらん

○す〻き
秋風もあたにな吹そ花す〻きほむけの糸のぬけるしら玉
○　正三位知家
さても又たれかはきます花す〻きこてふに〻たる袂なれとも
夕暮は吹もさためぬ秋かせにまれく薄の袖かへるみゆ
○おき
秋風にをきふしわぶるおきのはや老のね覺の心しるらん
○　權大納言公相
さらてたに身にしむいろの秋風を軒はの萩の音に立なる
○　正三位惟季
をのつから哀はのこせ秋の風さこそはおきのうは〻なりとも
○　少將内侍
かなしさはなにといふとも荻のはに風吹はかり聞ことはなし
○　辨内侍
いかはかりね覺せられんおきのはに今宵はいたく秋風のふく
○　鷹司院帥
さなくても秋とおほゆるわか宿におきのは風もさそと吹也
○　信實朝臣
荻原やすゑの〻露に風たちて身にしむときの秋の夕暮
○　藤原隆祐
袖のつゆのきはの荻を吹かせに思ひそしけき秋の夕暮
○　承明門院小宰相
はかなしやこぬ人たのむ夕くれにのきはの荻を秋風のふく
○　皇太后宮大夫俊成女
色かはる心の秋のときしもあれ身にしむ暮のおきの上風
○　入道前攝政

衣笠前内大臣
とへかしなまたほに出ぬした荻も暮れは風のよそにやはきく
○　前攝政左大臣
身に寒きのきはの荻のあき風にいも待かねてれんかたもなし
○　權中納言資季
をき原や葉わけのかせの音ことにたのめぬこひも驚かれつ〻
○　卜部兼直宿禰
秋風のこゑにもたてぬした荻の穗のめかさてや萎れはてなん
○　平重時朝臣
秋の露いかにむすへは荻のはのみたれてくれはかなしかる覽
○　惟乘法師
心からまかきに荻をうへそめて秋風ことにぬる〻袖かな
○　玄譽法師
物おもふ有明かたのそてに又なを露そふるおきのうは風
○　親玄法師
年をへて秋のあはれやつもるらん身にしみまさるおきの上風
○　信實朝臣
紫の色そめはてぬふちはかまうすきや草のゆかり成らん
○　藤原爲氏朝臣
誰かきてぬしとはいはんふちはかまのことに露の色は染とも
○　入道前攝政
いろ〳〵に咲ぬとすれと藤はかまやかてもろくも秋風の吹
○　前關白左大臣
あしひきの山路の菊も君かため萬代ふへきかさしとそ咲
○　前太政大臣
菊の露あきにもあへすうつろひぬ老せぬ花のかさしなれとも
○　藤原爲繼朝臣

誰しかもかさしにおらん足曳のやまちに匂ふ秋のしら菊　平重時朝臣
○　月もさはいかにわきてか宿るらん色もかはらぬ喜久の上の露　信實朝臣
○　秋の色をいま一さかりをく霜にうつろひとまる庭の白菊　藤原資宗朝臣
○　白妙ににほひしきくのうつろひておなし花ともみえぬ色かな　藤原隆祐
○　うつろふはかるゝはしめの色なればまたきにおしむ秋の白菊　正三位知家
○　そかきくの色のてこらもみえわかす秋の初霜をき迷ひつゝ　淨忍法師
色かはるきくの籬をきてもみよ身をこそ人のとふにうからめ　承明門院小宰相
○　つむ菊の花もかひなし初霜のよそにはをぬなか月の空　前攝政左大臣
○　あた人の心のみかは世中もうつろひそ行しら菊のはな　正三位知家
○くさのかう　けふもまた市女かもたるくさ〳〵のかう人おほみ殘り少なき
○きちかう　今もなをこふるはくるし尋みんいてそもきちかうらの初しま　淨忍法師
○　みよしのゝたきちかうちに月さえて夜さへみゆる波の花哉　卜部兼直宿禰
○りうたん　垣のもと哀れと見ませかくはかりうたむかしより盛なる世を　源兼氏
○　かきさむるあふみふりうたむかしへて今も變らぬ水くきの跡

○しをに　亂あしを濁れる水にふみしたきをしの浮れのかけたにやみぬ　藤原隆祐
○　あまたとしをにもだへすてくたくるは老の泪の玉にそ有ける　卜部兼直宿禰
○くたに　こほりしく谷の下水おもひいつやもりこし月の秋のひかりを　衣笠前内大臣
○　深くたに契りもをかは夜半の月かたふくまてに待もみてまし　淨忍法師
○　いはた河いくたに水のおちあひて百瀨にかはるならひ成らん　卜部兼直宿禰
○さうひ　しらすいさうひとはうたの姿にて神のいつもしなきなとそ聞　正三位知家
○　早せ河さてにはちかふいしふしをいさうひとつに任てをみん　信實朝臣
○かるかや　折れかへるしたの亂れに埋れてほにかすかなるのへのかる萱　嘉陽門院越前
○　秋風におもひみたれてくやしきは君をならしの岡のかるかや　衣笠前内大臣
○かや　鶉ふすをのゝかやふは霜かれておれはかたより風さはく也　前大納言爲家
○　はた山の尾上つゝきのたかゝやに臥猪ありやと人とよむなり　權大納言公基
○　吹かせや寒なるらしたちすけのまのゝかや原うら枯にけり　九條前内大臣
○　やま人のかやかりおほひ作るやのひまなきこひは露そ亂るゝ

○はちす　たまこゆるはすのうき葉に宿かりてかけも濁らぬ夏のよの月　前太政大臣
○　み草のみしけく成行秋の池のはすのかれはに村雨そふる　衣笠前内大臣
○　このよにもいかなる露の契りとてわきて蓮の花になくらん　前大納言爲家
○　種しあれはむれの蓮も開けなんと思へはやすく安からぬかな　俊明門院大貳
○かきつはた　このねぬるあさゝはをの〻杜若衣に匂はせあかぬかたみに　正三位知家
○　いそのかみふるかはをの〻杜若はるの日數はへたてきにけり　二條院讃岐女
○こも　かりてほすよとの〻まこも網糸のちかひめおほき我うれへ哉　前大納言爲家
○はなかつみ　よしや唯かりにもよらし花勝見かつみなれなは亂れもそする　下野
○　花かつみかつみるからにものそ思ふつらき心のしけり增れは　前攝政左大臣
○あし　分わふるほとをしれつゝ湊江のあしのわかはを手折ふな人　前太政大臣
○　霜さゆる浦風あらく冬はきて下葉のこらぬあしの村立　九條前内大臣
○　朝霜のかれはの蘆の隙をあらみやすくや船の湊いるらん　權大納言公相
○　難波かた入江のしほや滿ぬらん末はに殘るあしのむらたち

○　難波かたふるえのあしのしほれはもよをへて浪の下に朽ぬる　按察使爲經
○　なには江や流て早き夕しほにみきはのあしのかたなひきなる　權大納言資季
○　水こもりの入えの蘆のさかりはの沈み果ぬる代をいかにせん　入道三品親王
○　奥津かせ吹しく浦のあしの葉の亂れてしたにぬるゝころ哉　前太政大臣
○　こやとてもいつくを問ん津の國の蘆のまよひに過る比かな　正三位知家
○　なとかゝるえにしあれはか難波なるみほの蘆れは浮方もなき　信實朝臣
○　蘆のはも霜かれにけりなにはなるみつとて人をこひ渡るまに　少將内侍
○　世中はなにはの蘆のかりそめと思ふにたにも猶そ住うき　前攝政家民部卿
○　老らくもさそはたおなし難はえの蘆のよはくも霜枯にけり　信實朝臣
○　ほに出ていはねはこそあれ蘆のはにかくれて住し里そ忘れぬ　藤原季宗朝臣
○　波かくる磯邊のあしのれを絶て浮立ほとの世をやおしまん　最知法師
○ひし　いかゝして池のひしつる浮事ははしめもはても思ひわくへき　前大納言爲家
○ぬなは　こほりする冬の池なる浮ぬなはくるしや解すむすほゝれつゝ　鷹司院按察

○
よしや唯浮ぬの池のうきぬなばうきなたつとも逢むとそ思ふ　左兵衛督基氏
○れぬなば　眞　觀
なくろさきぬたのれぬなば苦きは此世にひける心なりけり　信實朝臣
○あさゝ
みれはまたあさゝおふてふ澤水の底の心のねをやあらはす　御　製
○うきくさ
戀侘て身を浮草とおもへ共れはたえすこそまつ流けれ　正三位知家
○
さのみやはうきに年へん浮草のれもみぬ人を思ひたえなて　少將内侍
○
浮草のうきかうへこそこほるらめさそふ水たになき我みとて　承明門院小宰相
○
たくひある浮身もさそへ行水にれさしとゝめぬ草ならすとも　鷹司院按察
○つきくさ
おほかたの露もうちめしつき草のうつろへとやは契り置けむ　兵部卿有教
○
つき草の花もあたにや思ふらんぬれぬに移る人の心を　藤原行宗朝臣
○
つきくさに衣はすらしうつろふを心の色と人もこそみれ　九條前内大臣
○わすれくさ
露そなく枕のしたの忘草うへていてにし人の名殘に　前大納言爲家
○
うき人の心の種の忘草うたてあるよになとおひにけん　權中納言資季
○
住吉のわするゝ草のたれもかなつれなき人をよそに思はん　藤原爲氏朝臣
○しのふくさ
かれてたゝその名もよしや忍ふ草思ふにまけは人も社しれ　藤原經平朝臣
○
故郷の軒におふてふ忍ふ草しのひに君をこふる頃かな　權大納言公相
○
人しれすしのふの草に置露のみたれてのみや思ひきえなん　正三位知家
○ことなしくさ
都人とふことなしの草のはも今霜かれの冬のさひしさ　正三位知家
○せり
徒にあるゝそのふのはたけせり侘しけにてもあるよ也けり　信實朝臣
○なき
苗代のたつちの畔のうへこなきまくてふ程にとりやませけん　前攝政左大臣
○たて
みつたてのほつみにかよふむら鳥の立ぬにつけて秋そ悲しき　衣笠前内大臣
○
さきのとふ河へのほたてくれなゐに日影さひしき秋の水哉　藤原隆祐
○
世を秋のたつちのほたてつみはやし幾度からきふしにあふ覽　前大納言爲家
○むくら
あしかこふ垣ほにかゝる八重葎ひまなき物は人めなりけり　鷹司院師
○
やへむくらしけりはてたる故郷そ見るもさひしき秋のゆふ暮　少將内侍
○たまかつら
心してはふきさためよ玉桂あまたにならはえやは賴む　隆專法師
○
わきもこかれやまにかゝる玉桂くるさみゆるも夢ち成けり

○
夏くれは大江の山のたまかつらたけりにけりな道みえぬまて　右近中將忠基
○くす
たはしたに猶立かへれま葛原うら枯て行秋のわかれち　權大納言實雄
○
忍ふ山したはふくすの夕たくれしらしな人はそむるこゝろを　前大納言伊平
○
あまのすむ里のとまやの葛かつらひとかたにやは浦風も吹　前大納言爲家
○
あちきなしかくかきくくて水くきの岡へのま葛恨みはてすは　平重時朝臣
○
夏山のたけみかたにはふくすのいつあらはれて恨たにせむ　明珍法師
○
彼岡に葛かるおのこまてたはし恨みんと思ふおりもこそあれ　藤原忠尚朝臣
○
風わたる野原のくすをけふみれはひとりは身をも恨さりけり　藤原隆祐
○
葛の葉もこゝろの秋にくらふれは風のひまある恨なり鳬　皇太后宮大夫俊成女
○
おもふよりいかに夕の秋なるをまた吹かへすくすのうち風　鷹司院按察
○
人こゝろ霜かれはつる葛のはのうらむさきさへ過にけるかな　尙侍家中納言
○
秋はてゝたも枯にけりまくす原うらむるさまに拔やみえけん　前大納言爲家
○されかつら
いとはしや山たた茂みされかつらはひまつはれて絶ぬ心を　信實朝臣
○
まつはるゝなけきの杜のされかつら絶ぬや人のつらさ成らむ　衣笠前内大臣
○あをつゝら
足曳のやましたはへるあをつゝらくるゝ日影もなかき頃かな　前大納言爲家
○
草の原うはゝにはへるあをつゝらくるしやことの茂き夏のは　源　俊　平
我こひはあそ山もとのあをつゝら夏野を廣み今盛なり　祝部成茂
○
かへるさのあしたの原のあをつゝらくるしき道と今そ知ぬる　同
○
同くは端山かしたのあをつゝらくる〳〵繁くあふよしもがな　靜眞法師
○
忘らるゝ宿の垣れの青つゝらくるものとてそ人もまたれし　入道前攝政
○あさかほ
立まよふ霧のまかきにむすほゝれまた露ほさぬあさかほの花　衣笠前内大臣
○
朝かほの夕をまたぬ花のふにをきてあたなる露の身もうし　藤原行宗朝臣
○
ゆふ影を待へきものかけさのまにとふ人あれやあさかほの花　三善康義
○
朝かほの花よりけなる命もてあすともいかゝ身をたのむへき　下　野
○
朝かほのなとゝきのまを契りにて露よりけなる色に咲らん　從一位掄子家尾張
○
いかさまに契りかをきし白露の結ふほとなきあさ貌の花　藻壁門院少將
○
暮をまつちきりもあらはきぬ〳〵の袖にはかけし朝顏の露

○
たゝひとや契りをきけむしら露も暮なはなけの朝かほの花　鷹司院按察
○　皇太后宮大夫俊成女
きえぬまの色を哀とみな人も花もはかなきあさ顔の露
○あさち　藻壁門院少將
いつくにも同しやとりの露なれと月はあさちの上そ淋しき
○　右兵衛督基氏
乙女子かしめゆふをの〻淺ち原いつしか秋の色かはりける
○　藤原行宗朝臣
今よりはや〻はた寒しまくすはふをの〻あさちや移ひぬらん
○　源具親朝臣
露さゆる末はのあきの淺ちはら虫のねよりそ枯はしめける
○つはな　信實朝臣
たまほこの道の芝草ほに出て春のつはなも人まねき鬼
○　藤原隆祐
ふそにては春のすさひとみゆれ共誰ためのへの茅花ぬくらん
○かにひ　源　兼氏
いくとせの秋の今宵かあふさかにひくてふ駒の跡ふりぬらん
○　卜部兼直宿禰
我忍ふおもひの程をみせたらはいかに人めもくるしからまし
○　正三位知家
から崎やしかつの濵のひとり松いかに久しき名にかふりぬる
○あちさゐ
今もかもきませ我せこみせもせんうへしあちさゐ花咲にけり
○さこく
伊勢の海やしほもかなひぬ浦人の朝こく船はつりにいつらし
○すみれ　前大納言爲家
紫のこそめの袖さまかふまてすみれ摘もて歸る里人
○　正三位知家
なつかしき色こそあかね紫ににほへるいもかすみれつみつゝ
○　藤原經平朝臣
堇咲いはたのをのにしめさゝん行きの人のつまゝくもなし
○ねはき　前大納言爲家
春日野はをはきつみけりなら山のこのめはる風ゆるく吹らし
○わらひ　正三位知家
けふの日はくるゝ外山のかき蕨あけは又こんおり過ぬまに
○　眞　觀
露かゝる小笹ましりのしたわらひさもおりふしはぬるゝ袖哉
○ゑく　正三位知家
雲雀あかる山澤水に袖ぬれてゑくのわかはを摘はたかこそ
○ゆり　前攝政左大臣
いまはけに秋ちかゝらしさゆりはなゆりあふまてに置る白露
○　衣笠前内大臣
草の原しけみ隱れのひめゆりも花にし咲は人にしれつゝ
○　正三位知家
今も猶草のま袖にかくろへてあらはにみえぬのへの姫ゆり
○あゐ　衣笠前内大臣
はりまなるしかまの里にほすあゐのいつか思ひの色に出へき
○まさきのかつら　正三位成實
山深みまさきのかつらくる人のさふにつらさの露そこほるゝ
○　信實朝臣
誰をかもくる人にせんとやまなるまさきのかつら道は絶つゝ

○
奥山のまさきのかつらうちはへて苦しきよ社かなしかりけれ　藤原爲氏朝臣
○　藤原行宗朝臣
いかはかり色にそむらん外山なるまさきの葛まなくしくれて
○　法印耀清
薄くこきまさきの葛くりかへしとやまをめくる村時雨かな
○ひかけ　前大納言爲家
をみ衣けふきてかさす日陰草さよのあかりの名こそしろけれ
○　權中納言資季
けふにあふ豊の明のひかけ草いつれのよゝり懸はしめけん
○　從三位行能
あかれさす日かけの葛千代かけて乙女さひすさいはふ頃哉
○やまたちはな　信實朝臣
あし引の山たち花の木かくれて身は徒になるよ也けり
○　入道前攝政
いはかれは緣もあけもはへ色の山橘のときはかきはに
○すけ　權大納言實雄
山里はしけりにけりな岩こすけなか〳〵し日の詠せしまに
○　衣笠前内大臣
こひわひぬ逢夜もかたしおく山の岩もと菅のねのみなかれて
○　權大納言實雄
したにのみしのふの山の岩小菅いはておもひの年そへにける
○　右兵衛督基氏
我こひは人もかよはぬ奥山の岩もと菅のしける頃かな
○　正三位知家
武士のゆつるにまけるみしま菅みしまゝなかち消ぬつれなさ
○　從三位泰光
逢みてもまたかくれぬの岩こ菅いはてはなかきれをのみそ啼
○　明珍法師
五月雨のまなくし降は笠にぬふまの〻小菅もしほれあひに鬼
○　前大納言爲家
皆人のかさぬふ草のかり跡の世にすけなくも成にける哉
○さゝ　入道前攝政
秋風にまつうちなひくさ〻竹の大宮人の袖そ涼しき
○　衣笠前内大臣
玉さ〻の葉分にむすふ白露の我よ計のうきふしはなし
○あふひ　前大納言爲家
賀茂山のみあれをちかみ今こそは神の宮つこ葵さらめ
○　入道攝政
千早振神もかさせるもろかつら萬代かけてたえしとそ思ふ
○　前太政大臣
宿ことにかさすみあれのあふひ草神のしろしやときは成らむ
○　權中納言資季
神まつるけふのみあれのかさし草なかき世懸て猶やたのまむ
○　中原師光
其かみのみかけの山のもろは草けふはみあれのゑるしにそ取
○　右大將近忠母
かたみとそみるに泪そかゝりける葵はよそのかさしと思ふに
○　入道三品親王
かさしこしかものみあれの葵くさその名をけふはかくる計そ
○みくり　前大納言爲家
今ははやとをちの池のみくりなはくるよも知ぬ人にこひつゝ

○　信實朝臣
いたつらにひかぬみくりの深きえに沈むくるしき戀もする哉
○　藤原隆祐
みくりおふる池の浮草さにかくにまつ晴る夜のさころせき哉
○よもき　皇太后宮大夫俊成女
たつねてもわすれぬ月の影そさふよもきか庭の露の深さに
○　信實朝臣
な〻そちに向ふの里のふる芝うた〻朽れさなれるさまかな
○　源有長朝臣
いつの日の霜の芝をはらひつ〻松のさほその月をかなめむ
○　藤原隆祐
霜深き庭に折ふす蓬生のたつかたなくて身はふりにけり
○こけ　御製
おく山の谷には冬もよそなれや霜かれもせぬ苔の色哉
すみふしさおもはぬ人のためなれや岸にしくてふ苔の小蓬
○　皇太后宮大夫俊成女
幾度かきしうつ涙のあらふらん年ふりにける苔の色かな
○　藤原隆祐
かく山のむすきかもさにむす苔の色も變らてふをやつくさん
○　觀玄法師
なき人の跡をのはらに尋きてこたへぬ苔のしたをさふかな
○　鷹司院按察
されはさて苔の下さもいそかれす浮なを埋むならひなければ
○いちし　入道前攝政
たつたみも衣てしろしみちのへのいちしの花の色にまかへて
○　正三位知家
人をいかておもひ忘むおほ原や此いちしはのつかのまはかり
○しは
曉の露のみちしは置わかれ袖のかたみに殘る月かけ
○　前攝政左大臣
秋されはをのか心さ霜かれぬさふ人もなき庭のみちしは
○　信實朝臣
い〔ひ〕ゑの風吹からしたる柴のねのをこし處もなくなりに鬼
○むし　入道前攝政
さらてたに秋はかなしき淺茅生にをのれもたえす虫の鳴らん
○　前攝政左大臣
我やさのまかきの草のしけきれに何をうしさかむしのなく覽
よもすから草のはかくれ鳴虫も我すむ宿はねをやそふらん
○　九條前内大臣
夕暮の野はらに人やかよふらん草葉にたゆるむしのこゑ〳〵
○　前大納言基良
なれにける秋の寢覺も今更にさの〻めつらき虫の聲かな
○　權大納言實雄
曉のね覺こさ〻ふむしのねに我さへあやな〻みたおちけり
○　正三位忠定
明行は野原のむしもよはるなり誰をうらみの音をもなかまし
○　信實朝臣
雨過てさきそさもなくをく露のいまは夕さ虫のなくらん
○　藻壁門院少將
露さけき庭のあさちふ我ならぬ思ひもありさ虫そなくなる
○　下野
秋かせのさむく吹ぬる夕暮は草葉の虫もこかれてそ啼く

○　信實朝臣
大かたのあらしにわふる虫のねもやさから志けき秋のゆふ暮
○　承明門院小宰相
あれまさる宿は草はのかけなれはよる鳴むしのねをのみそ聞
○　皇太后宮大夫俊成女
明ぬさてわかれぬ虫のこゑにさへ袖のなみたの露そこほる〻
○　前攝政家民部卿
われのみさ野もせにすたく虫のねに露もをさらぬ袖の上かな
○　正三位知家
我せこかこぬたにつらき風の音にさこそはなかめ秋のみの虫
○　信實朝臣
庭草のもさくたちゆくさかりはもや〻過るねに虫そ鳴なる
○　藤原行宗朝臣
なくむしの聲うらふれてこの頃の有明かたは露そさむけき
○　鷹司院按察
かれぬへき草の葉かくれ住吉の曉かたは寒くこそなけ
○せみ　九條前内大臣
夏山の木のしたさよみ鳴せみは岩こす瀧になみたかるらし
○　衣笠前内大臣
絶はてはいかにせんさか空蟬のむなしきくれは音のみ鳴る〻
○　權大納言實雄
身をかへてなにしか思ふうつせみのよは賴まれぬ人の心を
○　鷹司院按察
よしやさはみきさなかけそ空蟬の薄き契りはなきになしても
○　前攝政左大臣
か〻りける身をうつ蟬のおりはへて茂きなけきの枝に鳴也
○　九條前内大臣
誰ためさぬきてかすらん空蟬の鳴木のもさの已か羽ころも
○　正三位知家
秋やまに色たに殘る空蟬のからくもひさり露けかるらむ
○　藤原忠兼朝臣
人の身も果はむなしきうつ蟬の鳴なる聲を哀さそきく
○　圓地法師
うつ蟬の世さしりなからねをそ鳴心のうちのむなしかられは
○なつむし　前大納言爲家
はかなさのたくひもかなし燈火の影にか〻ふ夜半の夏虫
○　右兵衛督基氏
さもし火のほのほに向ふ夏虫の心つからをよそにやはみる
○　御製
我こひに誰かまさるさくらへみむよるはすからに燃る夏虫
○　前攝政左大臣
身をかへて思ひこかる〻夏虫の扨もあふよはなきそかなしき
○　鷹司院按察
みに近き秋をしらる〻なつ虫のもさし見せたる夜はの思ひに
○きり〳〵す　信實朝臣
淺茅生の秋の夕のきり〳〵すれに鳴ぬへきさきはきに鬼
○　正三位知家
蓬生の夕日かくれのきり〳〵すよ半の思ひをかれて鳴也
○　衣笠前内大臣
きり〳〵すれに鳴あかす秋のよをれすて我身に思ひしりぬる
○　入道三品親王
露深き我手枕のきり〳〵す誰かまさるさ鳴あかしつる

御製

○
曉の枕のしたに住なれてれさめこと〻ふ螢かな
前大納言爲家

○
秋はかり露に憂ふるきり〳〵す我とことはのれさめをもしれ
權中納言實季

○
故郷の淺茅か庭のきり〳〵す曉をきの露になくなり
前中納言定嗣

○
夢さむる床のしたなるきり〳〵す聲いそかはしあけぬ此夜は
正三位知家

○
長月のくれこそあらめ螢よのあくるにも聲よはる也
下野

○
心していたくなきそきり〳〵すかことかましき花のれ覺に
菅原有氏

○
夕されはあさちかもとのきり〳〵す秋かせさむみ啼まさる也
式乾門院御匣

○
つれもなき人こそとはれ螢鳴音にまさる秋のおもひを
前關白左大臣

○
なへてよの哀は知るや螢かへにおふてふ草のゆかりに
前關白左大臣

○
うらかる〻かやの垣れのきり〳〵すよかせを寒み聲よはる也
衣笠前内大臣

○
きり〳〵すいたくなくの〻淺ちふは曉深きつゆやをくらむ
正三位知家

○
行秋のあり明かたのきり〳〵すものうかるれに今は鳴なり
衣笠前内大臣

○
里遠き野中のもりのした草に暮るもまたぬ待虫の聲
藻壁門院少將

○
まつ虫の聲するのへの露わけて我かと〻は〻袖やぬれなん
嘉陽門院越前

○
何ゆへと思ひはわかてまつむしの鳴ゆふくれの秋そかなしき
源具親朝臣

○
人はいさくるしきものとしりぬれはよそにもきかし待虫の聲
祝部成茂

○
けふもなと〻はれぬ秋の夕そとわか宿かこつ庭のまつむし
法眼長尋

○
誰ゆへの露のかことにか〻るらんお花かもとのまつむしの聲
前中納言定嗣

○
見し人のくへきよひともたのまれす甚くな〻きそ待虫のこゑ
前關白左大臣

○
我ことやたのめてつらき秋かせの寒きよな〳〵待むしの聲
前太政大臣

○
草の原したはやさむく成ぬらんや〻うらかる〻待むしの聲
式乾門院御匣

○
こぬ人を猶まつ虫のねにそ鳴庭のあさ地もうらかる〻まて
鷹司院按察

○
をのか名も忍る〻程にたえにしを何まつ虫のこ〻ら鳴らん
正三位知家

○
す〻むし
秋は〻やよさむになりぬをとめこか袖ふる山の鈴虫のこゑ
九條前内大臣

○
ひくらし
あしかきに山おろし吹て日暮しのなかなく里は秋そま近き
衣笠前内大臣

○
吹すさむ山した風に雨過て夕日のかけにひくらしそなく
前大納言爲家

○
人はこてかせのみ秋の山里にさそひくらしの音はなかれける
藤原隆祐

○
契りをきし時そと思へは日晩の鳴れにつけて袖そぬれける
入道前攝政

○
なつのよは物おもふ人の宿毎にあらはにもして飛ほたる哉
前大納言爲家

○
とふほたる光りみるこそ哀なれ何の思ひにもえはしめけむ
按察爲經

○
あたりたにす〻しき水の上になとともえて螢のよを渡るらん
信實朝臣

○
みなそこにもえたるかけの移らすはかた思ひなる螢ならまし
正三位知家

○
ひろふてふ玉にもかもなひさきおふる清きかはらに螢飛也
藤原爲氏朝臣

○
何なけく思なるらし終夜身にあまるまてもゆる螢は
鷹司院按察

○
おもひやれ澤の螢のよるはもえ晝はきえつ〻年へぬる身を
千早振神たにけたぬ思ひとや御手洗河に螢とふらん
藻壁門院少將

○
螢とふ岩まの水を結ひつ〻袖におもひの猶やたりなん
源仲業

○
いかなれは澤の螢にあらぬみのよるは思ひにあへすもゆらん
正三位知家

○
はたをりめ
うらかる〻草のいとすちをさをあらみま遠にもをる虫の聲哉
入道前攝政

○
くも
蜘蛛のてたまもゆらに引糸のくるれは人をまたぬよそなき
前攝政左大臣

○
待人はむなしき暮に何と又あしたゆく〻る蜘蛛のいと
鷹司院按察

○
蜘蛛にの糸かくしるきよひ〳〵も浮みはいさやそれも頼ます
泪のみ袖にはか〻る笹かにの我をたのめし暮そ戀しき
尚侍家中納言

○
たえすとも何か頼まん蜘蛛のいとはるかなる人の契りは
信實朝臣

○
僞をなにかふるまふ蜘蛛のいかに待ともくへき宵かは
紀宗茂

○
蜘蛛のいかにふるまふ夕暮か契りたかへす待人はくる
正三位知家

○
てふ
おもひしれ花にむつる〻からてふも移ふ色のはてのつらさを
前大納言爲家

○
き
春しらぬ我のみかけの朽木にてよそなる花をなにいそくらん
入道三品親王

○
花さかて春をしへぬるみ山木のありてなき身をいかに頼まむ
前攝政左大臣

○
茂りあふ山の常磐木いつれともわかれぬなつに成にける哉
權大納言實雄

○
よそにのみみし計りなる深山木の其なもしらぬ人にこひつ〻
前參議定經

○
年へぬるゆけのかはらのむもれ木の浮ひ出へき行衛しらせよ
正三位知家

○
老ぬれは風もいとはし今はわれつま木こりたき身を過してん
やき捨し古山はたのかたきしにたてるやからき我みなるらん
信實朝臣

○

ふる枝のふしのみ殘るうつほきの立るもさひしほたのやけ山
里人はきてもや道をこりぬらん雪おれひろふ山の妻木に
橘則廣
○
とたちはの岡の茅の〻ふるたつ木こひに馴たる年そ經にける
藤原隆祐
○
ひとかたのあらぬしほりの道なれはなか〳〵まよふ花の頃哉
正三位知家
○はな
花の木を植しはなにそ今年より春しりそめよひとめをもみん
藤原基政
○
散をうしと思ひし花そまたれける春くることに物わすれして
皇太后宮大夫俊成女
○
尋きておりもそやつす此里に花咲そむといひなちらしそ
まちときに思ひし春のめくりきて今年の花を又見つるかな
入道前攝政
○
山かせの霞の衣ふきかへしうらめつらしき花の色かな
攝政前太政大臣
○
命あらはこの春見むと契り置し花は我をやおもひいつらん
前攝政左大臣
○
仇なりと思ひしはなは咲にけりみしにかはらぬ人はなけれと
九條前内大臣
○
たつぬへき我よりさきにあし曳の山にいる人花やみるらん
衣笠前内大臣
○
たまきはる命あらはとまたれこし花の盛になりにける哉
正三位知家
○
古の八雲たつとや今もかもいつものそらは花をみるらん
下野
○

いつもみるおなしたかまのあまのはら花咲ぬれは匂ふしら雲
權中納言顯朝
○
花ゆへはしらぬ山路もたとられす匂ふしるへを風にまかせて
中原師光
○
あめつちをわけし昔の春よりや花に心を人のそめけむ
丹波經長朝臣
○
朝またき吹こす風のかほる哉山のあなたに花やさくらむ
藤原盛基
○
世々へぬるしかの都のあとなれとふりぬは花のさかり成けり
祝部成茂
○
都人とは〻とはなん山里のあるしとき〻し花もさくめり
藻壁門院少將
○
ふくかせの匂ふやいつく道すから花に心をかけてこそゆけ
尚侍家中納言
○
咲ぬれはかならす花のおりにともたのめぬ人のまたれける哉
つけやらむ人のこゝろもこゝろ見よまたれし花は今そ盛りと
承明門院小宰相
○
をしほ山神よの春や契りけんにほひも盡ぬはなのしらゆふ
按察使隆衡
○
見る人そむかしのいろはかはりける花は老木の春も有けり
前太政大臣
○
かへりこぬ昔を花にかこちても衾いくよの春かへぬらむ
正三位知家
○
春をへて花をしみれはとはかりをうき慰めの身そふりにける
從三位伊忠
○
浮身には人よりもけになれぬへし花みるほかの春をしられは

○
いとまありて馴ぬる身をも思ひしれさりとも花は情わくらん
承明門院小宰相
○
身にうとき春の恨もかへりみすいつのものとて花になるらん
藤原隆祐
○
花にこそ心よはしとみへもせめとことはになと袖のぬるらん
眞觀
○
ちりてまたあひみむ春もさためなき人の哀を花もしるらん
皇太后宮大夫俊成女
○
後に又あひ見んこともたのまれす花も我身もさためなき世は
前攝政左大臣
○
みな人のよそにのみきくみよしの〻高れの花をみてそ過にし
法印良守
○
春をへて芳野の奥に咲花や人の心の色をわくらん
承明門院小宰相
○
うつしうへて移ろふ色にならふともいか〻は花を恨はつへき
入道前攝政
○
見る程はうさも忘る〻世中になとしも花のあたに咲らむ
從三位伊忠
○
思ひいてもなき身と思へと春をへて多くの花をみてそ過ぬる
藤原季宗朝臣
○
おしむとてとまるならひもなき花にさのみ心をつくさすも哉
承明門院小宰相
○
春をへてくるしきこと〻しりにしをまた散かたの花に馴ぬる
鷹司院按察
○
ありてよの果しうけれは花のためうしろ安くそ風はふきける
前攝政家民部卿

○
花はまたなかき別れやおしむ覽のちの春とも人を賴まて
入道三品親王
○
身にかへて思へは何かしたふへき花をとめても同しわかれを
九條前内大臣
○
さりとても終にとまらぬ花ゆへにことしもあやなもの思ふ覽
從三位顯氏
○
あたにしもおもひし人の命もて花を幾度をしみきぬらん
蓮生法師
○
移ろふをしたふならひはいとせめて花にもみゆる我心かな
鷹司院按察
○
そてならて心を空におほふとも人まにのみや花の散らむ
入道前攝政
○
人あ〻ろ風も吹あへぬよのなかにあたにも花を恨みける哉
前中納言國道
○
咲は散はなに心をつけしよりあたなる世とは思ひしりにき
下野
○
なからへていけらはのちの春とたに契らぬさきに花の散ぬる
辨内侍
○
けぬか上にまたふる雪とみゆるまてきのふもけふも花は散也
入道三品親王
○
とはれつる人のかたみもと〻まらすふめと跡なき花のしら雪
前太政大臣
○
いにしへのならひとてこそ慰むれ散しく頃の花の別れは
藤原經平朝臣
○
をのつから今年のみちる花とみはいか斗なるつらさならまし
藤原爲繼朝臣

○
さらてたにうつろひやすき花の色に散を盛と山風そふく　平長時
○　權少僧都珍覺
めのまへに散てふことの悲きもはなはよそにや思ひやらまし
○　玄譽法師
老ぬれはこれを限りとみる花に哀をそへて春かせそ吹
○　度會興房
花をのみあかすちりぬとうらむれは我みの春もさかり過つゝ
あきのはな　前太政大臣
かすかのやゆかりの草のたれまきて花咲秋をけふみつる哉
○　前大納言基良
あるしなき庭の千草のはな盛いかはかりかは秋はかなしき
○　辨内侍
咲はなにのへをさかりとみわたせは千草の露のそむる秋かな
○　成思法師
うへ置し籬の花のさかさらはむかしのあと〳〵いかてゝらまし
○もみち　前大納言爲家
岡邊なるふるれのはしの初もみち色めきわたるゆふつく日哉
○　正三位知家
秋來ぬと人もみるへくまきもくのあなしの山ハはつ紅葉せり
○　藤原經平朝臣
おほかたの梢はいまたゝくれぬにみ室の山はうすもみちせり
○　前攝政左大臣
染やらぬ青はましりの薄もみちいかなる色の時雨まつらん
○　御製
はる〳〵とひとつ梢とみしさもけさは色々の紅葉しにけり
○
露霜のをきあへぬまに染てけりはやまのすその秋の紅葉は　入道前攝政
○　權大納言公相
里遠き霧の晴まのうすもみち絶〳〵みゆる秋のゆふ暮
○　大納言典侍
むら時雨はるかにめくる外山より尾上の里のもみちをそ見る
○　信實朝臣
むへしこそ松は紅葉に殘りけれおなし枝をたにわきて染れは
○　藤原爲繼朝臣
秋山はゝくる〳〵程のあらはれて木もとに今はもみちしにけり
○　中原友章
いつくにもしくる〳〵雲はか〳〵れとも龍田の山そまつ紅葉せる
○　源兼泰
紅葉はの色にもゝるし神なひの梢を寒み時雨しにける
○　藻壁門院少將
ゝくれつ〳〵うき雲はる〳〵山もとの梢をさむみ紅葉しにけり
○　前攝政家氏部卿
けふも猶いかに染むとしくるらむはや紅葉にし山のこのはを
○　權大納言公相
神なひのいはせのもりの紅葉はをいかに時雨のわきて染らん
○　權少僧都澄舜
おほのなるみかさの杜にしくれふり染なす紅葉今さかりなり
○　皇太后宮大夫俊成女
紅にちしほやそめし山姫のもみちかされの衣手のもり
○　前太政大臣
枝をそめなみをも染つもみちはのゝたてる山の瀧のしらいと

○
龍田河ちらぬこすゑのうつるふり波のしたてる秋の紅葉は　前大納言基良
草のはらかれ行あきの初霜に色つきそむる峯のもみちは
○　權大納言實雄
そめてけりまなくときなく露しものかさなる山の峯の紅葉は
○　從三位行能
しくれ行をくらの山のもみちは〳〵臺にしもそてりまさりける
○　信實朝臣
晴くもりしくる〳〵數はしられともぬれてちしほの秋の紅葉は
○　藤原爲繼朝臣
日影みぬいはかき紅葉徒ちにしくる〳〵色はほすひまもなし
○　入道攝政家宰相
夕つく日うつろふみれの雲まより山したてらす木々の紅葉は
○　藻壁門院少將
たつたやま木のは色つく程はかりしくれにそはぬ秋風もかな
○　同院但馬
外よりも色こそこけれ我やとのもみちも物や思ひそめけむ
○　藤原隆祐
おほ井河はやふれよせよわたし守山のもみちに嵐もそたつ
○　侍從伊成
紅葉〳〵の散にもまかふしくれ哉殘る木すゑをそめ盡すとて
○　尙侍家中納言
いつの冬ちらはともにと契りけむ枝さしかはす木々の紅葉は
○　鷹司院帥
いかにせむ枝もゆるさぬもみちはをさそふ嵐のつらくも有哉
○　藤原行家朝臣
行秋のぬさに手向し紅葉はの殘りあれはや今も散らん　圓地法師
○
木からしに葉守の神のこゝろさへなひきにけりと散もみち哉　藤原行宗朝臣
○はゝそ
岡へなるはゝその梢霧たちて色つくみれはかりはきにけり
○　藤原爲氏朝臣
かたをかのはゝそのもみちいろつきて秋風寒く鴈そ鳴なる
○　入道三品親王
小男鹿のたちならす山の岡へなるはゝそは早く紅葉しにけり
○　前攝政左大臣
さほやまのはゝその紅葉けさみれは時雨をはやみ色つきに鬼
○　前太政大臣
薄きりの外山かくれのはゝそはらうつろはんとや時雨そむ甕
○　衣笠前内大臣
たかせさすさほの河原のはゝそ原うつろふ秋に成そしにける
○　前大納言爲家
みれつゝくとやまのすその柞原あきにはあへす薄もみちせり
○　正三位知家
鳴かりの聲きく山のはゝそ原した葉かつ散秋風そふく
○　信實朝臣
いつみかはゝその梢みわたせはわたりを遠み紅葉しにけり
○　藤原爲教朝臣
けさ見れは時雨にけりなさほ山のはゝその紅葉色そうつろふ
○　法眼長尋
あらし吹いはたのをの〳〵柞原あはれふり行秋の色かな
○　前大納言伊平

山科のいはたのもりに冬のきては〜そのもみちいまか散らし　前大納言爲家
○まゆみ
朝霧のあたちのまゆみ秋はまつしくれをこめて色つきにけり　正三位忠定
○
あたちのも雪ふりにけり狩人のひかぬまゆみの末たはむまて　藤原隆祐
○かへて
夏山のおなし緣にましりても人のみはやすわか〜へてかな　前大納言伊平
○
しけり行庭のかへての若みとり色そめかへん秋もまたれす　正三位知家
○
めかれせぬ宿のかへてゐいつのまに色とる秋の風は吹けむ　入道前攝政
○まつ
神風やも〜枝の松に契りをきしいろは常磐の千世もかはらす　九條前内大臣
○
霜やたひをけとかれせぬ濵松の久しきよ〜り波やかけ〜ん　衣笠前内大臣
○
すみよしのきしのみつかき神さひてその世もしらぬ松の色哉　鷹司院帥
○
住吉のあら人かみのともなれや世々にかはらぬきしのひめ松　右衛門督通成
○
千とせまてきみかすむへき池水にかけあらはなる岸の松か枝　權中納言顯朝
○
ちとせともかきらしものを庭の松なゐく春も君にまかせて　嘉陽門院越前
○
高砂の松を友とはなけれともなかめそなる〜いたつらにして　信實朝臣
○

しも雪の色にゆつりて高砂の松も我をは友とやはみむ　從三位行能
己かとちさてのみ年はたけくまの松の千とせの朽やはてなん
○
ゆき島の巖にたてるそなれ松まつとなきよに萎れてそふる　入道三品親王
○
さひしくてふりぬるものはみの山の一木の松と我となりけり　入道前攝政
○
時雨する紅葉の外のまつの色はをのれさめてそ秋はよそなる　前大納言爲家
○
浦とをきしらすのすへのひとつ松また影もなく澄る月哉　信實朝臣
○
しほ風にえやはむかはぬ枝も葉もそむきにまてる浦の松原　藤原爲氏朝臣
○
猶しはしみてこそゆかめたかしまや麓にめくる浦のまつ原　前攝政家民部卿
○
いかにせん哀なるおのひとつ松よにたくひなくもの思ふ身を　式乾門院御匣
○
夢にたにあふの松原いかなれはもろこしよりもはるけかる覽　從三位行能
○
うき名のみあらはれわたる河きしの松のねたくもかへる涙哉　嘉陽門院越前
○
岩の上におひぬる松のたねをのみ頼むはかりの慰めそなき　源孝行
○
誰世にかあふをたのみの種まきていはにも松の生はしめけむ　明教法師
○
いはしろの野中のまつを我とみよ難面き色にむすほ〜れつ〜

○
波よする磯まの浦のそなれ松ねをしほにのみぬる〜袖かな　橘廣兼
○
思へとも人にはえこそいはしろのまつを遠き身をいかにせん　賀茂季保
○かえ
しめのゆき紫のなるかえのもりはかへすなから埋もれに鳬　前大納言爲家
○
道のへのかえのかさおち拾ふとて木の下かくれ行そやられぬ　信實朝臣
○たけ
吳竹のときはかきはの影はあれと君のみかけに萬代やへん　卜部兼直宿禰
○
夏かけのそのふに生る吳竹のいやしき〳〵にしけきうきふし　入道三品親王
○
朝戸明てみれはす〜しもうへそよく竹の葉なみの秋の初かせ　眞觀
○
いかにして籬のたけのよの程に身にしむ風の吹かはるらん　隨心法師
○
秋の雨のとたえて過る山おろしに軒はの竹もまとをうつ也　藤原隆祐
よに絶ぬともとみるこそ哀なれ雪ふる頃の庭の吳竹
物おもふ涙と聞もあはれなりむかしそめける紫のたけ　平重時朝臣
○
風吹はしとろになひくなよ竹のそろはぬふしによを重れつ〜　前大納言爲家
○たかむな
いかて我かきれに生る竹のこによのうきふしを思ひしらせし　前攝政左大臣
○むめ
身こそかく袖のみぬれめ春雨に花さへをそき宿の梅かえ

○
はるかにも思ひこしかと我宿のねこしのむめは花咲に鳬　衣笠前内大臣
○
我屋とのねこしの梅もかた咲てほすゑの風ぞ薄匂ひなる　前大納言爲家
○
梅かえを春のよそなる宿にうへて心ゆかすや花のさくらむ　正三位知家
○
梅の花今さかりなりことならはをちかた人もはやきまさなん　入道前攝政
○
我せこにまつ〜けやらん梅花あかぬにほひをきてもみるやと　前大納言爲家
○
わか宿になにかうへけん梅のはなにほふ頃とて人もこなくに　權大納言良教
○
香をとめてたつれそきつる梅の花いとはし今は〜るの山かせ　尚侍家中納言
○
咲ぬとはかせにしらるな梅花おしむ心のくまにかくれて　鷹司院按察
○
さても猶色そゆかしき梅の花かをふきかくる風ばあれとも　辨内侍
○
梅かえの花のたよりのゆかしきは風に匂ひをつくる成けり　權大納言顯朝
○
夢ならておとろくものは春風の枕ににほふ夜半の梅かか　藤原爲氏朝臣
○
今こむといはぬものゆへ梅花にほふさかりは人そまたる〜　藤原爲教朝臣
○
いたつらに垣ほの梅は咲ぬれとかをたつれてもとふ人はなし　藤原行宗朝臣
○

梅花にほふやかこと我宿にさらてはいつか人のまたるゝ
うたて人とひこぬ宿の梅の花なにそ匂ひの有かひもなく
平重時朝臣
○
よそ人そ春はとひける山かつの色かもしらぬ軒の梅かえ
藻壁門院少將
○
月すまは色やまかはんむめの花やみそ匂ひのわくかたもなき
尙侍家中納言
○
いかにせむ梅ちりかたに成にけり折にをこする人もこそあれ
前大納言爲家
○
きみこすて軒はのむめは散ぬへし誰ゆへ待し花の盛そ
祝部成茂
○
さりともと移ろふまてに梅花なれしかたへの人そ待るゝ
藤原隆祐
○
わきて猶よろはおしけん梅の花ちらすはあすもみん人のため
法印尊海
○
風吹は空にしられぬ雪をさへ窓にあつむる軒の梅かゝ
權大僧都實伊
○こうはい
咲あへぬ軒ぢの梅のくれなゐにまつふりいてゝ驚そなく
前大納言爲家
○
むめかえの初花染のくれなゐにうつるはかりの袖のかそする
衣笠前内大臣
○やなき
白波のうつたのうへの河柳もゆるいふ春はきのふけふかも
眞觀
○
さゝれふみいさ行てみん佐保路なる河そひ柳もえわたるらし
藤原行宗朝臣
○
うち渡す駒ひきとめてさほ河のきしの柳のなひくかけみん
○
春はまつなひきにけりなさほ姫の染る手ひきの青柳の糸
信實朝臣
春風のわきても吹か山かけにみたれてなひく青柳のいと
入道前攝政
○
青柳のしろのけしきもたをやめのかさしの玉の露そ亂るゝ
攝政前太政大臣
○
青柳の糸よりかけて春かせになひくけしきを人にみせはや
前太政大臣
○
みちのへのひともと柳ふして靡きおきて亂るゝ春風そ吹
前大納言基良
○
うちなひき春さりくれは道のへに染て亂るゝ青柳の糸
鷹司院按察
○
青柳の枝のいとまもみえぬまて吹みたしたる春の風かな
入道前攝政
○さくら
あをによしならのあすかはいたつらに猶八重櫻いまも咲なん
御製
○
いと早も宿のさくらは咲にけり花まつ人のこゝにしもくる
前攝政左大臣
○
いこまやまあたりの雲とみるまてにおこしの櫻花咲に鬼
藤原隆平朝臣
○
高砂の尾上のさくら夜の程に春雨ふりて花咲にけり
鷹司院帥
○
山里は櫻さきぬとつけやらはさすかに人も今やとひこん
右衞門督通成
○
わく方もなくて詠めむ櫻はな立なまよひそ山のはの雲
從三位行能
○

ふら雲のきやとるみねは高砂のおのへにさける櫻なりけり
藤原隆祐
○
大原やをしほの山のさくらかり雲こそ春のとたち成けれ
九條前内大臣
○
はし鷹もさらふになりぬ櫻かり春のとたちに嵐吹らし
衣笠前内大臣
○
いさ櫻おりてかさゝむふりはつるかしらの雪の色やまかふと
前大納言爲家
○
櫻花いけらは後とたのまはあかぬに身をもかへやしなまし
藻壁門院少將
○
あらし吹山への櫻いかにして志はしも花の盛なるらん
辨内侍
○
おりてみむことのみそふき櫻花うつし心は散も社すれ
眞觀
○
世中にうきめみえてし身のはてはいさ櫻ともえこそいはれれ
源俊平
○
さくら花かはらぬ色をわきかれて雲さへおしき春の山かせ
前參議宣經
○
春くれはまつもおしむも人ことに櫻なりけり物思ひの花
承明門院小宰相
○
櫻さくふしの〳〵おくに住人は風ふくことにものやかなしき
尙侍家中納言
○
あたにのみ散はうけれと櫻花さかさらはとはおほえやはする
九條前内大臣
○
瀧河のいはもとさくら朝な〳〵おちても花やあはと浮なむ
衣笠前内大臣
よのなかにみれの櫻はありてなしあなうとやいはん春の山風
○
あたならはさかすもあらなん櫻花おしむも人の思ひそふよに
權大納言公相
○
心からちるとはいはん櫻花れたさもれたし春の山かせ
山高みさこそあらしはさそふともあまりなるまて散櫻哉
按察使爲經
○
さくら花うつろひやすき世間の人の心にいつならひけん
從三位顯氏
○
何ことも心にかなふ世なられはおしむにつけてちる櫻かな
承明門院小宰相
○
あすしらぬ我みなからも櫻花うつろふ色そけふはかなしき
鷹司院新參
○
はてはうきよとはみなから住ものをうらやましくも散櫻哉
藻壁門院但馬
○
見る儘にありて浮よのならひそとしらせかほにもちる櫻かな
藤原隆祐
○
春のあらし吹にふらしなかつらきやたかまの櫻雪とふるまて
藤原長綱
○
いつまてと身をたのみてかおしむらん櫻のみ散浮世ならぬに
大中臣俊職
○
またれしもきのふと思ふに櫻花おしむ計もいつなりにけん
玄饗法師
○
としたけて後こそいとゝ櫻花ちる哀をは思ひしりけれ
前大僧正行遍
○
春のよの匂ひも深き八重さくら月のなさけを重てそみる
權大僧都實伊
○

咲やらぬ山したかけの遅櫻ほかの〳〵ちとは誰契りけむ
前太政大臣
○
殘りける深山かくれのをそ櫻なつさへかせを猶やいとはむ
衣笠内大臣
○かにはさくら
雪ふかき垣れの梅のいかにしてなを埋もれぬかにはさくらん
源寂法師
○はなさくら
花櫻人のためともうへさりきとはすはとはす春の山さと
惟宗盛長
○
たえず立かつらき山のしら雲にわくことかたき花櫻かな
前大納言爲家
○
うき人のあたし心の花櫻ことはり過てうつろひにけり
前攝政左大臣
○
なにそこはよにさためなき花櫻おしきはかりのかはらさる覽
式乾門院御匣
○
故郷になをうへをかむはな櫻うつろふ色のためしなりとも
衣笠前内大臣
○やまさくら
春かすみたつをみしよりみよしの〳〵山の櫻をまたぬ日はなし
正三位知家
○
あまのはらみれはたかきのやま櫻空にたな引雲はそれかも
信實朝臣
○
よ處にしてわきやかれなむ雲か〳〵るかの山櫻花さきにけり
眞觀
○
久かたのあまのしら雲たなひくはなら山櫻今さかりかも
祝部成茂
○
おりてみぬ春はなけれと山櫻あかぬは花の色やそふらん
藤原長綱
○

山櫻あるをみるへきときたにもいかに契りて霞そめけむ
信實朝臣
○
我もしかありしものなり山櫻あはれはかなきひとさかり哉
藻壁門院小宰相
○
けさのまの盛を見てもやま櫻うきをわする〳〵花のうへかは
下野
○
手折ても誰にか見せむ山櫻花もかひなき旅の空かな
衣笠前内大臣
○
かすみよりもれて吹くる春かせに遠山櫻人にしれつ〳〵
權大納言實雄
○
咲にほふ都のきたの山櫻いく里かけて人さそふらむ
前關白左大臣
○
菅のねのなかきひかけを足引の山の櫻にあかて暮ぬる
前大納言爲家
○
身は春のよそなりなから山さくら咲ぬる花よえやはめかる〳〵
權大納言公相
○
あちきなくまたこりすまにおしめとも移ろひあまる山櫻かな
權大納言實雄
○
散さいふことこそうたて山櫻なれては花のつらさなりけれ
從三位行能
○
ちることを思ひますれは山櫻花みる春もうらみやはなき
藤原爲氏朝臣
○
春の日もあかてそくる〳〵やま櫻花のさかりのうつり安さに
承明門院小宰相
身にかはるならひしあれな山櫻あかぬ名殘のうきにつけても
○
あかてちるなけきはあれと山櫻逢みる春はあまたへにけり

宣仁門院一條
○
人しれぬ深山のおくの山櫻散はてぬとも誰かおしまん
藻壁門院少將
○
けさはまたうつろひそめて山櫻いまより風のつらさみすなり
信實朝臣
○
今はとやかたえの花もちりそめてうきたつころの山櫻哉
平重時朝臣
花さやは眺もはてん山さくらちるまをたにと雲にまかへて
法印良守
○
みよしの〳〵雲にうきたつ春かせに散さへまかふ山櫻かな
前太政大臣
○
雲となり雪とふりしく山櫻いつれを花の色とかもみむ
前大納言基良
○
いへちをもさこそ忘れ山櫻れにかへるさを何急くらん
藤原爲氏朝臣
○
おほかたの春の心はのとけきにちることさいそく山櫻かな
藤原行宗朝臣
○
よしの河瀧のうへなる山櫻岩こそ波の花とちるらし
正三位知家
○にはさくら
春の日のかけのとかなる庭櫻ほかにちらさて花をみる哉
前大納言爲家
あなこひし我ふる里の庭櫻手をりもてきてみせんともかも
○ひさくら
春をやくひかりはおなし梢にてわきてなにたつひ櫻の花
蓮信法師
○
ちるたひにもえこかれてもおしけきはかまと山なるひ櫻の花
前攝政左大臣
○ふち
思ひ出ふならの都の藤のはなむかしを今に咲にほふめり

御製
○
ふかみとり色もかはらぬ松か枝はふちこそ春のしるし成けれ
正三位知家
○
みれは又松に引れていや年にさもそこたかくさける藤浪
平重時朝臣
しはかこふ藤の若枝に取そへて花のしなひをれろやたれそも
○
よそなから心にかけてみつる哉たれまつ宿の池の藤波
藤原隆祐
○たちはな
思ひやる昔しもとをきみちのくのしのぶの里に匂ふたちはな
源寂(舜)法師
○
猶たのめさつききぬれは橘の身はふるれとも花咲にけり
安嘉門院高倉
○
いける世に袖ふれをかん橘のかをなつかしみ人や忍ふと
九條前内大臣
○
昔をは我こそしのへ橘のこのした露に袖やふれまし
入道前攝政
○
かきりあれは昔に又もかへらしを香こそ忘れれ軒のたち花
前攝政左大臣
橘の花やはもとのはな〳〵らむ香こそむかしのしかのふる里
○
人めみぬやそのしまもりをのれもやはな橘を袖にかくらん
正三位知家
○
我せこかことしけきとてこすもあらは藤や過なんやとの橘
藤原爲繼朝臣
○
人そうきうつれはかはるならひたにしらぬ昔に匂ふ橘
卜部兼直宿禰
○
我戀はまして常盤木しけりあひてかさへ露さへ袖にひまなし

○
橘のはなちる露を今朝みればさそなむかしとぬるゝ袖かな　眞觀
○あへたちはな　淨恩法師
花さかぬおりもきてみよわか宿のあへたち花の色のてこらさ
○　正三位知家
ときはにてあへたち花のかばられと行とし古るく苔生にけり
○しぬ　入道前攝政
はしたかの鳥かへる山に春くれはつれなく殘るみれのしぬ柴
○　無品法親王
よもすから何をしくれの流つらむ檜原の山の峯の椎しは
○　前大政大臣
したもみちうつろふまゝにをくら山色ことになる峯のしぬ柴
○　前攝政左大臣
とき過る椎のさえたもみえわかすのちせの山に積るしらゆき
○　前大納言爲家
いつのまに誰たれまきてかた岡のむかひのみれにしける椎柴
○　承明門院小宰相
いのりこしふるしもみせす神山の椎柴かくれしのひはてなく
○　衣笠前内大臣
我こひは色にいてめやむかつおの椎のさえたは紅葉しぬと
○　信實朝臣
位山みれのしぬ柴いまはさて變らぬものと朽やはてなむ
○さくろ　正三位知家
吾妹子はかたしきなかられにけらしけさくろ髪も亂れ勝なる
○なし　前大納言爲家
徒におふのうらなし年をへて身は數ならすなりまさりつゝ
○
なみかくるおふのうらなしみなるらんとも覺えす濡る袖かな　信實朝臣
○やまなし　前大納言爲家
き〻渡るおもかけみえて春雨の枝にか〻れる山なしのはな
○もゝ　源直氏
春の日にさらすにしきは霞たつのやまのもゝの花さかりかも
○すもゝ　信實朝臣
かすならぬかた山かけの青すもゝ芽はあるかひもなく也に鳧
○　藤原隆祐
いなしきや竹おひ廻る園ふよりみゆるすもゝの花もめつらし
○からもゝ　衣笠前内大臣
いかにして匂ひそめけむひのもとの我國ならぬからもゝの花
○くるみ　信實朝臣
夏山のしけみかくれの姫くるみかれてみまくのかたき戀かな
○すき　前攝政左大臣
忍ふへき誰しるしとかいにしへの人はうへけむ杉のむら立
○　前大納言爲家
道のへの杉の下枝に引注連はみわすへまつるしろしなるらし
○　皇太后宮大夫俊成女
たつれこし三輪の杉むら跡とへは霞にまかふ春の山もと
○　衣笠前内大臣
おく山の谷のすきふの朝あけにひとりき〻つる時雨(鳥カ)哉
○　入道前攝政
夕立のふるかはのへのふか緑ぬれてす〻しき二本の杉
○　九條前内大臣
旅人は今やたつらんとやまなる杉の梢に月かたふきぬ

○
月かけは三輪の山もと神さひてむかしの杉に秋かせそ吹　法橋春撰
○　藤原行宣
杉のはに秋のしろしはみえれ共や〻はた寒しみわの山かせ
○　從三位行能
初しくれふるの山なるすきむらは變らぬ色もしるし成けり
○　承明門院小宰相
とひもせてつれなき色をならへとや誰うへ置しみわの杉むら
○　信實朝臣
この暮もまたみたれなはあや杉のめみせにく〻や人の思はむ
○むろ　藤原隆祐
室の木のときはに闇きしま陰を涙のよるとはいふへかりけり
○　源仲業
ともの浦や波ち遙にこくふれのそかひになりぬ磯のむろの木
○まき　九條前内大臣
槇のはに月かけさゆるおく山のみれのかけちはあふ人もなし
○　前大納言爲家
みすひさになりそしにけるをすて山まきのふる木の葉深き迄
○　前中納言經光
槇の葉もこけおふるまて成にけりいくよかへぬるなか峯の山
○　正三位知家
ふひのまに雪積るらしまきのはのしなふをやまの風も音せす
○　源有長朝臣
夕されはをすての山の苔のうへに槇のはしのき積るしら雪
○かつら　前大納言爲家
舟さむる秋の入江の月かけにひかりたまらす散かつらかな
○
わたつうみの月のうへこす白波はかつらの枝の花と散つゝ　正三位知家
○　信實朝臣
ことに今ふる里寒きなか月の桂のもみち秋かせそふく
○かうか　正三位知家
わきもこにかくと許りはつけやらんかたみかやうか花咲に鳧
○あふち　源仲業
たまにぬくさ月も近しまたきよりそともものあふち人な手折そ
○も　前大納言爲家
御垣もるとのへにたてるあふち影ふたふみなれし道な忘れそ
○かし　入道前攝政
夜をかさね山路のふもゝふちかしのときはの色そ冬なかり鳧
○　前大納言爲家
とやまなるをかのかし原吹なひきあれ行頃のかけの寒けさ
○　眞觀
秋かけて露やはそむる玉たすきうねひの山の峯のかしはら
○くぬ木　衣笠前内大臣
高瀨さすさほの河原のくぬきはら色つくみれは秋の暮かも
○つはき　藤原行宗朝臣
みの山のら玉つはきいつよりかさふのあかりにあひ初めけん
○かしは　入道前攝政
神まつる頃にあはむとみゆる哉はひろになれるかしは木の杜
神山のこのてかしはを取かさしうつきになれは君をこそ祈れ
時雨の見るからをの〻もとかしはもとつはもなく紅葉しに鳧
○　源有長朝臣
霰ふるならのひろはの玉かしは枯て音せぬものとやはきく

○
故郷となりにしよゝりみの山の玉のはかしはとる人もなし　源寂法師
○ほゝかしは　浄恩法師
おほのなる三笠の杜のほゝかしは神のひくてに幾世ますらん　卜部兼直宿禰
○
すへらきのみわそゝきますほゝかしは大宮人の捧もつかも　藤原隆祐
○
かた山のそかひに立るほゝかしは風にからかふ音のさやけさ
○なかめかしは
神無月しくれぬ日こそなかりけれ詠かしはのなにやふるらん　正三位知家
○
雲晴ぬなかめかしはのまた露のをやみなくこそ袖ぬらしけれ　前大納言爲家
○つゝし
ゆふひさすをのへの松のしたつゝしときわきかほに花咲に鬼　信實朝臣
○いはつゝし
かた岸にれをさしのほる岩つゝしいつれを枝と花の咲らん　正三位經季
○
入日さすむかひの岡のいはつゝしいはれとしるき春の暮哉　前攝政左大臣
○
ことにいてゝいはぬはかりそ岩つゝしにほへる姿今も忘れす　入道前攝政
○ひさき
幾秋も月にはあかしひさきおふる清き河原の有明の空　藤原爲繼朝臣
○
冬かれにはや成にけりひさき生ふるをの〳〵淺芽に霜や置らん　前大納言爲家
○くり
古はたの栗の若はのこき垂てこは如何にとよれのみなかる〳〵
○くは
あちきなく物は思はし賤かほすにぬ桑まゆのうちにくるしも　平重時朝臣
○
おほうみの其なかはまや君か世に〳〵ぬ桑原とみたひなるへき　源孝行
○はたつもり
はたつもり積りし雪の消ぬれは賤かすさひに若葉つむらし　信實朝臣
○しきみ
哀なるしきみの花の契り哉ほとけのためと種やまきけむ　前大納言爲家
○
かよひけろ人のあとたにみえぬかなしきみか原にふれる白雪　嘉陽門院越前
○あせみ
みる草は心してかれ夏のなるしけみのあせみ枝ましるらし　信實朝臣
○やまちさ
足曳の山ちさのはな露かけてさけろ色これ我みはやさん　衣笠前内大臣
○ゆつるは
ゆつるはの常盤の色もうつもれぬあらくま山に雪のふれ〳〵は　正三位知家
○
これそ此春をむかふるしるしとてゆつるはかさし歸る山人　前大納言爲家
○かたかし
誰かみむ身をおく山にとしふ共よにあふことのかたかしの花　衣笠前内大臣
○つま〳〵
神さふるいそのつま〳〵のれをはへて深くや人をしたに忍はん　信實朝臣
○
磯の上は心してゆけまさこちやれはふつま〳〵に駒そつまつく　源兼氏
○
たつのゐる磯へのつま〳〵世々懸て何れかひさに年のへぬらん

○されき
青山となにこそ立てれをのつから峯のされきは花咲にけり　信實朝臣
○とり
かたしきの衣て寒しいかはかり雪のみやまに鳥の鳴らん　正三位知家
○みつこひとり
袖にみつよはの泪をたつれこて水こひ鳥のひとり鳴らむ　信實朝臣
○はなちとり
籠のうきを思ひやいつる放ちとりさらぬわたりの梢にそすむ　前大納言爲家
○ひなとり
春の〳〵のありすの雛のはをよはみ思ひたてとも行衛なのよや　從三位行能
○かひこ
も〳〵鳥のふるすにとめしすもりこの歸らぬものは暮る年なみ　空曉法師
○
ためしあれは鶴のかひこも君か爲とをつ〳〵とをや千世を重ん　皇太后宮大夫俊成女
○つる
むれぬつ〳〵和歌の浦はに鳴田鶴の聲にも君か千世そ聞ゆる　衣笠前内大臣
○
住よしのうちのわかすのしほかれに神さひ渡る鶴のこえかな　前大納言爲家
○
汐かれのひかたの浦のはなれ洲に田鶴そ鳴なる友よはふらし　衣笠前内大臣
○
あしたつのこたへぬれこそ悲けれ我ため高き雲ぬなられと　正三位知家
○
人しれすれをこそなかめ島かくれ住あし田鶴の妻こひにのみ　正三位成茂
○
友鶴のむれぬしことはむかしにてみしまかくれに我のみそ鳴　信實朝臣
○
わかの浦に我ひと群のあしたつの數は例しもあらしとそ思ふ　祝部成茂
○
うへはしもしたは凍れる蘆のはのさやくよ寒にたつ澤になく　衣笠前内大臣
○かり
天つ空雲のはたての秋かせにさそはれ渡るはつかりの聲　御製
○
ほの〳〵と朝霧かくれはつ鴈のはつかにすくる聲きこゆなり　入道三品親王
○
むはたまのよわたる雁の聲すなりいまはた萩の露あまるらし　九條前内大臣
○
河水にとわたる鴈のかけみえてかきなかしたる秋の玉つさ　前大納言基良
○
こゝろからあきしもなとかこしちより都を旅とかりの鳴らん　權大納言公相
○
よしさらはこし路を旅といひなさん秋は都に歸る鴈かれ　右近中將經家
○
山のはゝ月いてぬへきけしきにておりめつらしき初雁の聲　式乾門院御匣
○
かけてこむ誰玉章はしられ共空にまたるゝはつかりのこゑ　承明門院小宰相
○
越の海をいつかいてけむあまをふれ初かりかれそ寒に聞ゆる　鷹司院按察
○
人毎にいむなるものを行かりのたか玉つさを月にみすらむ　衣笠前内大臣
○
佐保山のこすゑも色やまさるらん霧たつ空に鴈はきにけり　藤原行宗朝臣
○

けさの朝け秋かせさむみ我宿のそともものわさ田鴈そ鳴なる　平基久
○天の原月にいさよふかりかれのこゑうらかなしさよや更ぬる　三善康家
○秋のたの穂むけの風をたよりにてあまとふ鴈はゝやもきに鳧　藤原基綱
○月にゆくかりの泪やこほるらんをのかはかせもさゆる霜夜は　平重時朝臣
○かりかれは花をそまたぬしかすかに鳴て別れぬ春はなけれと　平長時
○歸るさの雲路もかすむ曙にあまのとわたる春の鴈金　藤原孝繼
○わきてよもあとは霞もふかゝらし雲ゐの鴈そ遠さかるらん　藤原隆祐
○秋風にあひみのむをはいのちとも契りて歸る春の鴈金　下野
○かへるかりたかたまつさもかきたえて霞にきゆる鳥の跡哉　信實朝臣
○あけてみぬ誰玉章も徒らにまたよをこめて歸るかりかれ　前大納言爲家
あやしともえやかきそへん玉章のもしならひして歸る鴈金　尚侍家中納言
○玉章のあと〻なえこそことつてを人もそしのふかへる鴈金　皇太后宮大夫俊成女
○おのか身の数にかける玉章をやらてもみはや歸る鴈金　入道前攝政
○あかなくに歸る雲ゐに春雨のふるは泪か鴈そ鳴なる

○行鴈の山とひこゆるかたをなみ霞そふかき曙の空　入道前攝政
○何ゆへに誘はれつゝ雁かれの行ては歸るならひ成らん　御製
○誰ためにこし鴈かれときかれ共かへるはつらき春の別路　前太政大臣
○かへる鴈たかの爲にならひきて心もとめぬ空にしもなく　承明門院小宰相
○春かすみなを立かくせかへる山越ゆく鴈のみちまとふかに　皇太后宮權大夫師繼
○こゝろからかへるわかれもしかすかに哀なれはや雁の鳴らん　藤原隆祐
○こしかたを思ふれ覺のあけほのにかへるもかなし春の雁金　法印實位
○春霞たちわかれぬるかりかれはみもせぬまてそ遠さかりゆく　藥壁門院少將
○我ならぬ雲井のかりも音に鳴て春をはよそに遠さかる也　藤原忠直朝臣
○こゝろから都をよそに行雁もわかれはうしとれをや鳴らん　藤原爲綱朝臣
○あかつきの別や空にしりぬらんよこ雲わけて歸る雁かれ　藥壁門院但馬
○歸る雁はな咲程の春にしもなと限りけろ別なるらん　藤原爲氏朝臣
○花みむといそく心も有物をいかにちきりてかへるかりかれ　中原師光

○みやこにも花なき里はあるものをなへてそ歸る春の雁かれ　藤原隆祐
○うくひす
しら雪のふるすは今朝も猶さえて鳴れも解ぬ谷のうくひす　權大納言實雄
○今もなを雪とけかたき山里にすかくれてなく鶯のこゑ　尚侍家中納言
○ふる雪に谷のふるすを出やらてまた物うけに鶯の啼　鷹司院帥
○明やらぬ谷のとすくる春風にまつさそはる〻鶯のこゑ　皇太后宮大夫俊成女
○はるなれはまつさくむめの花のかにやまの鶯鳴ていつらし　入道前攝政
○みよしのは谷のふるさとちかけれは先馴そむる鶯の聲　前大納言基良
○せりつみしみかきか原の鶯はおなしむかしのれにや鳴らん　九條前内大臣
○さきやらぬ我身の花のものうきに鳴やしつ〻の春の鶯　正三位知家
○いまこそは妻こひすらし霞たつはる日かくれに鶯のなく　眞觀
○世は春と誰もしるらし鶯のなき〻かせたるけさの初音に　信實朝臣
○木ことにはなかすや有らんふる雪に梅か〻とむる鶯の聲　嘉陽門院越前
○鶯のはつれはき〻つ我宿の花こそ今は立ゐまたるれ　源具親朝臣
○谷深きゆきのふるすにおもなれて花にものうき鶯のこゑ　源直氏
○わか戀はまたふるすなる鶯のなきても人に知せかれつ〻　源仲業
○鶯の聲をきくにもかなしきは春のよそなるわか身なりけり　從三位行能
○ほと〻きす
常磐なるいはれの山の郭公つれなかれとはまたぬ夕を　前攝政左大臣
○あはさりしよひのれたさのありかほに我またせたる時鳥かな　衣笠内大臣
○今こむとたのめやはせし時鳥有明の月に何またるらん　衣笠内大臣
○時鳥しのふ比とはしりながらいかにまたる〻初れ成らん　前大納言基良
○いかなれはさ月まつまは郭公なくれを人におしみそめけむ　前大納言基良
○とことはに待そくるしき時鳥鳴ぬよをたに知よしもかな　正三位忠定
○今宵ともたのめぬものを郭公うたていたくもまたれつる哉　御製
○われも又いさかたらはむ時鳥まちつる程の心盡しを　前太政大臣
○鳴聲をぬさと手向よ千早振神のみむろの山ほと〻きす　衣笠前内大臣
○時鳥なくれを聞はふるさとの花橘は今さかむかも　前大納言爲家
○なきふるす里をはしらて時鳥きくやはつれと思ひけるかな　按察使爲經
○聞つやと人にそつくる郭公我まちかれしころのならひに

○　　權大僧都實伊
たかためのはつれ成らむ時鳥遠の高れを鳴て出なり
○　　宣仁門院一條
まさろまてひとり明ぬる短夜になく〳〵そ聞山ほと〻きす
○　　承明門院小宰相
郭公よその別や憂物とあくるほとなき月になかなむ
○　　明教法師
一聲に明るとほと〻きすまた夜深そ鳴て過ぬる
○　　下野
年へぬるれ覺や空にまろからん絶すこと〻ふ時鳥哉
○　　前太政大臣
またれつるをかへの杜の郭公思しよりも聞ぬ日そなき
○　　入道三品親王
きけはうしきかれは戀し時鳥むかしの夏は如何鳴けむ
○　　權大納言實雄
たちかへり鳴ふるせとも時鳥猶あかなくにけふも暮しつ
○　　法印良守
こゑふりて馴ぬる後も郭公あかぬは何の契り成らん
○　　藤原爲繼朝臣
なきふるす時こそ有けれ時鳥なにか卯月の空にまちけむ
○　　藤原忠直朝臣
岩こゆる河をとすめる秋のよの更行月に千鳥なくなり
むれてぬるさほの河原のむらちとり霜より外の跡も殘らす
○　　衣笠前内大臣
山近きさほの河との夕霧に行かたまらす鳴千とりかな
○　　權大納言忠信

山河のみかけにそよく蘆のほの寒き夕になく千鳥かな
○　　從三位行能
ふらすけのおふの河原のかはちとり鳴よの月の影のさむけさ
○　　信實朝臣
霜さゆる堤のうへの川むかひおちかた聞は千鳥なくなり
○　　藤原爲氏朝臣
こゑたて〻千鳥ふは鳴古郷のさほの河風寒く成らし
○　　藤原爲繼朝臣
冬きては風やさむけき河千鳥なかき霜よに今そ鳴なる
○　　鷹司院新參
ひとりれの心の友となるものは霜夜にわふる千鳥成けり
○　　中原師光
ますけおふる水の河せにさよ深てつまよふ千鳥聲すみぬなり
○　　惟宗盛長
佐ほ河のよるせをさむみ更行は聲も惜ます千鳥なくなり
○　　義涼法師
思ひかれ行やさほちのさよ千鳥いもに逢よをちとせともなけ
○よふこ〻とり　　皇太后宮大夫俊成女
哀しる人をやさそふよふこ鳥月と花とのかほる山路に
○　　前大納言爲家
名にしおは〻またすもあらす行人をこてふに〻たる呼子鳥哉
○　　藤原隆祐
山深みかすめる空の曙におりあはれなる呼子鳥かな
○しき　　皇太后宮大夫俊成女
まちかれてきみかこぬよの數よりもなみた落そふ鳴の羽かき
○　　辨内侍

憂き人のこぬ夜の數もよ所なから知やあしたの鳴のはれかき
○　　衣笠前内大臣
曉の鳴のはれかきしけしともおいてよふかきれ覺にそきく
○　　前大納言爲家
霜かれの〻たの草れにふす鳴のなにのかけにか身をも隱さん
○　　平重時朝臣
澤水にぬれてなく〳〵立鳴の聲ふき流す秋の夕風
○　　藤原時朝
しられしなしきのはれかきかくはかり思ふ心の隙もなきとは
○からす　　信實朝臣
月に鳴やもめからすの聲すみてかた山はやし秋風そふく
○　　前大納言爲家
月にれぬやもめ烏のれにたて〻秋のきぬたそ霜にうつなる
○　　前太政大臣
うかれきてさこそは晝とまよふらめ明るもしらぬ月のよ烏
○さき　　衣笠前内大臣
鷺のゐる野澤のますけ水こえて猶臺そふ五月雨の空
○　　信實朝臣
河中のあさせやいつくみと鷺のたちともみえぬ五月雨の頃
○　　前攝政太政大臣
さきたてる沼田のわせを刈はて〻あゆちの水は顯はれにけり
○　　前大納言爲家
朝またきそれかあらぬか鷺たてる寒き汀にふする白波
○　　右兵衛督基氏
賤のおか外面のをたのみくさぬにみなくち守る鷺たてるめり
○はこ〻とり　　衣笠前内大臣

春されは友まとはせるほこ鳥のふたかみ山に朝な〳〵なく
○　　信實朝臣
何こと思ひいれてかはこ鳥の明る朝けの音をは鳴らん
○かほとり
ありとてもまたみもしらぬかほ鳥のいと〻霞に空隱つ〻
○　　藤原隆祐
河岸のいくぬを傳ふかほよ鳥みをたのみてや風をみるらん
○　　承明門院小宰相
我門のいくぬはあれとかほよ鳥つ〻しに〻たる聲たにもせす
○かさ〻き　　入道前攝政
あまの河雲井をわたる秋風に行あひを待かさ〻きの橋
○　　前大納言爲家
よそにして戀渡るかな天の原雲ゐに高きかさ〻きのはし
○　　從三位行能
鵲のわたすひとよの橋ばしらたちゐまたれし秋はきにけり
○　　源俊平
こひわたる心は空にかよへ共逢はよそなる鵲のはし
○もす　　正三位知家
鴫のゐるのへの草葉の末さはきはれもやすめす秋風そ吹
○　　信實朝臣
見渡せは一むら薄もす鳴てや〻かれにけるのへの淋しさ
○くぬな　　明珍法師
日のくれにおほやか原を分行はすかもか下にくぬな鳴なり

建長元年十二月十二日。類聚畢。同廿七日入二仙洞一依レ召也。
同二年九月六日可レ註二附作者一之由被二仰下一。仍令二書顯一也。

名之事。續六現存。此二樣令レ申下可レ爲二現存倭歌一之旨上也。部類未 微少。重而選加。而可レ爲二六帖一之趣仰也。倭歌之數八百五十首。作者百九十七人也。

右現存和歌六帖。以二日野家御本一書寫。以二新六帖及夫木抄一校合畢。

群書類集卷第百五十 畢

群書類從卷第百五十一

和歌部六

秋風抄

やまとうたの道はひろくしていりがやすく。遙にしてきはめかたきものなり。しかるに。いまこの事の盛んなるをきくに。いにしへのあとをあらため。歌のこゝろをもさとれる人あまたにそ成にける。これをいはんとするに。其くらゐたかきと。そのしないやしきとをはいれす。家をつき名をあらはせる人は。すなはち前大納言爲家卿はよく歌のおもむきをえて。そのをはたくみなり。しかもえんなるを元として。やさしきをれかへるにや。たとへは上陽の人のまなふたは芙蓉に似。むれは玉に似たるかことし。かの深宮のありさまも傍なきにあらす。

新續古 かち人のとはぬ夜寒に待侘てこはたの里は衣うつ也
我袖の海となるをは津の國のなかす涙のつもる成けり
徒になかめておつる涙哉すゝまぬ月のうらめしきまて

正三位知家卿は。をはふるきをしたひて。姿いにしへにはちさるをや。いはゞ陵園妾の春愁秋思そのかきりをしらす。松門のあかつきの月。柄城の秋風。ときとして身にしみ。こゝろをくたかすといふ事なきかことし。

續古 此春の分れや限りとまる身の老て久しき命ならねは

續後撰 神無月しくるゝ頃と云をはまなく木のはのふれは成けり
其かみもいつら我身の思ひ出あなうや斯て年のへにける

前左京大夫信實朝臣はそのさまおかしきをゝして心になさけ深し。さむさをこひのなとゝめるまても。たとふるに賣炭のおきなの。雪のあかつき車をかけしに。牛くるしみていちのほかにやすめり。官の使きたりて。半疋の紅紗を掛しかをし。

續古 物をのみさも思はするささきの世のむくひや秋の夕成らん

續後撰 數ならて思ふ心は道もなしたか情にか身をうれへまし

從三位行能卿は。此名ある人々よりほよめる歌 あまたもきこへれは。かよはして志るをかたけれども。そのおもむき。もしかの宇治山のあとをれかへるさまなるにや。いはゞ新豐の翁の。ひそかに臂を折て風吹雨ふる夜。天のあくるまてにもいたむてれふちさりしかども。雲雨望江の鬼とならさりし事をひさりよろこへるかをし。

曉のれさめにおもふ身のはてをしる人あらは哀とやみむ

皇太后宮大夫俊成女は。あはれなるやうにてまをすくなし。歌のさまつよからぬは。女のしわさなれはなり。いはゞ李夫人さりて。九花の帳夜しつかなるに。魂きたれとも物いふ事なかりしかをし。

新古 梅の花あかぬ色香もむかしにて同しかたみの春のよの月

同 あくかれて嵐ぬよの塵の積る迄月にはらはぬ床のさ莚

後撰 はかなしや賴めはこそは契けめやかて別れもしらぬ命に

前侍從隆祐は。その心あまりてをはのこれり。はしめはほまれなきにしもあらす。いはゝ大行の路にことならす。衣裳にたき物をすれとも。容飾をゝすれとも。むなしかりしかをし。

玉 かもめぬる藤江の浦の朝ほらけあれたる波も心すみけり

何となくしらぬむかしの戀しきは有明の空にめくる月影

この人々をゝきて其名高くきこゆる。あるはもろこしのふみにたつさひて詞をかさり。あるは法のをしへにつきて心をぬ

すめり。これもよせおもく。かれもなさけ有といへども。そのいにしへを思へはかゝるへくなんあらさりけるにや。たゝはなをもてあそひ。月をあはれむ心をのみそあらはせりける。あるはふるきをはなれかひて。及はぬすかたをまなひ。あるはひとしれぬ海山の名をとめて。めつらしき事をえたりとおもへる。これらのたくひは。淸行式を見さる人のこのみよめるなるへし。かの式には凡和歌は先レ花後レ實。不レ詠二古語一弁卑陋之所名。奇物之異名。かくのをくそいましめたりける。但しこの道に其譽れある人。世々にたえさるないふには。必しもかの式をまもらす。ちかくはすなはち定家家隆等の卿は。むかしの赤人人丸の。たかひにかみしもにたゝむことかたくなん。有けるかやうにそ。世に思ひ時にあらそひ。このみちのひしりなるかなとあふきけるも。詞はふるきにより。姿はたかきにいたり。所の名をはよみふるさるゝをもとめ。心はあたらしきをもちひてすくれたる歌をはつくれりけるとそ。

前中納言定家卿歌

新古 駒とめて袖打はらふかけもなしさのゝわたりの雪の夕暮

同 旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さひしき山のかけはし

新勅 暮る夜は衞士のたく火を夫とみよ室の八嶋も都ならねは

同 こぬ人をまつほの浦の夕凪に燒やもしほの身も焦れつゝ

續後撰 久堅の天照神のゆふかつらかけて幾よを戀渡るらん

新續古 駒なつむ岩木の山を越かねて人もこぬみの濱にかもねん

從二位家隆卿歌

新古 富士の根の煙も猶そ立のほり上なき物はおもひ成けり

新勅 風そよくならの小河の夕暮はみそきそ夏のしるし成けり

同 老ぬれは今年はかりと思ひこし又秋のよの月をみる哉

續古 いつもかく淋しき物か津の國の蘆やの里の秋のゆふ暮

明方に山路の空や成ぬらん木々の雫のしけくも有かな

新拾 龍田山夕越くれは拾集大伴のみつの泊にふねやまつらん

これらの跡をしのひ。もの流をうくるともから。いやしきをのかれて。たかきにむかへるをは。あたらしきすかたのいてき歌の道のかはれるかとおもひて。はかなき事のみそ聞えける。しかはあれど。時うつりことさり。うれへ深くなけきおほく。親しかりしは疎くなれども。まとに歌にて其こゝろをは慰めける。これによりて人のあさけりをもわすれ。みつからのつたなきをもかへりみす。新古今新勅撰にいらぬ今の世のうたをあつめける。また万代といふ集いてきにけり。かの古曾部か打聞をゆるして。後拾遺にいれす。いまの内相府の撰集。いかてかたやすくこの抄にのせしめん。いかにいはむやいにしへしのなかのふゆ。忝くも別勅ありて御製入らる。かされて勒するに。三千の篇たちまちに槐門よりいて。朽さる萬代の名はやく射山にと〻まらむものをや。おほよそ歌はひろく見。とをくたつれぬみちなれば。たゞ詞林にいりて花をもとめ。心石くたきて玉をとれるはかりなり。人の心ふろつなれは。このめる姿ひとつにはあらさるものなり。たとへは絲竹のこゑとなれども。伶人ともにきらはす。丹青色わかるれとも。畫工みなもちふるかをく。この歌もまたかくのとくそあるへき。夫いま六義のおもむきをわきまへ。一分のをはりをあきらめたるにもあらす。たゝ短き心にまかせて。をろかなる身にしめるとの

はをあつめて。三百餘首上中下卷とせり。名を秋風の抄といふ。ときに建長二年四月十八日。小野春雄ひそかにしるしをはりぬることしかなり。

秋風抄上

春歌

○前攝政家百首歌山早春を　正三位知家

岩戸山天の關守今はとてあくる雲井に春は來にけり

○百首歌中に　入道前攝政(道家)

續古 久方のあまの戸明て出る日や神代の春のはしめ成らん

○早春を　前大納言爲家

續後拾集 いとはやも春立けらし朝霞たな引山に雪はふりつゝ

○　藤原信實朝臣

鶯の聲きくなへに新玉の年も春へも霞む空哉

○　藤原爲氏朝臣

續後拾 春霞はや立にけり故郷のよしの〻み雪いまやとくらし

○霞を　藤原爲氏朝臣

三輪山の春のしるしは霞つゝしかもかくる〻杉のむら立

○建保四年院御百首の春歌　前太政大臣(實氏)

續古 かさしおる三輪の檜原の夕霞昔や遠くへたてきぬらん

○題不知　衣笠前内大臣(家良)

足曳の山はみ雪のかきくもりふれ共霞む春の空かな

○千五百番歌合のうた　皇太后宮太夫俊成女

山里は猶ふる雪のきえかてにまたき梢の花そ散ける

此間二行闕 ○入道攝政家百首に　正三位知家

梅か枝を春のよそなる宿に植て心ゆかすや花の咲らん

○依梅待友　藤原行家朝臣

梅花匂ふやかこと我宿にさらてはいつか人のまたるゝ

○柳を　信實朝臣

續古 春はまつなひきにけりなさほ姫の染る手引の青柳の糸

○建保四年院御百首春歌　入道前攝政

かり人の安達か原のしらま弓をして春雨いく日ふるらん

○花歌　前攝政左大臣

伊駒山あたりの雲とみる迄に尾こしの櫻花さきにけり

○　藤原經平朝臣

高砂のおのへの櫻夜の程に春雨ふりて花咲にけり

○　尙侍家中納言

咲ぬれはかならす花の折にともたのめぬ人のまたれぬる哉

○　鷹司院帥

山里に櫻咲ぬとつけやらはさすかに人もいまやとひこむ

○題不知　攝政前太政大臣(兼經)

命あらは此春見むと契をきし花も我をや思ひいつらん

○花十首に　前太政大臣

續古 かへりこぬ昔を花にかこちても哀れ幾よの春かへぬらむ

○住吉社三十六首に　衣笠前内大臣

うかるへき春の別れの近しとも咲なしらせそ山吹の花

○院御百首に籬歇冬　從三位行能

咲なる〻籬はなにのつらけれはいはて露けき山吹の花

○暮春を　侍從伊成

いかにせむ身にかふ斗おしむともかたしや春のけふの別れは

○　藤原爲氏朝臣

思ふにもいふにもふらぬ別れ路の悲しかりける春の暮哉　入道三品親王

○

玉きはる命のためもいと〻しく老ては春のおしまる〻哉　前大納言基良

○院御百首に同心を

よそに行恨はふかき春なれとけふはをろかにおしみやはする

夏歌

○千五百番歌合うた　皇太后宮大夫俊成女

春の色をとゝめかたみの夏衣たつ日のけふに成にける哉　衣笠前内大臣

○夏歌

ほと〻きすはやもなかなむ山賤の垣の卯花いま盛なり　前摂政左大臣

○百首歌の中に

あはさりしよひのねたさのありかほに我またせたる郭公哉　權中納言資季

○入道前摂政家にて題をさくりて歌よみけるに奏

神まつるけふのみあれのかさし草なかきよかけて我や頼まん　従三位行能

○洞院摂政家百首に(教實)

常盤なる岩根の山の時鳥つれなかれとはまたぬゆふへを　従三位泰光

○郭公を

此里も猶まちかねつ郭公雲のいつくにときを鳴らん　入道前摂政

○

郭公遠山越て出にけり五月と契る人そ有るらし　院(後嵯峨)御製

○御百首に聞郭公

我もまたいさかたらはむ時鳥待つる程のこゝろつくしを　入道三品親王

○題不知

きけはうしきかれは戀し郭公むかしの夏はいかがなきけむ　九條前内大臣

○

昔をは我こそ忍へ橘の木の下露に袖やぬれにし　右大將通忠

○院御百首に五月郭公

(續拾)橘のにほふ五月の郭公いかにしのふるむかし成らん　藤原隆祐

○前摂政家百首に里廬橘

おもひやるむかしも遠きみちのくの忍ふの里ににほふ橘　辨内侍

○御百首に早苗

(續古)小山田にまかする水の淺みこそ袖はひつちめ早苗とるとて　入道前摂政

○前大納言爲家の家の十五首に

五月雨にかすまさるらし龜山の岩根を落る瀧の白玉　前大納言爲家

○洞院摂政家百首に

天の川遠き渡と成にけりかた野のみの〻五月雨の比　正三位知家

(續後撰に集)

○入道前摂政家百首に

今も猶草の眞袖にかくろへてあらはにみへぬ野へのひめゆり　入道前摂政

○

夏の夜は物おもふ人の宿とにあらはにもえてとふ螢哉　鷹司院按察

○夏歌

身に近き秋そしらる〻夏虫のもえてみせたる夜半の思ひに　前大納言爲家

結緣經百首に

とふ螢光りみるこそ哀れなれ何の思ひにもへはしめけむ　藤原爲氏朝臣

○

なになけく思ひ成らし夜もすから身に余るまてもゆる螢は　源兼氏

○夕立

(玉)かくてはや暮ぬとみつる夕立の日影たかくもはる〻空哉　前太政大臣

○建保四年院御百首に夏歌

(續古)風さはくしのたの杜のゆふ立に雨をのこしてはる〻村雲

此間數行闕

○院御百首に荻風　従三位行能

秋の來る空こそあらめ荻の葉に風の音さへなとかはるらむ　平重時朝臣

○題不知

心なき風にも秋を誰つけてきのふに荻の音かはるらん　嘉陽門院越前

○千五百番歌合歌

か〻れはや野山も色のかはるらむ身にしみそむる秋の初風　少將内侍

○院御百首に早秋

(續古)秋きぬといはぬをしるは吹風の身にしむ時の心なりけり　正三位成實

○洞院摂政家百首に

御被して幾日もあらぬ川風のふかく身にしむ秋は來にけり　入道三品親王

○里早春

うちつけに涼しく成ぬ夏衣服檜の里のあきのはつ風　入道前摂政

○建保四年院御百首に秋歌

(續後撰)天川雲井をわたる秋風にゆきあひを待かさ〻きの橋　右兵衛督基氏

(續古)

○日吉社五十首に二星期秋

もろともに待し心の通路にあき風ふけはほしあひの空　藤原行家朝臣

○前摂政左大臣の時七夕の歌三首よませ侍りけ

るに

天川はや船よせよ年の内にまたふた〻ひは渡るせもなし　鷹司院按察

○題不知

荻の葉に風の吹よる音すなり袖ぬらすへき時そきぬらし　藤原隆祐

○

袖の露軒端の荻を吹風におもひもしけき秋の夕暮　入道前摂政

○晩露

夕されは物おもふ袖と荻の葉とをきあへぬ露のいつれ滋けん　前大納言爲家

○入道前摂政家秋三十首に

旅人の立かてにする秋の〻はかりほの萩の花さかりかも　正三位知家

○院御百首に萩露

人は來ぬ草葉の床の露のうへにかたしきれたる萩かはなすり　承明門院小宰相

○おなし題を

定めなき風を待まにうつろひぬ本あらの萩に結ふ白露　藤原經平

○女郎花

露か〻るむかひの〻への女郎花おらぬになとか袖のぬるらん　院御製

○野外鹿

(新拾)秋の〻の尾花か本に鳴鹿も今はほに出て妻をこふらし　入道前摂政

○百首歌中に

春日野にむれ行鹿の聲きけは我も涙のおちぬへき哉　藻壁門院少將

○住吉社二十首に

(續後撰)(初集)枯果てのち迄つらき秋草にふかくや鹿の妻をこふらん　信實朝臣

○九條内大臣家三十首に夕虫

[illegible]に空も夕はかなしきを草の葉にのみ虫は鳴らん　源具親朝臣

○千五百番歌合歌

入はいさくるしき物と志りぬれは他所にもきかし松虫の聲　下野

○院御百首に曉虫

(續後撰)心していたくな鳴そきり〳〵すかとかましき老のねさめに　前關白左大臣

○叢虫を

きり〳〵す鳴夕かけの草の原いかになみたの露をそふらん　前摂政左大臣

○

我宿の籬の草のたけきれになにをうしとか虫の鳴らむ　正三位知家

○入道前摂政家秋三十首

露ふかき我にてたりぬ夕暮の草葉も秋の心あるらし　藻壁門院少將

○

続古 草のはの露も我身の上なれは袖のみほさぬ秋のゆふ暮　衣笠前内大臣
○百首歌に
同 夕されは露吹おとす秋風に葉末かたよるをの〳〵ちの原　院御製
○秋夕
同 我なから思ひもわかぬ涙哉たそかれ時のあきのならひは　權大納言實雄
○
わか袖のぬる〳〵や何のかをそと秋のゆふへを誰にとはまし　權大納言公相
○西園寺入道前太政大臣家月十首に
なかき夜をあかすとや猶いそくらむ暮るをまたぬ山のはの月　正三位知家
○順德院御時待月といふ事を
続古 見し人のたのめて更しよひ〳〵のつらさに〳〵たる山のはの月　承明門院小宰相
○院御百首に湖月
光りそふ月のためとや暮るよりひら山おろし海にふくらん　院御製
○御歌合海邊月
続後撰 鹽竈の浦のけふりもたえにけり月みむとての海士のしほさに　入道前攝政
○家歌合に月前鹿
続古 三笠山月さしのほる空はれて峯より高きさほ鹿のこゑ　藻壁門院少將
○
玉 さを鹿の聲きく時の秋山に又すみのほる夜半の月影　前關白左大臣
○秋二十首に
続後拾 幾秋もかはらすすめる久方の月のかつらやさきはなるらん　權大納言公相
○院にて月契多秋
行末の限りもあらし久方の天照月のあきの契りは　按察使爲經
○御百首に山月

久にふる三室の山の夜半の月幾秋おなし影にすむらん　前太政大臣
○月を
新千 いにしへを思ひつ〳〵けてなかむれは神代にかへる秋のよの月　九條前内大臣
○
月さゆる深山の秋はのとかにて苔のいほりのよるの露けさ　衣笠前内大臣
○
山里の松のとほその淋しきにひとりも秋の月を見る哉　大納言典侍
○鳥羽殿にて月前庭虫
露深き淺茅か庭の虫のねに影すみまさる秋の夜の月　尚侍家中納言
○題不知
かく斗月を哀となかめすはいかに久しき秋のよならん　式乾門院御匣
○
思ひたる人やなからむ秋をへて幾よの月に袖はぬるとも　皇太后宮大夫俊成女
○
まてたはし同し空行秋の月又めくりあふむかしならぬに　前大納言爲家
○
続古 いにしへは我たに忍ふ秋の月いかなるよ〳〵をおもひ出らん　藤原爲氏朝臣
○秋三十首に
同 秋のよの月こそ有けれ世中にいまも昔のかたみはかりに　八集
○入道前攝政家歌合に名所月(信實朝臣集)
同 をしほ山おのへの松の廳に神代もふりてすめる月かけ　尚侍家中納言
○夜深月明といふ事を
あまの原さよ更かたの秋風にかけものこさすすめる月哉　從三位伊忠
○順德院御時惜月といへる事を
神代より明るならひも今更に天の戸つらき夜半の月影　前大納言基長

○曉鹿を
つれなさの恨やのこるさをしかの妻とふ山のあり明の月　前大納言伊平
○院御百首に夜鹿
続後撰 秋風に妻とふ山の夜をさむみさこそ尾上の鹿はなくらめ　信實朝臣
○朝鹿を
続拾 秋萩の咲て散ぬる朝露に猶立ぬれて鹿はなくなり　蓮生法師
○野外雁
雁啼て朝露さむみ月草のうつし心に野は成にけり　藤原基政
○秋三十首歌
夕されは霧立空に雁啼て白露さむし小の〳〵篠原　藻壁門院少將
○千五百番歌合のうた
続古 うら枯て下葉色つく秋萩の露ちる風に鶉なくなり　皇太后宮大夫俊成女
○入道前攝政家百首に秋歌
吹風もさそさむからし鶉鳴かたの〳〵をの〳〵秋のゆふ暮　前攝政左大臣
○建保四年院御百首に
草の原下葉やさむく成ぬらんや〳〵うらかる〳〵松むしの聲　前太政大臣
○内大臣の時の百首に原鹿
うらかる〳〵淺茅か原に鳴鹿の聲吹みたる山おろしの風　入道前攝政
○入道前攝政家百首に秋歌
初霜のさやくをみれはさをしかのすたき鳴のもうら枯にけり　正三位知家
○長谷寺十八首歌
千草まて色とる比は初霜の夜寒になれやころもうつ也　入道前攝政
○題不知
大方の月にれられぬ宿までも哀をそへて衣うつなり　權中納言資季
○院御百首に聞擣衣
おもひれの夢路も絶て悲しきになとかよるしも衣うつらん　鷹司院按察
○千五百番歌合の歌
深草の野への月影うらみつ〳〵住こし里に衣うつなり　皇太后宮大夫俊成女
○順德院御時歌合に月前擣衣
衣うつ人もやはるはおしむらん山のはちかきあきの月影　藤原行家朝臣
○入道前攝政家百首に
長月の末の〳〵草の白露を玉につくれるあり明の月　從三位行能
○題不知
新續古 月影も夜寒に成ぬ今よりは寐さめを誰かとはんとすらん　鷹司院帥
○住吉社百首に秋歌
ねさめして袖ぬらしけり長月の有明の月にか〳〵る時雨は　尚侍家中納言
○
物おもふ袖のみぬらす時雨哉四方の木のは〳〵何かそむらん　大納言典侍
○院にて遠樹紅葉
村時雨はるかにめくる外山より尾上の里のもみちをそみる　前太政大臣
○洞院攝政家百首に紅葉
続古 きのふけふしくるとみゆる村雲のか〳〵れる山は紅葉しぬらん　藤原爲氏朝臣
○秋三十首に
雲か〳〵る遠山もとは時雨めり行てやみましもみちしぬらん　藤原爲繼朝臣
○北野社歌合に山紅葉
秋山のしくる〳〵ほとはあらはれて木毎に今は紅葉しにけり　衣笠前内大臣
○院御百首に杜紅葉
続古 村時雨いくしほ染てわたつ海のなきさの杜の紅葉しぬらん　前大納言爲家
○洞院攝政家百首に
をくら山梢もみちて秋風の日ことに　鹿もなくなり

○順德院御時百番歌合のうた　前太政大臣
秋の色は移りにけりな村雲の山端さらす時雨せしまに
○題しらす　權中納言資季
秋の色は染へき限り染つれと夕の雲は猶しくれつゝ
○　源有長朝臣
色深き紅葉はこきませ吹風や身にしむ秋の限り成らん
入道二品親王家五十首歌（道助）　從三位行能
まつとなき人も恨めし山里に木のはの落る秋のゆふ暮
千五百番歌合のうた　嘉陽門院越前
夕されは梢をはらふ風の音にさひしくなりぬ秋の山さと
○　皇太后宮大夫俊成女
色かはる淺茅か末に吹風の音にもしるき秋の暮かな
○暮秋　式乾門院御匣
（續拾）思ひやるかたこそなけれ巡りあはむ命もしらぬ秋の別れは
○入道攝政百首を和侍けるに　衣笠内大臣
けふはまた誰かは袖のかはるへき時雨て暮る秋の別れに

冬歌

○六帖題歌に初冬　信實朝臣
けふしこそ時雨もことに降まされ思ひしとそ冬のはしめは
○千五百番歌合のうた　嘉陽門院越前
冬きぬとおもふはかりの朝期とのほかにもかはる空かな
○前攝政家にて題をさくりて歌よみ侍けるに柞を　藤原行家朝臣
けふはやは冬とつく也はゝそ原いはたのをの〳〵木枯のかせ

○前太政大臣家十五首に　藤原爲教朝臣
山風のはけしくかはる神無月むへも木のはゝたまらさりけり
○前攝政家百首に杜初冬　藤原隆祐
うら枯る生田の杜の神無月とふそといひしもの葉もなし
○題しらす　慶政上人
はれくもる時こそ有けれ神無月時雨わたさぬ里なかりけり
○内大臣の時百首に田家時雨　入道前攝政
足曳の山田の庵を篷をあらみまさをにあれや時雨もる也
○時雨　前攝政左大臣
神無月さも定めなき村雲に時しる雨のいかてふるらん
○　權中納言資季
見渡せは山の尾上に雲こえて一村すくる夕しくれかな
○六帖題歌　正三位知家
（續後撰）ふりはつる我身むそちの神無月袖はいつより時雨そめけん
○前大納言爲家の家の百首に　信實朝臣
（續古）さらに又おもひ有とや時雨らん室の八島の浮雲のそら
○暮山時雨　明珍法師
夕されは河風さえて衣手のたなかみ山にしくれふるなり
○閑居落葉　隆專法師
落つもる木の葉を道にふみなして宿とふ人も淋しかるらん
○建保四年院御百首に冬歌　前太政大臣
（續古）木の葉さへふかく降行山路哉嵐もおくやはけしかるらん
○橋上落葉　院御製
山人は心あてにや渡るらん木のはかくれの谷のかけはし
○題不知　攝政前太政大臣

神無月ゆふへの空をなかむれは時雨ぬ宿も袖はぬれけり
○夕時雨　入道三品親王
曇りなき影たに寒き冬の日のかたふく山に時雨ふる也
○冬歌　前大納言爲家
霜枯の野田の草根にふす鳴の何のかけにか身をかくすらん
○　從三位行能
竹の葉のさやく霜夜に驚けは呼えたる月そかたふきにける
○　九條内大臣
（續後拾）紀の國や吹上のをの〳〵淺茅原なひく霜夜にさゆる松風（はな集）
○御百首に池水　院御製
朝毎に氷そ今は結ひける霜枯はつるきくの池みつ
○氷を　入道前攝政
（續古）さえくれぬけふ吹風にあすか川七瀨の淀や氷はてなむ
○　九條前内大臣
篠分る山下水もこほりけりあはてこしよの谷のあらしに
○池水鳥　右衛門督通成
冬されはまの〳〵池水氷ぬてよかれかちなるあちの村鳥
○院御百首に池水　藤原爲繼朝臣
蘆ふきのこやのあたりの池みれは結ふ氷もまた隙そなき
○湖邊氷を　平重時朝臣
しかの浦や汀は遠く氷ぬて波よせかへすひらの山かせ
○夜千鳥　中原師光
眞菅生るみつの河せに小夜更て妻とふ千鳥聲すみぬなり
○前攝政家百首に湊千鳥　藤原伊嗣朝臣
湊入の蘆まもわけぬ小夜千鳥なに〳〵さはりの妻をこふらん

○千鳥を　鷹司院新參
ひとりれの心の友と成物は霜夜に渡る千鳥なりけり
○千五百番歌合のうた　嘉陽門院越前
まさ木ちる谷のかけはし埋れてとはれぬ宿は霰ふるなり
○閑居霰　權大納言長教
槇のやの木の葉の後の淋しさを思ひ知てもとふ霰かな
○冬御うた　院御製
（續後撰）天乙女玉もすそひく雲の上に豊（の集）のあかりはおも影にみゆ
○　前攝政左大臣
霜枯のあさの〳〵きゝすふみたて〳〵谷のうへ行狩人やたれ
○結緣經百首に　前大納言爲家
いかにせむ身は降まさる雪にまた出てみしよの月のさそふを
○　信實朝臣
都までさむさそ見ゆる峯越のひらの遠山雪ふりにけり
○雪歌　少將内侍
思ふよりいと〳〵いくの〳〵道たえてまたふみもみすつもる雪哉
○　辨内侍
とふ人をえやは待みん三輪の山雪には道のあらしと思へは
○　尙侍家中納言
我爲とこと更にこそわけすともふりつむ雪のうへをたにとへ
○九條前内大臣家十五首に名所雪　承明門院小宰相
雪ふかき木幡の峯をなかめてもうちのわたりに人や待らん
○千五百番歌合歌　嘉陽門院越前
雪にまたかくれてすめる津の國のこやもあらはに立けふり哉
○寛喜女御入内屏風歌　前太政大臣
烟たつ槇のすみかま燒そへてさゆる時しるをの〳〵やま人

○入道前攝政百首を和侍けるに　衣笠前内大臣
いたつらに暮ぬと思ひしあら玉の年のやとりは我身也けり
○題不知　權大納言實雄
今更におしくも有哉かれてより思ひし年の終りなれとも
○　卜部兼直宿禰
老ぬとてさらぬ別れのちかけれはいよ〳〵おしき年の暮哉
○院御百首に歳暮　藤原行家朝臣
いたつらに過る月日のはては又たゝひとゝせの暮にそ有ける

秋風抄下

戀歌

○院御百首に寄風戀　前太政大臣
續後撰 夕されは天つ空なる秋風に行衛もしらぬ人を戀つゝ
○寄雨戀　權大納言公相
降雨をいつまてよそに思ひけむぬるゝは戀の秋なりけり
○鳥羽殿にて月前忍戀　院御製
續拾 いとせめて忍ふる夜半の涙ともおもひもしらてやとる月哉
○千五百番歌合のうた　皇太后宮大夫俊成女
續後撰 いかにせむ忍ふの山に跡たえておもひ入とも露のふかさを
○戀歌　承明門院小宰相
立カ 戀そひてたえぬ烟にまかへましあまたにつゝむ戀ときかすは
○院御百首に寄瀧戀　辨内侍
續古 音に猶たてぬもくるし思ひせく心の内に瀧なくもかな
○　藤原爲氏朝臣
我涙なとやせかれぬ瀧つせを中にもよとは有とこそきけ
○入道前攝政家百首に戀　藤原行家朝臣
涙川あさき瀬そなき陸奥の袖のわたりに淵はあれとも
○寄荻戀　卜部兼直宿禰
秋風の聲にもたてぬ下荻のほのめかさてやしほれはて南
○忍戀　加茂季保
よそにこそ忍ひもはてめ君にたに心のほとをしらせかねつる
○戀歌　藤原爲繼朝臣
思ひそむる初めはありて有かひのみえはや戀のはてを頼まん
○六帖題歌　前大納言爲家
淀河のむかひにみゆるみつの杜よそにのみして戀渡る哉
○九條前内大臣家十五首に名所戀　承明門院小宰相
いかにせむうき身にかきる名取川あふせもしらて命たへすは
○住吉社百首に戀歌　鷹司院帥
湊路のあまの往來のかひもなし我ためにかるみるめならねは
○戀歌中に　入道前攝政
たくなはの長き命のかひもなしくるしや心あはぬためしに
○　衣笠前内大臣
續古 我戀は海士のいさり火よるはもえひるはくるしき浦のあみ繩
○院にて寄海戀　按察使爲繼
我袖のたくひやなにそわたつ海の鹽のひるまも有といふなり
○寄松戀　橘廣兼
波よするいそまの浦のそなれ松れをしほにのみぬるゝ袖哉

○前大納言爲家の家百首に　下野
新後拾 最上川いなとこたへていな船のしはしはかりの心をも見む
○不逢戀　藻壁門院但馬
うらむとも我心なる道なれはこさはやこさん相坂の關
○入道前攝政百首を和侍けるに　衣笠前内大臣
假初にみし斗なるはし鷹のをふさのはしを戀や渡らん
○院御百首に　前大納言基良
あつさ弓春のきゝすをみてたにも人の心にいるよしも哉
○　權大納言公相
續後撰 はかなくも思ひなくさむ心哉おなし世にふる頼みはかりに
○題不知　九條前内太臣
身にしめし秋のね覺のさむしろに物おもふ我と成にける哉
○秋三十首に　少將内侍
あすしらぬ命に人を戀佗て秋の夜なかく物おもふ哉
○　前關白左大臣
我こゝやや頼めてつらき秋風のさむきよな〳〵松虫のなく
新後撰 ○待戀　尚侍家中納言
たのめしは今夜もいかに成ぬらん更ぬる物を山のはの月
○六帖題歌　前大納言爲家
山端に出つる月をおしむまてなをさりとも君を待かな
○　正三位知家
君まつとさも夜寒なる秋風に閨の板戸をさして明ぬる
○寄莚戀　最知法師
今夜こそこぬもつらけれ獨れの我さむしろに秋風そふく
○夜戀　藤原時朝
かき曇り時雨る空をかとにてこぬよの床の更にける哉
○院御百首に寄雨戀　下野
續古 かきくもれたのむる霄の村雨にさはらぬ人のこゝろをもみむ
○戀歌中に　辨内侍
ならはれはその僞りもしらぬ身になにとかならん夕くれの空
○　宣仁門院一條
僞りを待はしめけむいにしへの人もうらめしゆふ暮の空
○寄風戀　院御製
いもとぬるすきまの風そ猶さむきいつならひける心成らん
○六帖題歌　正三位知家
袖かはす夜半の手枕何かたかあかぬなみたにぬれ增るらん
○題不知　尚侍家中納言
おきてゆく人は待ける鳥の音をなとあやにくに我いとふらむ
○　入道前攝政
新後拾 暮るまを侍へき身とも頼まれすかへりし道の心まとひに
○　前太政大臣
玉 なけきわひむなしく明し空よりも優りてなとかけさは悲しき
○前太政大臣家十五首に　右兵衛督基氏
けさはしもあやに心の悲きはいかにされける夜半の名殘そ
○寄關戀　藤原經
今更に恨みやはせむ相坂の關は別れのみちと聞しに
○正三位知家の家にて別戀　信實朝臣
をのつからあふはあふとも頼まれす別れそ戀のまと成ける
○戀歌　少將内侍
此世にはいつ逢むとも たのめは今よりさらぬ別とそなる